静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第14集

駿河山遺跡Ⅳ

第二東名№91地点
（弥生・古墳・歴史時代編２）

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－６

２０１２

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

序

第二東名高速道路は静岡県を東西に横断する形で建設が進められており、御殿場市駒門以東を除いて各地でその建設に伴う発掘調査を実施してきました。本書はそのうちの島田市牛尾に所在する駿河山遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書の４分冊目にあたります。

島田市域では、上ノ山遺跡、上志戸呂古窯跡、駿河山遺跡、上伊太遺跡の４箇所で本調査が行われ、いずれも地域の歴史を物語る貴重な成果が得られました。本書で報告する駿河山遺跡は、その中で最も大規模に調査が行われた遺跡で、発見された縄文時代中期前半～後期後半、弥生時代後期～古墳時代前期に属する多種多量の遺構・遺物は、この遺跡が大井川流域屈指の大遺跡であることを物語っています。

本書では駿河山遺跡が最も盛んであった弥生時代～古墳時代に属する遺構・遺物を対象としています。すでに刊行した『駿河山遺跡Ⅲ　弥生・古墳・歴史時代編1』では200棟以上の竪穴住居の存在を報告しており、大規模な集落域の構造を明らかにすることができました。本書では竪穴状遺構、掘立柱建物跡、方形周溝墓等の遺構とそれらに伴う遺物についての報告を行います。これによって、居住域と墓域の分布からわかる土地利用のあり方や変遷など、集落内における人々の営みをさらに具体的な形で知ることができるようになりました。こうした成果は地域の歴史、文化を知る上で欠かせない資料となることと思います。

本書が研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査ならびに資料整理にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社（旧横浜支社）ほか関係諸機関、また地元住民の方々より多くの御理解と御援助をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2012年３月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝　田　順　也

例　　言

1　本書は静岡県島田市金谷地区における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、静岡県島田市牛尾1174番地他に所在する駿河山遺跡の発掘調査報告書である。駿河山遺跡の発掘調査報告書は、平成19年度に「駿河山遺跡Ⅰ（図版編）」が刊行され、平成21年度には「駿河山遺跡Ⅱ（縄文時代編第1分冊・第2分冊）」及び「駿河山遺跡Ⅲ（弥生・古墳・歴史時代編1）」が刊行されている。本書は駿河山遺跡の報告書としては4分冊目にあたるため、「駿河山遺跡Ⅳ（弥生・古墳・歴史時代編2）」としている。

2　調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧静岡県教育委員会文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。

3　駿河山遺跡（第二東名№91地点）の確認調査・本調査及び資料整理の期間と調査担当者は以下のとおりである。詳細な調査体制については既刊の「駿河山遺跡Ⅱ（縄文時代編第1分冊）」第2章第1節を参照いただきたい。

＜財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所＞

・確認調査：平成10年8～10月　足立順司、河合修、川上努

・本調査：平成10年10月～平成11年3月　足立順司、河合修、川上努

平成11年4月～平成12年3月　及川司、飯塚晴夫、諸星雅一、河合修、石田勉、木崎道昭、大林元

平成12年4月～平成13年3月　及川司、飯塚晴夫、諸星雅一、河合修、中田出、大畑要

平成13年4月～平成14年3月　及川司、加藤埋文、河合修、桶田光俊

・資料整理・報告書作成：平成17年12月～平成19年3月　河合修、鈴木淑子

平成19年4月～平成20年3月　河合修（4～6月、12～3月）、鈴木淑子

平成20年4月～平成21年3月　松川淑子（旧姓鈴木）

平成21年4月～平成22年3月　河合修

平成22年4月～平成23年3月　溝口彰啓

＜静岡県埋蔵文化財センター＞

平成23年4月～平成24年3月　田中萌子

4　本書は第1章第3節3を田中萌子が執筆し、その他は溝口彰啓が執筆した。

5　本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

6　現地での基準点測量、空中写真撮影及び遺構測量の一部は株式会社フジヤマに委託した。

7　発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

伊藤通玄　佐藤達雄　佐野五十三　篠ヶ谷路人　篠原和大　柴田稔　澁谷昌彦　滝沢誠

萩原佳保里　松井一明　向坂鋼二（五十音順・敬称略）

8　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1　座標は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。

2　グリッドは、上記座標を用い一辺10mの方眼を設定している。また、方位も上記座標による方位（座標北）を基準としている。

3　本書に使用した図表は主に調査によって測量・実測した図を基に作成している。これ以外の図については各図中に出典等を示している。

4　本書で使用した遺構の表記は次の通りである。

例）SZ208（SZ：遺構の種別　　208：遺跡内の全遺構通し番号）

SH：竪穴住居跡・竪穴状遺構　　SB：掘立柱建物跡　　SZ：方形周溝墓　　SK：土坑

SP：小穴　　SD：溝状遺構　　SX：性格不明遺構

5　遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図版に明記した。

6　遺構図には遺構と攪乱を同時に表記してある。これらのうち、攪乱については下端線を破線としてケバ記号を遺構とは別の表記とし、線号を落としている。

7　遺物番号は、挿図掲載遺物について種類・挿図の別にかかわらず、通し番号を付した。

8　本文中に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1992）を使用した。

9　本書の図中に用いたスクリーントーン等の使い分けは、必要なものを各図の中で表記した他、遺物については次のように統一した。

石器摩耗範囲

目　　次

弥生・古墳・歴史時代編 2

序／例言／凡例／目次

第 1 章　調査の成果
第 1 節　竪穴状遺構 …… 3
1　遺構 …… 3
2　出土遺物 …… 5
第 2 節　掘立柱建物跡 …… 8
1　掘立柱建物跡の概要 …… 8
2　遺構 …… 10
3　出土遺物 …… 52
第 3 節　方形周溝墓 …… 56
1　方形周溝墓の概要 …… 56
2　遺構 …… 60
3　出土遺物 …… 95

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第１図　遺構配置図 …… 1
第２図　SH50542平面・断面図 …… 3
第３図　SH50542遺物出土状況図 …… 4
第４図　SH50542出土遺物１ …… 6
第５図　SH50542出土遺物２ …… 7
第６図　SB80014平面・断面図 …… 9
第７図　SB80057平面・断面図 …… 10
第８図　SB80001平面・断面図 …… 11
第９図　SB80002平面・断面図 …… 12
第10図　SB80004平面・断面図 …… 13
第11図　SB80005・80008平面・断面図 …… 14
第12図　SB80009・80010平面・断面図 …… 15
第13図　SB80011平面・断面図 …… 16
第14図　SB80058・80059平面・断面図 …… 17
第15図　SB80012平面・断面図 …… 18
第16図　SB80013平面・断面図 …… 19
第17図　SB80017・80060平面・断面図 …… 20
第18図　SB80025平面・断面図 …… 21
第19図　SB80026平面・断面図 …… 22
第20図　SB80027平面・断面図 …… 23
第21図　SB80028平面・断面図 …… 24
第22図　SB80029・80061平面・断面図 …… 25
第23図　SB80030平面・断面図 …… 26
第24図　SB80031・80032平面・断面図 …… 27
第25図　SB80034・80062平面・断面図 …… 28
第26図　SB80035平面・断面図 …… 29
第27図　SB80039・80040平面・断面図 …… 30
第28図　SB80041平面・断面図 …… 31
第29図　SB80045平面・断面図 …… 32
第30図　SB80046平面・断面図 …… 33
第31図　SB80048平面・断面図 …… 34
第32図　SB80050・80051平面・断面図 …… 35
第33図　SB80054・80055平面・断面図 …… 36
第34図　SB80056平面・断面図 …… 37
第35図　SB80003・80006平面・断面図 …… 38
第36図　SB80007・80015平面・断面図 …… 39
第37図　SB80016・80018平面・断面図 …… 40
第38図　SB80019・80020平面・断面図 …… 42
第39図　SB80021・80024平面・断面図 …… 43
第40図　SB80022・80023平面・断面図 …… 44
第41図　SB80033・80036平面・断面図 …… 45
第42図　SB80037・80038平面・断面図 …… 47
第43図　SB80042・80043平面・断面図 …… 48
第44図　SB80044・80047平面・断面図 …… 49
第45図　SB80049・80052平面・断面図 …… 50
第46図　SB80053・80063平面・断面図 …… 51
第47図　掘立柱建物跡出土遺物１ …… 54
第48図　掘立柱建物跡出土遺物２ …… 55
第49図　方形周溝墓全体図１ …… 57
第50図　方形周溝墓全体図２ …… 58
第51図　方形周溝墓全体図３ …… 59
第52図　方形周溝墓分布図 …… 59
第53図　SZ18010・SZ52642平面・断面・遺物出土状況図 …… 61
第54図　SZ52639・52423平面・断面図 …… 62
第55図　SZ51497平面・断面・遺物出土状況図 …… 63
第56図　SZ52284平面・断面・遺物出土状況図 …… 64
第57図　SZ50861・50871平面・断面図 …… 65
第58図　SZ50861・50871遺物出土状況図 …… 66
第59図　SZ51505・51507・54807平面・断面図 …… 67
第60図　SZ52863平面・断面図 …… 69
第61図　SZ50902・51149平面・断面・遺物出土状況図 …… 70
第62図　SZ50880平面・断面図 …… 71
第63図　SZ50880遺物出土状況図 …… 72
第64図　SZ52155平面・断面図 …… 74
第65図　SZ51174・51234・51175平面・断面・遺物出土状況図 …… 75
第66図　SZ5171平面・断面図 …… 76
第67図　SZ5192平面・断面図 …… 77
第68図　SZ5009平面・断面・遺物出土状況図 …… 78
第69図　SZ2579平面・断面図 …… 79
第70図　SZ2002平面・断面図 …… 80
第71図　SZ2575平面・断面・遺物出土状況図 …… 81
第72図　SZ317平面・断面・遺物出土状況図 … 83

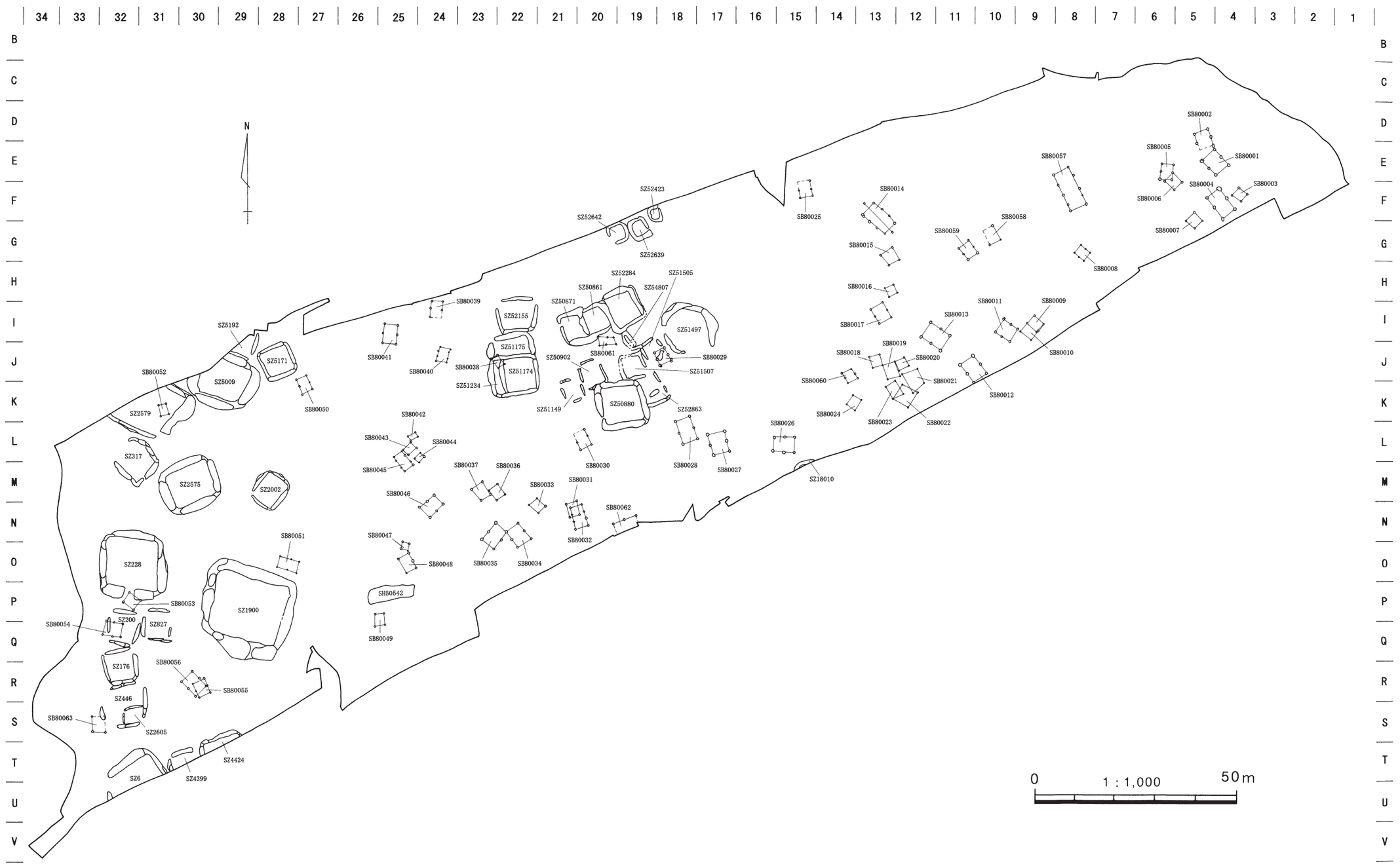
第73図　SZ1900平面・断面図 …… 84
第74図　SZ1900遺物出土状況図 …… 85
第75図　SZ228平面・断面図 …… 86
第76図　SZ228遺物出土状況図 1 …… 87
第77図　SZ228遺物出土状況図 2 …… 88
第78図　SZ827平面・断面図 …… 89
第79図　SZ200平面・断面図 …… 90
第80図　SZ176平面・断面図 …… 91
第81図　SZ446・2605平面・断面・
　　遺物出土状況図 …… 92
第82図　SZ4424・SZ4399平面・断面図 …… 93
第83図　SZ 6 平面・断面・遺物出土状況図 … 94
第84図　方形周溝墓出土遺物 1 …… 96
第85図　方形周溝墓出土遺物 2 …… 97
第86図　方形周溝墓出土遺物 3 …… 99
第87図　方形周溝墓出土遺物 4 …… 100
第88図　方形周溝墓出土遺物 5 …… 102
第89図　方形周溝墓出土遺物 6 …… 103
第90図　方形周溝墓出土遺物 7 …… 105
第91図　方形周溝墓出土遺物 8 …… 106
第92図　方形周溝墓出土遺物 9 …… 108
第93図　方形周溝墓出土遺物10 …… 110
第94図　方形周溝墓出土遺物11 …… 111
第95図　方形周溝墓出土遺物12 …… 113
第96図　方形周溝墓出土遺物13 …… 114
第97図　方形周溝墓出土遺物14 …… 116
第98図　方形周溝墓出土遺物15 …… 118
第99図　方形周溝墓出土遺物16 …… 119
第100図　方形周溝墓出土遺物17 …… 121
第101図　方形周溝墓出土遺物18 …… 122
第102図　方形周溝墓出土遺物19 …… 124
第103図　方形周溝墓出土遺物20 …… 125
第104図　方形周溝墓出土遺物21 …… 127
第105図　方形周溝墓出土遺物22 …… 128
第106図　方形周溝墓出土遺物23 …… 129
第107図　方形周溝墓出土遺物24 …… 131
第108図　方形周溝墓出土遺物25 …… 132

挿表目次

第 1 表　掘立柱建物跡一覧表 …… 133
第 2 表　方形周溝墓一覧表 …… 134
第 3 表　出土土器一覧表 …… 135
第 4 表　出土石器・玉類一覧表 …… 141
第 5 表　出土金属製品一覧表 …… 141

図版目次

図版 1　出土土器 1
図版 2　出土土器 2
図版 3　出土土器 3
図版 4　出土土器 4
図版 5　出土土器 5
図版 6　出土土器 6
図版 7　出土土器 7
図版 8　出土土器 8
図版 9　出土土器 9
図版10　出土土器10
図版11　出土土器11
図版12　出土土器12
図版13　出土土器13
図版14　出土土器14
図版15　出土土器15
図版16　出土土器16
図版17　出土土器17
図版18　出土土器18
図版19　出土土器19
図版20　出土土器20
図版21　出土石器 1
図版22　出土石器 2
図版23　出土石器・ガラス玉・金属製品
図版24　SH50542・SZ50880出土土器
図版25　SZ5009・2575出土土器
図版26　SZ228出土土器


34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V
N
SZ52423
SZ52642
SZ52639
SZ52284
SZ51505
SZ50861
SZ54807
SZ50871
SZ52155
SZ51497
SZ51175
SZ50902
SZ51174
SZ51234
SZ51507
SZ51149
SZ50880
SZ52863
SZ5192
SZ5171
SZ5009
SZ2579
SZ317
SZ2575
SZ2002
SZ228
SZ1900
SZ200
SZ827
SZ176
SZ446
SZ2605
SZ6
SZ4399
SZ4424
SZ18010
SH50542
SB80001
SB80002
SB80003
SB80004
SB80005
SB80006
SB80007
SB80008
SB80009
SB80010
SB80011
SB80012
SB80013
SB80014
SB80015
SB80016
SB80017
SB80018
SB80019
SB80020
SB80021
SB80022
SB80023
SB80024
SB80025
SB80026
SB80027
SB80028
SB80029
SB80030
SB80031
SB80032
SB80033
SB80034
SB80035
SB80036
SB80037
SB80038
SB80039
SB80040
SB80041
SB80042
SB80043
SB80044
SB80045
SB80046
SB80047
SB80048
SB80049
SB80050
SB80051
SB80052
SB80053
SB80054
SB80055
SB80056
SB80057
SB80058
SB80059
SB80060
SB80061
SB80062
SB80063
0
1 : 1,000
50m

第１図　遺構配置図

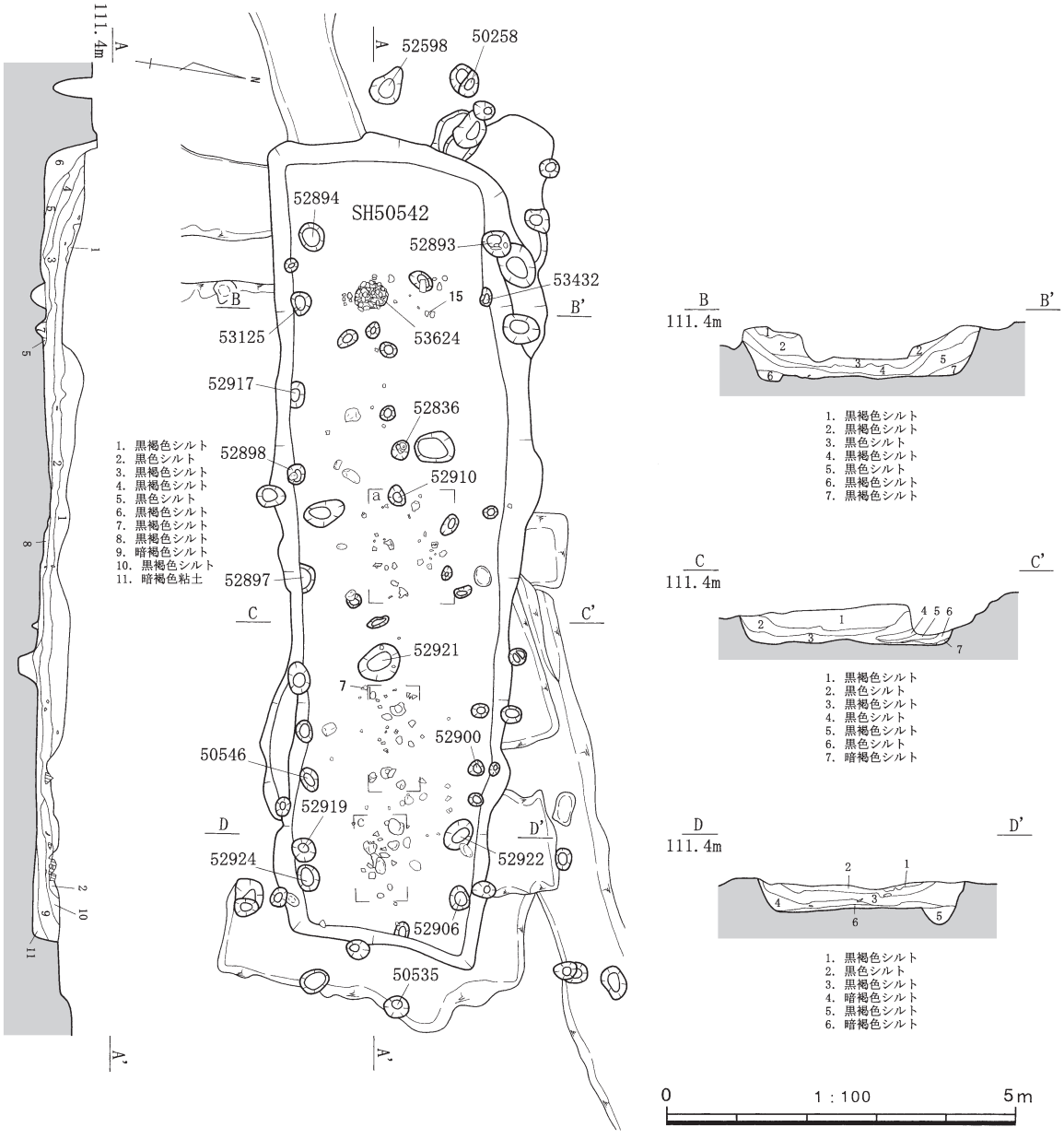
第１章　調査の成果

第１節　竪穴状遺構

１　遺構

SH50542（第２図）

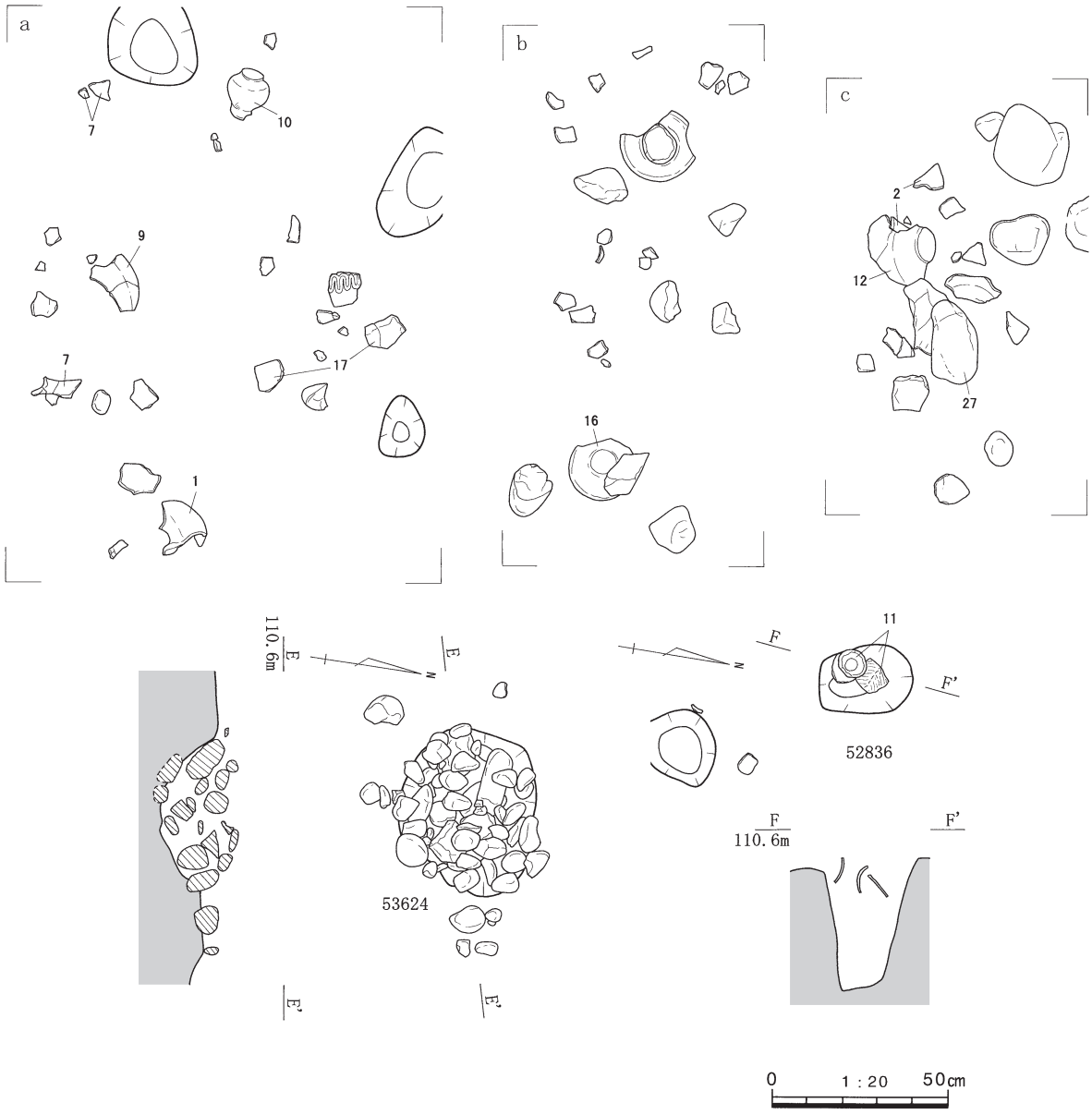
P-25～26区で検出された長方形の竪穴状遺構である。東西に長く、長辺が11.6m、短辺3.0～3.4mを測る。検出面からの深さは西側が75㎝、東側が40㎝とやや浅いが、これは遺構上端部が改植などによって削平されているためである。底面は標高110.3～４mで、中央付近がやや高くなる傾向があるものの、ほぼ平坦となっており、壁溝は設けられていない。壁面に沿ってSP52894・52893・53125・53432・52917・52898・52897・50546・52900・52919・52922・52924・52906のように、対になるような小穴が



第２図　SH50542平面・断面図

確認されたことから、これらが柱穴となる建物跡である可能性が高い。また、遺構短辺の外側にも対となるような小穴SP50535・52598があり、棟持柱が設けられていたとも考えられる。ただし、これら柱穴は直径20～30㎝程度と小規模であることから、恒常的な建物ではなかったのかもしれず、また床面に炉が検出されなかったことも、住居のような生活の場ではなかったことを示すものと思われる。床面ではSP53624（第３図）のように集石を伴う小穴が検出されているが、被熱の痕跡などは見られず、その用途は不明である。明確な貼床も確認されておらず、建物の性格を示すような遺構を認めることはできない。埋土は黄褐色粘土混じりの黒褐色シルト及び黒色シルトを主体とし、一部に黄褐色粘土をブロック状に含む。堆積状況から、廃絶後は徐々に埋没していった様子が窺える。遺物の多くは床面から10～30㎝浮いた状態で出土しており、廃絶後の埋没の段階で廃棄された可能性が高い。また、中央西よりの床面で検出されたSP52836の最上層では11の壺の破片が折り重なるようにして出土している（第３図）。

後述する出土遺物の特徴から、弥生時代後期中葉の遺構と考えられる。



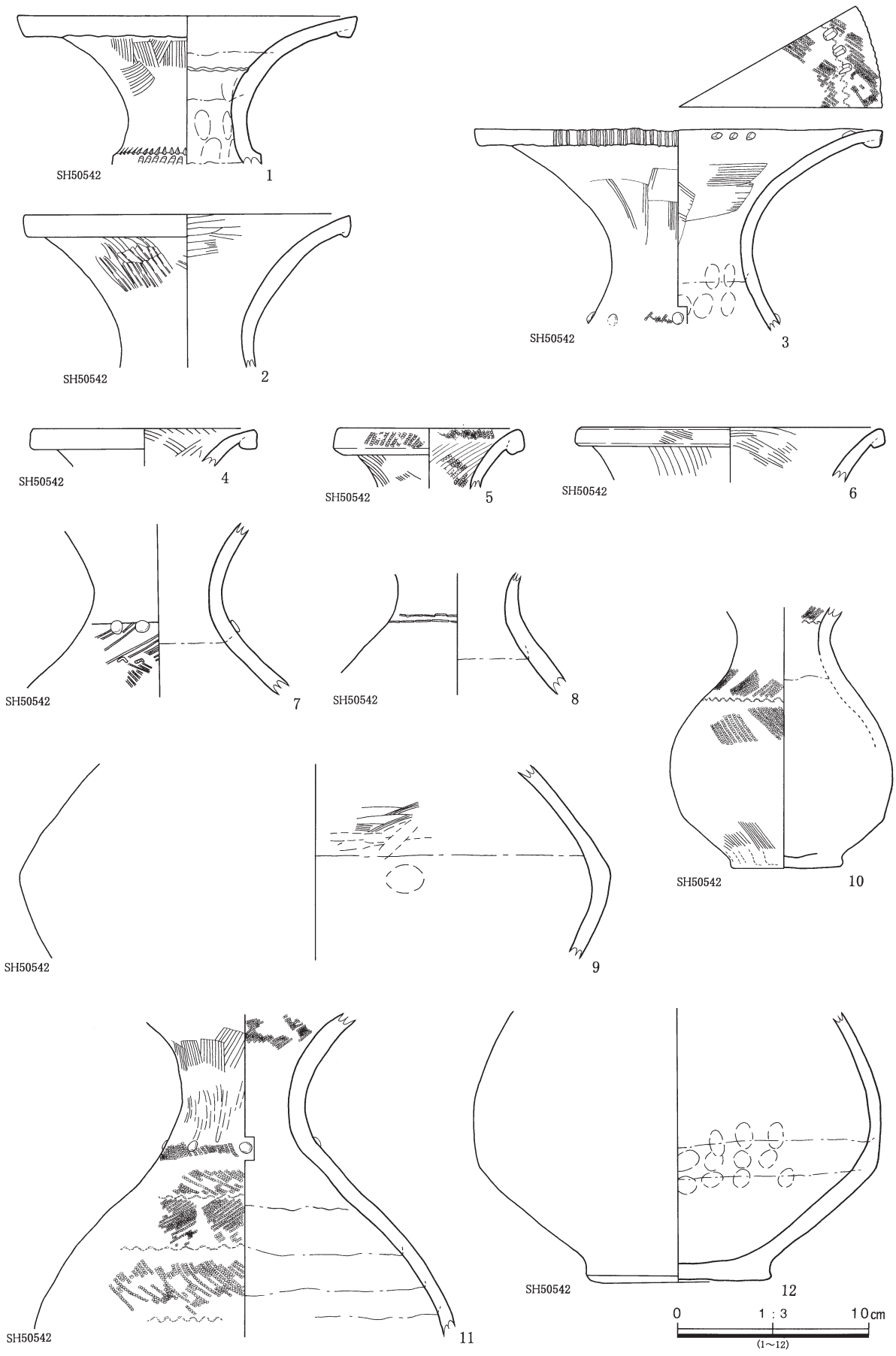
第３図　SH50542遺物出土状況図

２　出土遺物（第４・５図）

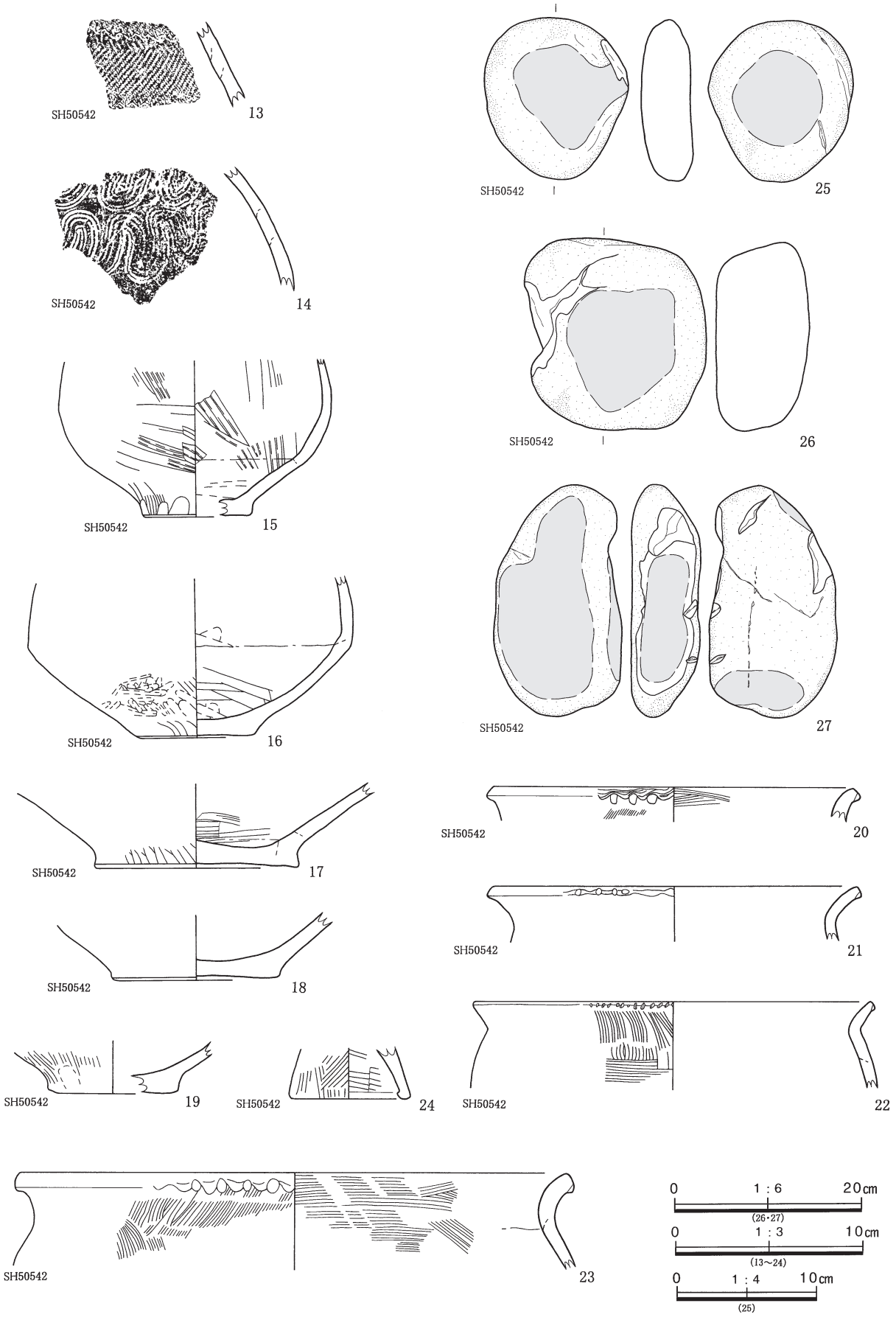
前述のように、床面から浮いた層位より多くの土器・石器が出土している。１～19は壺で、１～６は口縁部である。全て折り返し口縁を持ち、かなり摩滅しているものの、１・３～５の口縁内面には結節を伴う縄文が付けられ、２・６は斜位のハケ調整が施される。頸部にかけては縦位あるいは斜位のハケ調整がなされる。３は口縁端部に刻目が施され、口縁内面には３個一組の短い棒状浮文が付される。７・８は頸部から肩部である。11は頸部～体部、13は肩部破片である。７・11・13は肩部に結節を伴う縄文が付けられる。11の肩部の羽状文上部はハケ調整の後に縦位のミガキ調整が施され、下部は端末結節縄文となる。11の頸部には円形浮文が等間隔で９個付けられるが、７は２個一組の円形浮文が５ヵ所付けられる。８は頸部にハケ刺突横文が施されるが、粗雑であるため食い違いになっている箇所がある。14は肩部の破片であるが、櫛描波状文が施される。９は体部破片で、外面は摩滅により調整不明、内面はナデ調整によって平滑に整えられる。10は欠損した口縁部以下がほぼ完形で残る小型の壺である。肩部には結節を伴う縄文による羽状文が施され、口縁から頸部内面にも同様に縄文が確認される。体部は摩滅により調整不明だが、底部に近い下半部には縦位のハケ調整痕が残る。12・15・16は体部から底部にかけての部位である。15は内外面ともに幅広の工具による縦位あるいは斜位のハケ調整がなされ、底部内面はナデ調整で仕上げられる。12・16は摩滅によって調整が明確でないが、12の内面には指頭圧痕とナデ調整痕が残り、16は体部外面下半に細かいミガキ調整が施され、体部内面にはハケ調整の後、ナデ調整が施される。17～19は底部破片で、18は内外面ともに摩滅が激しいため調整不明であるが、17・19はいずれも底部外面近くに縦位のハケ調整がなされる。20～24は台付甕で、20～23は口縁部破片である。いずれも口唇部に刻目があるが、20・23は指頭、21・22はハケ工具によって施される。摩滅が顕著な21を除き、外面は縦位あるいは斜位、内面は横位のハケ調整痕が観察される。20は口唇部外面にも横位のハケ調整がなされる。24は小型の台付甕の脚部である。内外面ともにハケ調整が顕著である。

25は黒色粘板岩の自然石を利用した磨石である。中央部には両面とも使用による摩耗が顕著にみられる。26は灰黄色粗粒砂岩、27は淡黄褐色中粒砂岩の自然石を利用した台石である。ともに使用面である上部中央が摩耗し、使用によって全体的に窪んでいる。27は側面にも使用痕が認められる。

土器を中心としたこれら遺物は、概ね菊川式中段階の遺物群と位置づけられるため、当遺構は弥生時代後期中葉の時期に属するとみられる。



第４図　SH50542出土遺物１



第 5 図　SH50542出土遺物 2

第２節　掘立柱建物跡

１　掘立柱建物跡の概要

（１）建物の形態と規模

掘立柱建物跡は調査区全域で検出され、その数は63棟を数える。SB80035を除き、ほとんどが梁間１間の建物となるが、間数と規模により、大きくⅠ～Ⅲ類の３つに分類が可能かと思われる。掘立柱建物の規模や分類については第１表にまとめているため、併せて参照されたい。なお、梁間及び桁行の規模は長い方を表記している。

Ⅰ類建物は桁行３間以上の大型建物が該当するが、SB80014・SB80057の２棟があるのみである。それぞれ調査区の東よりに位置するが、いずれも周辺の竪穴住居や掘立柱建物からやや離れた場所にあることや、SB80014のように棟持柱を持つという形態的特徴から、何らかの特別な施設であった可能性がある。また、建物面積がSB80014は29.6㎡、SB80057は44.7㎡と、当該期の建物としては最大規模であることも特筆される。

Ⅱ類建物は桁行２～３間の建物で、35棟が該当する。１間×３間の建物が２棟、１間×４間の建物が１棟、残り32棟は１間×２間の建物で占められる。N－18区のSB80062は南半が調査区外であるが、おそらくⅡ類建物になるものと思われる。建物の平面積は０～10㎡の規模が４棟、10～20㎡が20棟、20～30㎡が10棟、不明が１棟で、当該期としては中型建物が多く、普遍的に分布する形態の建物といえる。

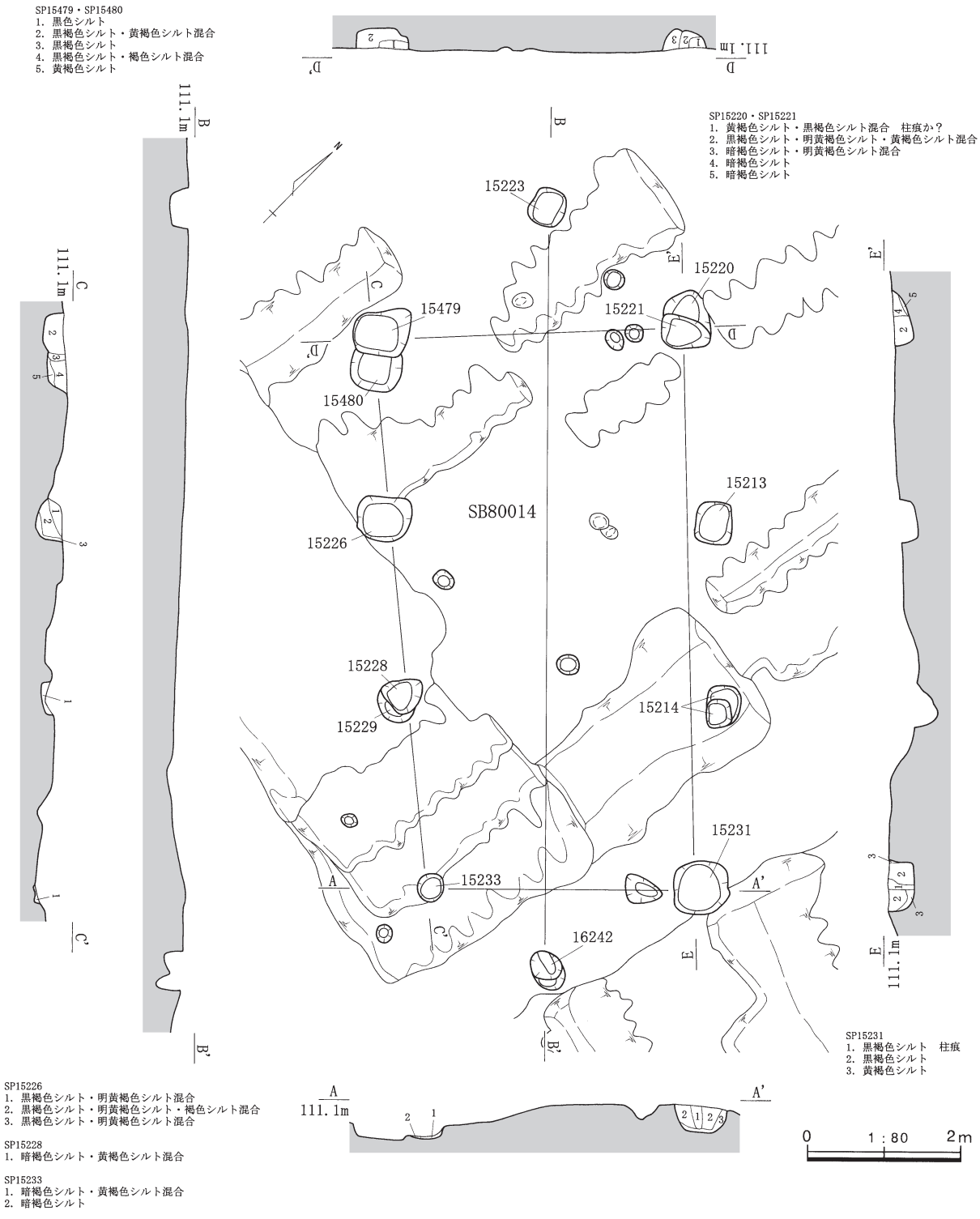
Ⅲ類建物は梁間１間、桁行１間の建物で、26棟を数える。形態的な特徴に加え、SB80018～80024が集中するJ－12～K－13区付近には竪穴住居が分布していないことなどとも考え合わせると、深い削平によって竪穴部分が消失した竪穴住居の可能性があるものを含むと考えられる。そうした性格や形態から、小規模な建物が多く、平面積は０～10㎡の規模が17棟、10～20㎡が８棟、20～30㎡が１棟という数字がそれを端的に表している。

（２）建物の分布

掘立柱建物跡は調査区のほぼ全域で検出されるが、その分布には偏在する傾向もある。調査区東端から５ラインくらいまで数棟の建物が建てられるが、東西６～９ラインでは２棟の建物のみが分布する地区となる。ただし、そこには調査区内最大のⅠ類掘立柱建物SB80057があり、建物の集中を意識的に避けている可能性もある。東西10ラインから14ラインにかけては、南北G～Kラインを中心に多くの建物が分布する。竪穴住居の分布と合致する箇所もあるが、東西13～14ラインには竪穴住居が希薄となっており、やや相違する傾向もある。これは先述のようにⅢ類建物が本来は竪穴住居であった可能性があることと無縁ではなく、この地区の遺構面削平が深かったことによるものとも考えられる。区画溝SD50838の東側となる東西15～20ラインの間では４棟のⅡ類建物が分布するのみである。SD50838の西側となる東西20～25ラインの間にはⅡ類建物を中心に分布がみられ、K－22～M－25区付近にⅢ類建物がやや集まっているように見える。東西26ラインから西側については、楕円形の竪穴住居が多く分布する地区であるが、掘立柱建物は７棟が散在するのみの極めて希薄な分布域であることがわかる。

また、建物の方向性に着目すると、ある程度グルーピングが可能かと思われる。北を基準とした桁行方向は１～30°西に振れるグループ（A群）、30～60°西に振れるグループ（B群）、１～20°程度東に振れるグループ（C群）に大きく分けられる。A群は大型Ⅰ類建物SB80057をはじめとして、調査区全体に分布する。中でも東西17～21ラインにはA群のみが分布し、その周辺に所在する楕円形あるいは隅丸方形の竪穴住居と方向性が近似しそうである。B群は調査区東端～14ライン、東西22～25ラインに集まる傾向があり、特に調査区東端～14ラインに多くみられる。この地区ではⅠ類建物SB80014をはじめとし

て、SB80002・80004・80006・80011～80013などしっかりとした平面形と柱穴を持つ建物がある。これらはSH14549・15285などといった方形の竪穴住居と方向性が近似する傾向がある。C群建物は少数で、H－24～J－26区のSH80039～80041などが確認されるのみで、分布傾向の把握は困難である。



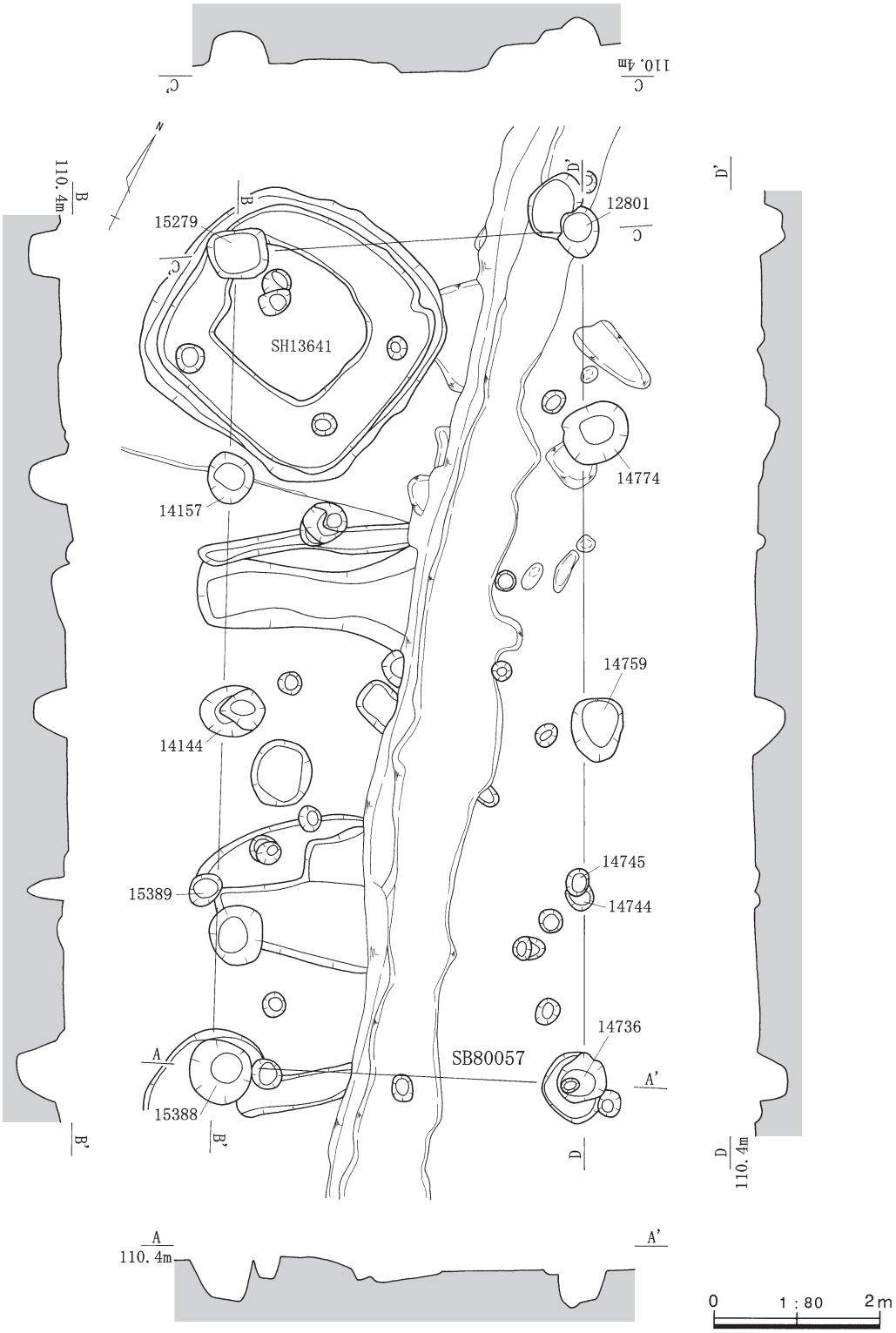
第 6 図　SB80014平面・断面図

２　遺構

（１）Ⅰ類掘立柱建物

SB80014（第６図）

F・G－13区で検出された梁間１間、桁行３間の側柱建物である。建物の規模は梁間が4.0m、桁行は7.4mで、桁行の軸方向はN－44°－Wである。南側の梁間が3.5mと狭くなっており、平面形はややいび

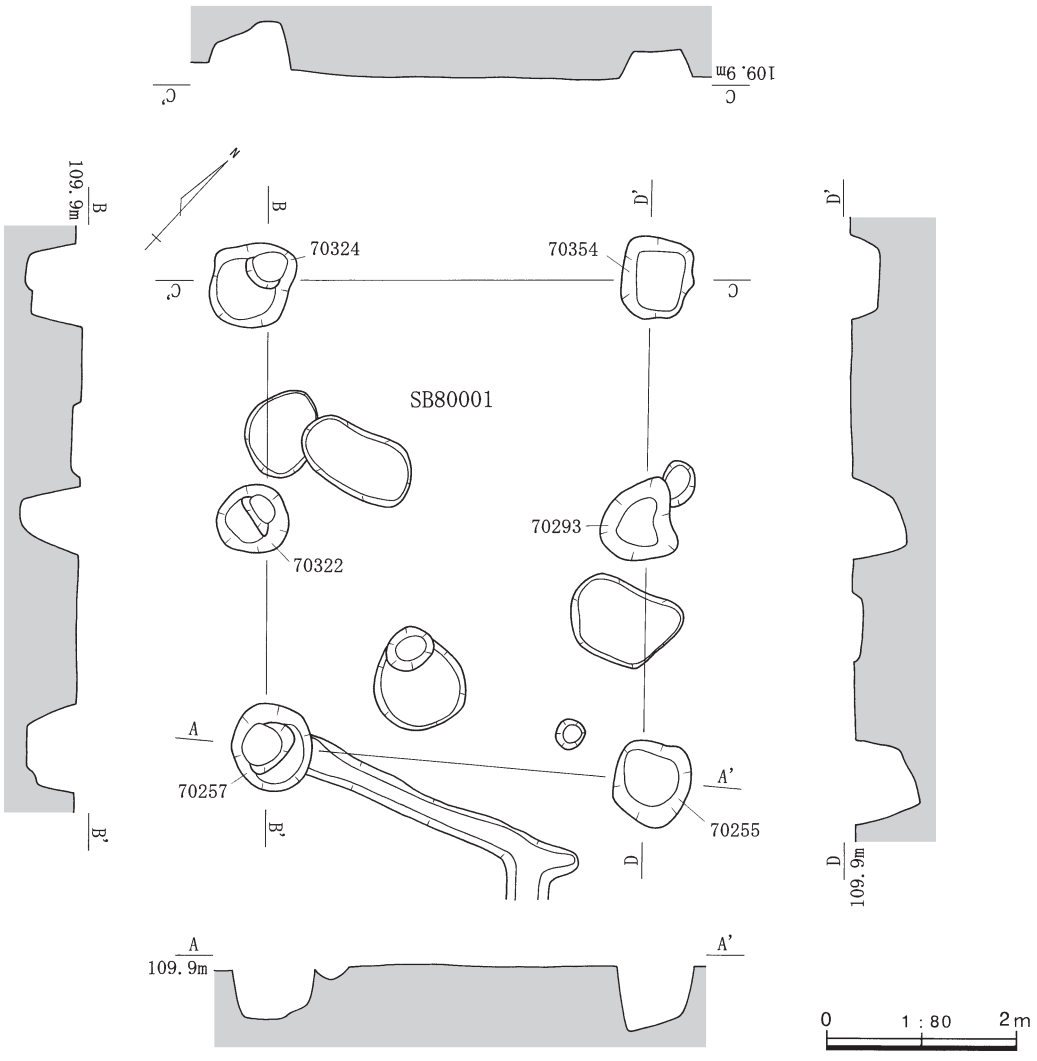


第７図　SB80057平面・断面図

つな長方形を呈する。また東側桁行方向の柱の通りも不揃いである。梁間外側では棟持柱とみられる一対の柱穴が検出されている。北側のSP15223、南側のSP16242間の距離は9.9mを測る。桁行の柱間は西側が北から2.3m、2.4m、2.5m、東側は北から2.5m、2.4m、2.5mである。柱穴の通りはばらつきが大きく、柱穴の平面形状は楕円形あるいは不整形な円形で、規模は南西隅の柱穴が直径36㎝と小規模である他は直径55～80cmと比較的規模は大きい。改植による攪乱が激しい箇所にあるため、検出面からの柱穴の深さは12～36cmと浅い。北東隅のSP15220で直径20㎝、南東隅のSP15231では直径12㎝の柱痕が土層堆積状況によって確認されている。竪穴住居、掘立柱建物が集中する地区の北端に位置し、周囲には目立った遺構が見あたらず、単独で存在しており、また棟持柱を持つ特異な建物構造とも考え合わせれば、集落域にあって特殊な施設であった可能性が高い。

SB80057（第７図）

Ｅ・Ｆ－８区で検出された梁間１間、桁行４間の建物である。建物の規模は梁間4.3m、桁行10.4mを測り、平面積が44.7㎡となる、今回の調査区内では最大規模の大型側柱建物である。建物西側で竪穴住居SH13641・14152・14131と重複し、それらを切る形で遺構が検出されたことから、これら遺構よりも新しい。建物の規模は梁間が4.3m、桁行が10.4mであり、桁行の軸方向はＮ－26°－Ｗである。桁行の柱間は西側が北から2.7m、2.8m、2.2m、2.2m、東側は2.4m、3.5m、2.2m、2.3mである。柱穴の平面形



第８図　SB80001平面・断面図

状は円形あるいは楕円形で、規模は直径24～88cm、検出面からの深さは８～48cmである。この建物もSB80014と同様に、周辺の竪穴住居や掘立柱建物から離れた場所に所在することから、特別な機能を有する建物であったと考えられる。

（２）Ⅱ類掘立柱建物跡

SB80001（第８図）

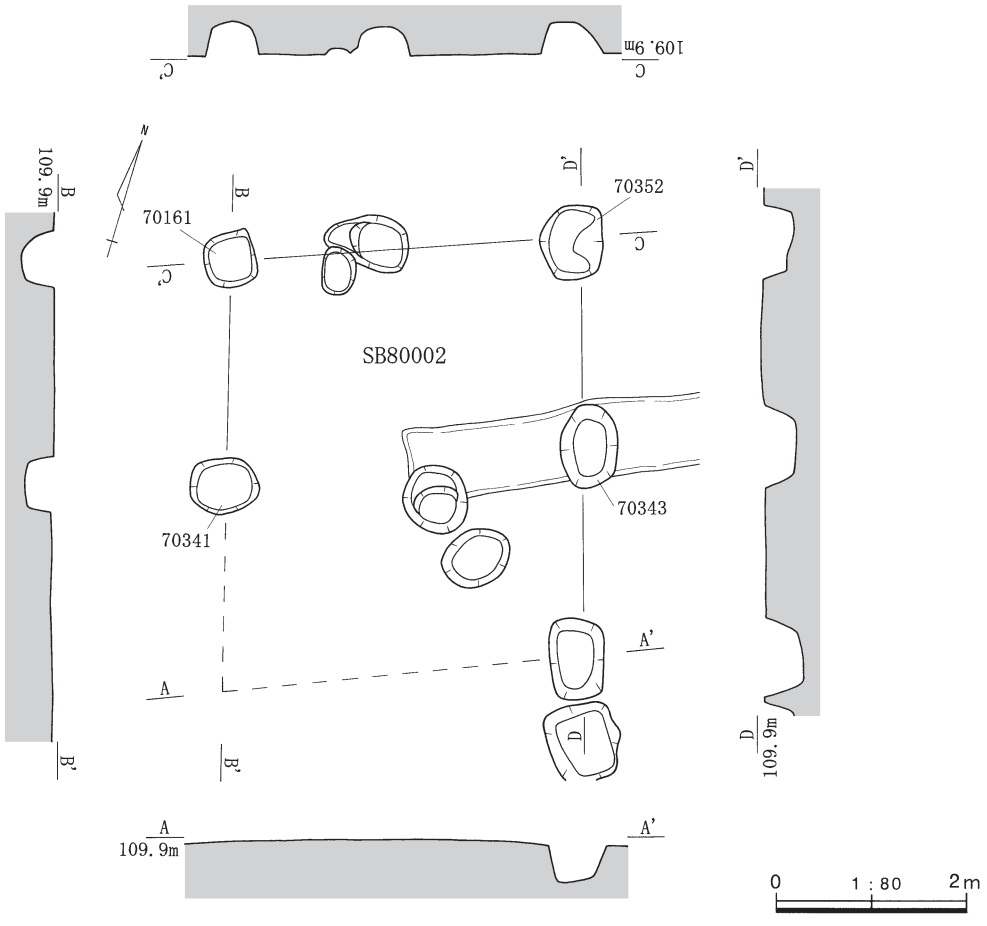
Ｅ－４・５区に位置する。梁間１間、桁行２間の側柱建物で、建物規模は梁間が4.0m、桁行が5.3mである。桁行の軸方向はＮ－42°－Ｗとなる。桁行の柱間は西側が北から2.6m、2.4m、東側は2.6m、2.7mである。柱穴の平面形状は不整形な円形で、直径72～96cm、検出面からの深さは29～68cmである。遺物はSP70354から29の壺の口縁部が出土している。

SB80002（第９図）

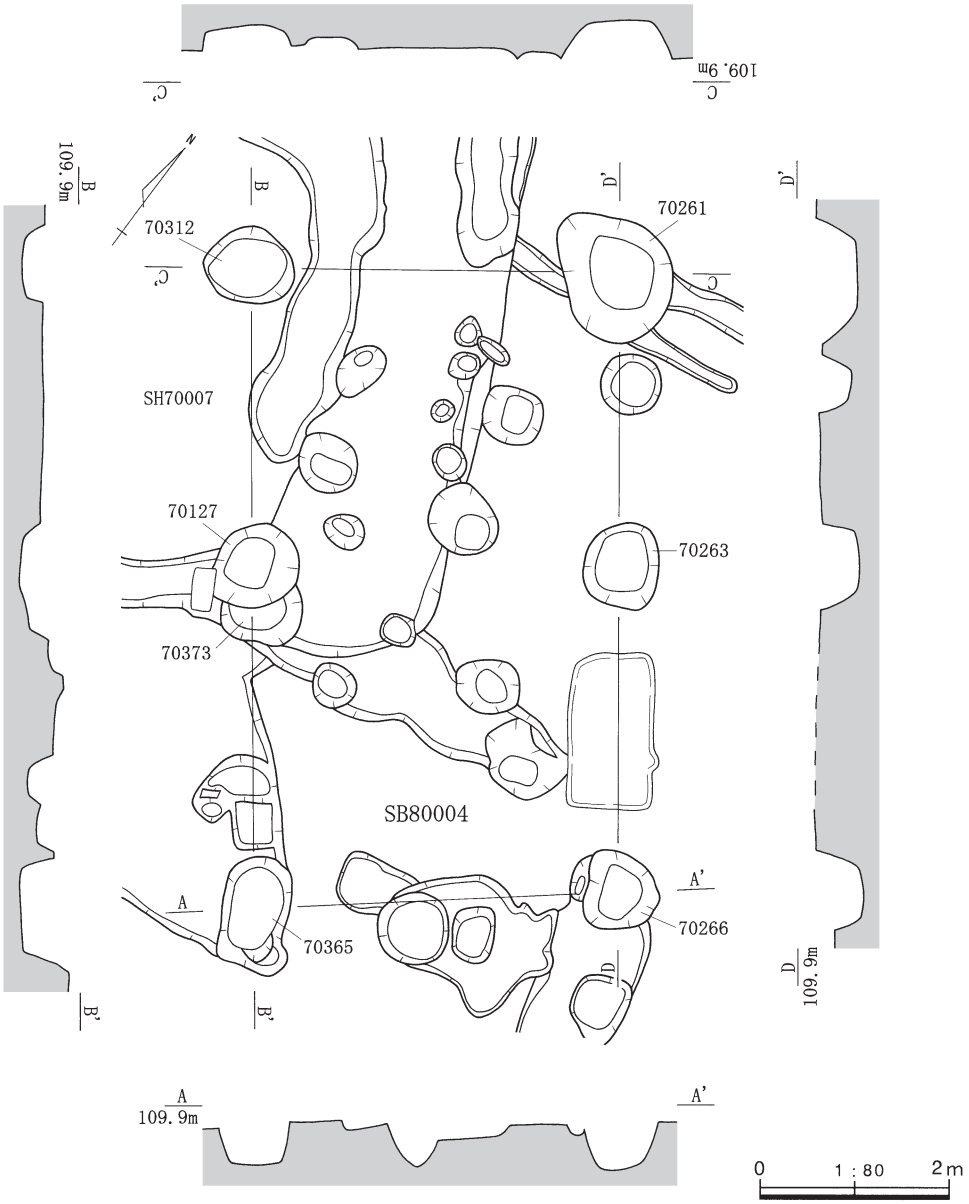
Ｄ・Ｅ－５区に位置する梁間１間、桁行２間の側柱建物であるが、南西隅の柱穴は未検出である。建物の規模は梁間3.7m、桁行4.6mで、桁行の軸方向はＮ－17°－Ｗである。桁行の柱間は西側が2.4m、東側は北から2.2m、2.3mである。柱穴の平面形状は楕円形あるいは略方形で、直径56～88cm、検出面からの深さは32～44cmである。遺物は30の鉢がSP70352から出土している。

SB80004（第10図）

Ｆ・Ｇ－４区に位置する梁間１間、桁行２間の側柱建物である。北西部で竪穴住居跡SH70007と重複し、SH70007その２の貯蔵穴とみられるSK70373をSP70127が切っていることから、これよりも新しい遺構



第９図　SB80002平面・断面図



第10図　SB80004平面・断面図

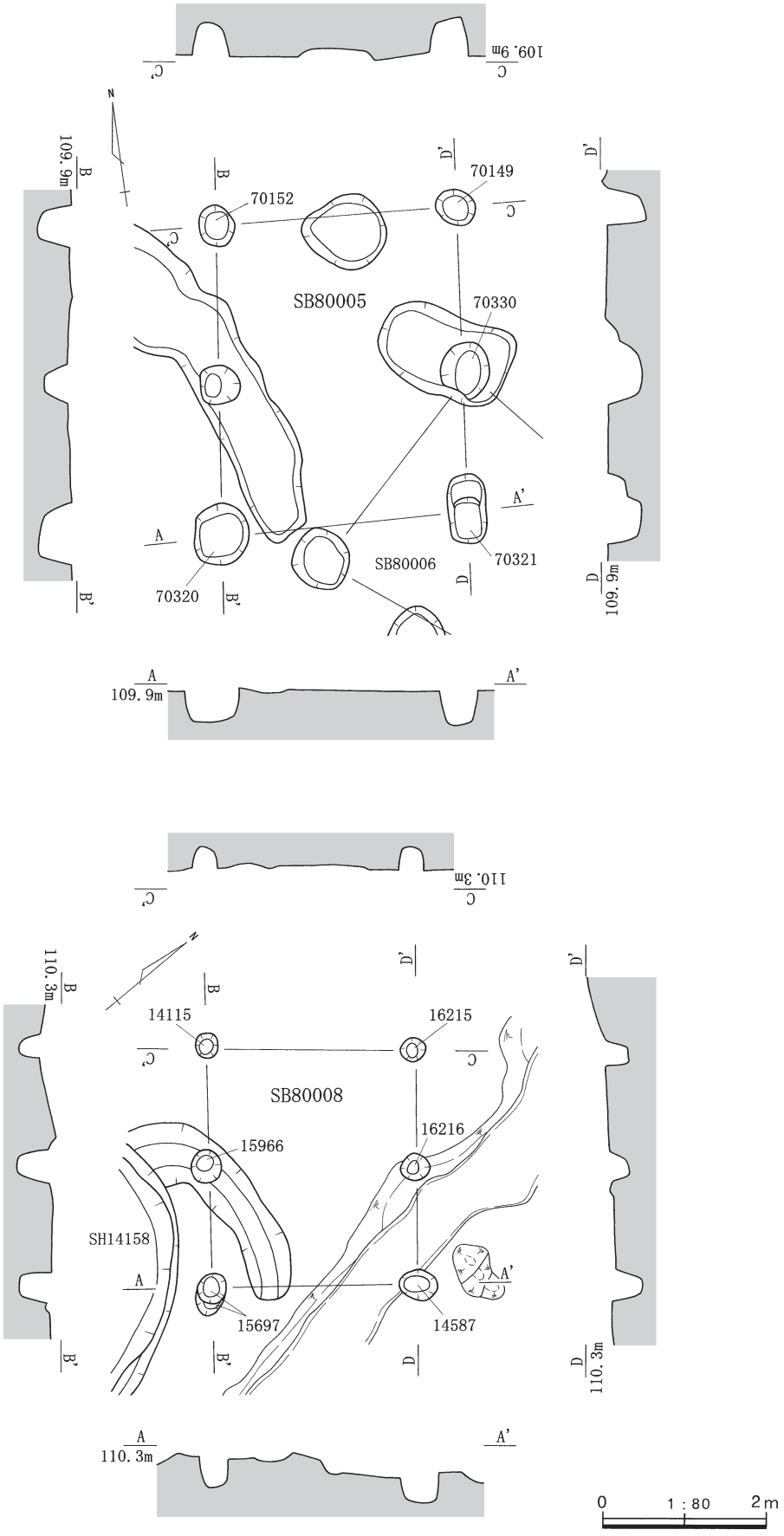
と判断される。建物の規模は梁間が3.9m、桁行は6.8mで、桁行の軸方向はN－37°－Wである。桁行の柱間は西側が北から3.1m、3.7m、東側は北から3.0m、3.5mである。柱穴の平面形状は楕円形あるいは不整形な円形で、直径86～128cm、検出面からの深さは22～52cmである。遺物はSP70312から31の壺が出土している。

SB80005（第11図）

E－５・６区に位置する梁間１間、桁行２間の側柱建物である。南東部で掘立柱建物SB80006と重複するが、新旧関係は不明である。建物規模は梁間3.0m、桁行3.8mで、桁行の軸方向はN－6°－Eである。桁行の柱間は西側が北から2.0m、1.8m、東側は2.0m、1.8mである。柱穴の平面形状は円形または楕円形で、直径44～120cm、検出面からの深さは30～48cmである。遺物はSP70330から32の壺、またSP70321からは33、SP70320からは34の台付甕が出土している。

SB80008（第11図）

G－８区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。建物規模は梁間が2.6m、桁行が2.9mで、



第11図　SB80005・80008平面・断面図

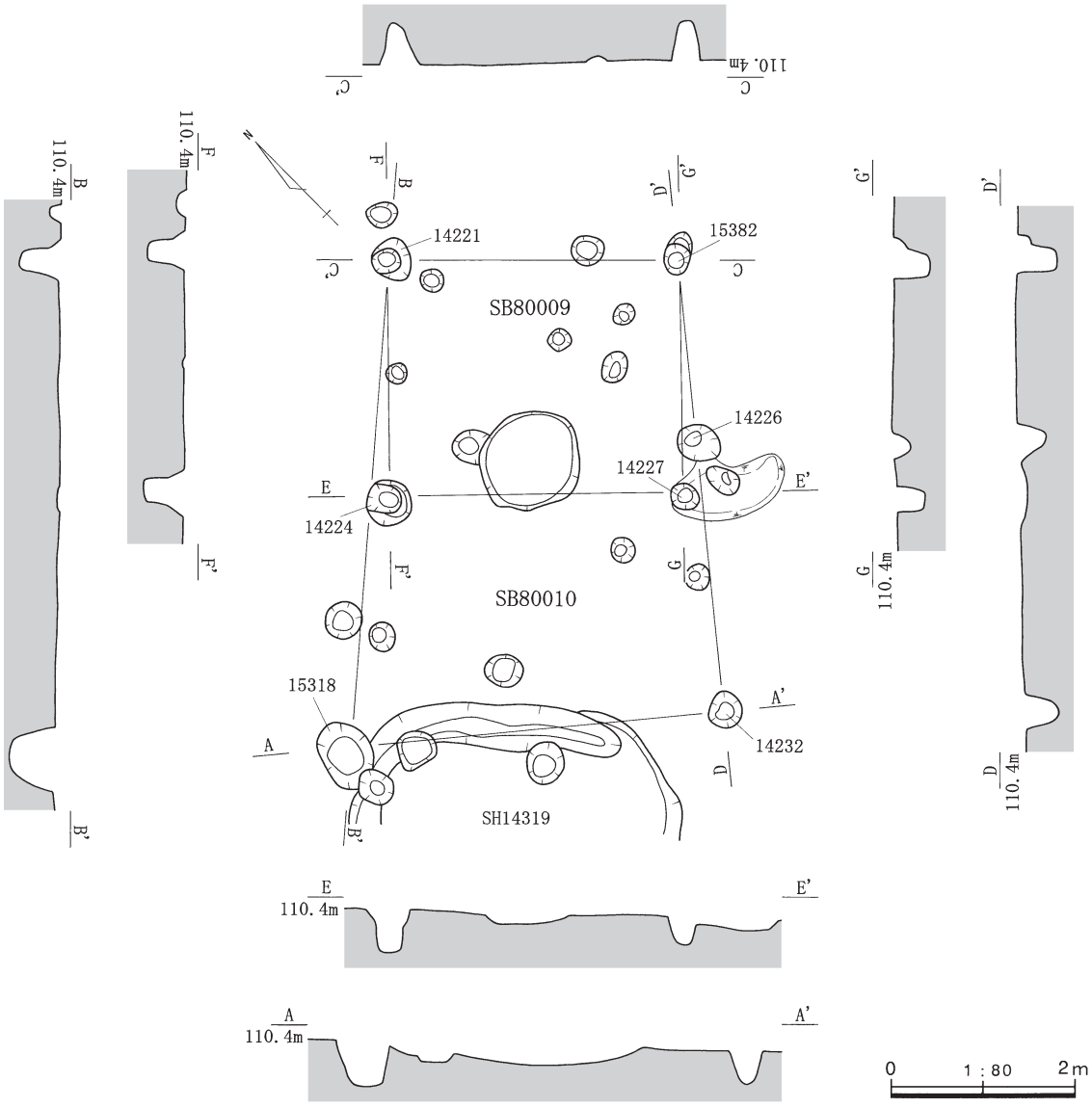
桁行の軸方向はN－50°－Wである。桁行の柱間は西側が北から1.4m、1.5m、東側は1.4mの等間である。柱穴の平面形状は小規模な円形を呈し、直径25～40cm、検出面からの深さは26～40cmである。

SB80010（第12図）

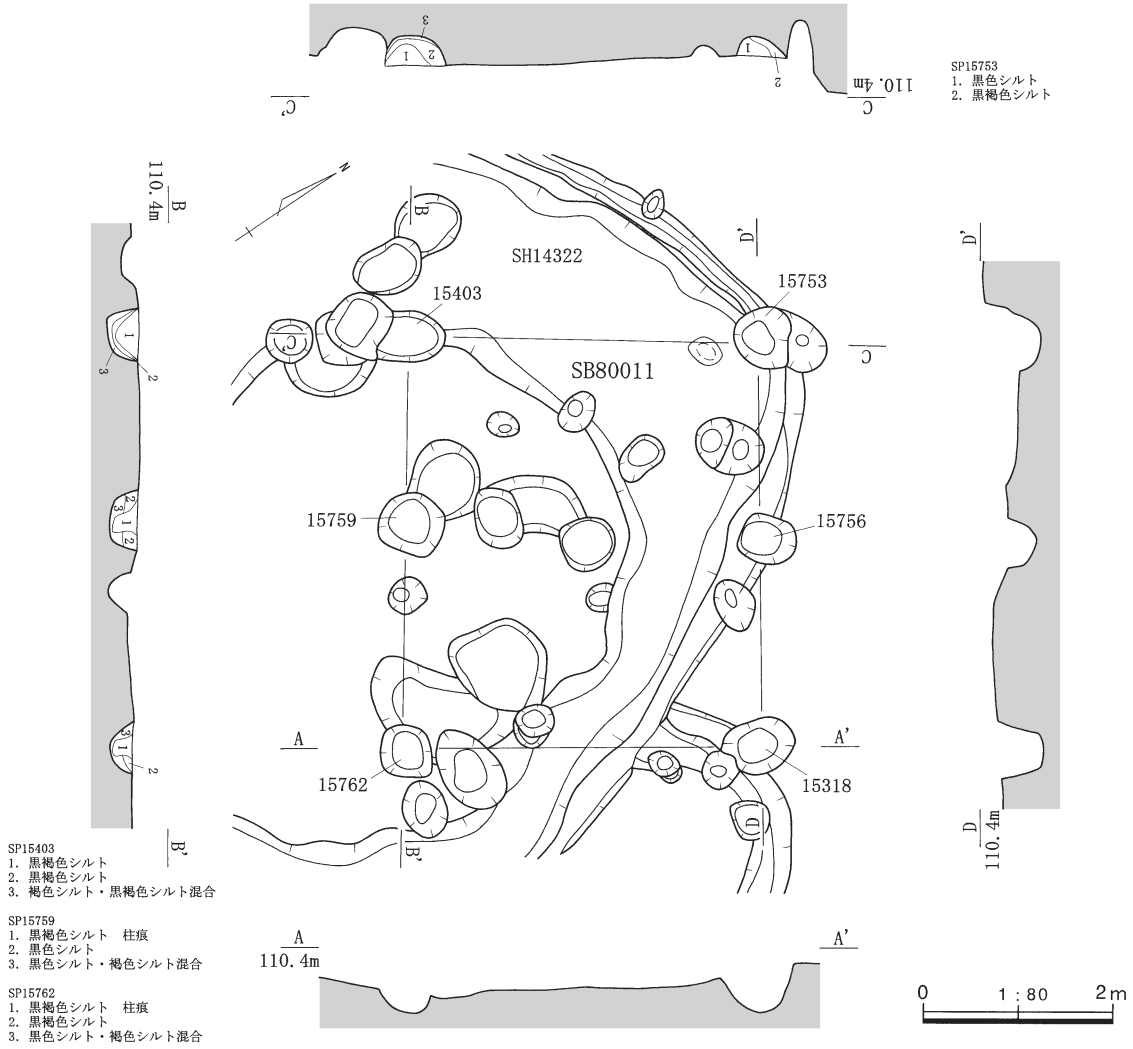
H・I－９区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。北半でⅢ類建物のSB80009とほぼ重なる形で重複し、これよりも新しいとみられる。SB80009から80010へと拡張、改修しているものであろうか。西端では竪穴住居SH14319を切る形で重複している。平面形は西側梁間が4.1m、東側梁間が3.2mとややいびつな長方形を呈し、桁行は5.4mを測る。桁行の軸方向がE－46°－Nの東西棟で、桁行の柱間は北側が西から2.8m、2.6m、南側は2.4m、2.6mである。柱穴の平面形状は円形あるいは不整形な円形で、直径33～74cm、検出面からの深さは32～48cmである。

SB80011（第13図）

I－10区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。竪穴住居SH14322と大きく重なり、柱穴が炉や壁溝の一部を破壊していることから、本遺構の方が新しい遺構と考えられる。建物規模は梁間3.8m、桁行4.4mで、桁行の軸方向はN－56°－Wである。桁行の柱間は西側が北から2.0m、2.4m、東側は



第12図　SB80009・80010平面・断面図



第13図　SB80011平面・断面図

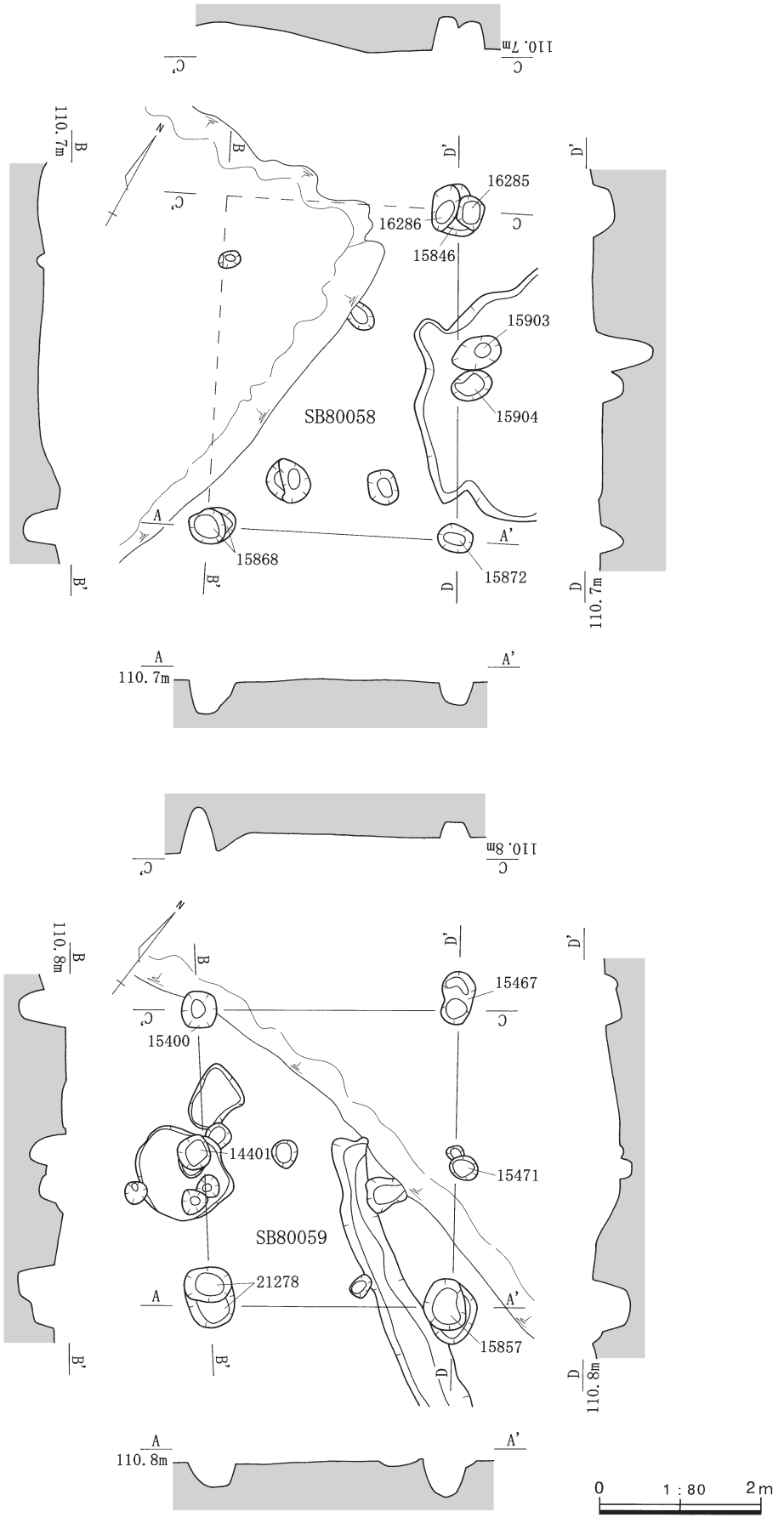
2.1m、2.2mである。柱穴の平面形状は不整形な円形を呈し、直径56～80cm、検出面からの深さは24～50cmである。桁行西側のSP15759・15762の土層堆積状況で柱痕が確認されているが、それぞれ直径20cm・16cmの規模であった。遺物はSP15318の覆土から35の台付甕、SP15403の覆土から36の壺が出土している。

SB80058（第14図）

G－10区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物であるが、北西側の柱穴は攪乱によって失われていた。SB80059と隣接している。残存箇所における建物の規模は梁間3.1m、桁行4.1m、桁行の軸方向はN－28°－Wである。桁行東側の柱間は北から2.2m、1.9mであった。柱穴の平面形状はほぼ円形で、直径40～65cm、検出面からの深さは26～40cmである。

SB80059（第14図）

G－11区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。SB80058と並ぶような位置関係にあり、前後関係は明らかでないが、関連する建物であった可能性もある。建物の規模は梁間3.2m、桁行3.7mと、平面形状は正方形に近い。桁行の軸方向はN－39°－Wである。桁行西側の柱間は北から1.8m、1.9m、東側の柱間は2.0m、1.7mであった。柱穴の平面形状はほぼ円形で、直径30～64cm、検出面からの深さは20～60cmである。



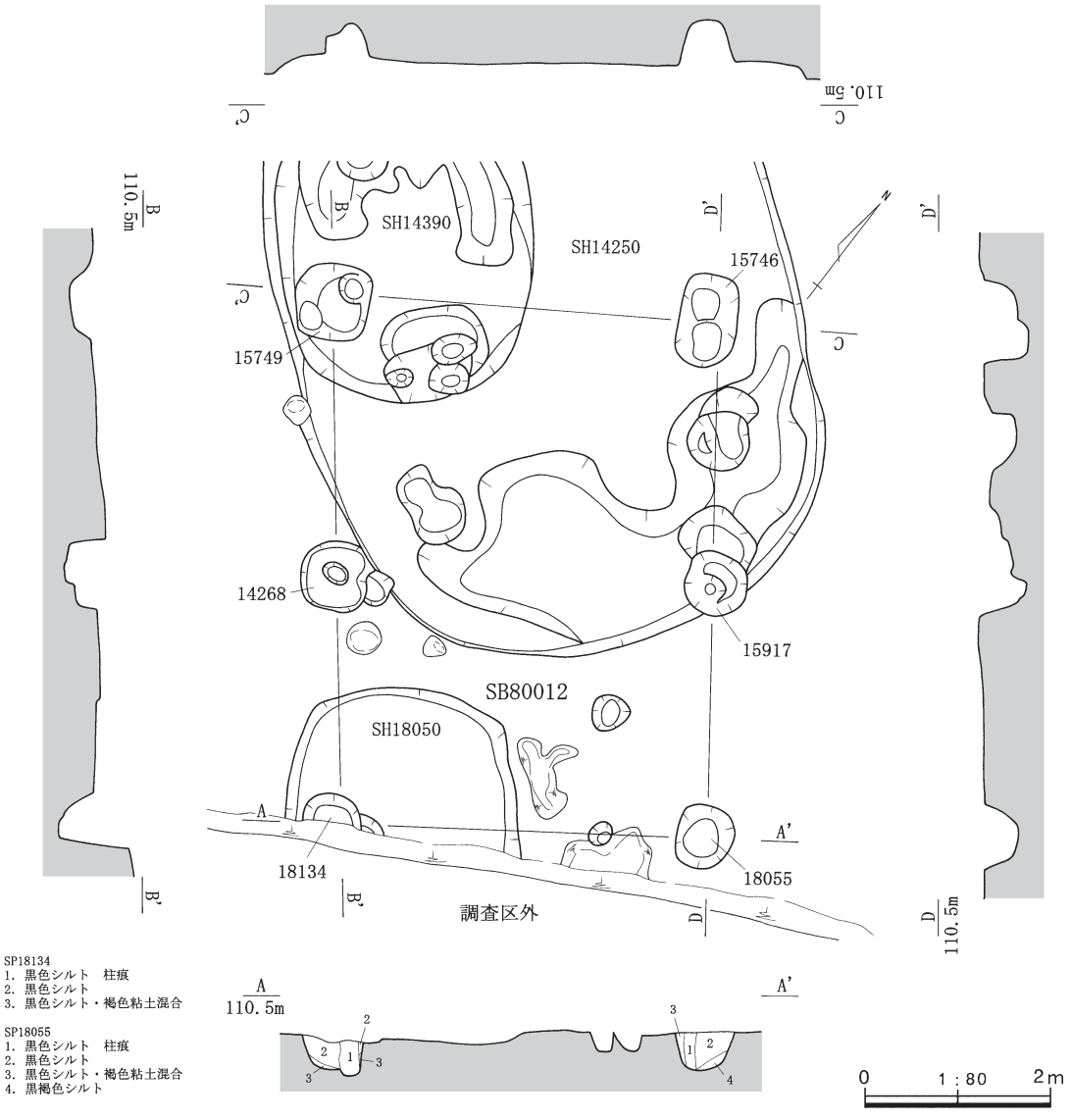
第14図　SB80058・80059平面・断面図

SB80012（第15図）

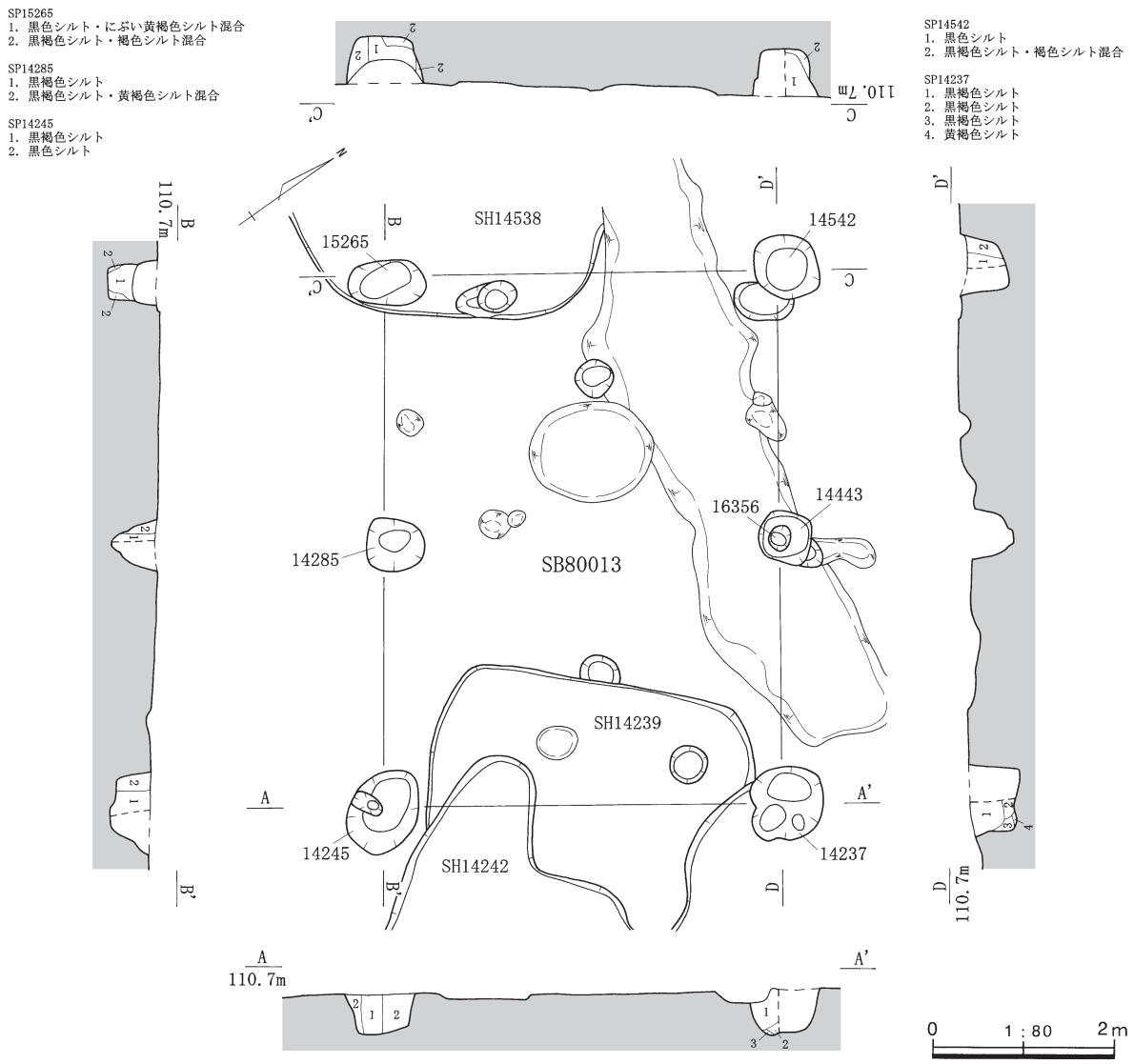
J－11区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。竪穴住居SH14250と大きく重なり、SB80012の柱穴はその埋土から掘り込まれていることから、これよりも新しい遺構と判断される。建物の規模は梁間4.2m、桁行5.8m、桁行の軸方向はN－38°－Wである。桁行東側の柱間は北から3.0m、2.7m、西側は2.9m、2.7mである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径68～80cm、検出面からの深さは36～48cmである。南端柱穴のSP18055・18134ではそれぞれ直径12㎝・20㎝の柱痕が土層堆積状況によって確認されている。遺物はSP15746の掘方内より37の甕が出土している。

SB80013（第16図）

I－12区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。柱穴SP14237が竪穴住居SH14242を一部破壊していることから、これよりも新しい遺構とみられる。建物の規模は梁間4.4m、桁行6.0m、桁行の軸方向はN－55°－Wである。桁行の柱間は東側、西側ともに3.0mの等間であった。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径60～96cm、検出面からの深さは46～56cmである。SP14245の埋土堆積状況、またSP14285・14443の底面に残る圧痕の様子から、直径20㎝程度の柱が据えられていたことがわかる。遺物はSP14245の覆土から38～40の壺が出土している。



第15図　SB80012平面・断面図



第16図　SB80013平面・断面図

SB80017（第17図）

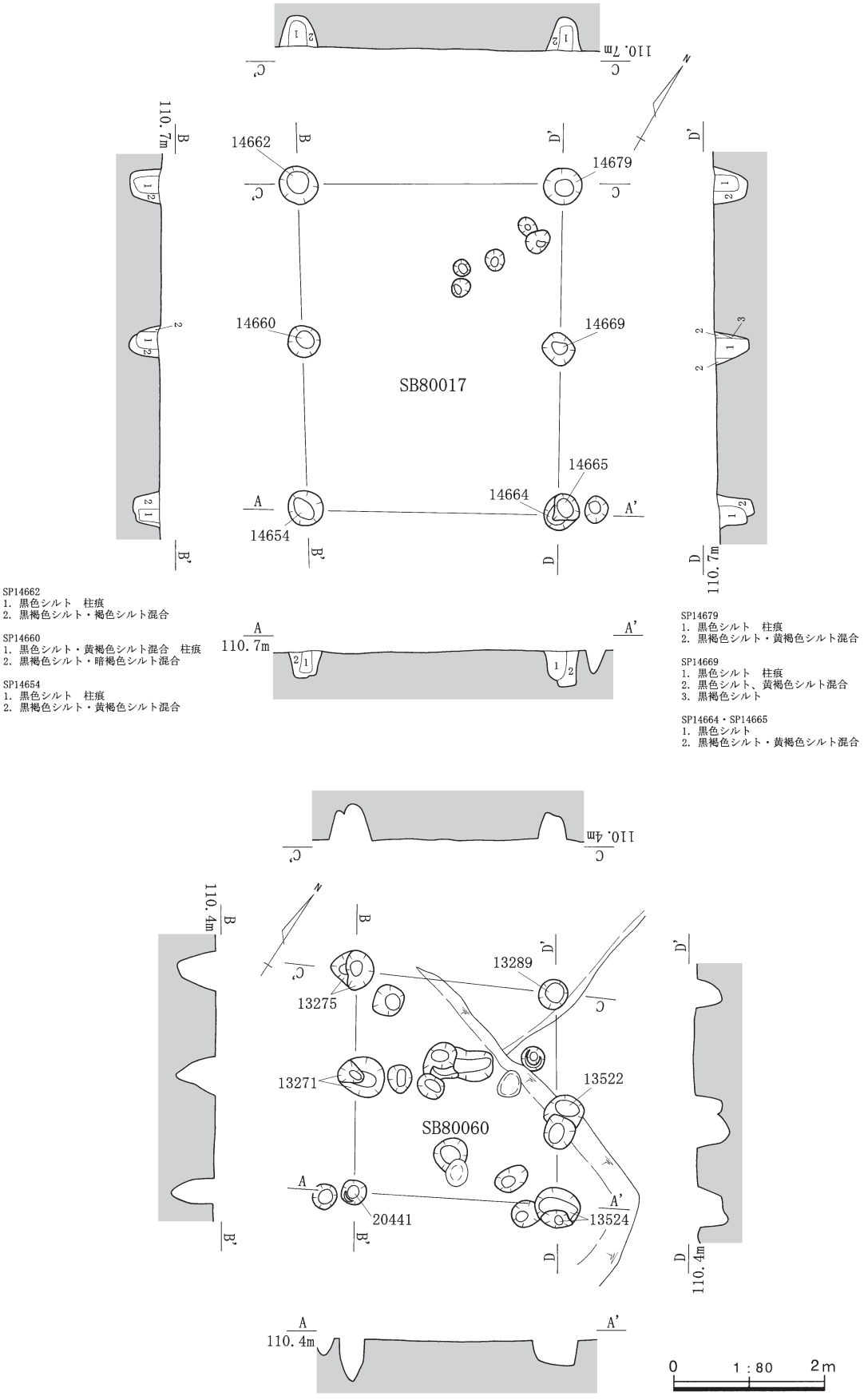
H－13区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。建物の規模は梁間3.5m、桁行4.4m、桁行の軸方向はN－30°－Wである。桁行の柱間は西側が北から2.1m、2.2m、東側が2.2m、2.2mであった。柱穴の平面形状は円形で、直径40～50cm、検出面からの深さは36～48cmであり、比較的規模が揃っている。SP14654・14660・14662・14679・14669で柱痕が検出され、土層断面から直径20～35㎝の柱が使用されていたと想定される。

SB80060（第17図）

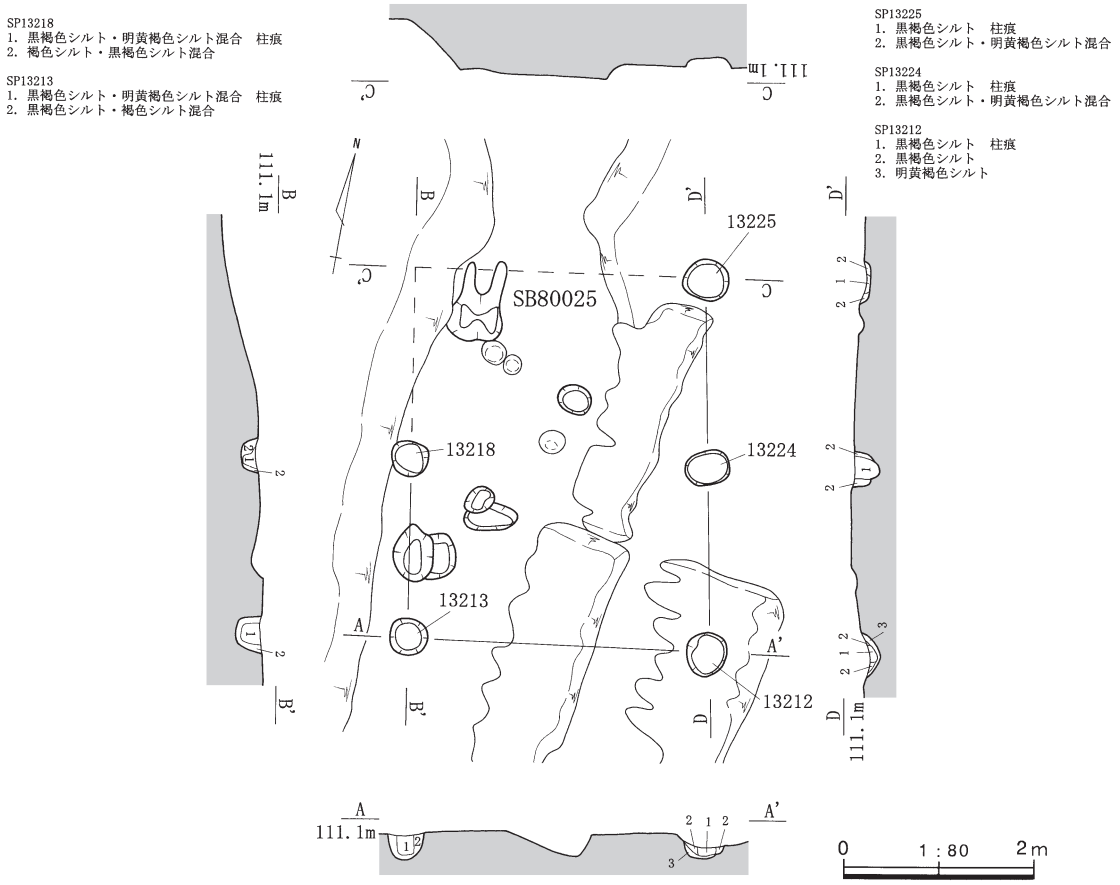
J・K－14区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。建物の規模は梁間2.7m、桁行3.0mの小規模建物で、桁行の軸方向はN－33°－Wである。桁行の柱間は西側が北から1.5mの等間、東側が1.6m、1.2mであった。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径30～55cm、検出面からの深さは34～56cmである。

SB80025（第18図）

F－15区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物であるが、北西隅の柱穴は後世の攪乱によって失われていた。竪穴住居や掘立柱建物が集中する地区からやや離れた場所に位置する。残存している部



第17図　SB80017・80060平面・断面図



第18図　SB80025平面・断面図

分における建物の規模は梁間3.2m、桁行4.0m、桁行の軸方向はN－11°－Wである。桁行の柱間は東側が北から2.0mの等間、西側柱間は南側のみ確認可能で、1.9mであった。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径は36～44cm、検出面からの深さは12～28cmである。検出されたすべての柱穴で柱痕が確認されており、直径15～25㎝程度の柱であったと推定される。

SB80026（第19図）

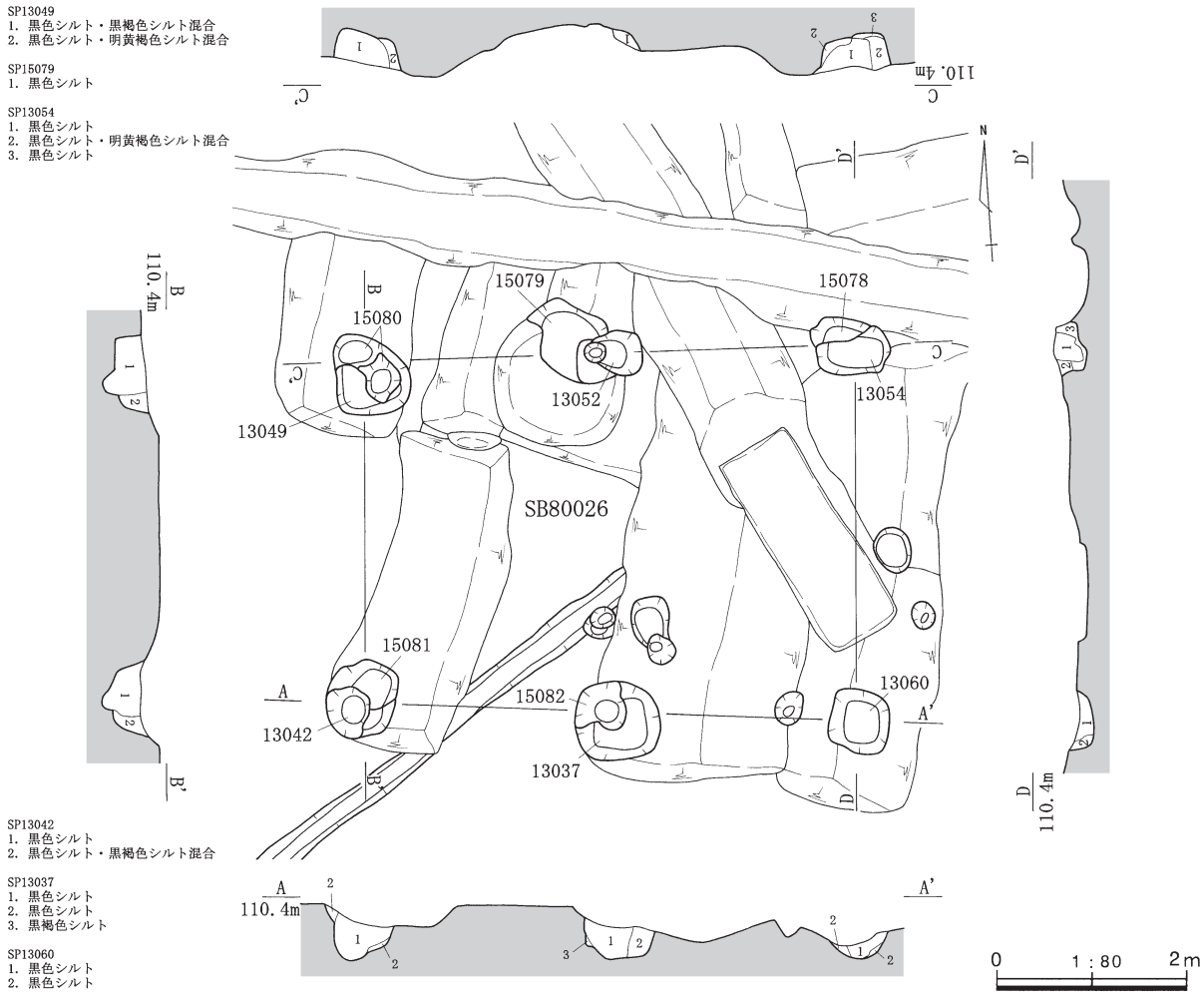
L－15区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。建物の規模は梁間4.0m、桁行5.2m、桁行の軸方向がE－4°－Nの東西棟である。桁行の柱間は北側南側ともに2.6mの等間であった。柱穴の平面形状は楕円形や不整形な円形で、直径55～96cm、検出面からの深さは20～60cmである。柱穴の底面には直径20㎝程度の圧痕が残り、土層断面の観察状況から、柱は廃絶の際に抜き取られた可能性が高い。遺物はSP13054から41の台付甕が出土している。

SB80027（第20図）

L－17区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。竪穴住居SH13021・15325・53475と重複しており、SH13021と15325の掘方面で柱穴が検出されていることから、これらよりも古い遺構と判断される。建物の規模は梁間4.4m、桁行5.3m、桁行の軸方向はN－15°－Wである。桁行の柱間は西側が北から2.6m、2.7m、東側が2.5m、2.7mであった。柱穴の平面形状は円形で、直径65～100cm、検出面からの深さは20～64cmである。SP52962・54357・53771では直径15～30㎝程度の柱痕が確認され、土層断面の状況から柱を据えた後に段階的に異なる土を入れて固定している様子が観察される。

SB80028（第21図）

L－18区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。竪穴住居SH52984・53409と重複してお



第19図　SB80026平面・断面図

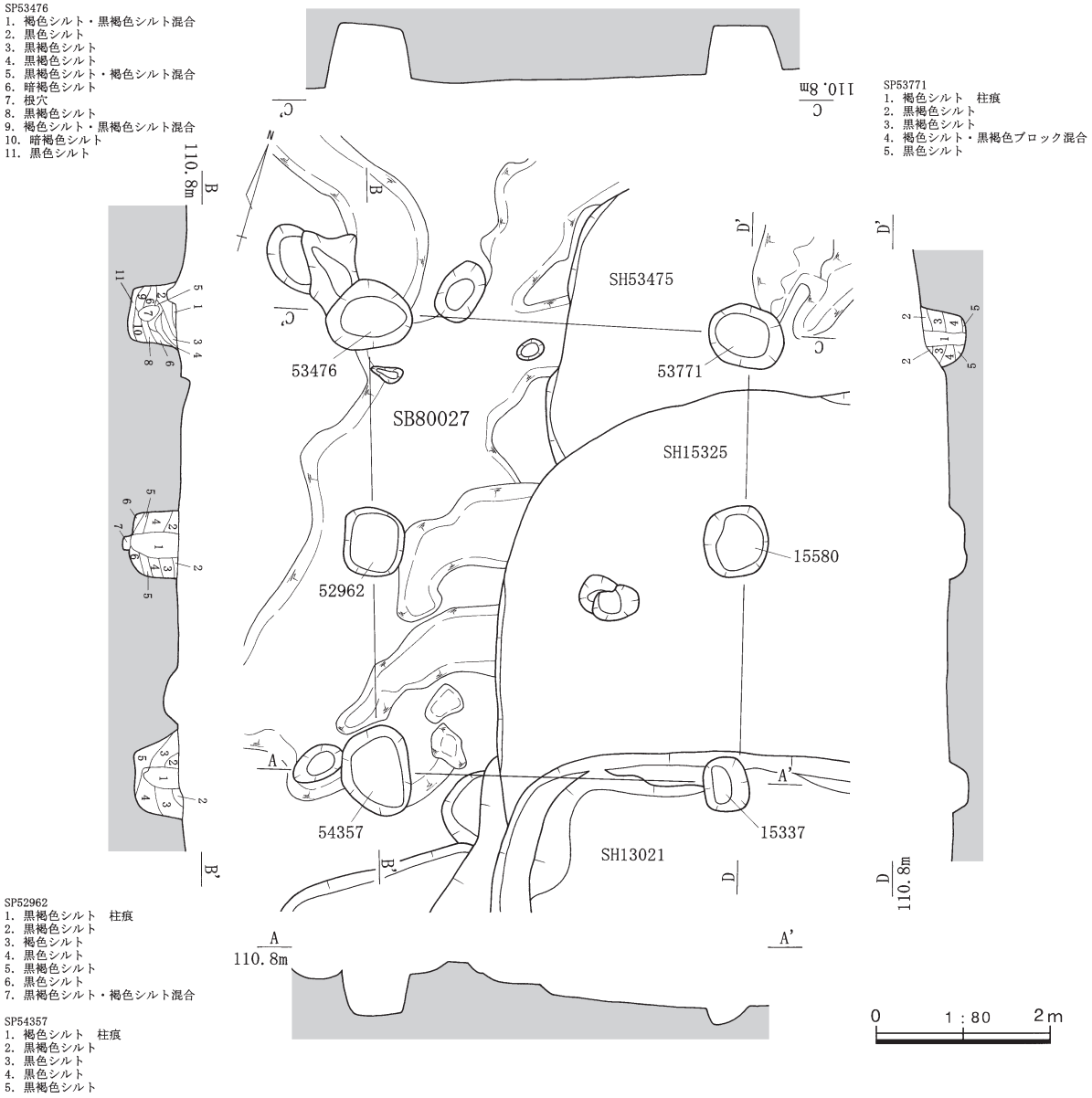
り、これらを切る形で柱穴が掘り込まれるため、これら遺構よりも新しい。建物の規模は梁間3.8m、桁行6.1m、桁行の軸方向はN－20°－Wである。桁行の柱間は西側、東側ともに3.0mの等間である。柱穴の平面形状は円形で、直径55～88cm、検出面からの深さは36～64cmである。遺物はSP54755から42の壺が出土している。

SB80029（第22図）

J－18区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。建物の規模は梁間2.9m、桁行3.5m、桁行の軸方向はN－28°－Wである。桁行の柱間は西側が北から1.8m、1.7m、東側は2.0m、1.5mとやや不揃いである。柱穴の平面形状は楕円形あるいは不整形な円形で、直径48～70cm、検出面からの深さは28～50cmである。SP50741・50743・50749で直径15㎝程度の柱痕が土層断面によって確認され、SP50751・50749・54444では柱穴には柱抜取穴とみられる小穴が重複する。遺物はSP50749から43の壺が出土している。

SB80061（第22図）

I・J－19・20区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。方形周溝墓SZ50861に近接する。建物の規模は梁間2.2m、桁行4.1mと小型で、平面形状はやや歪んだ長方形を呈する。桁行の軸方向がE－2°－Nの東西棟で、桁行の柱間は北側が西から2.2m、1.5m、南側は1.7m、2.4mであった。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径28～44cm、検出面からの深さは４～48cmである。



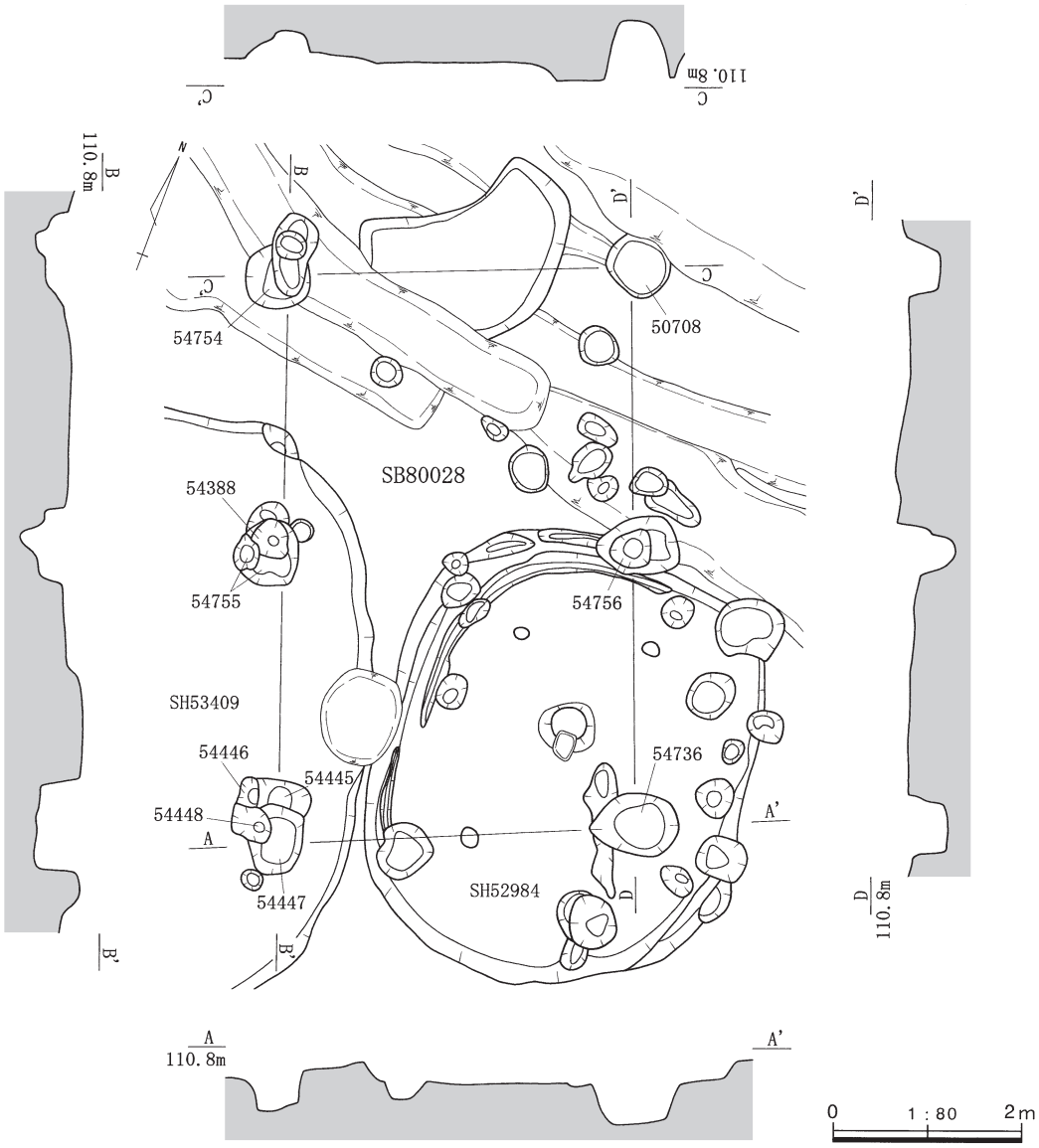
第20図　SB80027平面・断面図

SB80030（第23図）

L－20区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。北西隅の柱穴は後世の攪乱によって失われている。建物の規模は梁間3.0m、桁行4.1m、桁行の軸方向はN－26°－Wである。桁行の柱間は東側が北から1.8m、2.3m、西側南の柱間は2.0mであった。柱穴の平面形状は楕円形あるいは不整形な円形で、直径44～80cm、検出面からの深さは20～42cmである。SP51665・52250・53305で直径10～15cmの柱痕が確認されている。

SB80032（第24図）

N－20・21区で検出された梁間１間、桁行３間の建物である。建物の北西側でSB80031と重複しているが、新旧関係が不明である。建物の規模は梁間3.3m、桁行5.6m、桁行の軸方向はN－15°－Wである。桁行の柱間は西側が北から1.8m、1.8m、2.1m、東側は1.8m、1.7m、2.0mで、他の掘立柱建物と比較すると狭くなっている。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、規模は直径52～64cm、検出面からの深さは20～48cmである。遺物はSP51951から44の台付甕、SP52062から45の壺が出土した。



第21図　SB80028平面・断面図

SB80034（第25図）

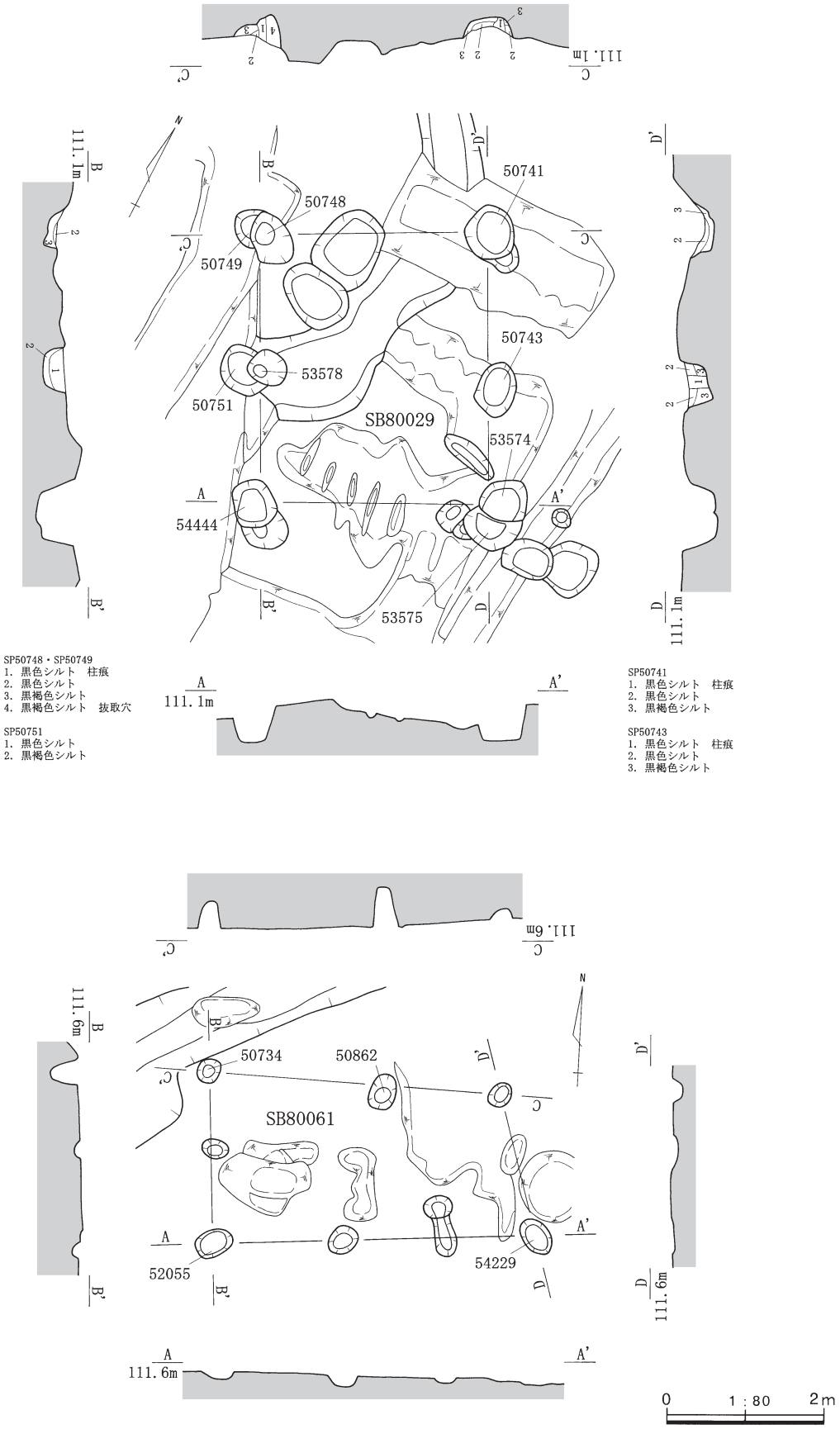
N－22区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。北西隅の柱穴がSB80035と重複する。建物の規模は梁間4.0m、桁行5.1m、桁行の軸方向はN－38°－W、桁行の柱間は西側が北から2.6m、2.4m、東側は2.5m、2.6mであった。柱穴の平面形状は楕円形で、直径52～96cm、検出面からの深さは12～46cmである。

SB80062（第25図）

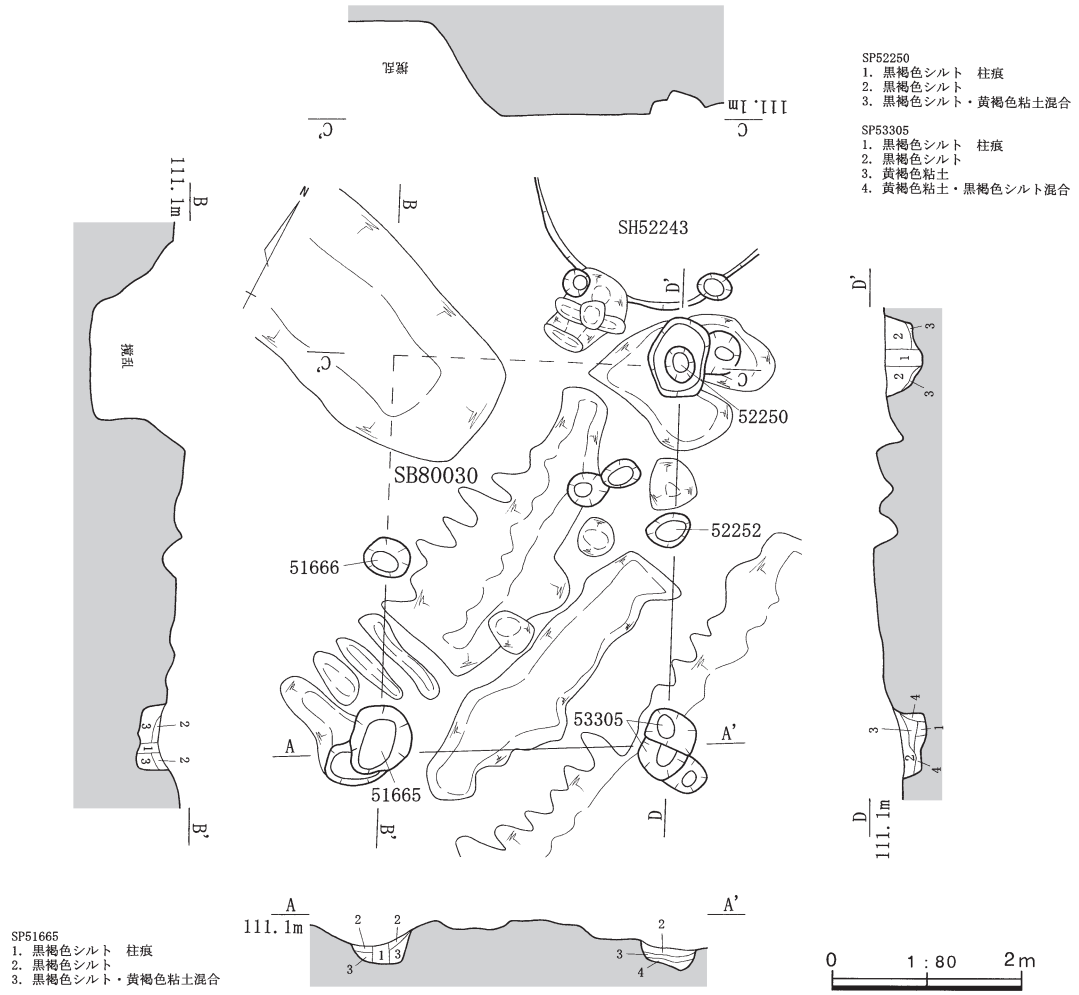
H－19・20区で検出された建物跡である。南側は調査区外となっており、正確な規模は不明であるが、梁間１間、桁行２間の建物とみられる。建物の規模は梁間2.8m以上、桁行は6.0mである。桁行の軸方向がE－20°－Nの東西棟である。桁行の柱間は東から3.1m、2.9mとなっている。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、規模は直径56～64cm、検出面からの深さは10～34cmである。

SB80035（第26図）

N－22・23区で検出された梁間２間、桁行２間の側柱建物であるが、北側梁間にSP51865に対応する南側梁間の柱は確認されていない。北東隅の柱穴がSB80034と重複するが、新旧関係は明確でない。建



第22図　SB80029・80061平面・断面図



第23図　SB80030平面・断面図

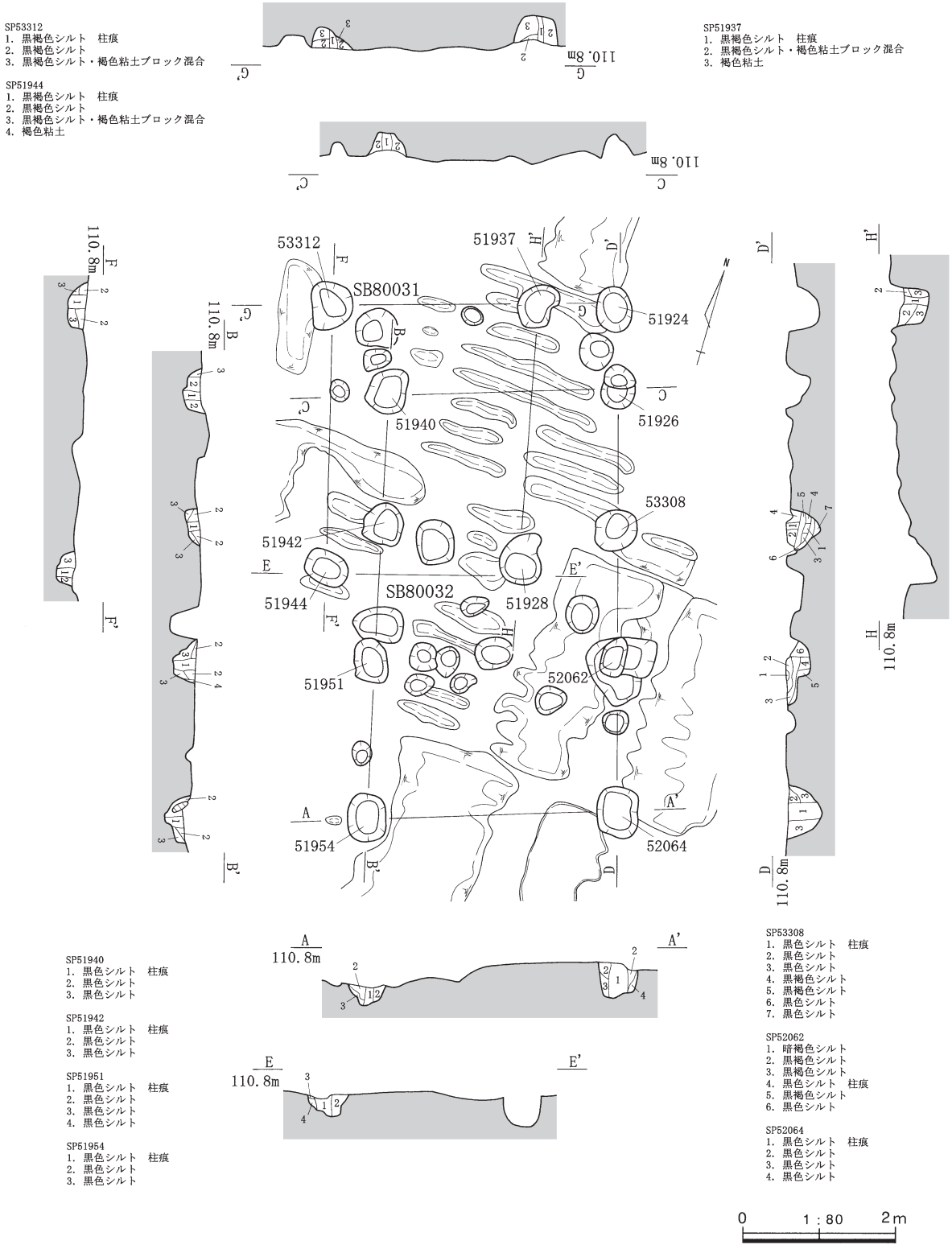
物の規模は梁間3.8m、桁行5.5m、桁行の軸方向がE－62°－Nの東西棟である。北側梁間の柱間は西から1.9m、1.6m、桁行の柱間は西側が北から3.0m、2.4m、東側は2.6m、2.9mであった。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径56～96cm、検出面からの深さは36～44cmである。すべての柱穴で柱痕が確認され、土層断面で観察されるその規模は直径15～25㎝程度である。北側梁間の間柱であるSP51865からは46の台付甕脚部が最上層より出土している（第26図）。

SB80039（第27図）

I－24区で検出された建物跡である。梁間１間、桁行２間の側柱建物であるが、南東隅の柱穴は攪乱によって失われている。建物の規模は梁間2.8m、桁行4.0mである。桁行の軸方向はN－５°－Eである。桁行の西側柱間は北から1.9m、2.2m、東側は2.1mとなっている。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径36～60cm、検出面からの深さは32～52cmである。SP54528では直径15㎝程度の柱痕が確認されている。遺物はSP54094から47の台付甕が出土している。

SB80040（第27図）

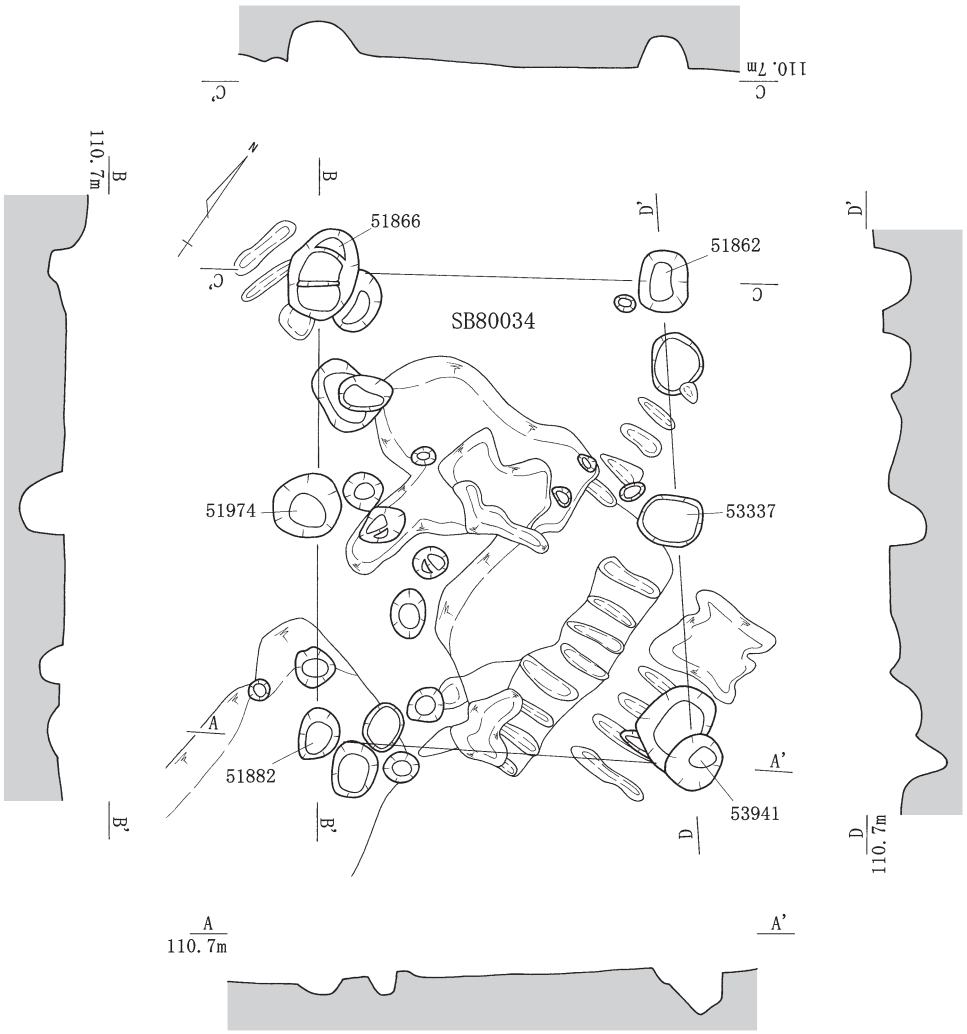
J－24区で検出された梁間１間、桁行３間の側柱建物であるが、梁間2.7m、桁行3.6mと比較的小規模である。桁行の軸方向はN－16°－E、桁行の柱間は西側が北から1.0m、1.4m、1.2m、東側は0.9m、1.6m、1.0mとかなり狭くなっている。円形を呈する柱穴の直径は25～40cmの規模で、検出面からの深さは４～30cmと、攪乱による遺構上部の削平が顕著であった。



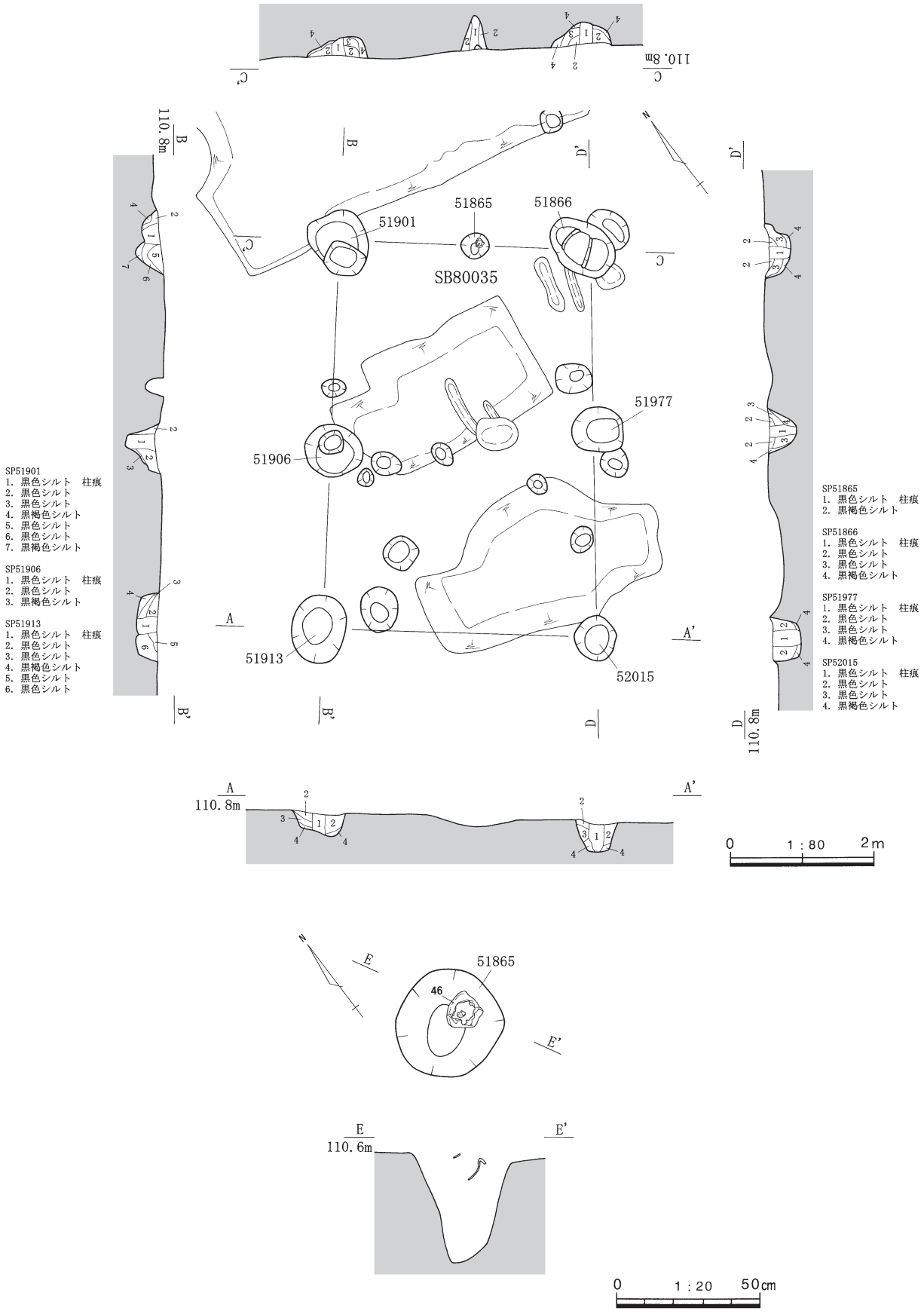
第24図　SB80031・80032平面・断面図

SB80041（第28図）

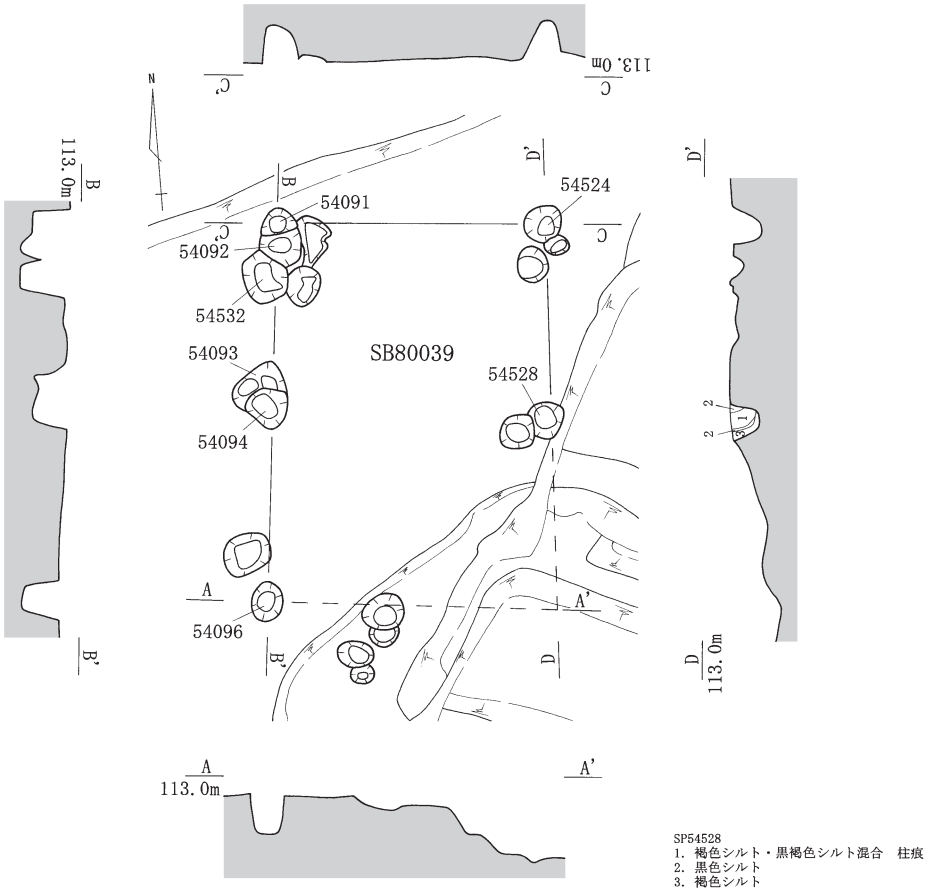
Ⅰ−25区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。建物の規模は梁間3.4m、桁行4.7m、桁行の軸方向はN−6°−Eであった。桁行の柱間は西側が北から2.4m、2.3m、東側は2.4m、2.3mである。柱穴の平面形状は楕円形あるいは不整形な円形で、直径40〜60cm、検出面からの深さは24〜50cmである。

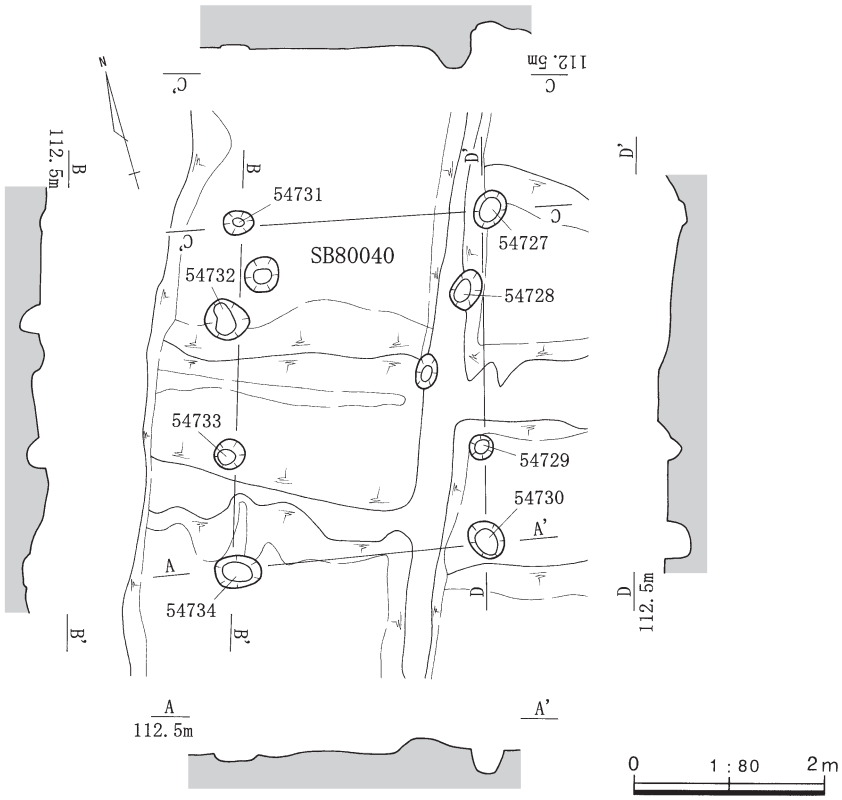


第25図　SB80034・80062平面・断面図

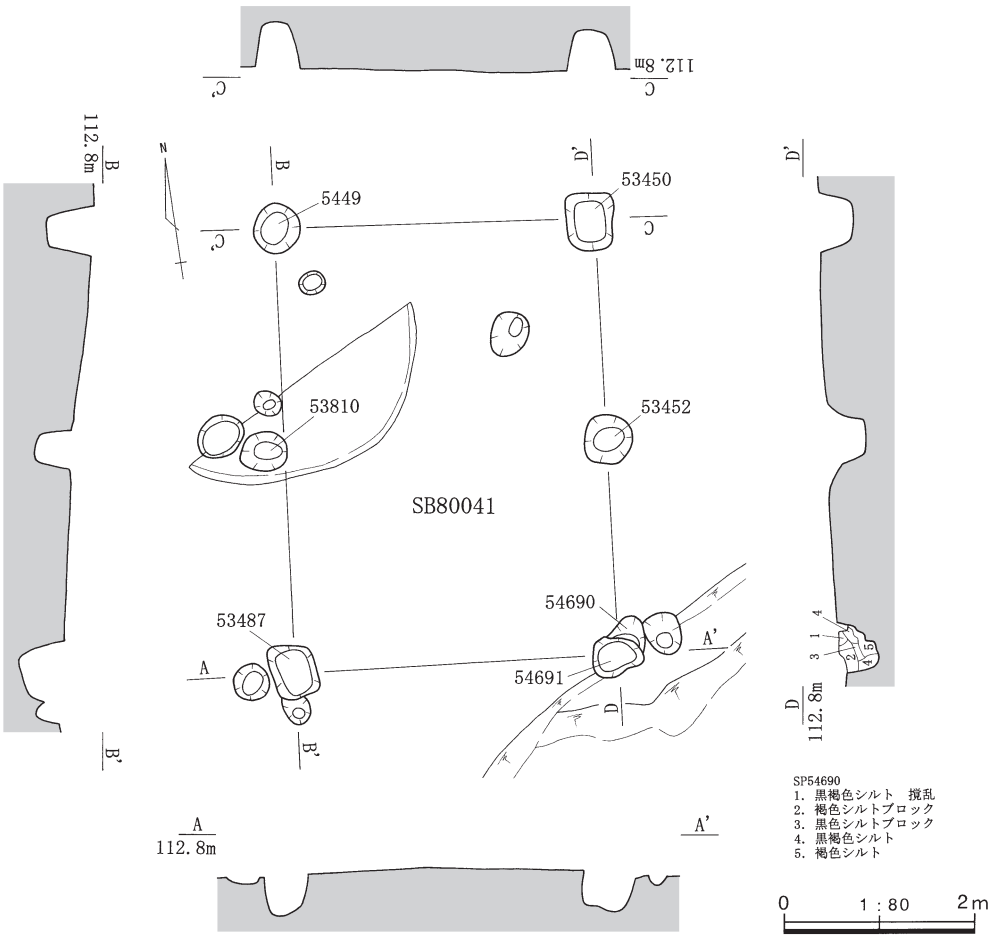


第26図　SB80035平面・断面図





第27図　SB80039・80040平面・断面図



第28図　SB80041平面・断面図

SB80045（第29図）

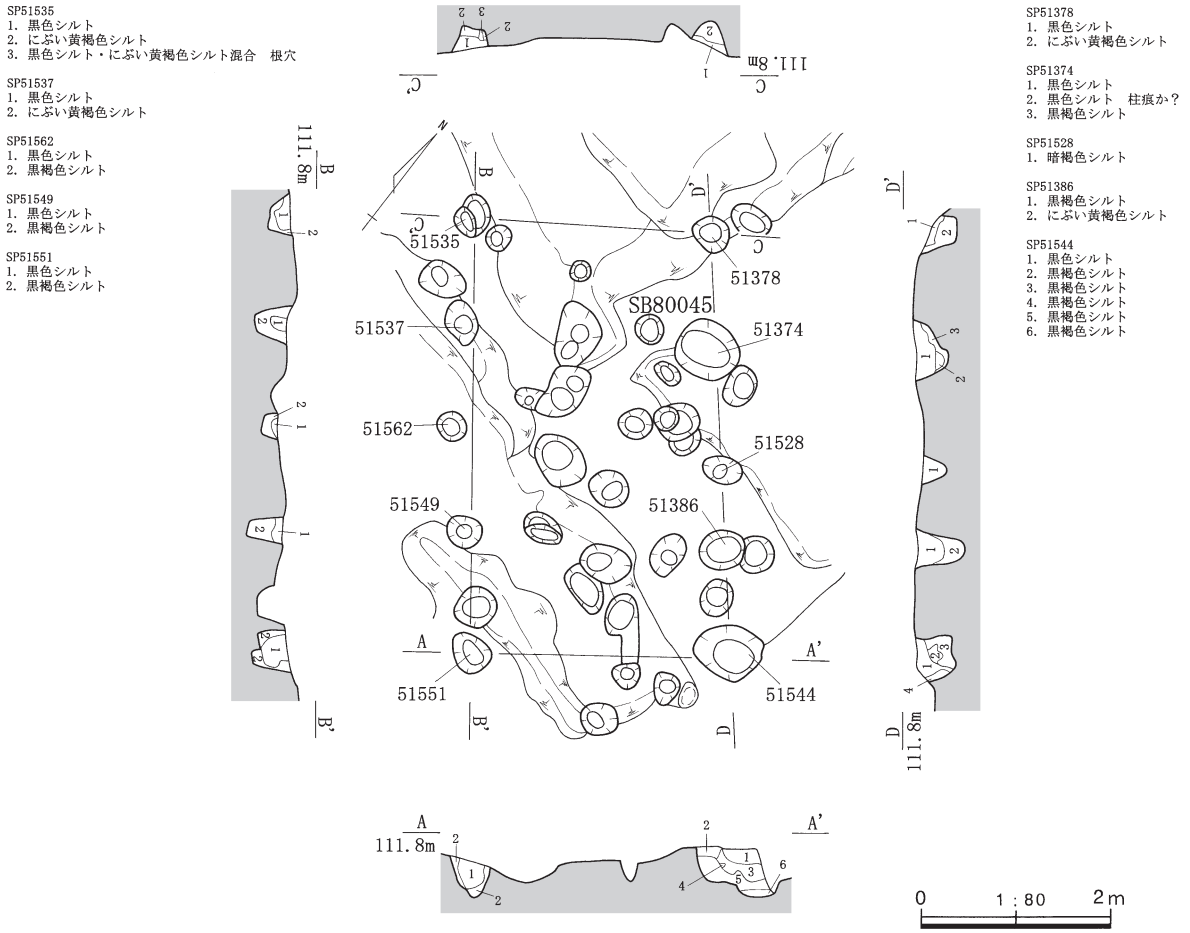
L・M－25区で検出された梁間１間、桁行４間の側柱建物である。SB80043・80044の西側に近接し、これらとは桁行方向がほぼ直交することから、一連の建物であったと推定される。建物の規模は梁間2.8m、桁行4.6m、桁行の軸方向はN－39°－Wであった。桁行の柱間は西側が北から1.1m、1.1m、1.1m、1.3m、東側は1.2m、1.3m、0.8m、1.2mであり、かなり狭くなっている。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径28～70cm、検出面からの深さは18～52cmである。柱の痕跡は明確でなく、SP51374・51551・51535のように上部から再度掘り込まれている様子が土層断面にみえることから、廃絶にあたって抜き取られたものと考えられる。

SB80046（第30図）

M・N－24区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。建物の規模は梁間3.6m、桁行4.8m、桁行の軸方向がE－43°－Nの東西棟である。桁行の柱間は西側が北から2.5m、2.2m、東側は2.5m、2.3mである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径32～80cm、検出面からの深さは26～60cmである。すべての柱穴の土層断面で直径12～25㎝の柱痕が認められた。遺物はSP50048から48の壺が出土している。

SB80048（第31図）

O－25区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。建物の規模は梁間2.9m、桁行4.1m、桁行の軸方向はN－29°－Wであった。桁行の柱間は西側、東側ともに北から2.2m、1.9mである。柱穴の平面形状は楕円形あるいは不整形な円形で、直径25～70cm、検出面からの深さは５～50cmである。



第29図　SB80045平面・断面図

SP50085・50117・50119・50122で直径15～25㎝の柱痕が確認され、SP50085・50122のように柱を据える際に黒色シルトを入れて柱穴下部を整地するかのような例が認められる。遺物はSP50122から49の壺が出土している。

SB80050（第32図）

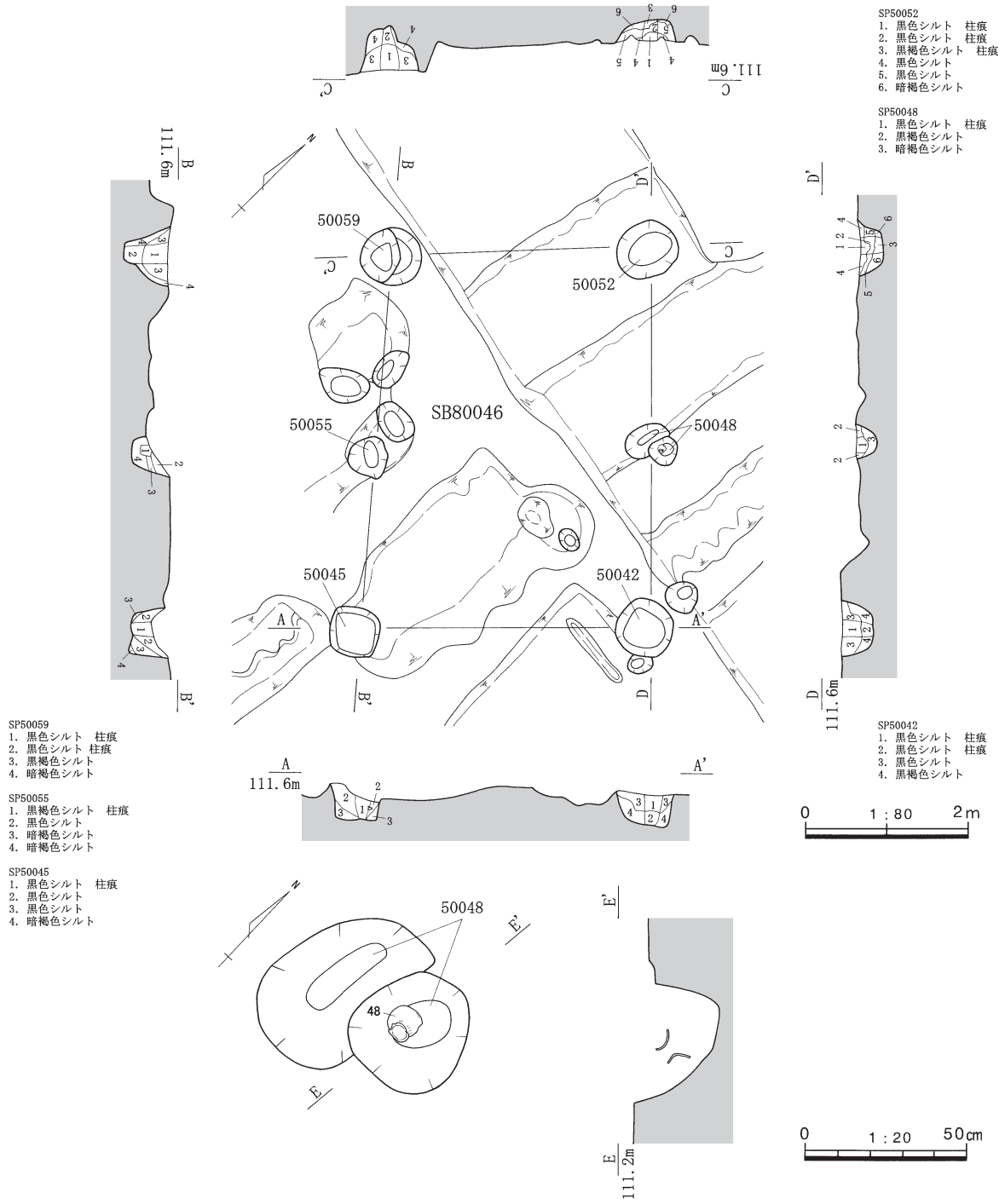
J・K－27区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。建物の規模は梁間2.8m、桁行3.9m、桁行の軸方向はN－24°－Wである。桁行の柱間は西側が北から1.9m、2.0m、東側は1.9m、1.8mである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径32～62cm、検出面からの深さは20～42cmである。SP5322の下部では礫が検出されていた。

SB80051（第32図）

M－27・28区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物で、SZ1900の北側に近接する。建物の規模は梁間2.9m、桁行5.1m、桁行の軸方向がE－18°－Sの東西棟である。桁行の柱間は北側が西から2.9m、2.1m、南側は2.7m、2.4mである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径25～30cmと小規模である。検出面からの深さは20～46cmであった。遺物は51の壺がSP3470から出土している。

SB80054（第33図）

P・Q－32区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。SZ200と重なり、明確な新旧関係は不明であるが、おそらく方形周溝墓に先行する建物であろう。建物の規模は梁間3.5m、桁行4.6m、桁行の軸方向がE－８°－Sの東西棟である。桁行の柱間は北側が2.1mの等間、南側は西から2.5m、2.1mである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径25～64cm、検出面からの深さは16～36cmであ



第30図　SB80046平面・断面図

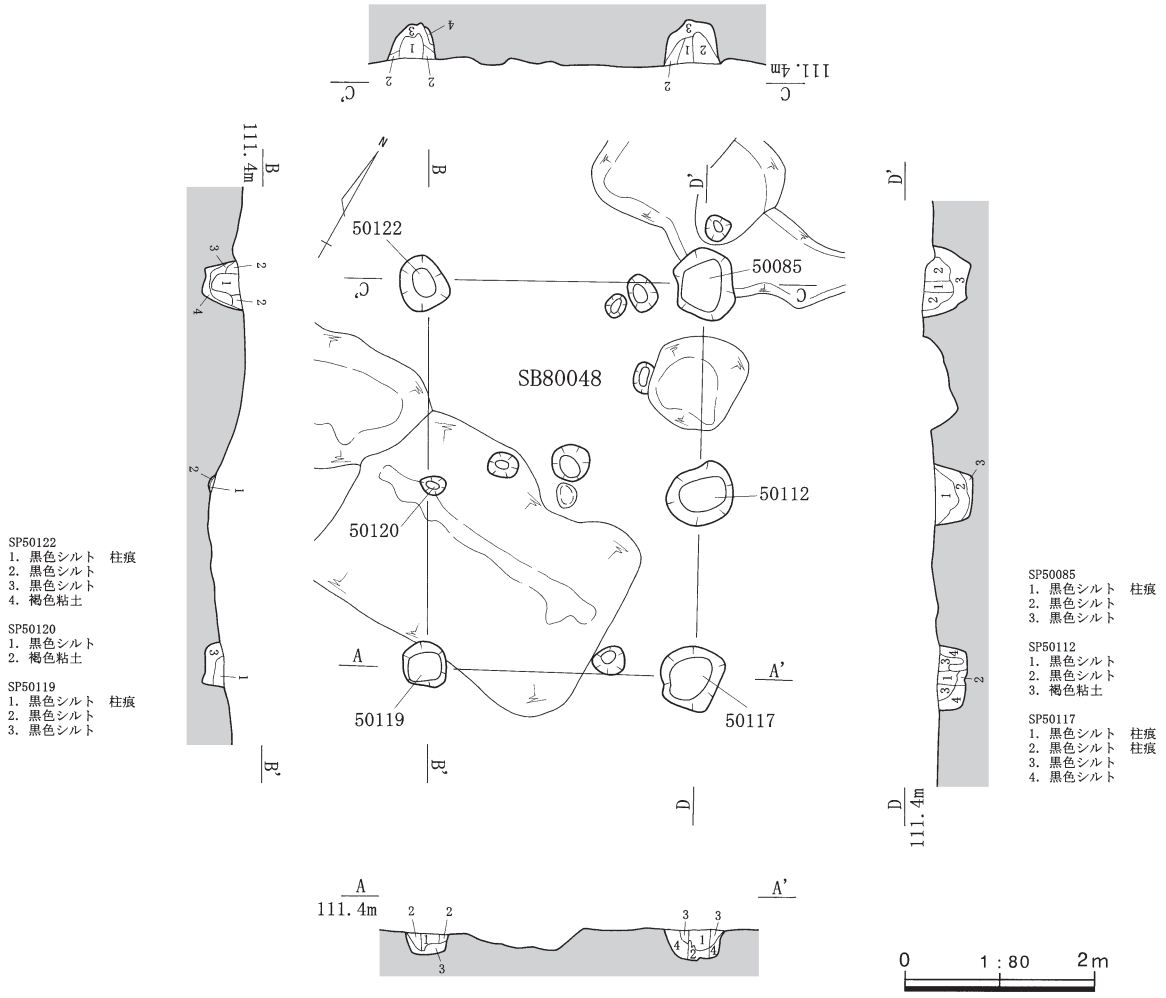
る。遺物はSP644から50の壺が出土している。

SB80055（第33図）

R－30区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物で、SB80056と重複するが、新旧関係は明確でない。建物の規模は梁間3.3m、桁行3.9m、桁行の軸方向はN－24°－Wである。桁行の柱間は西側が北から2.0m、1.9m、東側は1.9mの等間である。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径30～56cm、検出面からの深さは26～40cmである。

SB80056（第34図）

R－30区で検出された梁間１間、桁行２間の側柱建物である。SB50055と重複するが、新旧関係は明



第31図　SB80048平面・断面図

確でない。北側で竪穴住居SH1200と重複するが、床面を柱穴が掘り込むことから、これよりも新しい。建物の規模は梁間3.8m、桁行5.1m、桁行の軸方向はN－43°－Wである。桁行の柱間は西側が北から2.6m、2.5m、東側は2.4m、2.7mである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径50～64cm、検出面からの深さは52～68cmである。遺物はSP3344から52の壺と53の台付甕が出土している。

（３）Ⅲ類掘立柱建物跡

SB80003（第35図）

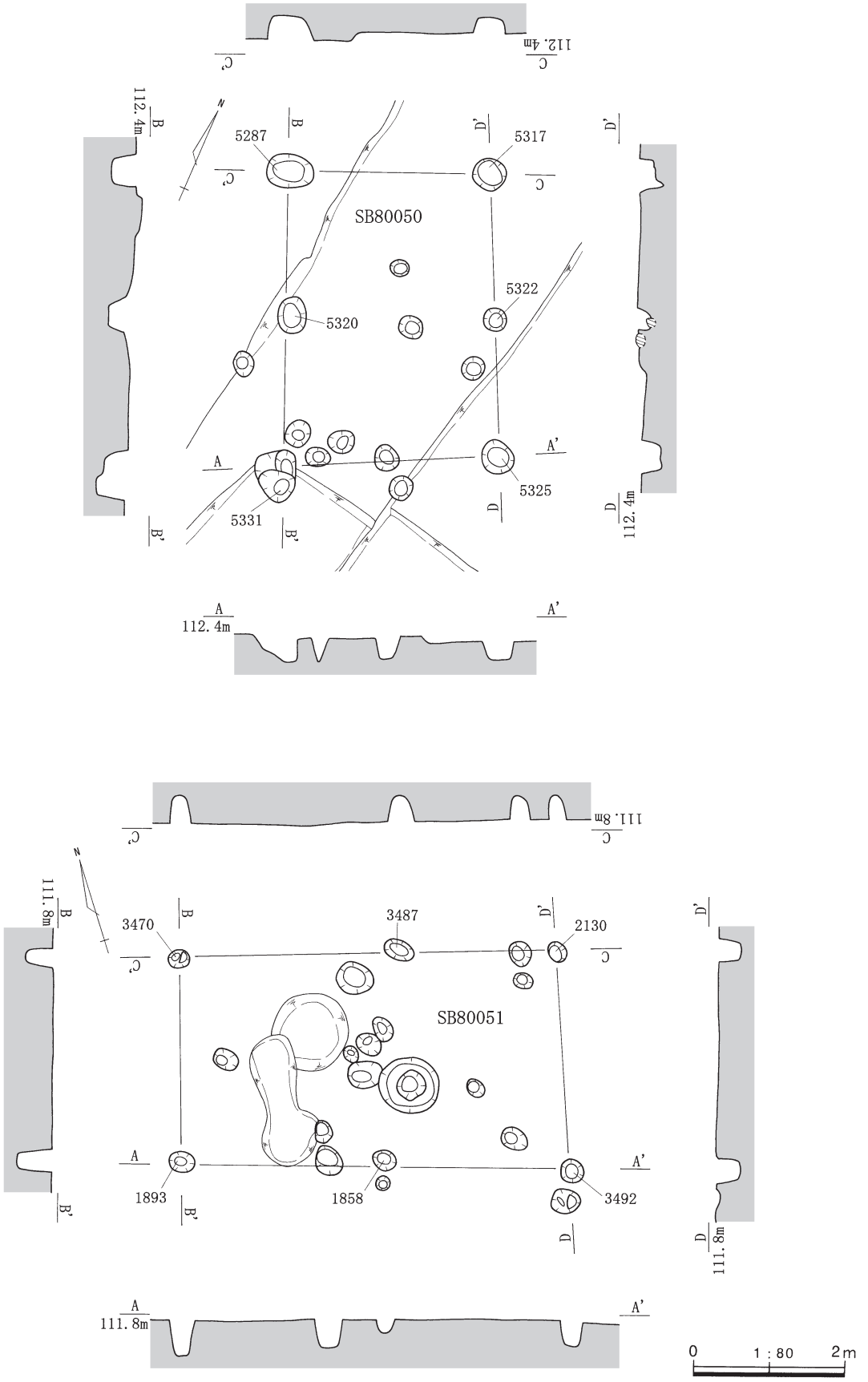
F－４区で検出された梁間2.6m、桁行2.7mの建物で、桁行の軸はN－40°－Wである。柱穴の平面形状は楕円形あるいは不整形な円形で、直径40～70cm、検出面からの深さは32～52cmである。

SB80006（第35図）

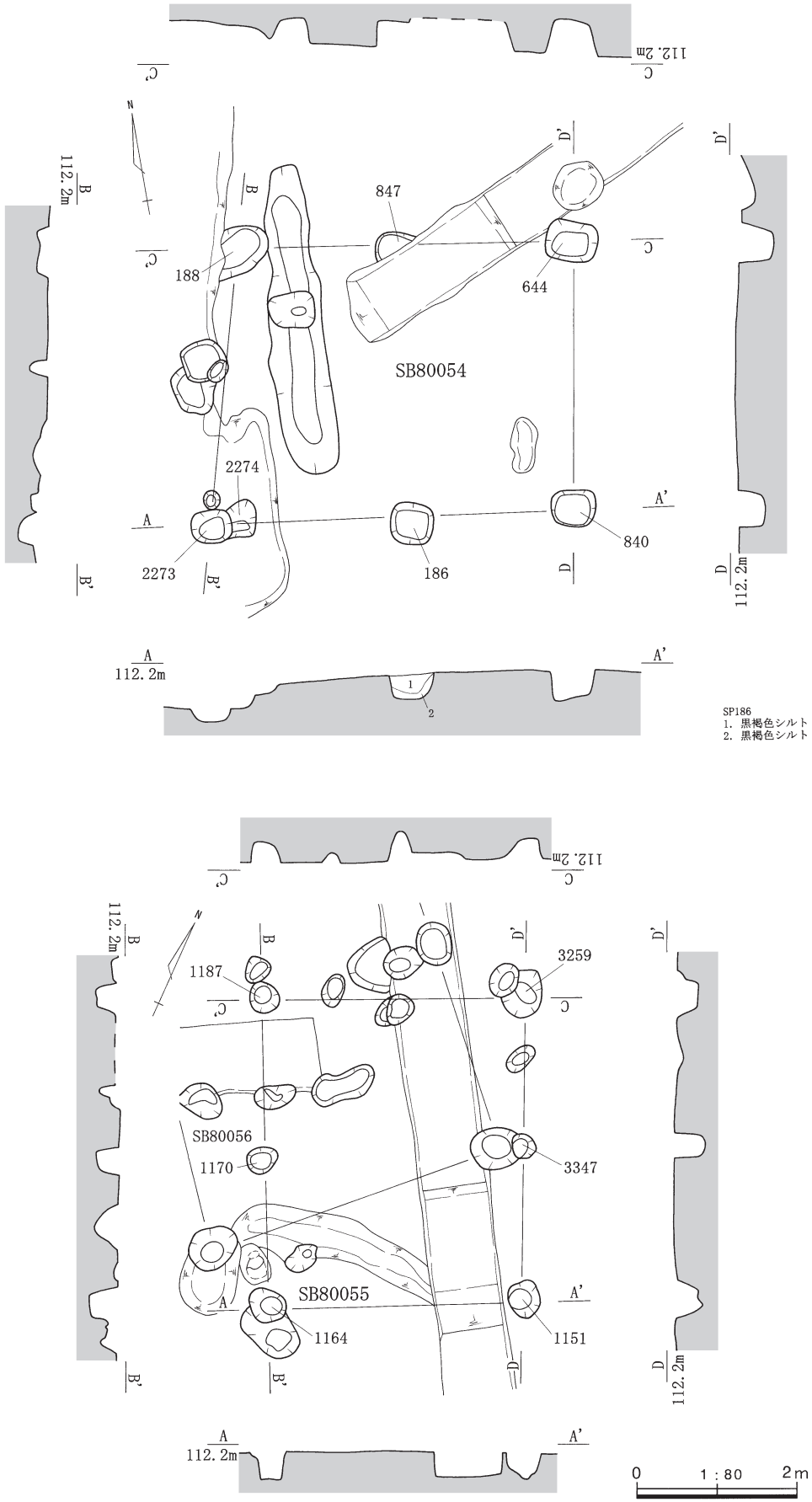
E－５・６区で検出された梁間2.9m、桁行3.4mの建物で、SB80005と重複する。桁行西側柱間には小穴があり、桁行２間となる可能性もある。桁行の軸方向はN－47°－Wである。柱穴の平面形状は楕円形あるいは不整形な円形で、直径64～70cm、検出面からの深さは22～34cmである。遺物はSP70134から54の壺と55の台付甕が出土している。

SB80007（第36図）

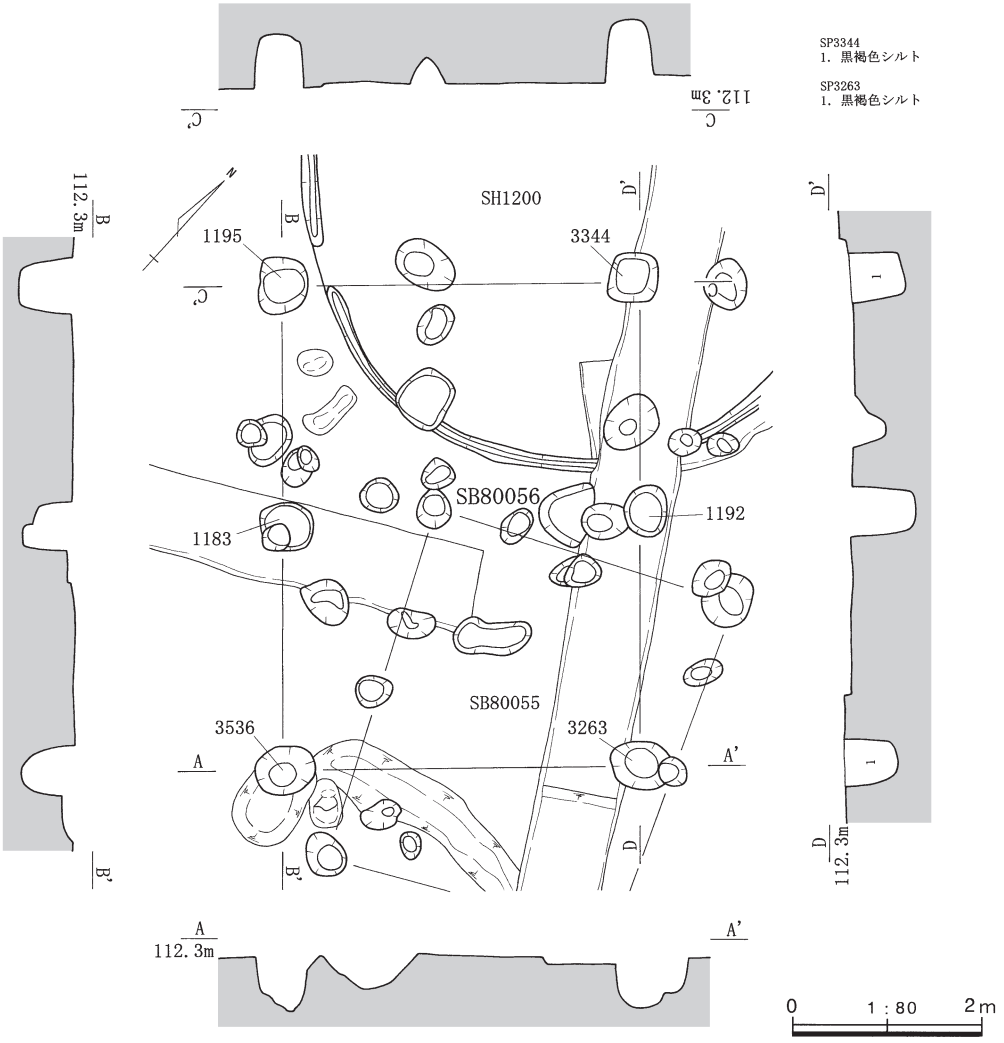
F・G－５区で検出された梁間2.9m、桁行3.0mの建物である。桁行の軸方向はN－44°－Wである。柱



第32図　SB80050・80051平面・断面図



第33図　SB80054・80055平面・断面図



第34図　SB80056平面・断面図

穴の平面形状は楕円形あるいは不整形な円形で、直径40～70cm、検出面からの深さは32～52cmである。SP70103では出土状況図で示すように、埋土最上層で56～59の壺がまとまって廃棄された形で出土した。

SB80009（第12図）

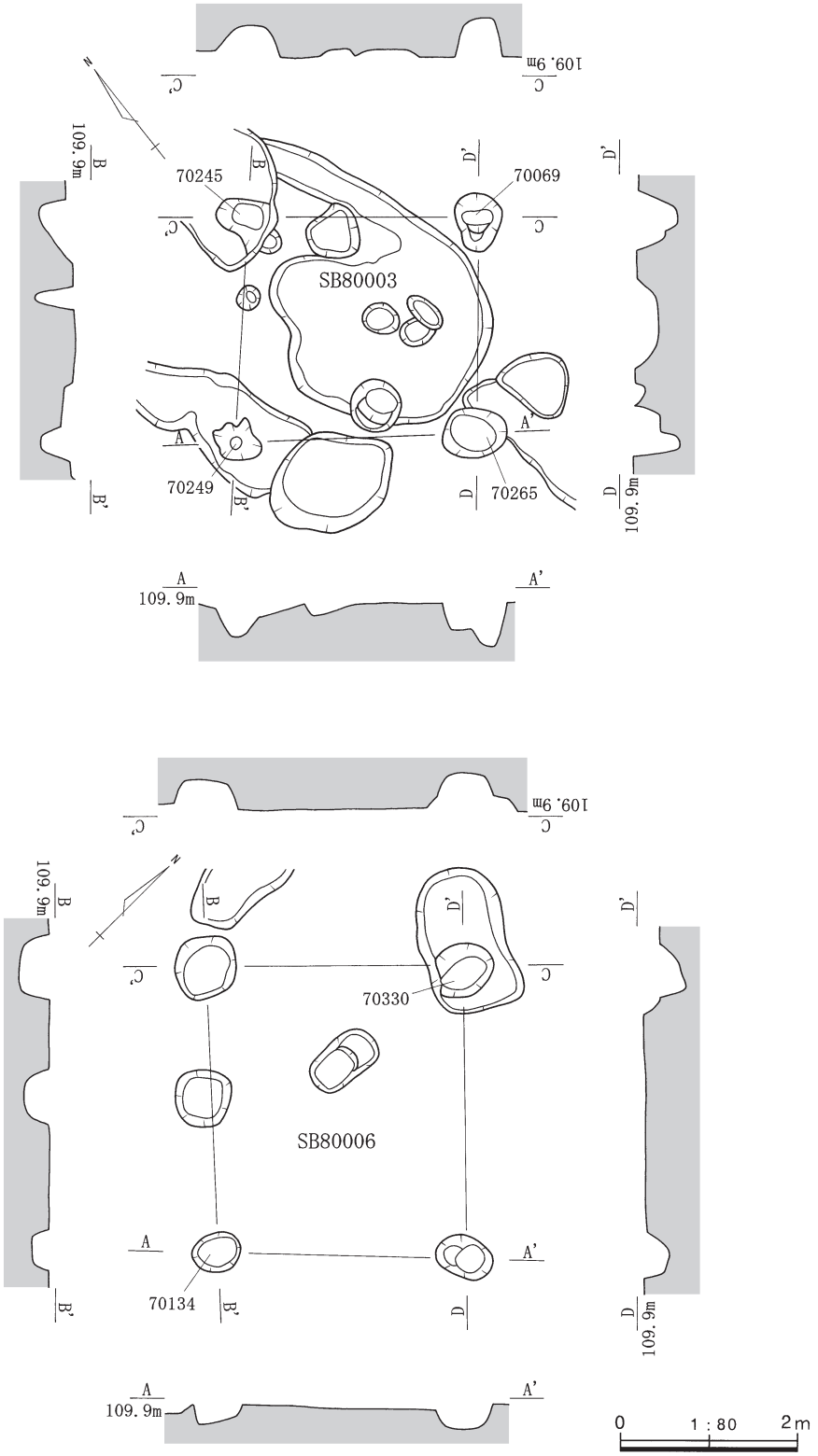
I－９区で検出された梁間2.6m、桁行3.2mの建物である。SB80010の東半と重なる形で検出されており、SB80009からSB80010へと拡張改修している可能性がある。桁行の軸方向はN－44°－Wである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径20～48cm、検出面からの深さは32～44cmである。

SB80015（第36図）

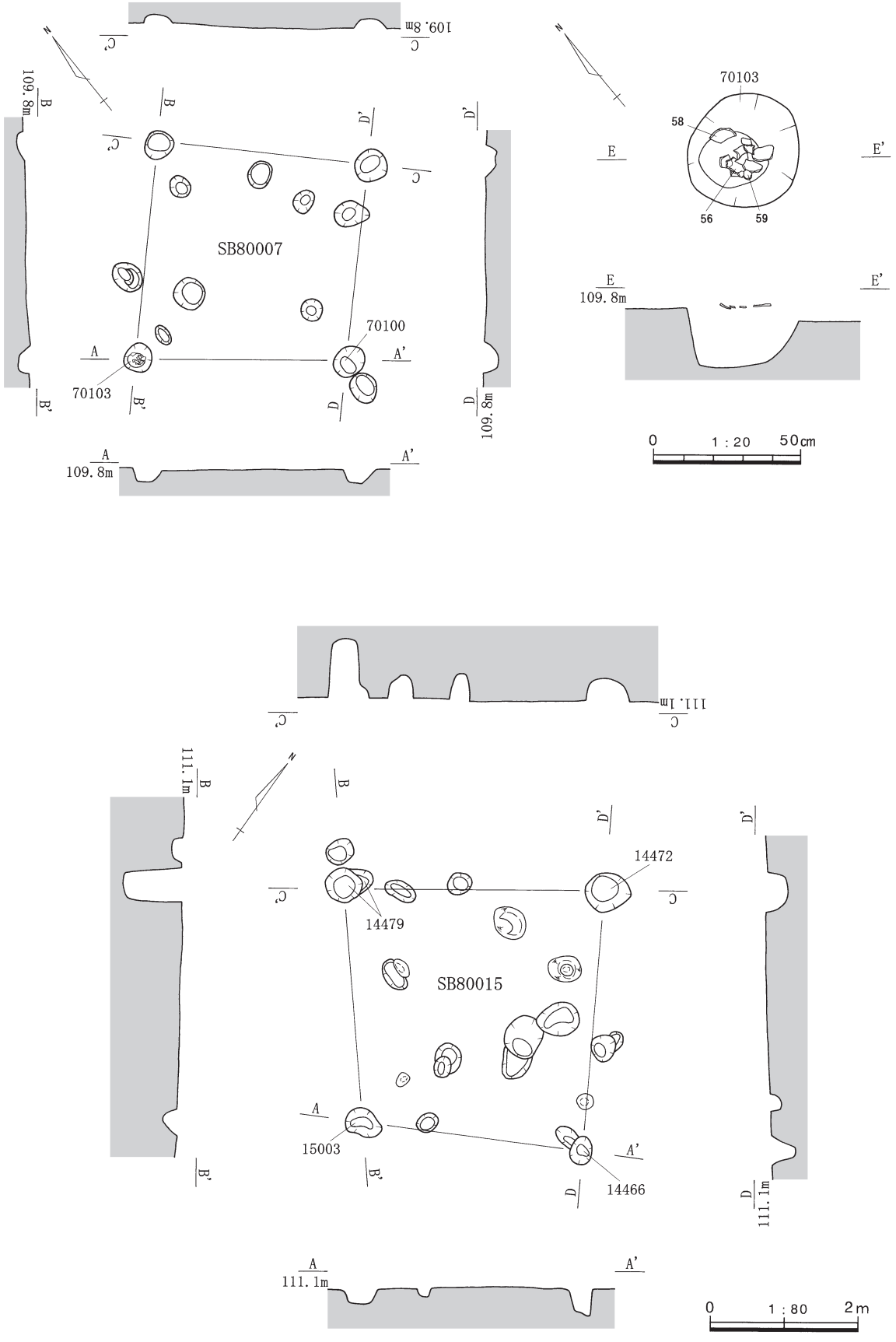
G－13区で検出された梁間、桁行ともに3.6mの建物であるが、南辺の柱間は3.0mと狭くなっている。桁行の軸方向はN－36°－Wである。柱穴の平面形状は楕円形で、直径35～60cmを測る。検出面からの深さは20～80cmであり、北西隅のSP14479は特に深く掘り込まれている。遺物はSP14472から60の壺が出土している。

SB80016（第37図）

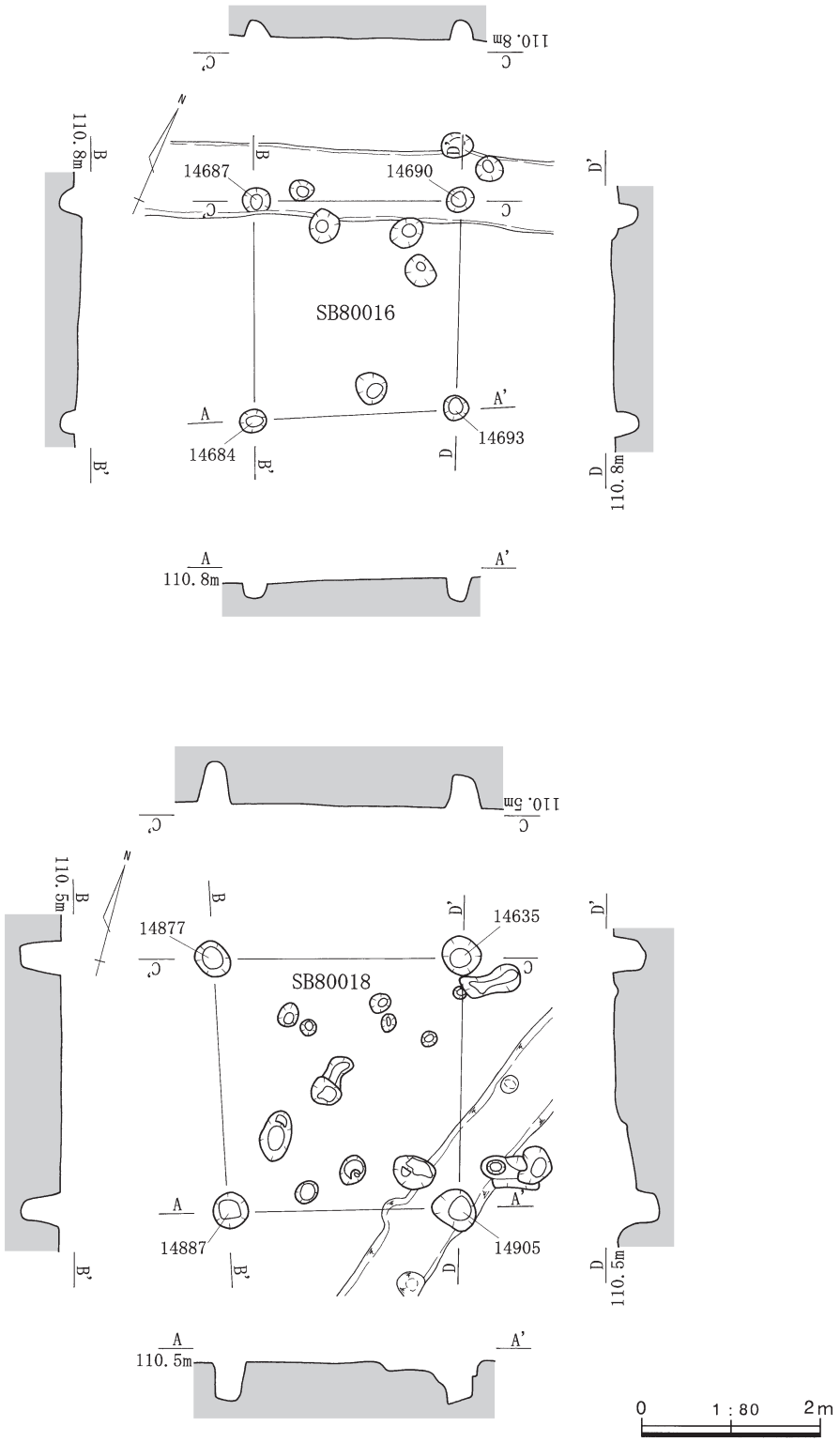
H－12・13区で検出された梁間2.3m、桁行2.5mの建物で、SB80017に近接した位置にある。桁行の軸方向はN－24°－Wである。柱穴の平面形状は円形で、直径24～28cm、検出面からの深さは18～26cmといずれも小規模である。



第35図　SB80003・80006平面・断面図



第36図　SB80007・80015平面・断面図



第37図　SB80016・80018平面・断面図

SB80018（第37図）

J－13区で検出された梁間2.8m、桁行2.9mの建物である。SB80018～80023のあるこの地区には規模の差はあるが、Ⅲ類建物が密集している傾向が窺える。桁行の軸方向はN－15°－Wである。南東隅の柱穴がSB80019と重なるが、新旧関係は明確ではない。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径35～42cm、検出面からの深さは36～44cmである。

SB80019（第38図）

J－13区で検出された梁間3.2m、桁行4.0mの建物である。北西隅の柱穴がSB80018、北東隅の柱穴がSB80020と重なるが、切合い関係は明確でない。桁行の軸方向はN－20°－Wである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径40～48cm、検出面からの深さは38～50cmである。遺物は61の壺がSP13534から出土している。

SB80020（第38図）

J－13区で検出された梁間2.6m、桁行2.8mの建物である。北西隅の柱穴がSB80019と重なるが、切合い関係は明らかでない。桁行の軸方向はN－27°－Wである。柱穴の平面形状は楕円形で、直径24～55cm、検出面からの深さは28～40cmである。

SB80021（第39図）

J－12区で検出された梁間4.0m、桁行5.4mの建物で、南隅でSB80022と重なるが、新旧関係は明らかでない。桁行の並びにいくつか小穴が検出されるが、対応関係が明らかでないため１間として認識した。東側桁行が4.0mと西側と比べて狭くなっており、平面形はかなり歪んだ長方形となる。桁行の軸方向はN－29°－Wである。柱穴の平面形状は楕円形で、直径25～42cm、検出面からの深さは16～46cmである。

SB80024（第39図）

K－13・14区で検出された梁間2.7m、桁行3.0mの建物である。平面形はやや歪んだ長方形を呈し、桁行の軸方向がE－55°－Nの東西棟である。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径30～46㎝、検出面からの深さは30～44㎝であった。

SB80022（第40図）

J・K－12・13区で検出された梁間4.3m、桁行4.4mの建物である。北東側でSB80021が重複する。北西側ではSB80023と重複し、南西隅の柱穴13489が切合うが、新旧関係は明らかでない。平面形はやや歪んだ正方形に近い形状で、桁行の軸方向はN－34°－Eである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径30～42㎝、検出面からの深さは26～44㎝であった。

SB80023（第40図）

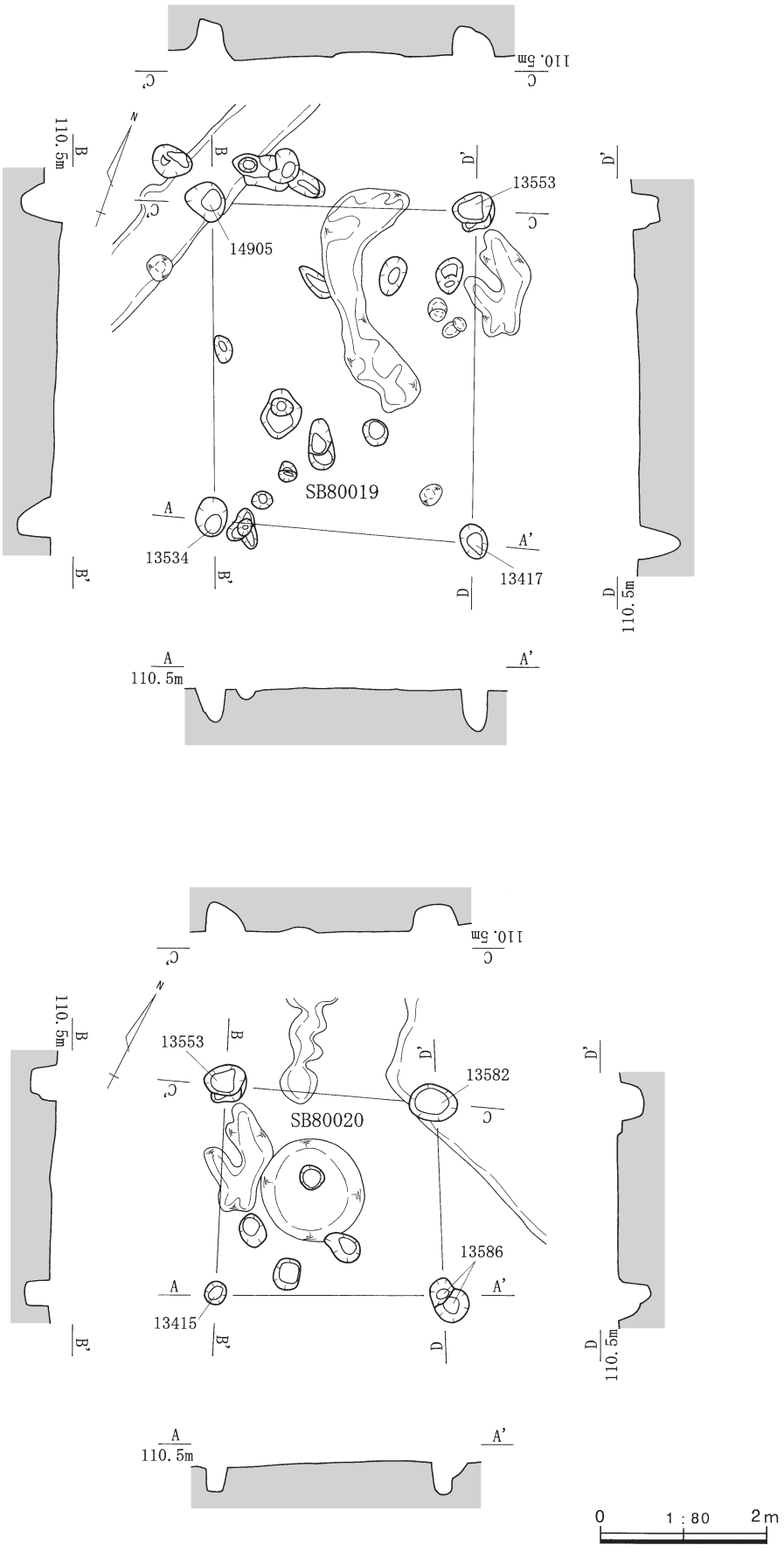
K－13区で検出された梁間2.9m、桁行3.8mの建物である。南東側柱穴のSP13489がSB80022の柱穴と重なる形で検出される。桁行の軸方向はN－32°－Wである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径35～52㎝、検出面からの深さは削平のためか10～26㎝と極めて浅かった。

SB80031（第24図）

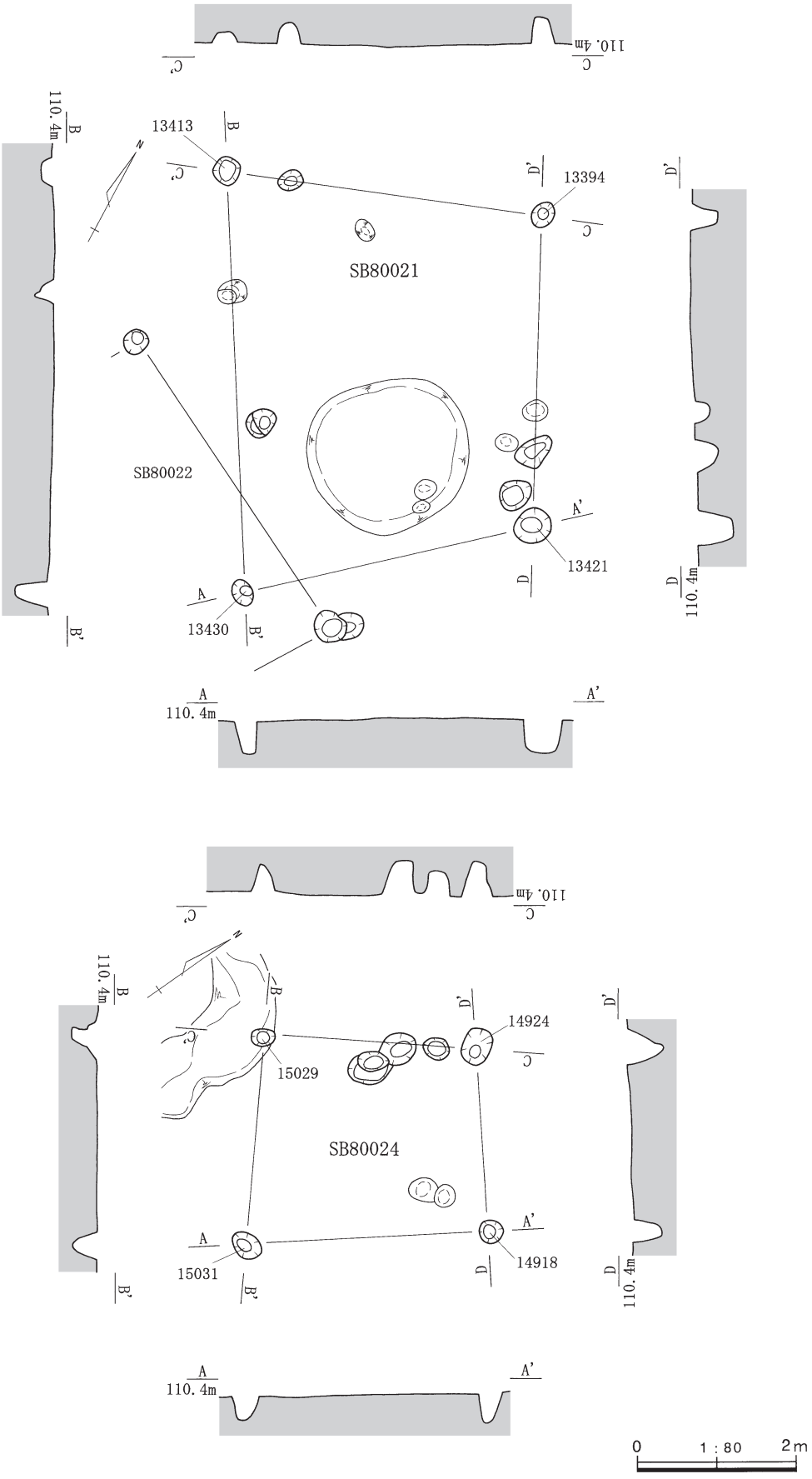
N－20・21区で検出された梁間2.8m、桁行3.6mの建物である。SB80032と南東側で大きく重複するが、新旧関係は明らかではない。桁行の軸方向はN－14°－Wである。柱穴の平面形状は楕円形あるいは不整形な円形で、直径55～68㎝、検出面からの深さは28～40㎝であった。

SB80033（第41図）

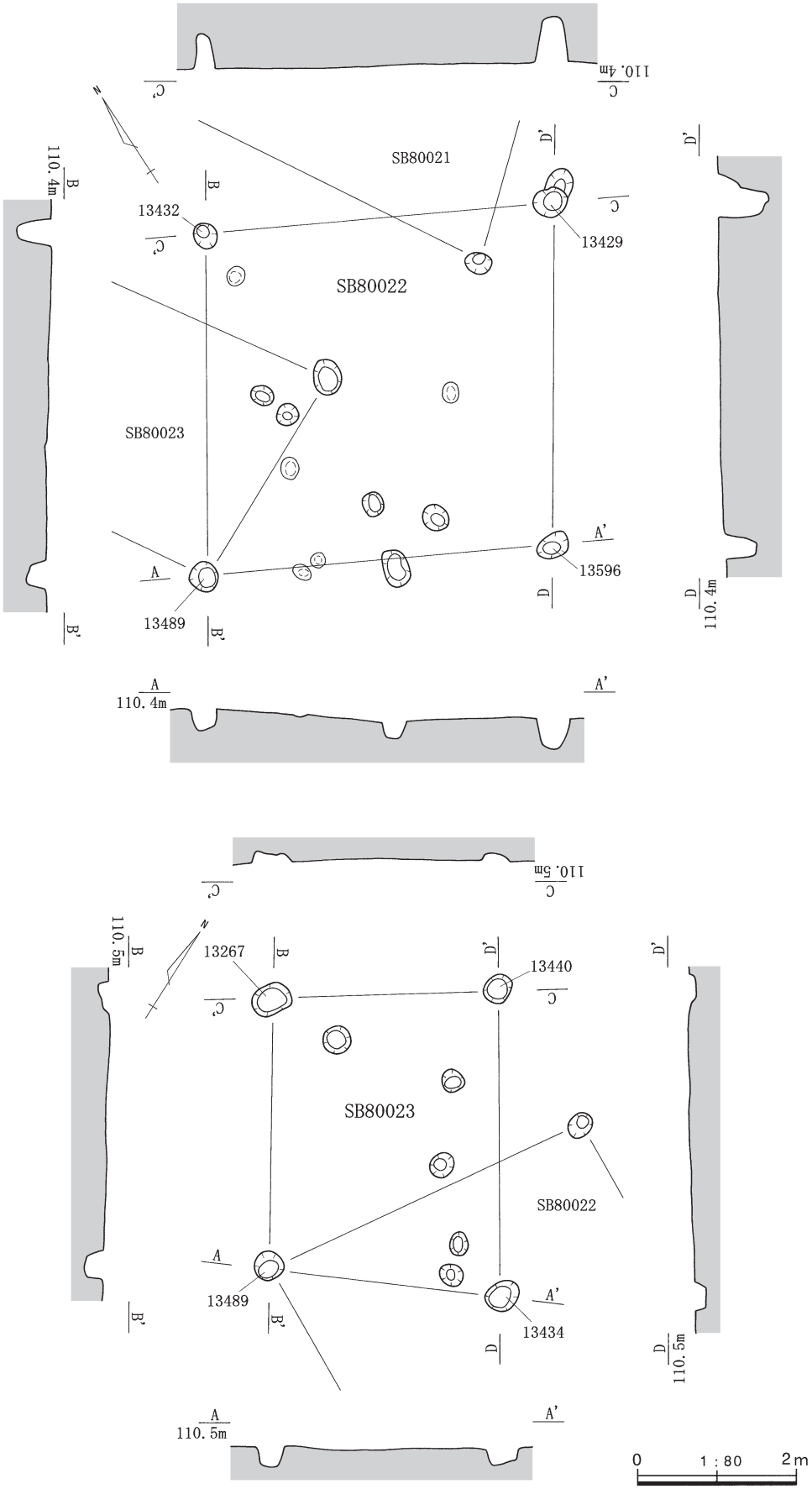
N－21・22区で検出された梁間2.6m、桁行3.0mの建物である。西側の桁行が長く、平面形状はやや歪な長方形を呈する。桁行の軸方向はN－49°－Wである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径35～52㎝、検出面からの深さは14～44㎝であった。すべての柱穴で直径８～10㎝程度の柱痕が土層



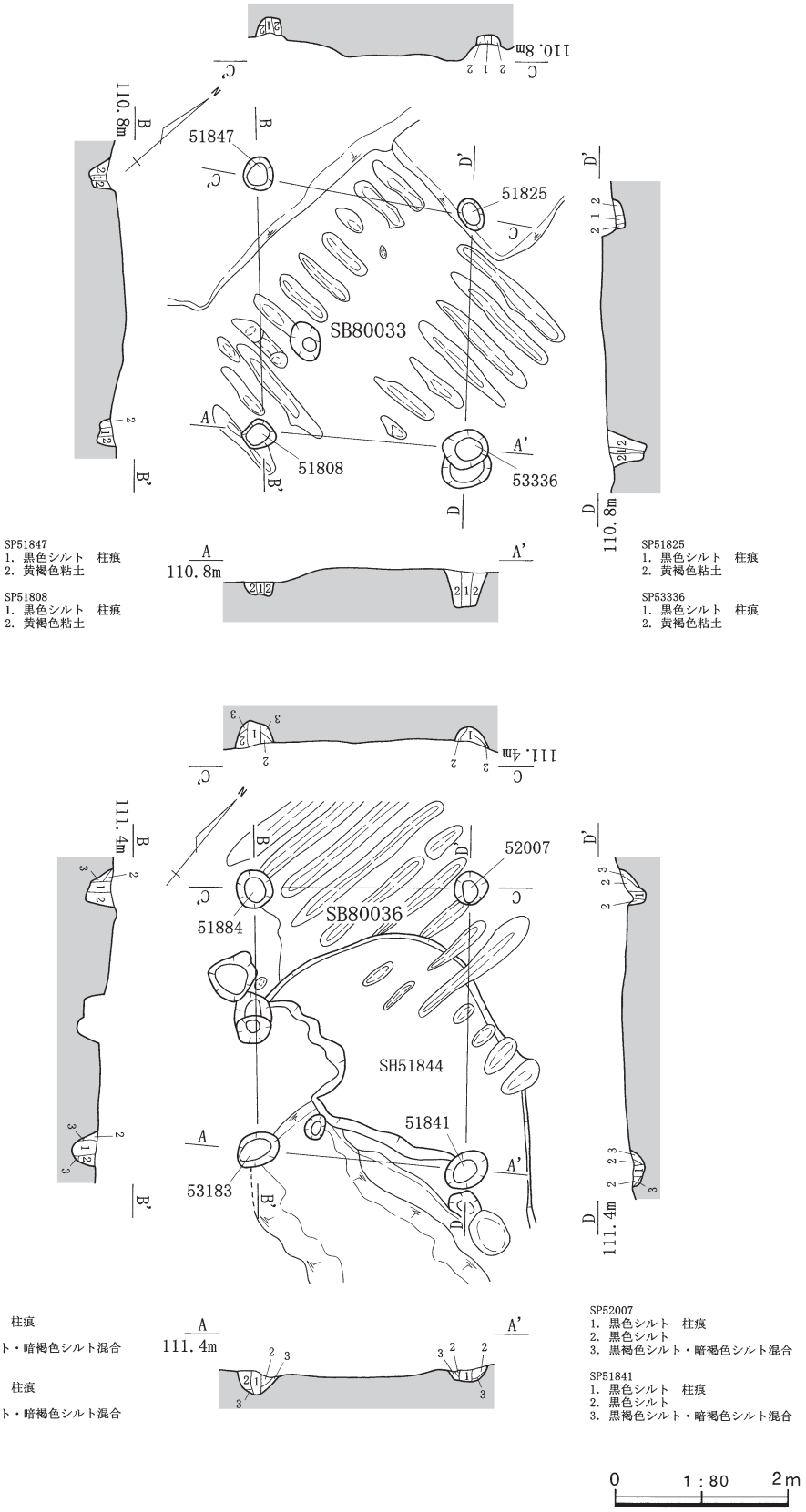
第38図　SB80019・80020平面・断面図



第39図　SB80021・80024平面・断面図



第40図　SB80022・80023平面・断面図



第41図　SB80033・80036平面・断面図

断面によって把握されている。

SB80036（第41図）

Ｎ－22・23区で検出された梁間2.5m、桁行3.3mの建物である。SB80037と西側で重複しているが、新旧関係は明確でない。桁行の軸方向はＮ－39°－Ｗである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径40～54㎝、検出面からの深さは20～32㎝を測る。全ての柱穴で直径10～12㎝の柱痕が土層断面によって確認される。

SB80037（第42図）

Ｎ－23区で検出された梁間3.2m、桁行3.8mの建物である。先述のとおり、SB80036と東側が重複する。桁行の軸方向はＮ－36°－Ｗである。柱穴の平面形状は楕円形あるいは不整形を呈し、直径56～80㎝、検出面からの深さは12～38㎝である。SP52008を除く柱穴で、直径10～12㎝程度の柱痕が土層断面により把握される。

SB80038（第42図）

Ｆ－22・23区で検出された梁間1.8m、桁行3.0mの小規模建物である。SZ51234とSZ51174と全体的に重複しているが、遺構の切合いがないため、新旧関係は不明瞭であった。桁行の軸方向はＮ－37°－Ｗである。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径42～48㎝、検出面からの深さは36～62㎝であった。

SB80042（第43図）

Ｌ－24・25区で検出された梁間1.3m、桁行2.2mの小規模建物で、SB80043の北側に隣接する。SK41942と重複し、切合い関係からこれよりも新しい遺構と判断される。桁行の軸方向がＥ－30°－Ｎの東西棟である。柱穴の平面形状は楕円形で、直径30～48㎝、検出面からの深さは32～46㎝である。土層断面による覆土堆積状況をみると、柱痕も確認されず、柱穴上部から別の掘り込みが観察されることから、建物の廃絶にあたって柱が抜き取られた可能性が高い。遺物はSP51330から62の壺が、またSP51314から63の壺と64の台付甕が出土している。

SB80043（第44図）

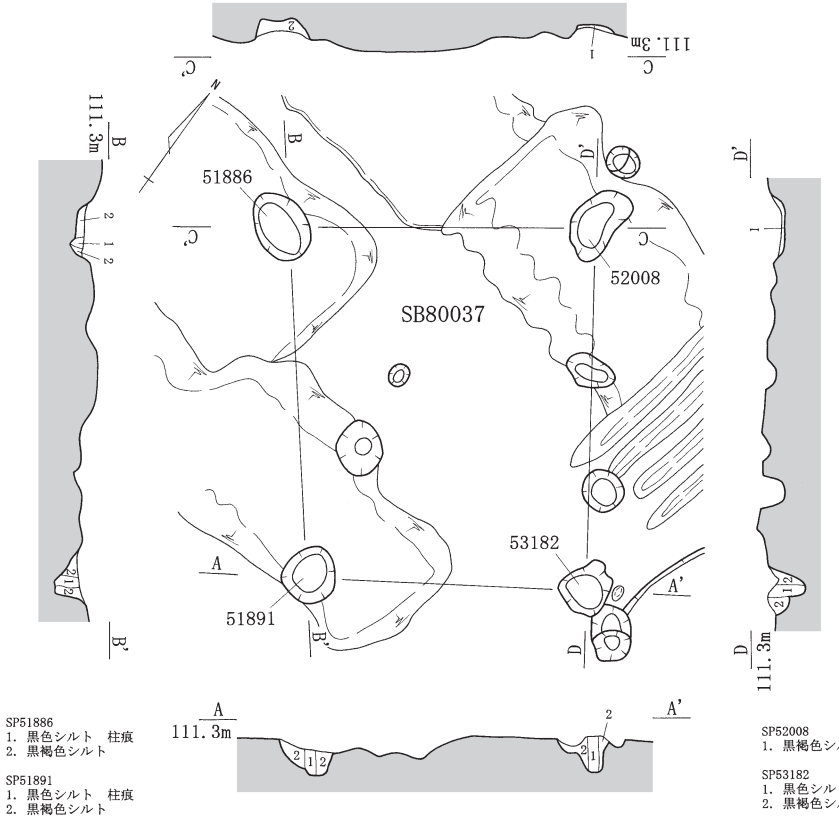
Ｌ－24・25区で検出された梁間2.1m、桁行2.9mの建物で、SB80045の東、SB80044の北に隣接する。桁側の柱間に小穴がいくつか認められるが、対応関係は明確でないため、梁間桁行ともに１間のⅢ類建物として分類した。桁行の軸方向がＥ－46°－Ｎの東西棟で、SB80045とはほぼ直交し、後述するSB80044とはほぼ一致する建物方向であることから、これら３棟は一連の建物と推定される。柱穴の平面形状は楕円形で、直径28～52㎝、検出面からの深さは26～44㎝である。土層断面から覆土の堆積状況をみると、SB80042と同様に柱痕が明確でなく、上部から別の掘り込みが認められることから、やはり柱が抜き取られた可能性が高い。

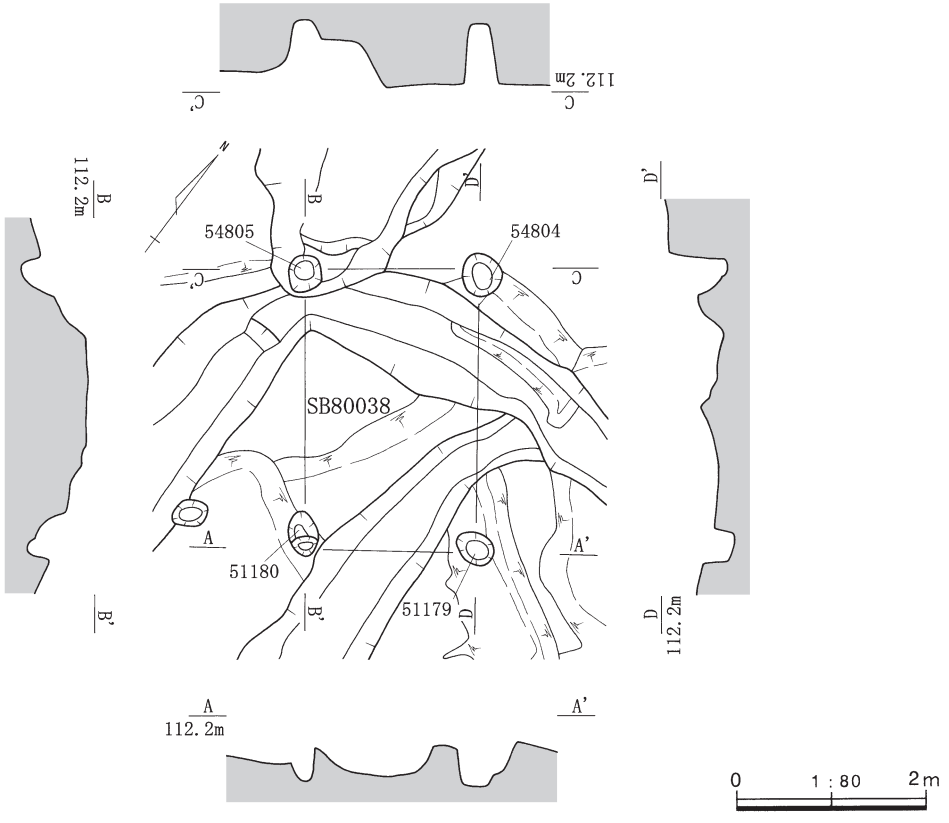
SB80044（第44図）

Ｌ・Ｍ－24区で検出された梁間1.6m、桁行2.0mの小規模建物である。この建物も桁側の柱間に小穴が確認されたが、対応関係が明らかでなかったため、Ⅲ類建物とした。桁行の軸方向がＥ－44°－Ｎの東西棟で、前述のように、SB80045・SB80043とは一連の建物であった可能性が高い。柱穴の平面形状は円形あるいは楕円形で、直径35～72㎝、検出面からの深さは16～60㎝である。SP51313では直径８㎝程度の柱痕が土層断面によって観察されることから、建物廃絶後も柱はそのまま残されたと考えられるが、SP51515・51520ではそれが明確にみえないため、抜き取られた可能性がある。

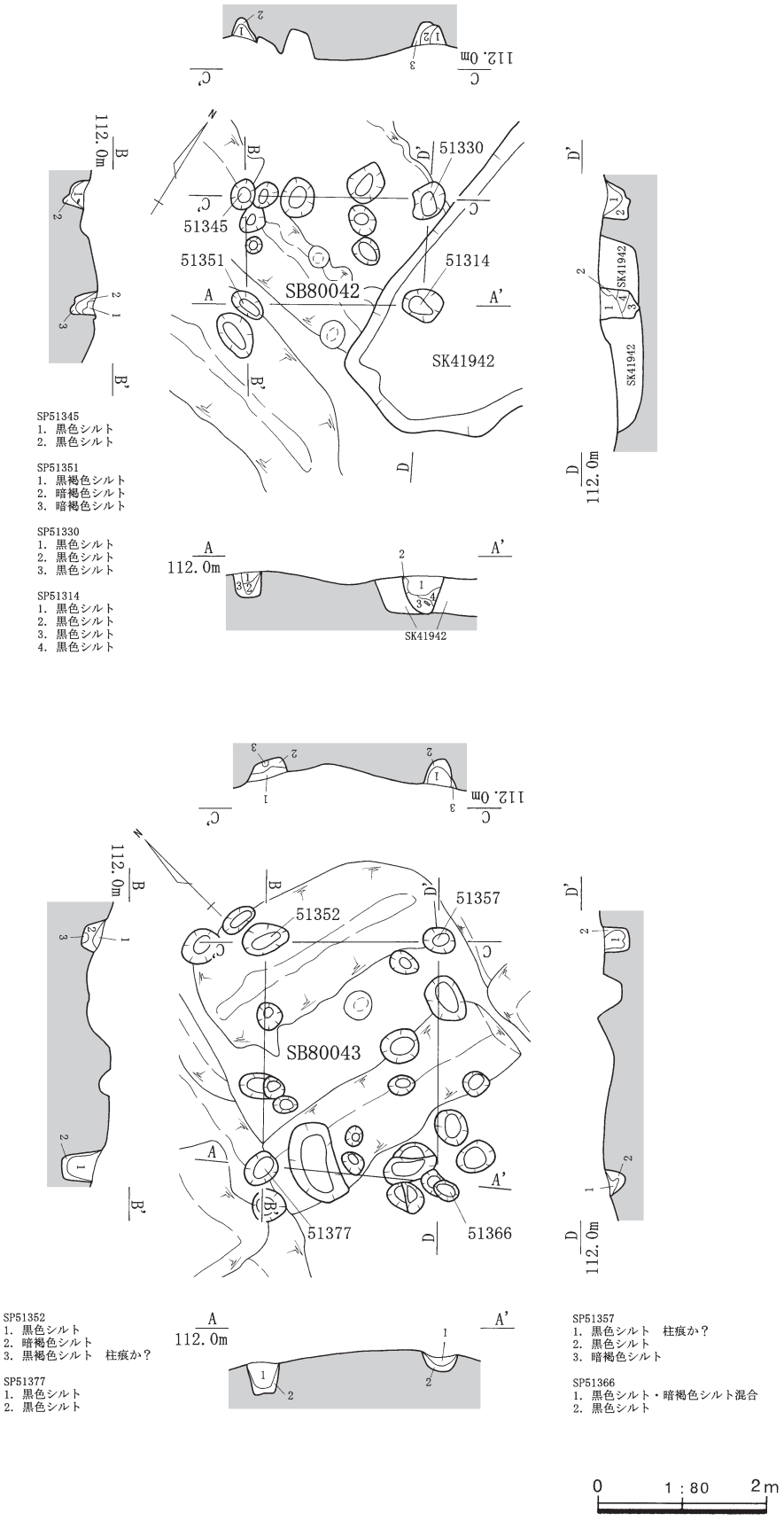
SB80047（第44図）

Ｎ・Ｏ－24・25区で検出された梁間1.8m、桁行1.9mの小規模建物である。SB80048の北側に隣接する。桁行の軸方向はＮ－13°－Ｅである。柱穴の平面形状は楕円形で、直径28～64㎝、検出面からの深さは34

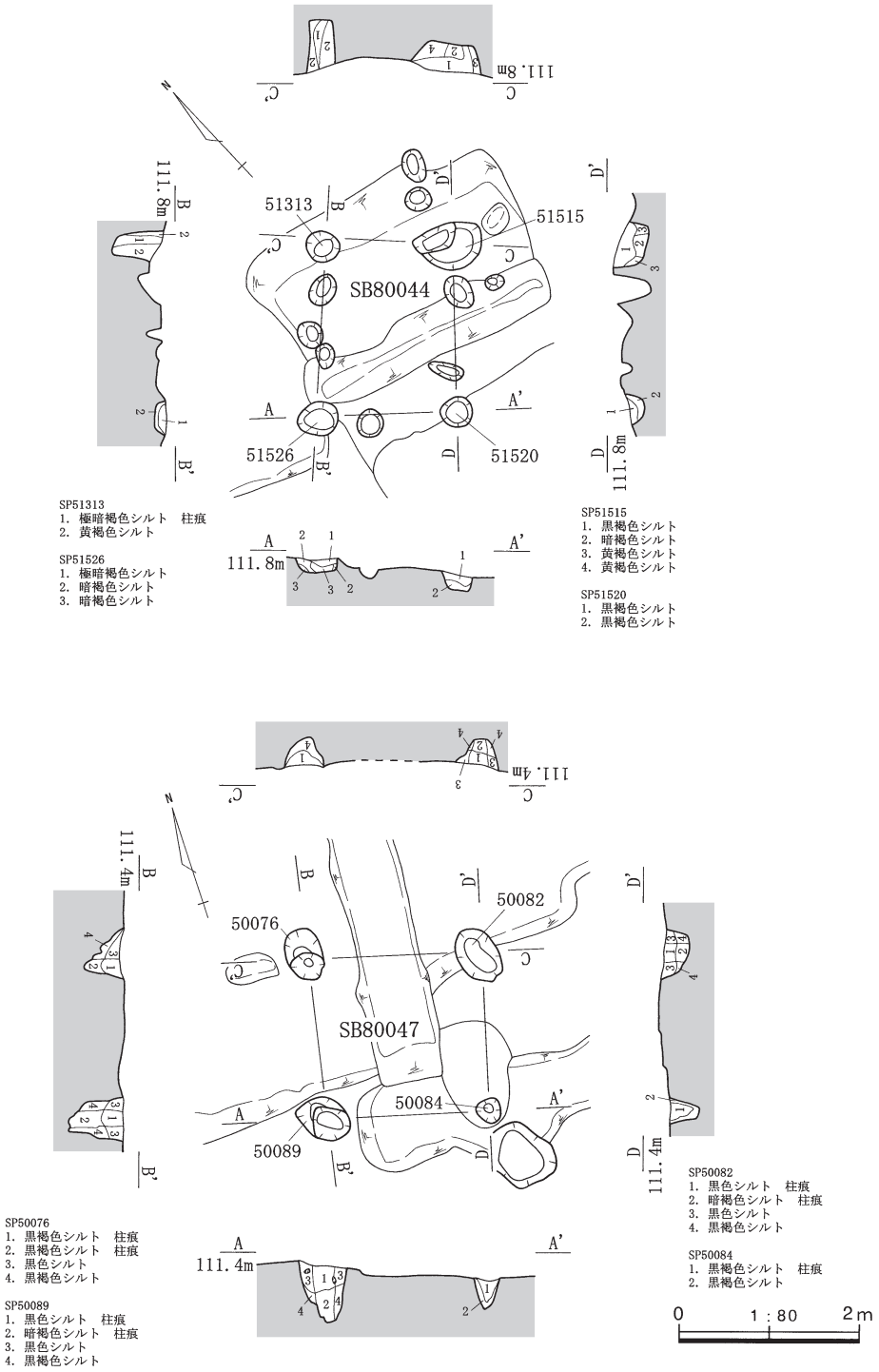




第42図　SB80037・80038平面・断面図



第43図　SB80042・80043平面・断面図

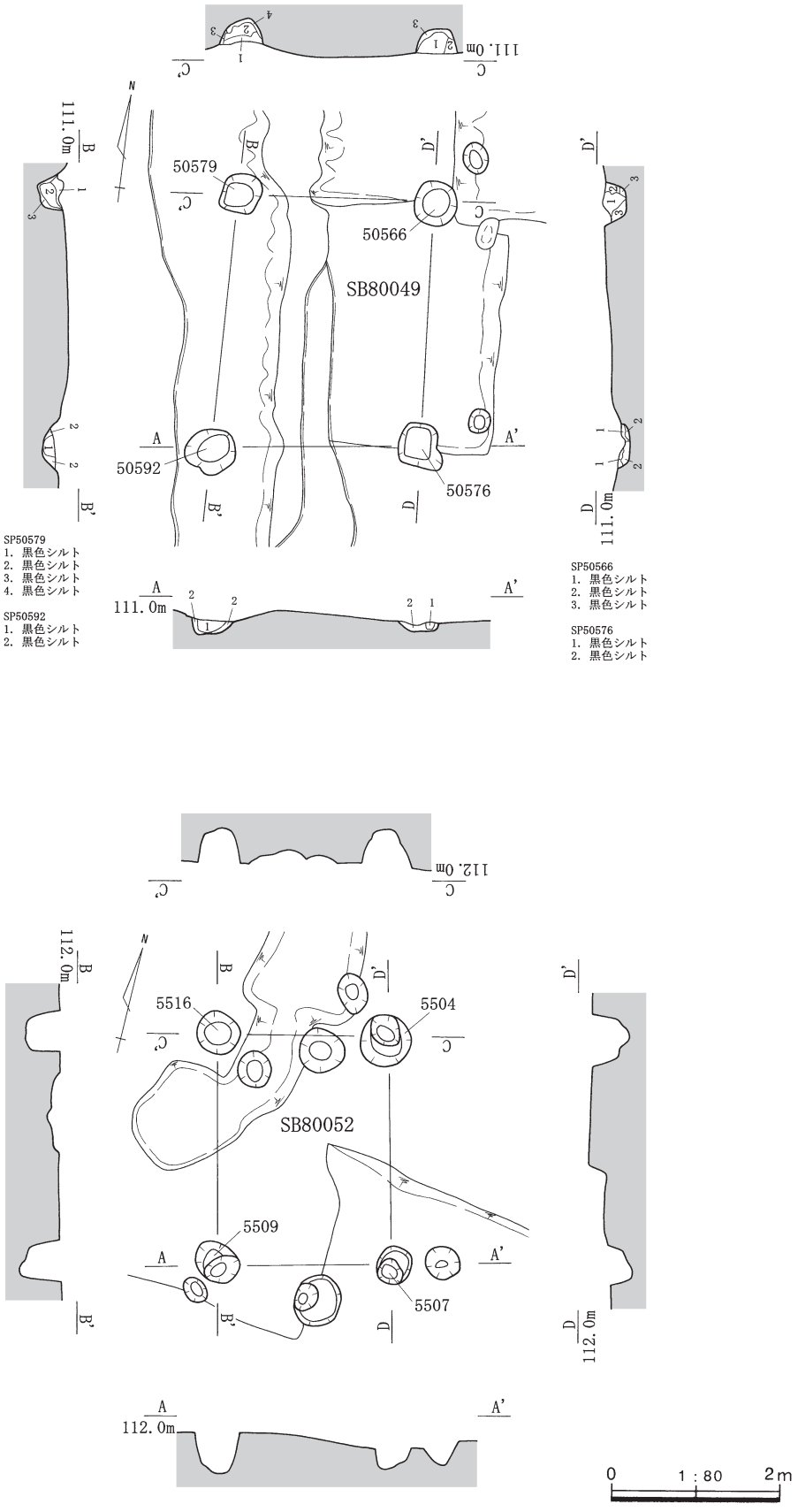


第44図　SB80044・80047平面・断面図

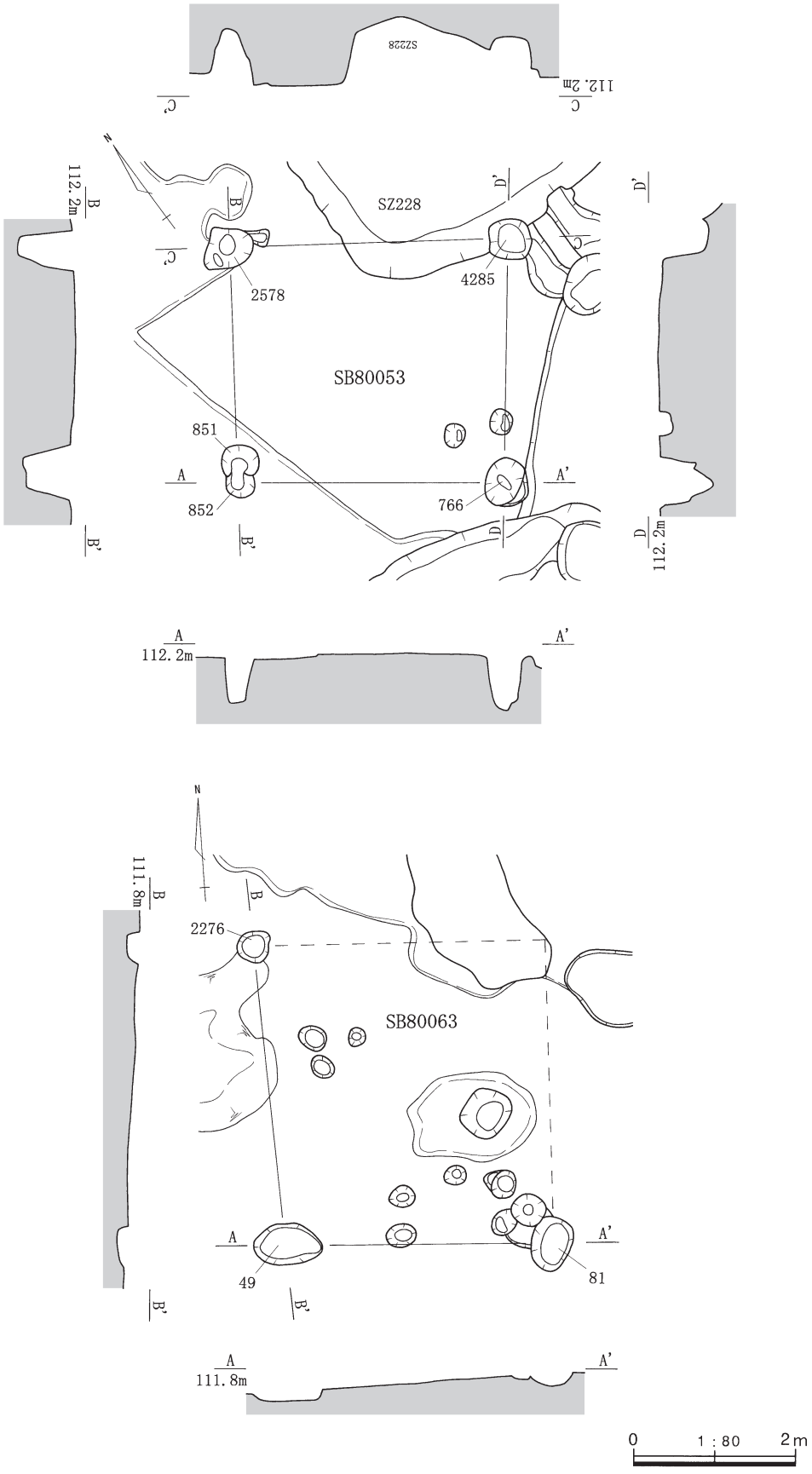
～68㎝である。SP50076・50082・50089では直径16～25㎝の柱痕が土層断面によって確認される。SP50084は柱痕が明確でなく、抜き取られた可能性がある。

SB80049（第45図）

P・Q－25・26区で検出された梁間2.5m、桁行3.0mの建物で、SH50542の南側に位置している。桁行の軸方向はN－3°－Wである。柱穴の平面形状は楕円形あるいは不整形な円形で、直径48～60㎝、検出面からの深さは12～28㎝である。柱穴の堆積状況では柱痕は確認されず、SP50592のように上部からの掘り込みが認められるため、建物廃絶にあたって柱は抜き取られたものと考えられる。



第45図　SB80049・80052平面・断面図



第46図　SB80053・80063平面・断面図

SB80052（第45図）

Ⅰ－31区で検出された梁間2.0m、桁行2.8mの建物である。SZ2579の内部にあたり、方形周溝墓に先行する建物と推定される。桁行の軸方向はN－14°－Wである。柱穴の平面形状は楕円形で、直径40～60㎝、検出面からの深さは28～50㎝である。柱穴SP5504・5509の底部には直径16㎝程度の浅い円形の窪みがあり、これが柱底部の痕跡とすれば、使用された柱の規模がある程度推測できる。

SB80053（第46図）

Ｐ－31区で検出された梁間3.0m、桁行3.4mの建物である。SZ228の南側で重複し、切合い関係は明確ではないが、方形周溝墓に先行する建物と推定される。桁行の軸方向はN－35°－Eである。柱穴の平面形状は楕円形あるいは不整形な円形で、直径52～60㎝、検出面からの深さは56～68㎝である。

SB80063（第46図）

Ｓ－32・33区で検出された建物であるが、北東隅の柱穴をSZ446の西溝SD2521によって壊されていたため、検出することができなかった。残存する柱穴から、梁間3.3m、桁行3.7mの建物と推定される。桁行の軸方向はN－0°で、ほぼ真北を向く。柱穴の平面形状は楕円形で、直径38～80㎝を測る。調査区西端の傾斜地にあるためか遺構上面がかなり削平されており、検出面からの深さは14～16㎝と極めて浅かった。

3　出土遺物（第47・48図）

掘立柱建物跡の柱穴からはそれほど遺物は出土せず、図示できるものはさらに限定される。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の遺物であるが、小破片が多く、遺構年代の手がかりとするのは困難である。ただし、SB80002出土の30の鉢（30）、SB80011出土の台付甕（35）、SB80012出土の台付甕（37）、SB80013出土の壺（39）、SB80035出土の台付甕（46）、SB80007出土の壺（56・57・59）は古墳時代前期に属すると考えられる土器であり、これらは当該期の遺構としては新しい段階の建物と推定される。以下、遺構ごとに出土遺物の記述を進めたい。

SB80057　28はSP15388から出土した石鏃で、灰色珪質頁岩製の未製品と考えられる。

SB80001　29はSP70354から出土した壺の口縁部破片である。折り返し口縁を持ち、口縁端部には棒状浮文が縦に貼り付けられる。摩滅により調整不明だが、口縁部内面にはわずかに縄文が観察される。

SB80002　30はSP70352から出土した鉢の口縁部破片で、口径9.6cmに復原される小型品である。

SB80004　31はSP70312から出土したが、SH70007出土の破片と接合した。壺の底部破片であるが、摩滅により調整は不明である。

SB80005　32はSP70330から出土した壺の口縁部破片である。折り返し口縁を持ち、口縁端部直下から頸部にかけて縦位のハケ調整によって外面を整えている。33はSP70321から出土した台付甕の口縁部破片である。口唇部にハケ工具による刻目を持ち、外面は縦位のハケ調整がなされる。34はSP70320から出土した台付甕の口縁部破片である。頸部の屈曲が小さく、強い。摩滅が顕著だが、内外面ともにハケ調整が施される。

SB80011　35はSP15318から出土した台付甕の口縁部破片である。く字状に屈曲した口縁を持ち、外面は斜位のハケ調整痕がわずかに観察される。36はSP15403から出土した壺の底部破片である。

SB80012　37はSP15746から出土した台付甕の口縁部破片である。頸部の屈曲が弱く、頸部外面は斜位、口縁から頸部内面は横位の幅広の工具によるハケ調整がなされる。

SB80013　38～40はいずれもSP14245から出土した壺である。38は底部破片で、外面にわずかに縦位のハケ調整痕が観察される。39・40は口縁部破片で、39は複合口縁を持つ壺で、内外面をナデ調整し、口縁部上端を面取りして平坦に仕上げる。折り返し口縁を持つ40は外面及び口縁内面端部をハケ調整し、

口縁部内面を縄文で装飾する。

SB80026　41はSP13054から出土した台付甕の脚部破片である。接合部外面に粘土を貼り付けて体部と脚部を接合し、縦位のハケ調整で仕上げている。

SB80028　42はSP54755から出土した壺の底部破片で、内外面ともにナデ調整痕が残る。

SB80029　43はSP50749から出土した壺の底部破片で、底径5.4㎝に復原される小型品である。

SB80032　44はSP51951から出土した台付甕の頸部である。内外面ともにナデ調整がなされる。45はSP52062から出土した壺の口縁部破片である。折り返し口縁を持ち、摩滅が著しいが、内面にはわずかに縄文が残る。

SB80035　46はSP51865から出土した台付甕である。脚部のみであるが、S字甕の一部とみられる。外面は摩滅により調整不明だが、内面は斜位のハケ調整がなされる。底部は内側に折り返され、ナデ調整で仕上げられている。

SB80039　47はSP54094から出土した台付甕の脚部接合部である。

SB80046　48はSP50048の埋土中層から出土した壺の口縁部である。外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整がなされ、一部その上からナデ調整で仕上げられる。

SB80048　49はSP50122から出土した壺の底部である。

SB80054　50はSP644から出土した壺の口縁部である。折り返し口縁を持ち、摩滅により調整は不明瞭であるが、ハケ調整痕がわずかにみられる。

SB80051　51はSP3470から出土した壺の底部で、ハケ調整の後、ナデ調整で仕上げられている。

SB80056　52・53はいずれもSP3344から出土した。52は壺の口縁部破片で、折り返された口縁端部外面には棒状浮文が等間隔で貼り付けられる。摩滅が顕著だが、内面にはかすかに縄文が残る。53は台付甕の口縁部破片である。内面は横位、頸部にかけての外面には斜位のハケ調整がなされる。口唇部にはハケ工具による刻目が施される。

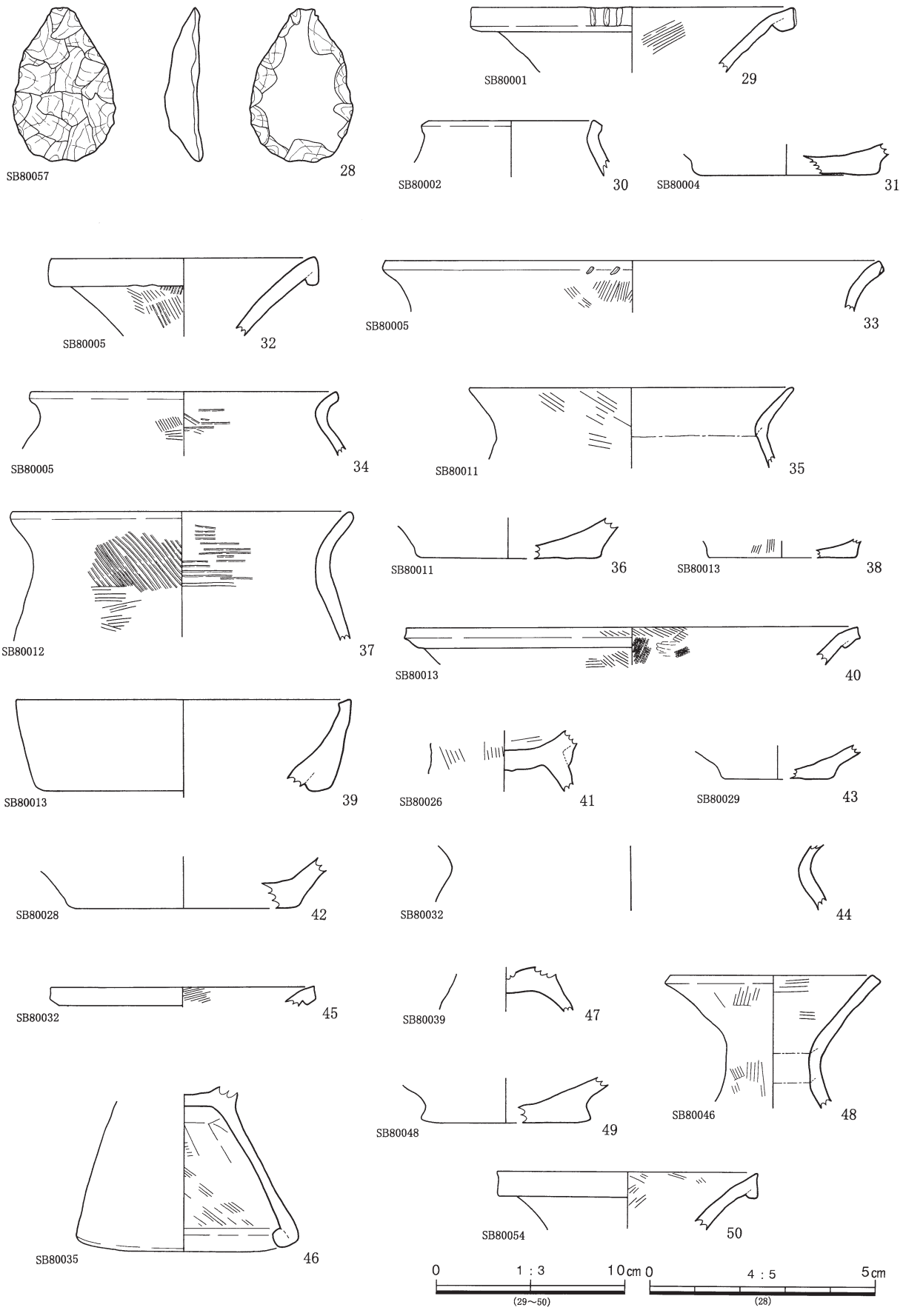
SB80006　54・55はいずれもSP70134から出土した。54は折り返し口縁を持つ壺の口縁部破片で、外面は口唇部が斜位、頸部にかけては縦位のハケ調整がなされ、内面は幅広の工具によってハケ調整が施される。55は台付甕の口縁部破片で、口唇部にはハケ工具による刻目が確認される。調整は摩滅により不明瞭だが、頸部外面には縦位のハケ調整痕がわずかに残る。

SB80007　56～59はいずれもSP70103から出土している。56は小型壺の口縁部破片である。やや外反しながら立ち上がる直口縁を持ち、横方向のナデ調整が顕著である。57・59は小型壺の頸部で、57は口縁部にかけて強く外反しながら立ち上がる。58は小型壺の底部破片で、内面はハケ調整がなされる。

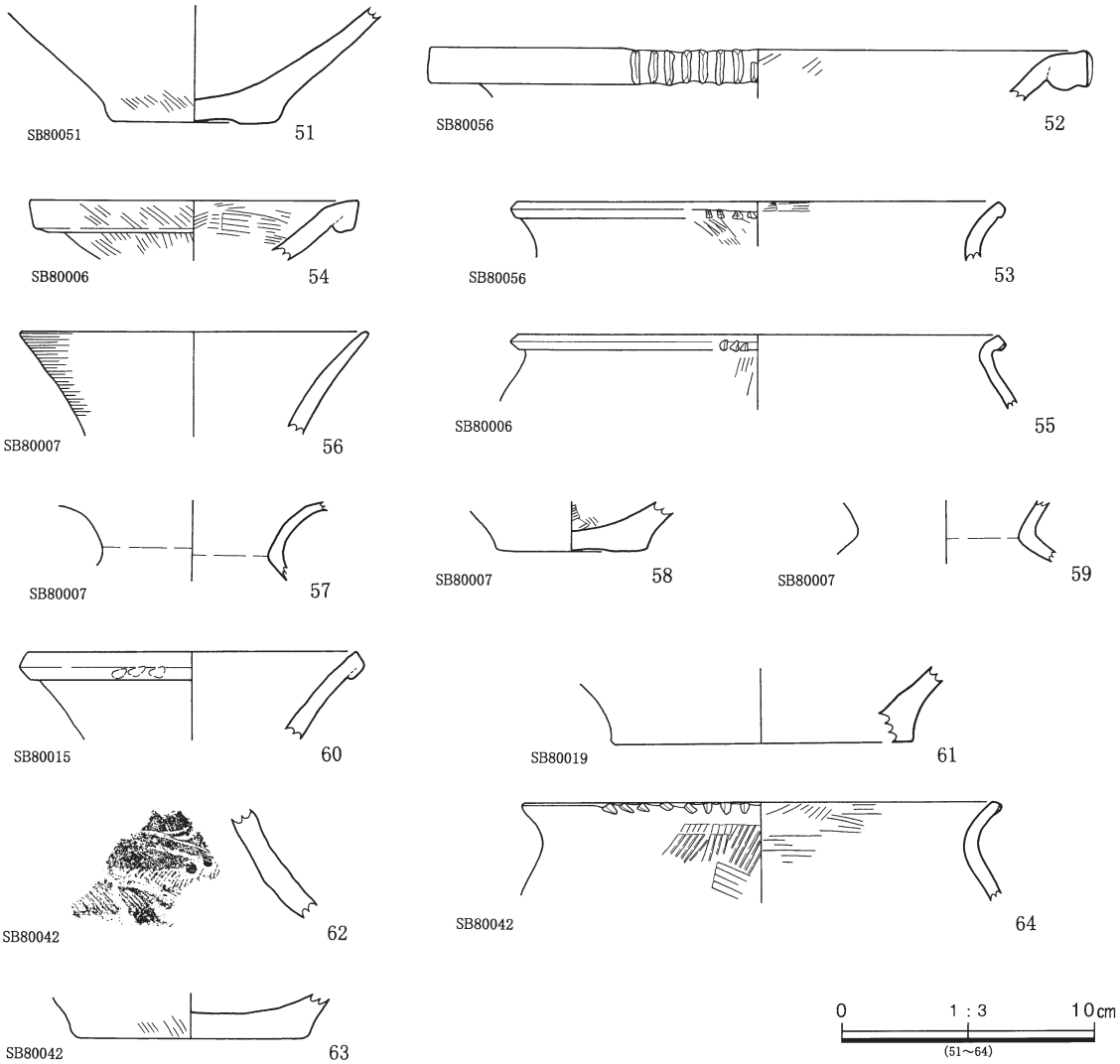
SB80015　60はSP14472から出土した壺の口縁部破片である。摩滅により調整は不明だが、折り返された口縁部端部には連続する指頭による圧痕が観察される。

SB80019　61はSP13534から出土した壺の底部破片である。

SB80042　62はSP51330から、63・64はSP51314からそれぞれ出土した。62は壺の頸部から肩部にかけての破片で、頸部にかけてはミガキ調整がなされる。肩部にはハケ工具の刺突による羽状文が施され、円形浮文が２ヵ所貼り付けられる。63は壺の底部であるが、摩滅が顕著でわずかに外面に縦位のハケ調整痕が観察される。64は台付甕の口縁部で、口唇部には指頭による刻目が巡っている。内面は横位あるいは斜位のハケ調整がなされ、頸部から体部外面にかけては幅広の工具による縦位あるいは斜位のハケ調整がなされている。



第47図　掘立柱建物跡出土遺物１



第48図　掘立柱建物跡出土遺物 2

第３節　方形周溝墓

１　方形周溝墓の概要

（１）方形周溝墓の形態と規模

方形周溝墓は調査区内において36基検出されており、そのあり方は多様である。調査区外に及ぶ遺構や、攪乱や削平によって形状が不明瞭な遺構もあるが、全容が判明する遺構を主に取り上げて形態と規模について概観する。

形態については墓域を巡る周溝の処理の仕方によって形態的な特徴を捉えることが可能かと思われ、おおむね下記のように大きく３つに分類される。１類は周溝が全周する形態で、四隅がやや浅くなるものや、細溝で隅部を繋ぐものを含む。該当する方形周溝墓としては、SZ50880、SZ51174、SZ51234、SZ5171、SZ5009、SZ2575、SZ1900が挙げられる。２類は四隅が切れる形態を示す方形周溝墓で、SZ52863、SZ50902、SZ51149、SZ827、SZ200、SZ446が該当する。３類は隅が１～２ヵ所切れる形態の方形周溝墓で、SZ52642、SZ52423、SZ52639、SZ52284、SZ50861、SZ50871、SZ51507、SZ52155、SZ51175、SZ2002、SZ176が該当する。南辺の中央が切れて陸橋状となるSZ228、周溝が半円形状に巡るSZ51497の２基は他の方形周溝墓と比べればやや特異な形態を示している。なお、主体部はSZ52863で検出されたのみで、盛土が確認された遺構は認められなかった。

これら方形周溝墓はいくつかのまとまりをもって築造され、配置状況にも相違がみられる。単独型として築造されるのはSZ51497、SZ50880、SZ2002、SZ2575、SZ228、SZ1900のような大型の遺構にみられる傾向である。周溝を隣接させながら築造する連接型はSZ52642・SZ52423・SZ52639、SZ51507・SZ50902・SZ51149、SZ2579・SZ5009、SZ827・SZ200・SZ176にみられる。周溝を共有させるように隣接させる結合型の配置はSZ52284・SZ50861・SZ50871にみられ、SZ51174・SZ51234・SZ51175は周溝を追加していくかのような拡張型ともいえる配置状況を示している。

方形周溝墓の規模については第２表に示した。大半の方形周溝墓は長軸規模５～10mで、最小は長軸規模4.1mのSZ52423、最大は長軸規模23.7mのSZ1900である。SZ1900を含む長軸規模10mを超えるSZ50880、SZ51174、SZ51234、SZ5009、SZ2575のような大型の方形周溝墓は１類のものが多いようであり、調査区西側に展開する方形周溝墓群に集中する状況が窺える。逆に長軸規模が５～８m前後の比較的小型の方形周溝墓は２類あるいは３類に属するものが多い。

（２）方形周溝墓の分布

方形周溝墓は調査区内において顕著な偏在傾向が認められ、調査区中央部となる東西23ラインから17ラインにかけて、また東西28ライン以西となる西部にまとまりがみられる。こうした偏在は集落内の墓域のあり方に伴うものと考えられ、それは集落域の変遷にも繋がる可能性がある。

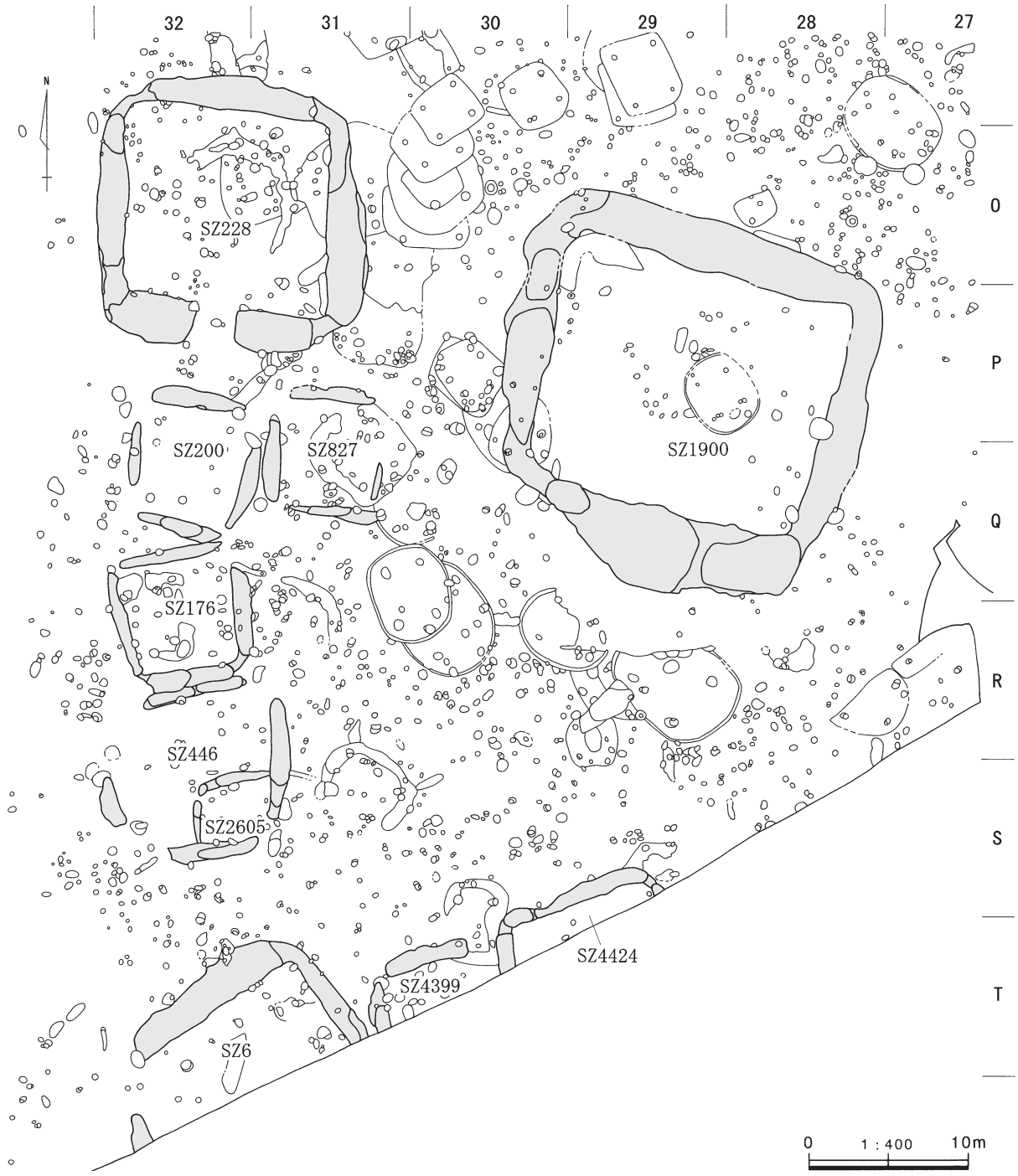
切合いや主軸方向などを手がかりとすると第52図に示すようにA～Dの大きく４つのグルーピングが可能と思われる。A群は調査区中央部のSZ52642・SZ52423・SZ52639、SZ52284・SZ50861・SZ50871などを中心とした比較的小型の方形周溝墓群で、形態的には２・３類が多い傾向がある。B群はSZ52155・SZ51174・SZ51234・SZ51175・SZ50880といった方形周溝墓で、SZ50880はA群を切ることからこれらよりも新しい遺構と考えられる。調査区西側ではC・D群の二つがあり、C群は大型方形周溝墓SZ1900・SZ228、またSZ827・SZ200・SZ176といった比較的小型の方形周溝墓が該当する。大型方形周溝墓に小型方形周溝墓が伴う形で造営されている可能性があり、SZ1900が１類、SZ228が陸橋を有する形態である一方、小型方形周溝墓は２類となる特徴もある。D群は調査区北側のSZ5171・SZ5009・SZ2579・SZ2002・SZ2575を中心とした方形周溝墓群で、大半が調査区外となることからやや

第49図　方形周溝墓全体図１

不明確ではあるが、南側に展開するSZ６などもD群に含まれると考えたい。

まとまった遺物が出土している方形周溝墓に注目した場合、A群のSZ50871、B群のSZ51174は弥生時代後期的要素を含む土器群が出土することから、弥生時代末～古墳時代前期初頭に位置づけられよう。B群のSZ50880はA群方形周溝墓とほぼ同時期の土器群が出土するが、無文化した折り返し口縁壺などやや新しい要素を含むことから、古墳時代前期初頭頃に位置づけられると思われる。C群のSZ228、D群のSZ5009・SZ2579・SZ2575からは古墳時代前期前半の土器群が出土しているが、小型丸底鉢（坩）など新しい要素を含む土器群の存在からD群のSZ2579・SZ2575出土土器群の方がより新しいとみられる。

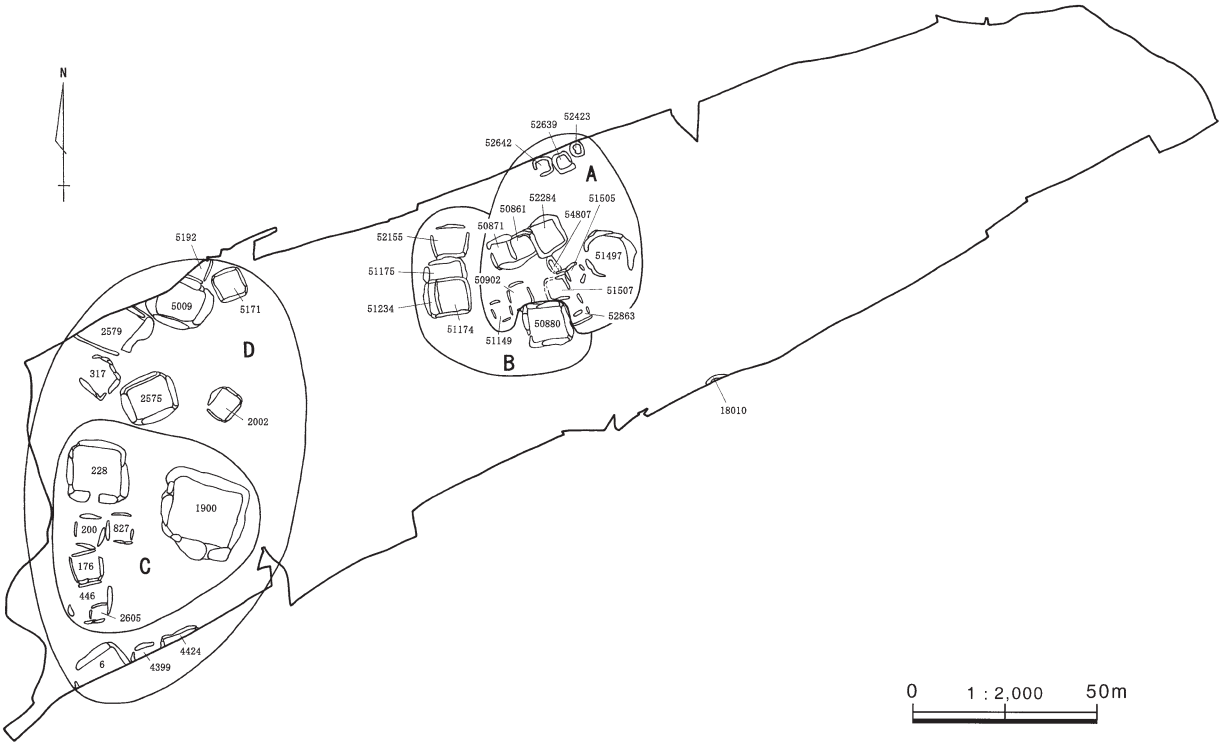
こうした各遺構の切合い関係や遺物の様相から、A群→B群→C群→D群というおおまかな方形周溝墓群の変遷が想定できる。これは墓域の変遷、つまり集落の再編が行われた可能性を示唆するものと考えられ、特に大きな画期はB群からC群、すなわち中央から西側に墓域が移動している時期である。B群の



第50図　方形周溝墓全体図２

SZ50880が区画溝とみられるSD50838に切られているのは、A・B群の展開する中央部が墓域として認識されず、居住域へと変遷していくことの現れと捉えられよう。

第51図　方形周溝墓全体図 3



第52図　方形周溝墓分布図

２　遺構

方形周溝墓それぞれについて以下に述べていく。なお、遺構規模は周溝外側の上端を基準とし、方台部の規模は周溝内側の下端を基準として示した。

SZ18010（第53図）

L・M－15区で検出している。弧状をなしていることから方形周溝墓の溝としたが、大半が調査区外となるため遺構の全体は明らかではなく、また周囲に方形周溝墓が分布していないことから、別の性格の遺構である可能性もある。溝の形状は底面がやや平坦となる箱堀状を呈し、幅80～90㎝、検出面からの深さは60～70㎝であった。覆土は黒色シルトを主体とし、底面近くは褐色粘土の堆積が確認されている。調査区境に近い遺構東端部分では底面から30㎝程度浮いた状態で、完形近くに復原される65の台付甕がまとまって出土している。台付甕にはやや扁平な長辺38㎝の大型の石がかぶせられるように置かれていたが、その意図を示す所見は得られていない。

SZ52642（第53図）

G－19・20区で検出したが、北端は調査区境となるため不明瞭であった。東側にSZ52639、SZ52423が隣接しているが、SZ52639との切合い関係は認められない。遺構の規模は東西5.3m、南北5.4mで、主軸方向はN－22°－Wであった。方台部は東西4.3m、南北4.2mを測り、主体部は確認されていない。周溝の平面形は隅角の緩い隅丸方形で、南西隅が途切れている。周溝の幅は50～80cmで、隅角部分がやや狭くなっている。検出面からの深さは20～30mとほぼ平坦に近いが、西側周溝SD52646の端部は土坑状にやや掘り窪められる。周溝の覆土は黒褐色シルトを主体とし、下層に暗褐色シルトが堆積する。周溝の北溝と南溝では70～73の壺が、いずれも底面から10～20㎝浮いた状態で出土している。また東溝ではSZ52639との境付近の最上層で69の壺が出土している。

SZ52423（第54図）

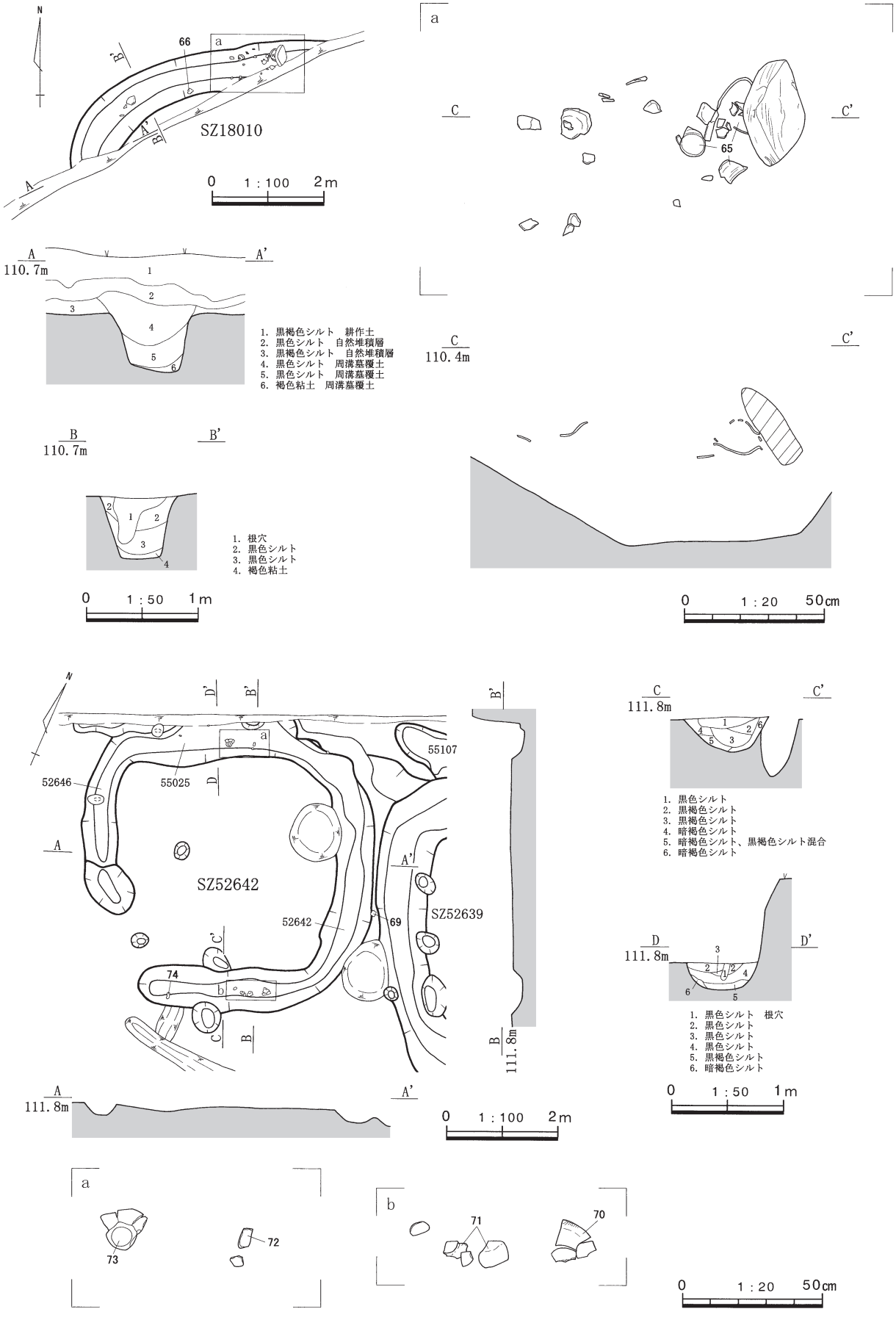
F・G－18・19区で検出され、西側にSZ52639とSZ52642が隣接する。遺構の規模は北側が調査区境となるため正確にはわからないが、東西3.3m、南北4.1mを測り、主軸方向はN－20°－Wであった。方台部は東西2.6m、南北3.0mで、主体部は確認されていない。周溝は隅角が不明瞭な隅丸方形状に廻り、北東隅が途切れている。周溝の幅は30～90㎝で、西溝の一部が突出するように掘られ、南溝が南東隅付近で急激に広くなっている。検出面からの深さは10～20㎝と極めて浅い。隣接するSZ52639とSZ52642よりも小規模であることから、周溝の規模もそれに比例しているのかもしれない。周溝覆土は黒色シルトと黒褐色シルトを主体としている。周溝内から図示可能な遺物が出土していないが、SZ52642と関連する遺構と考えられることから、前後する時期の遺構と推定される。

SZ52639（第54図）

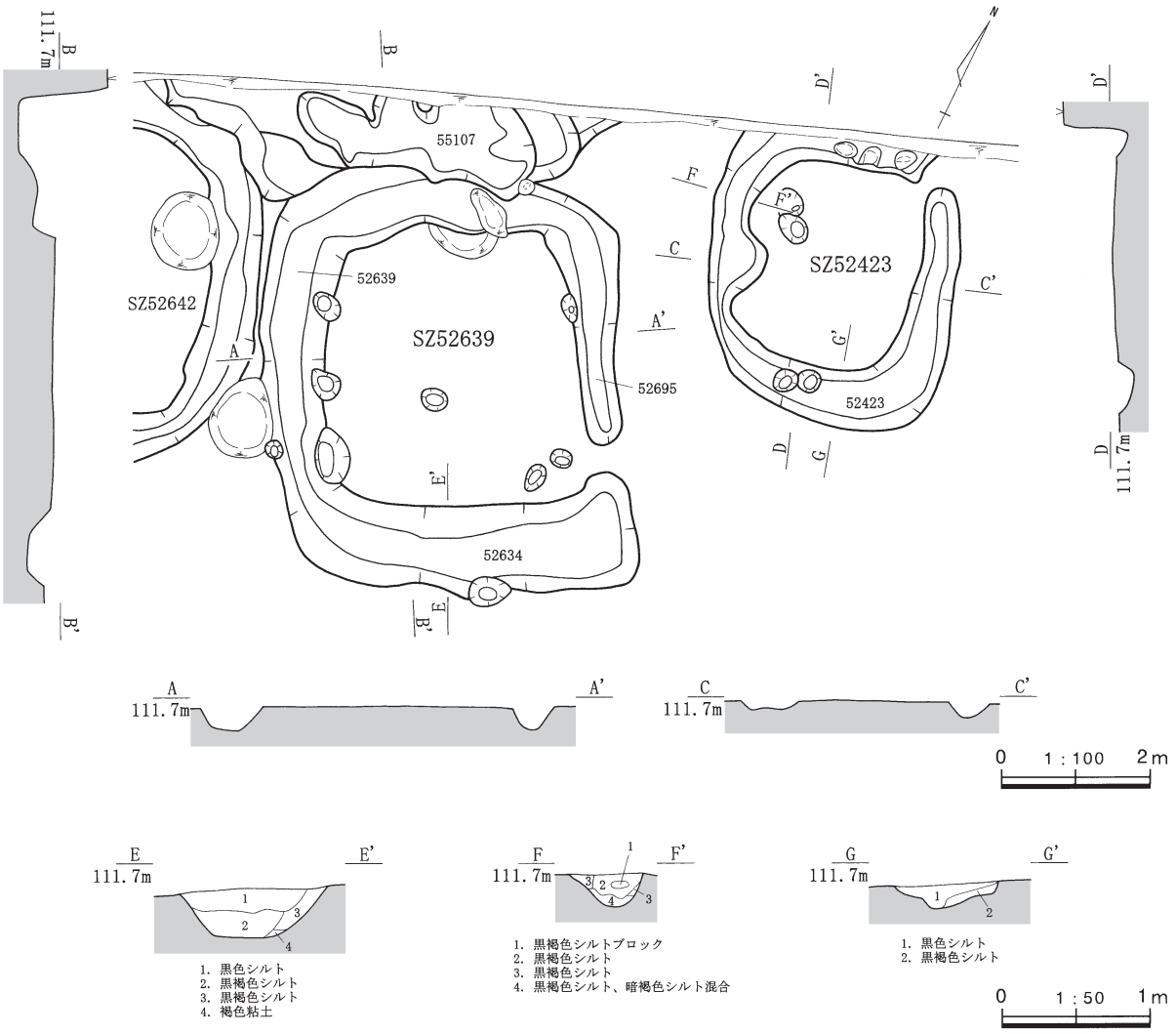
F・G－19区で検出している。西側はSZ52642、東側はSZ52423が隣接する。遺構の規模は北側がSD55107に切られているため不明瞭であるが、東西4.8m、南北5.6mであった。主軸方向はN－30°－Wで、方台部の規模は東西3.8m、南北4.3mであった。主体部は確認されなかった。周溝は隅角の緩い隅丸方形状に廻り、南東隅の一角が途切れている。周溝の幅は0.7～1.7mで、南溝SD52634がやや広く掘られる。検出面からの深さは0.2～0.4mで、ほとんど凹凸なく掘られている。周溝の覆土は黒色シルト、黒褐色シルトを主体とした自然堆積によるものとみられる。周溝内からは図示可能な遺物は出土していないが、SZ52642と関連する遺構と考えられることから、前後する時期の遺構と推定される。

SZ51497（第55図）

I・J－17・18区に所在し、SH51495の南東部の一部を周溝が切っている。遺構の規模は東西13.9m、南北8.7mを測り、主軸方位はN－21°－Wである。方台部の規模は東西7.3m、南北7.1mで、内部に主体部は確認されていない。内部の竪穴住居の検出状況から、遺構周辺の検出面の削平はあまり大きなもの



第53図　SZ18010・SZ52642平面・断面・遺物出土状況図

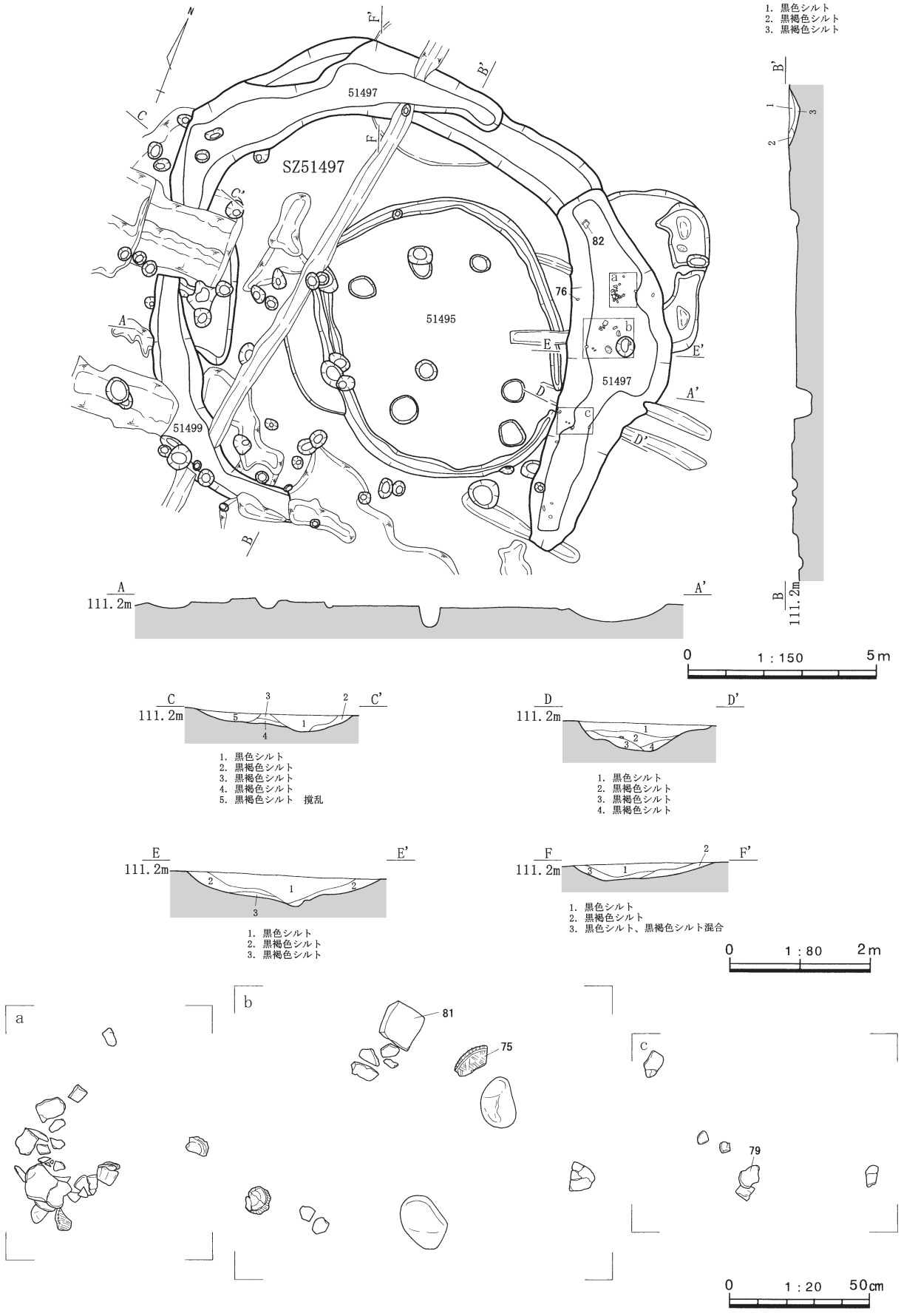


第54図　SZ52639・52423平面・断面図

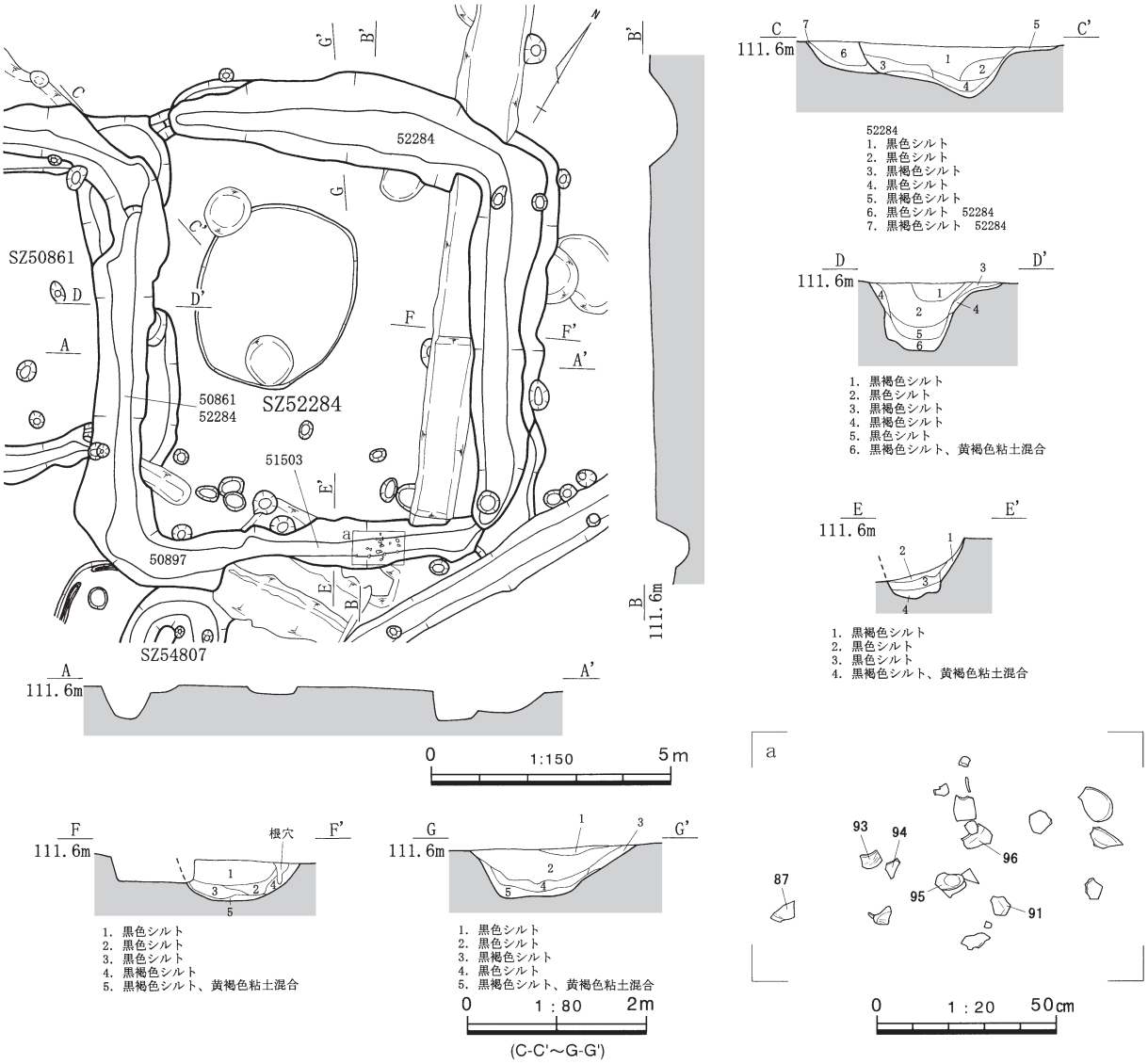
ではないため、盛土にかなりの厚みがあったと推定される。周溝は楕円形に近い形状で廻り、南辺は延長4.4mにわたって途切れている。他の方形周溝墓を比較して特異な形状であるといえ、ここでは方形周溝墓として報告するが、他の性格を持った遺構である可能性も否定できない。周溝の幅は0.8～2.9mで、東側は特に広く掘り広げられる。検出面からの深さは20～50㎝で、西辺と東辺が弧状に深く掘り込まれることから、数度にわたって掘削が進められたように見える。周溝の覆土は黒褐色シルトを主体とした自然堆積によるものである。周溝内では第55図に出土状況を示したように、東溝で比較的まとまって遺物が出土しており、底面から20～30㎝程度浮いた１層土から出土しているものが多い。75～77・79の壺、78の台付甕、80の石器、81・82の台石が出土している。

SZ52284（第56図）

H・I－19・20区で検出した方形周溝墓で、西側にSZ50861及びSZ50871が一部重なる形で作り出されている。第56図土層図C－C´で示すように、SZ52284の西溝がSZ50861の東溝と重複し、これに切られているため、SZ50861構築にあたり再掘削を行っているとみられる。遺構規模は東西10.1m、南北10.4mを測り、主軸方向はN－29°－Wである。方台部の規模は東西7.4m、南北8.3mで、主体部は確認されていない。周溝は方形に巡っており、北西隅ではそれが途切れて小溝で連結され、南東隅もかなり幅が狭くなっている。周溝の幅は0.8～2.0mで、北溝から東溝SD52284が広く掘られており、検出面からの深さは20～80cmである。覆土は黒色または黒褐色シルトを主体とした自然堆積によるもので、最



第55図　SZ51497平面・断面・遺物出土状況図

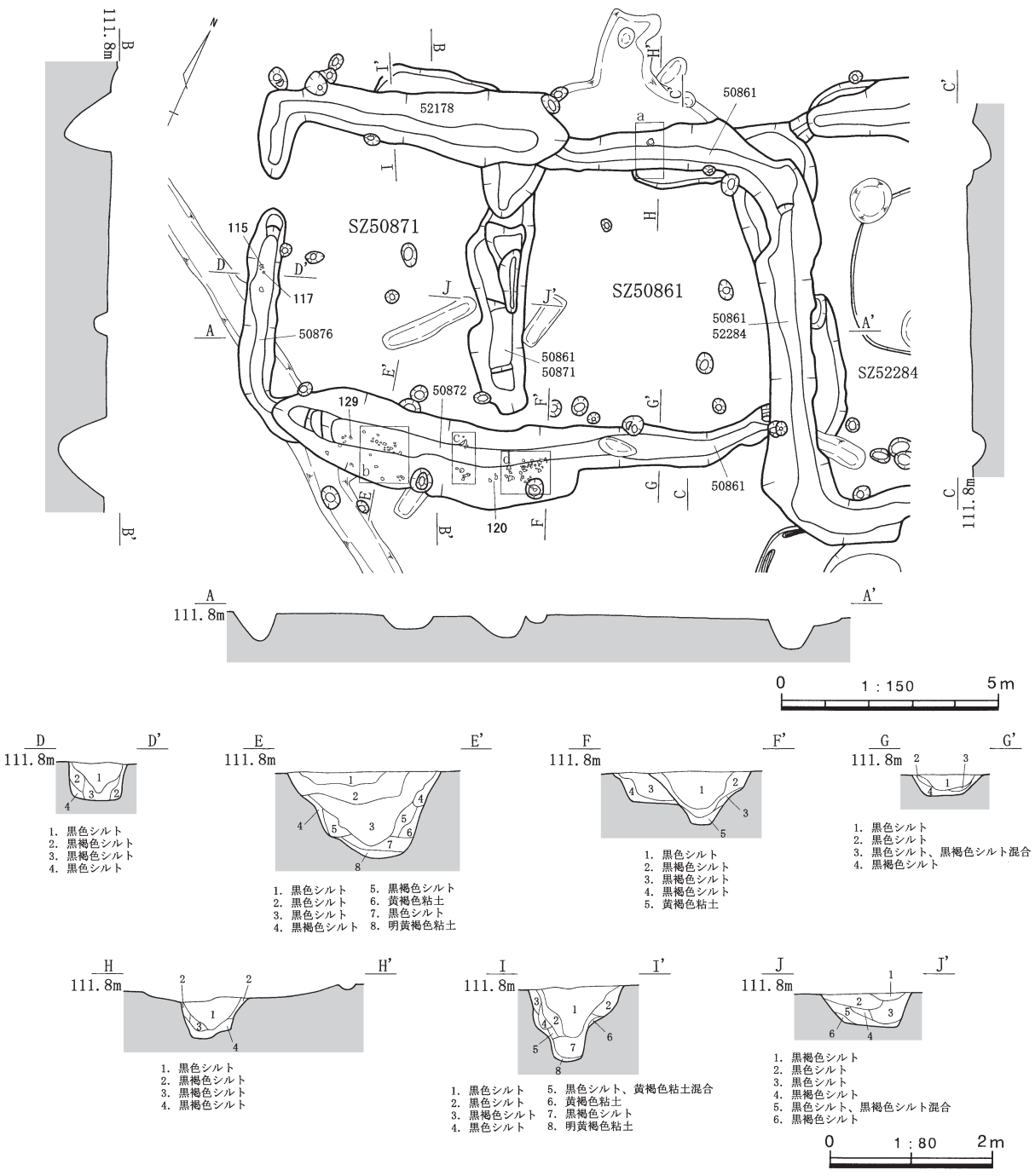


第56図　SZ52284平面・断面・遺物出土状況図

下層は黄褐色粘土が混じる。周溝出土遺物は83～87・89～93の壺、88の鉢、94～96の台付甕が出土している。このうち、87・91・93～96は南溝SD51503からまとまって出土しているが、いずれも底面からは20～30cm程度上層で出土している。

SZ50861（第57・58図）

Ⅰ－20区で検出した方形周溝墓で、東にSZ52284、西にSZ50871が一部重複して構築される。前述のように、切合い関係からSZ52284よりも新しい。SZ50871との切合い関係は明確でないが、北溝などに一部が本遺構の上から掘り込まれており、これよりも古いと判断される。遺構の規模は東西8.6m、南北8.0mを測り、主軸方向はN－25°－Wである。方台部の規模は東西6.2m、南北6.3mで、主体部は確認されていない。周溝は方形に巡るが、南西隅は途切れている。東溝は南側でSZ52284南溝と境が明確でなくなっているが、本来は南溝方向に屈曲しているものである。また、南溝西端はSZ50871南溝とも連結しているが、本来は西端で途切れ、南西隅は掘り残されていたものとみられる。西溝はSZ50871と切合い関係が明確でなく、溝を共有していた可能性もある。周溝の幅は0.5～1.5mで、検出面からの深さは0.3～0.6mである。覆土は黒色シルトと黒褐色シルトを主体とした自然堆積層で、最下部には明黄褐色粘土が堆積している箇所もある。出土遺物は97～100の壺、101の台付甕が出土している。97は第58図に出土状況を

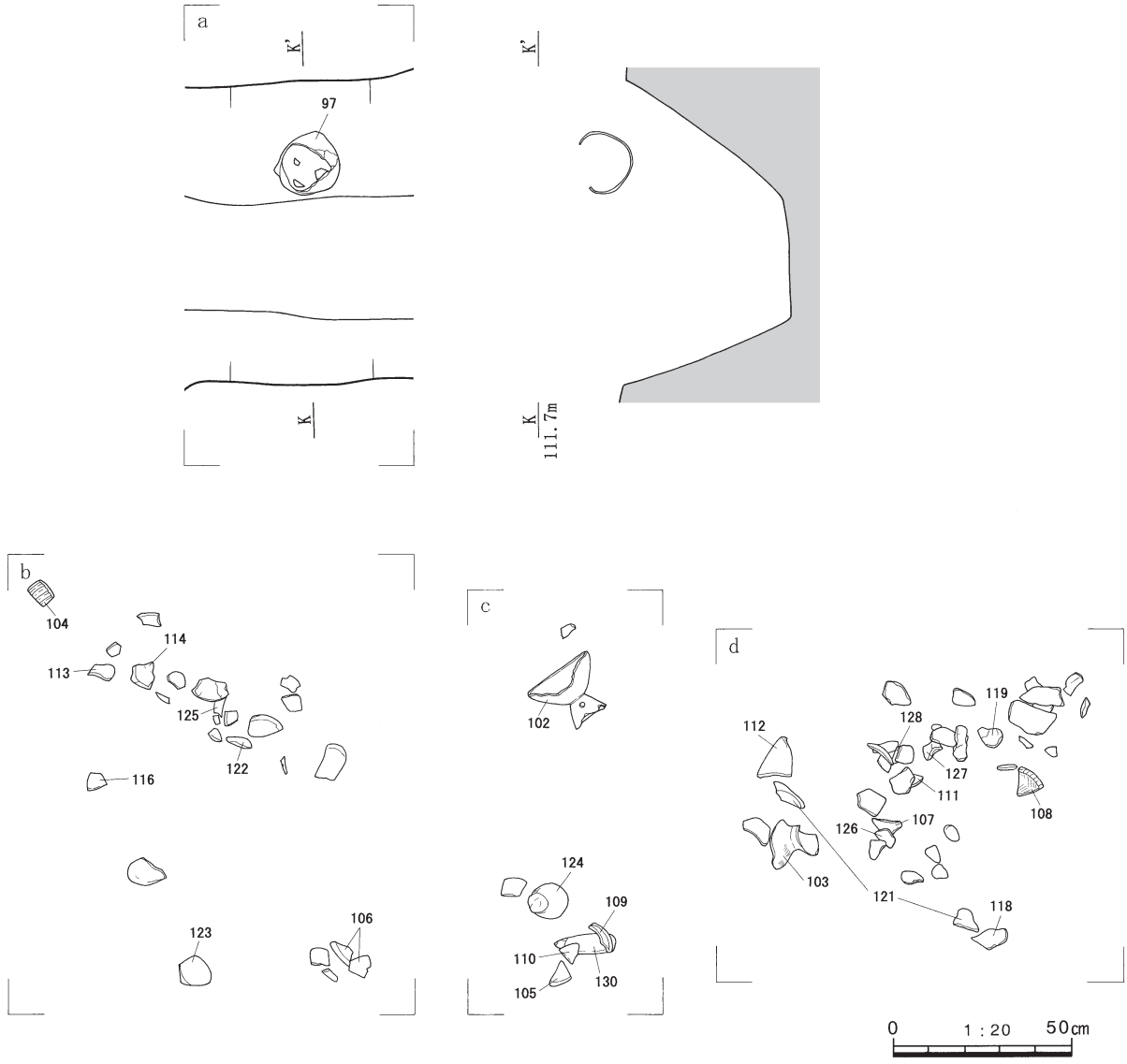


第57図　SZ50861・50871平面・断面図

示しているが、検出面に近い最上層で出土している。

SZ50871（第57・58図）

Ⅰ・J－20・21区で検出され、東側でSZ50861と重複する。前述のようにSZ50861よりも新しいと考えられる。おそらくSZ50861を西側に拡張する形で構築されたと推定され、SZ52284・50861・50871の３基の方形周溝墓はSZ52284を起点に、東から西に向かって増築、拡張されたものと考えられる。遺構の規模は東西6.5m、南北9.8mで、主軸方向はN－15°－Wである。方台部の規模は東西5.3m、南北6.8mで、主体部は未検出である。周溝は方形に巡り、西溝の北寄で約0.6mにわたって途切れている。周溝の幅は0.5～1.9m、検出面からの深さは0.4～1.3mを測る。北溝と南溝が広く、深く掘り込まれている。東溝の深さは北溝、南溝に比べて0.5～1.1m程度浅く、SZ50861の北・南溝の底面とほぼ同じ標高である。

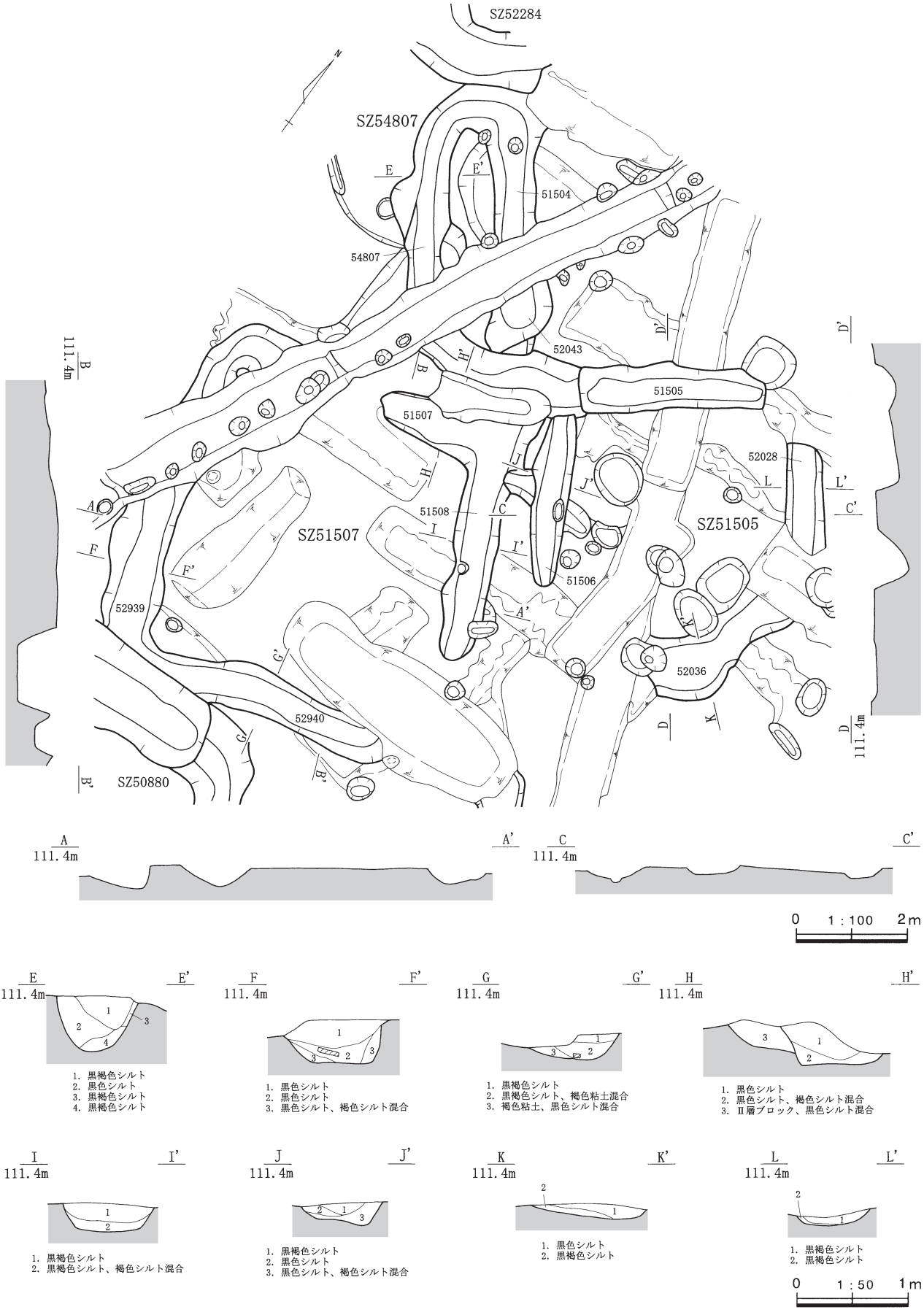


第58図　SZ50861・50871遺物出土状況図

よって、東溝は本来SZ50861の西溝と判断され、SZ50871はそれをそのまま利用する形で拡張したのであろう。周溝の覆土は黒色及び黒褐色シルトを主体とし、下部に黄褐色粘土を含む箇所がある。出土遺物は102の高坏、103～123の壺、124～128の台付甕、129・130の石器がある。第57図に出土状況図を掲載したように、遺物の大半は南溝の底面から30～50㎝高い中～上層で出土している。これら出土遺物から、本遺構は古墳時代前期初頭の遺構とみられ、SZ52284・SZ50861・SZ50871は近接した時期に営まれたことが想定される。

SZ51505（第59図）

Ⅰ・J－18・19区で検出された方形周溝墓である。西側にSZ51507が隣接し、北溝はSZ54807南溝と重複するが、新旧関係は明らかでない。遺構の規模は東西5.3m、南北6.1mで、主軸方向はN－37°－Wである。方台部の規模は東西4.2m、南北4.5mで、主体部を検出することはできなかった。周溝はほぼ方形に巡るが、南溝が東側から湾曲しているため、南側はやや歪な形状となる。四隅が途切れているが、攪乱が激しいため、本来このような形であったか不明確である。周溝の幅は0.5～1.2m、上部がかなり削平されているため、検出面からの深さは10～40㎝と浅い。周溝の覆土は黒色及び黒褐色シルトを主体とした自然堆積層である。図示が可能な遺物が出土していないが、SZ51507と前後する時期の遺構と推



第59図　SZ51505・51507・54807平面・断面図

定される。

SZ51507（第59図）

Ｊ－19区で検出された方形周溝墓で、東側にSZ51505、北東にSZ54807が隣接し、南西隅をSZ50880によって切られている。遺構の規模は東西6.9m、南北6.5m、主軸方向はＮ－17°－Ｗである。方台部の規模は東西5.4m、南北5.5mで、主体部は検出されていない。周溝は方形に巡り、南東隅が途切れているとみられるが、攪乱によって一部破壊されているため不明瞭である。周溝の幅は0.6～1.1mで、SZ51505と同様に遺構上部の削平が激しいため、検出面からの深さは10～40㎝とかなり浅くなっている。周溝の覆土は黒褐色シルトを主体とした自然堆積によるもので、下部に褐色シルトや褐色粘土を含む。東溝SD51508から131の台付甕をはじめとした遺物が周溝内から出土している。

SZ54807（第59図）

Ｉ・Ｊ－19区で検出した遺構で、SZ51505・SZ51507の北側に隣接しており、南溝がSZ51505の北溝を重複するが、新旧関係は不明である。SD51504とSD54807のいずれかが西溝となり、SZ51505北溝と重複するSD51505が南溝となる方形周溝墓と考えられるが、周辺の攪乱が激しいため、遺構の規模・形状は不明瞭である。位置関係からSZ51505・SZ51507・SZ54807は関連性を持って構築された可能性が高い。周溝は方形に巡っていたとみられ、その幅は0.7～1.1m、検出面からの深さは20～50㎝と浅い。図示可能な出土遺物はないが、前述のようにSZ51507と前後する時期の遺構と推定される。

SZ52863（第60図）

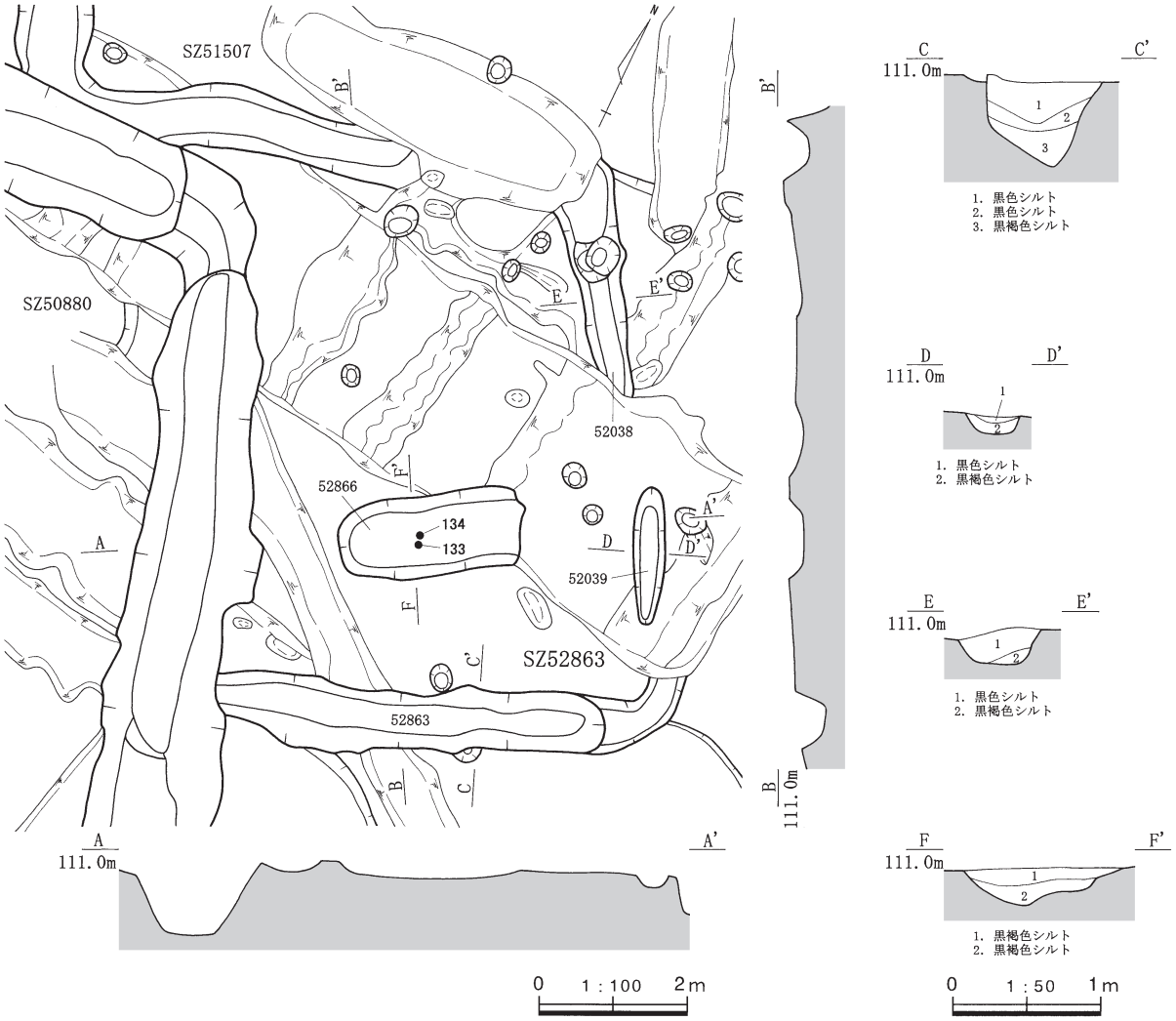
Ｊ・Ｋ－18・19区で検出された方形周溝墓で、西溝はSZ50880東溝によって切られているため、これよりも古い遺構と考えられる。北溝は不明瞭、東溝SD52038・SD52039は攪乱によって破壊されており、遺構の規模・形状は明らかでないが、主軸方向はＮ－25°－Ｗと推定される。方台部中央には土坑SK52866があり、内部から133・134のガラス玉が出土したことから、主体部であった可能性が高い。SK52866の規模は長軸2.5m、短軸1.1m、検出面からの深さは20㎝である。周溝の幅は0.3～1.0m、検出面からの深さは10～60㎝で、覆土は黒色シルト及び黒褐色シルトを主体とした自然堆積層である。図示可能な出土遺物はないが、北側のSZ51505・SZ51507・SZ54807と規模・形状が類似することから、前後する時期の遺構と推定される。

SZ50902（第61図）

Ｊ・Ｋ－20区で検出された方形周溝墓で、SZ51149の東側に位置し、南溝はSZ50880北溝によって切られほぼ破壊されている。確認可能な遺構の規模は東西6.2m、南北7.6m、主軸方向はＮ－22°－Ｗである。方台部の規模は東西5.3m、南北6.6mで、主体部は検出されなかった。周溝は方形に巡っていたと考えられ、四隅が途切れているようにも見えるが、遺構周辺は攪乱が顕著なため不明瞭である。周溝の幅は0.5～1.1m、検出面からの深さは10～50㎝である。周溝の覆土は黒色シルト及び黒褐色シルトを主体とした自然堆積層とみられる。図示可能な出土遺物はないが、東側に展開するSZ51505・SZ51507・SZ54807と規模・形状が類似することから、近似する時期の遺構と推定される。

SZ51149（第61図）

Ｊ－21、Ｋ－20・21区で検出された方形周溝墓で、SZ50902の西側に隣接する。周辺部の遺構面には攪乱がかなり影響を及ぼしており、遺構の規模・形状は不明瞭である。確認可能な遺構の規模は東西5.5m、南北6.3m、主軸方向はＮ－24°－Ｗである。方台部の規模は東西4.4m、南北5.3mで、主体部は検出されていない。周溝は方形に巡り、四隅が途切れていたとみられるが、周溝上部が削平されているため、浅い部分の形状は不明である。周溝の幅は40～80㎝、検出面からの深さは10～50㎝であった。覆土は黒色シルト及び黒褐色シルトを主体とし、下部に暗褐色シルトを含む自然堆積層である。西溝SD51402では第61図に出土状況を示したように、土器がまとまって出土している。覆土上層から出土しているものも

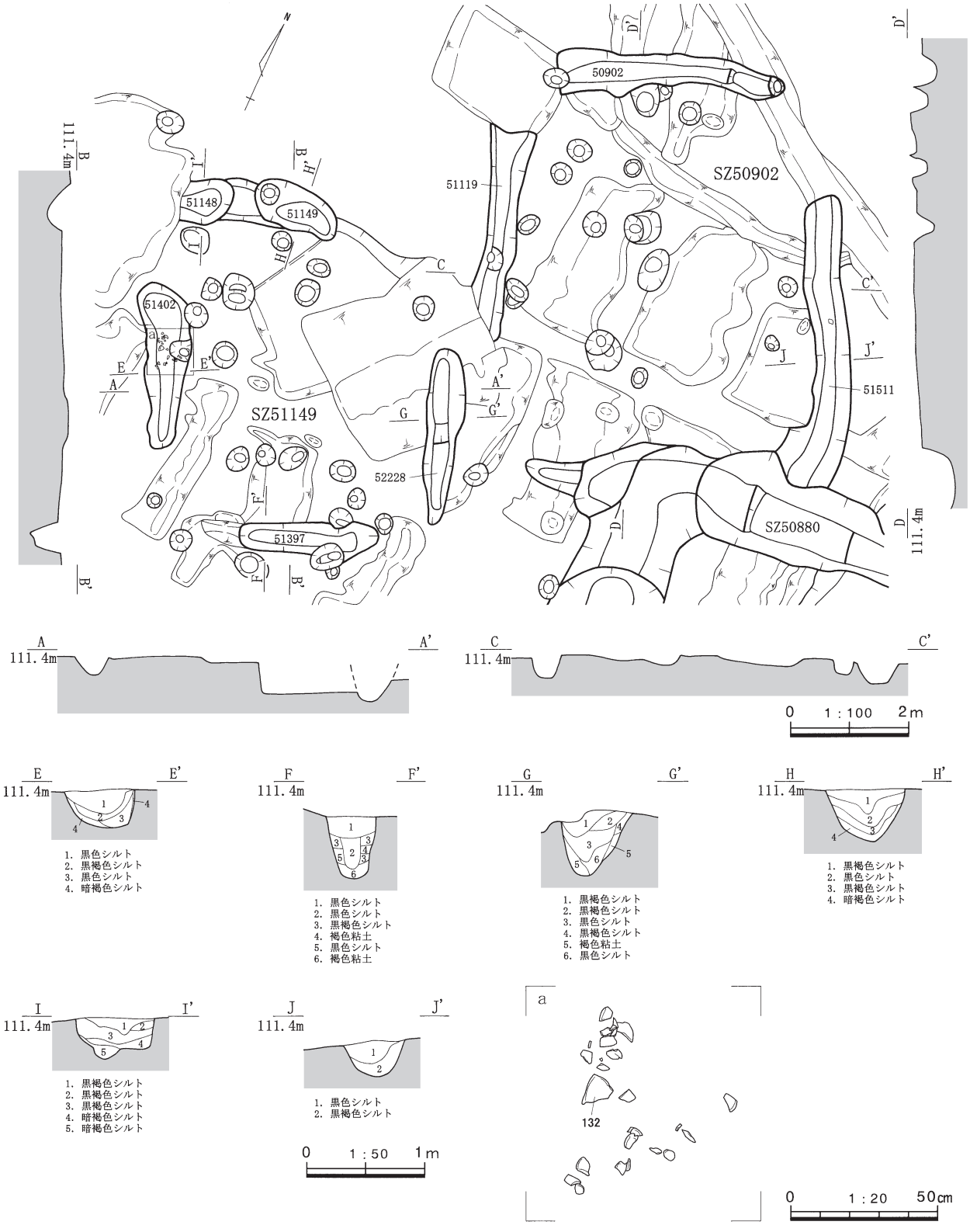


第60図　SZ52863平面・断面図

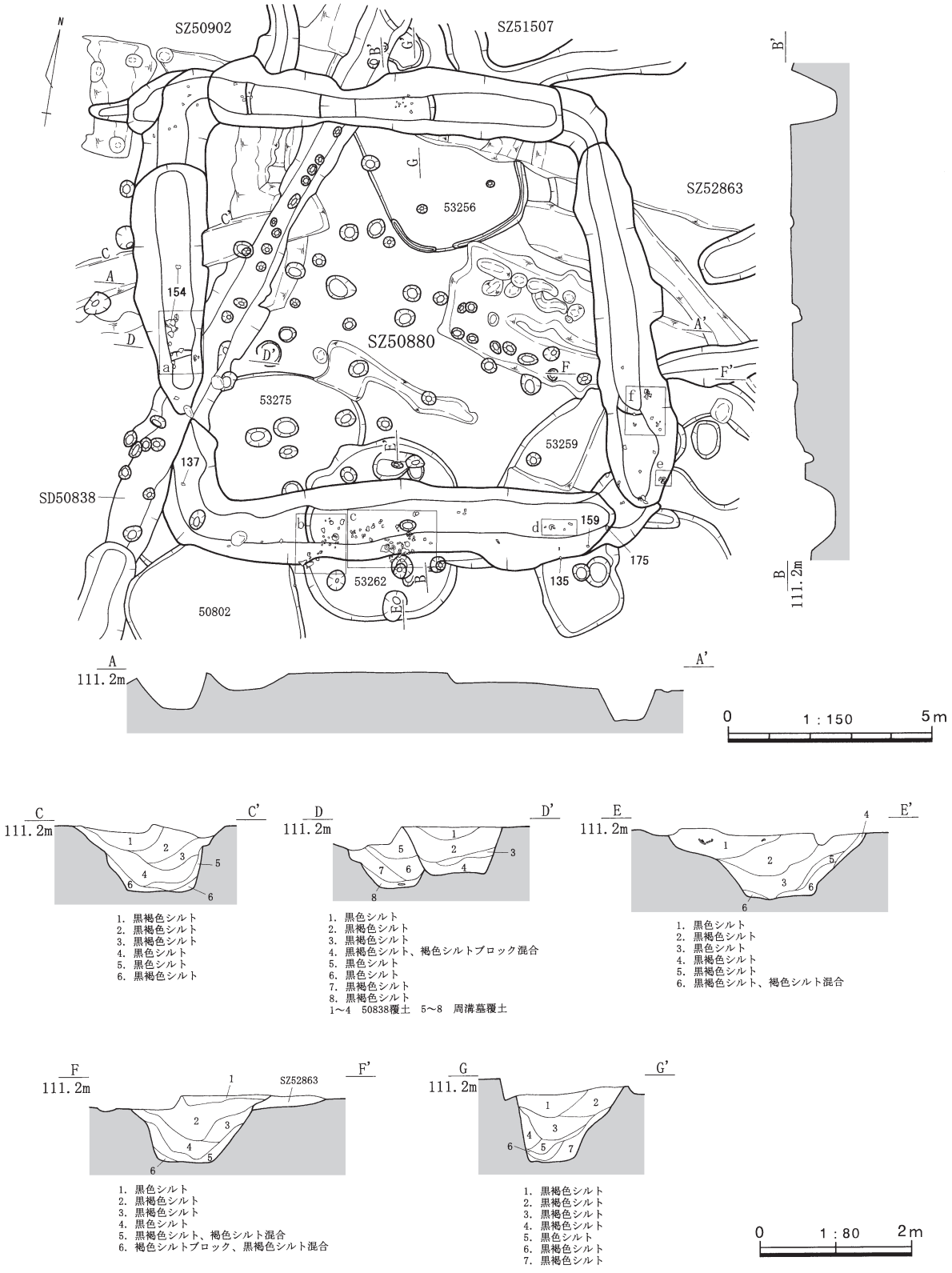
多いが、132の壺は周溝底部付近で出土した。

SZ50880（第62・63図）

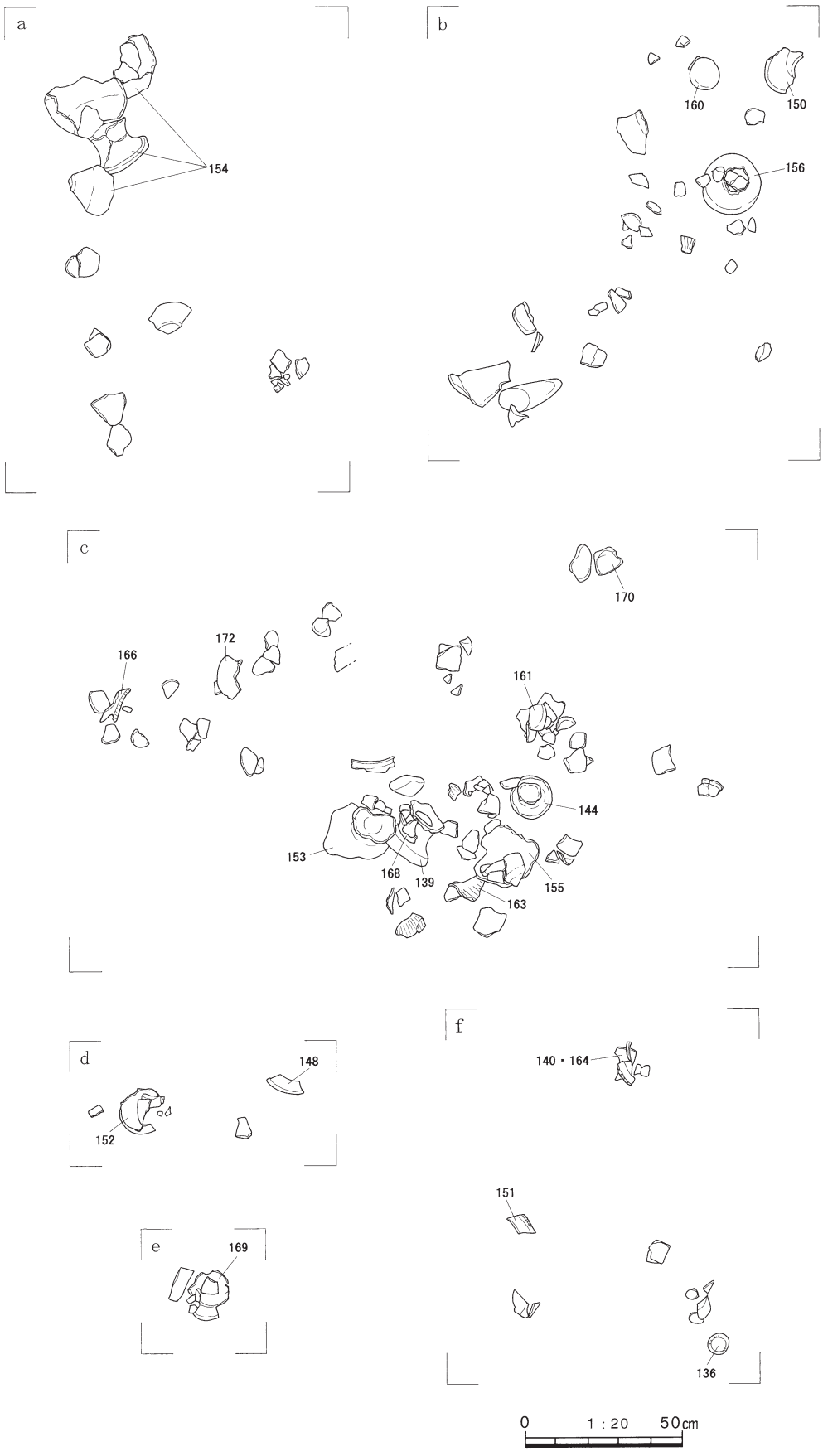
J・K・L－19区、K・L－20区で検出された大型の方形周溝墓である。SZ50880は竪穴住居SH50802・SH53256・SH53275・SH53262、また方形周溝墓SZ51507、SZ50902を切る形で構築されることから、これらよりも新しい。また西溝から北溝にかけてはSD50838に一部壊されることから、これよりも古い遺構と判断される。遺構の規模は東西13.1m、南北12.0m、主軸方向はN－8°－Wである。方台部の規模は東西10.5m、南北9.5mで、主体部は検出されていない。周溝は方形に巡るが、南西隅を除く隅角部は浅い溝によって東西南北溝を接続する形状となる。周溝の幅は0.8～2.1mで、西溝と南溝がやや広く掘り込まれるようである。検出面からの深さは0.3～1.3mで、四隅接続部の溝は東西南北溝よりも20～50㎝程度浅くなっている。周溝の覆土は黒色シルトと黒褐色シルトを主体とした自然堆積層とみられ、下部には褐色シルトをブロック状に含む部分もある。周溝からは135の鉢、136の手捏ねの小型壺、137の高坏、138～161の壺、162～172の台付甕が出土している。第63図に出土状況図を示したように、南溝・西溝・東溝で集中して出土しているが、覆土上層から出土している土器が多い。南溝中央部では多くの土器が周溝底面から50～80㎝浮いた覆土上層で出土しており、周溝が埋没する段階で廃棄された可能性も残している。



第61図　SZ50902・51149平面・断面・遺物出土状況図



第62図　SZ50880平面・断面図



第63図　SZ50880遺物出土状況図

SZ52155（第64図）

H・I－22、I－23区で検出された方形周溝墓である。南溝がSZ51175北溝を切る形で掘り込まれていることから、本遺構の方が新しいと判断される。SZ51174・SZ51234・SZ51175に隣接する位置関係、また規模の類似性からこれら方形周溝墓群と一連の遺構と考えられ、この中では最も新しい。遺構の規模は東西10.5mであるが、南北は南溝の一部が破壊されており、残存する規模は8.9mであった。主軸方向はN－2°－Wで、方台部の規模は東西8.7m、南北7.5mである。主体部は検出されていない。周溝は北側東西隅が切れており、また南側の東隅を浅い溝で連結している状況が窺える。周溝の幅は0.4～1.4mで、南溝は特に広く掘り込まれている。検出面からの深さは20～60㎝とかなり浅く、周辺の状況から、上部はかなり攪乱されていることが想定される。周溝の覆土は黒色シルトと黒褐色シルトを主体とした自然堆積層で、下部には黄褐色粘土が混ざっている部分がある。出土状況図を示したように、176の壺が北溝から出土しているが、口縁から底部にかけてほぼ半分が残存している。底部に穿孔が確認されることから、周溝墓に供献された土器と考えられる。

SZ51174（第65図）

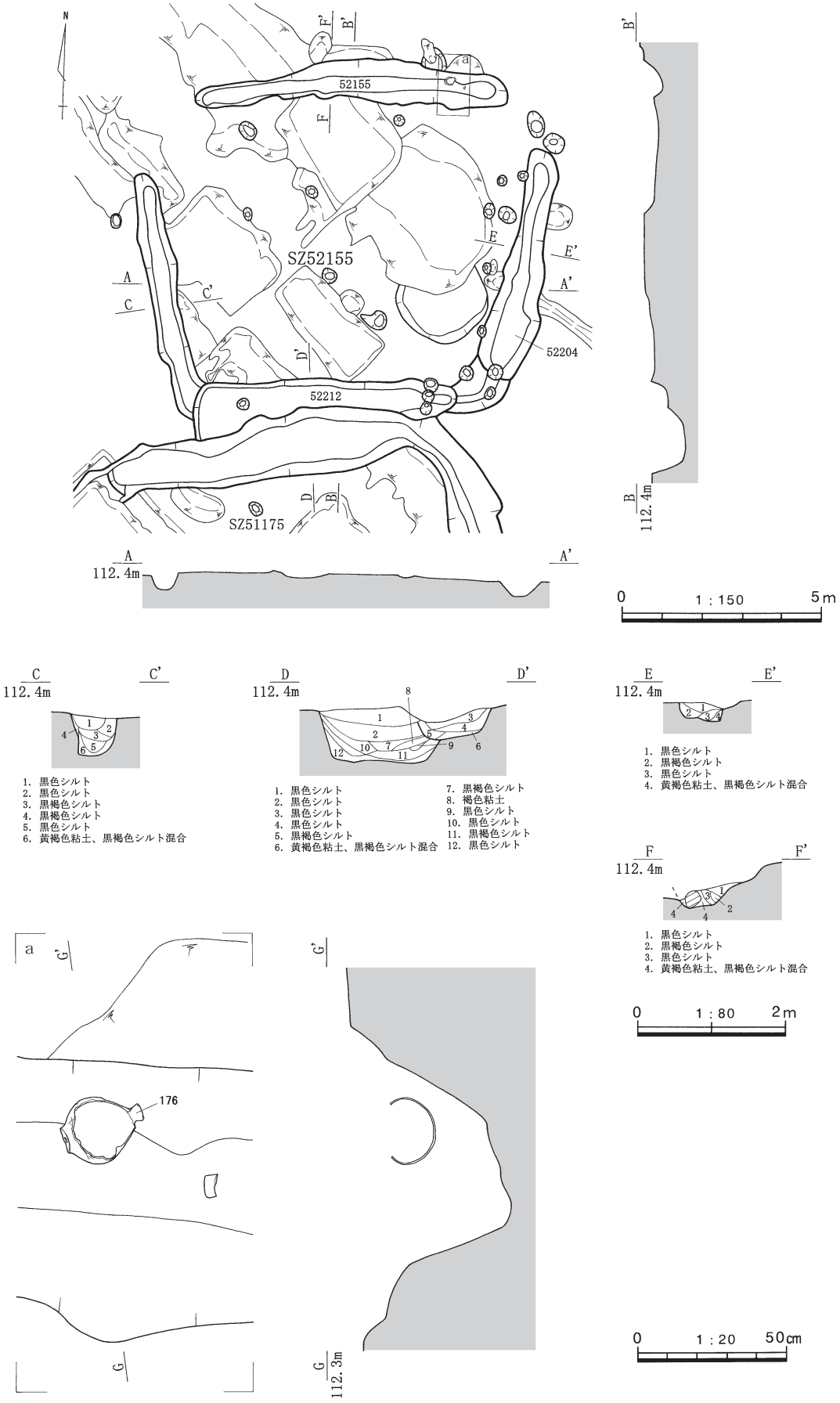
J・K－21・22区で検出された方形周溝墓である。近接するSZ51174・SZ51234・SZ51175は一連の方形周溝墓群とみられる。切合い及び位置関係から、SZ51174が当初築造され、西側に拡張する形でSD51234が掘削されてSZ51234が造られ、さらに北側にSD52213とSD52913が掘削されてSZ51175として拡張したと考えられる。SZ51174の規模は東西10.0m、南北10.5m、主軸方向はN－9°－Wである。方台部の規模は東西8.3m、南北9.2mで、主体部は検出されなかった。周溝は方形に巡っており、幅は0.6～1.4m、検出面からの深さは10㎝～80㎝であった。周辺は耕作等による攪乱が顕著であり、SZ51174・SZ51234・SZ51175は共に上部がかなり削平されているとみられる。周溝の覆土は黒色シルトと黒褐色シルトを主体とした自然堆積層で、下部には黄褐色粘土が混ざっている。周溝からは177の高坏、178の鉢、179～181の壺、183～186の台付甕が出土している。

SZ51234（第65図）

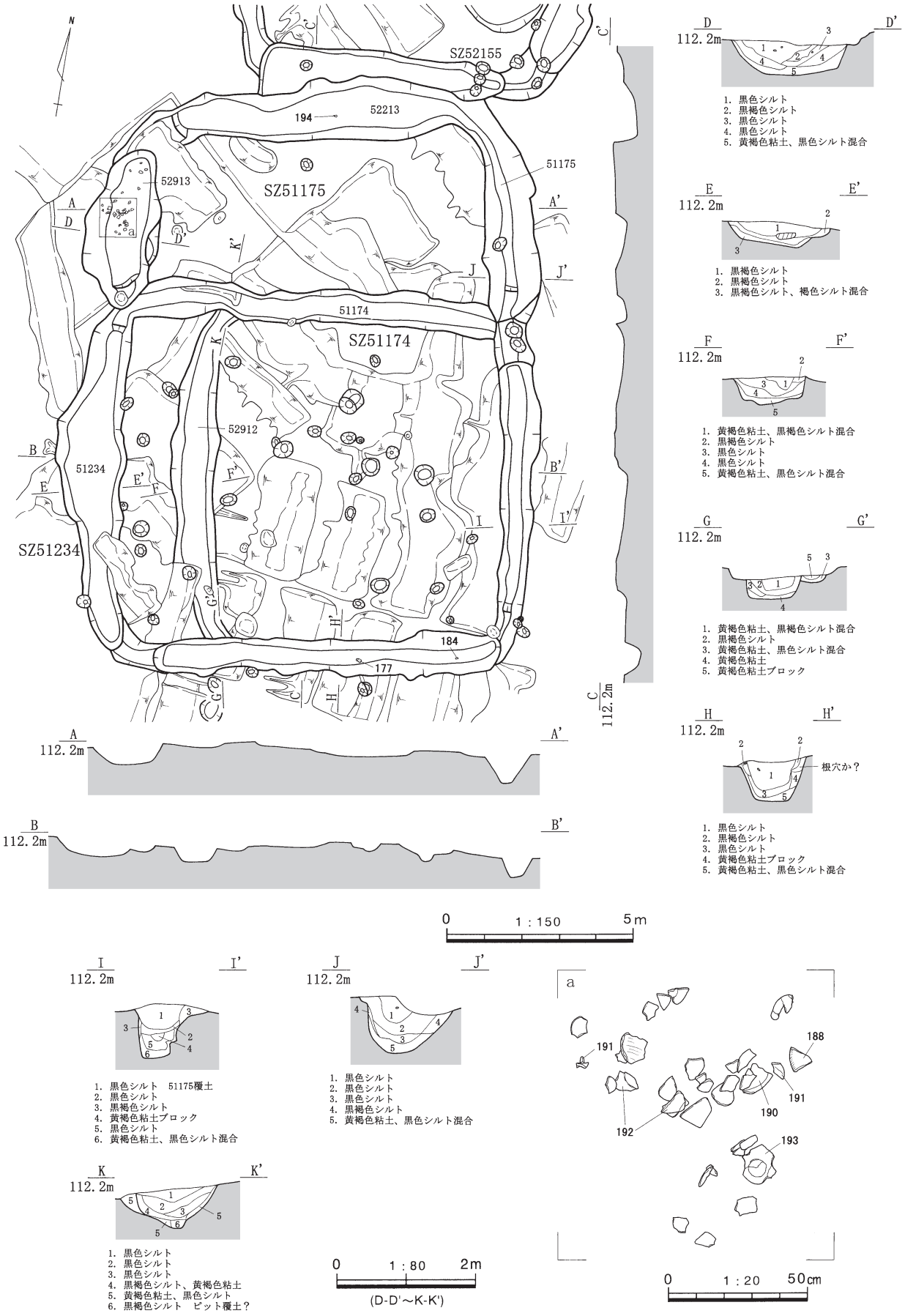
J・K－22・23区で検出され、SZ51174の西溝SD52912を拡張する形で掘削されたSD51234を西溝とする方形周溝墓としてSZ51234を認識した。拡張の際にSZ51174の南北溝も再掘削されているようである。遺構の規模は東西13.1m、南北10.5mで、主軸方向はN－9°－Wである。方台部の規模は東西10.8m、南北はSZ51174と同じく9.2mで、主体部は確認されていない。周溝は方形に巡るようであるが、南西隅は浅い溝によって連結される形状である。拡張された周溝SD51234の幅は0.8～2.0m、検出面からの深さは30～50㎝で、中央部がかなり広く掘り込まれている。覆土は黒褐色シルトを主体とした自然堆積層で、下部には褐色シルトが混ざる。出土遺物は拡張されたSD51234から187の台付甕が出土している。遺構及び遺物の状況から、SZ51174と近接した時期の遺構と考えられる。

SZ51175（第65図）

I・J－22・23区で検出された方形周溝墓である。SD51175・SD52213・SD52913をSZ51234の北側に延長して掘削することによって拡張した方形周溝墓として認識し、一連の遺構の中では最も新しいと考えた。遺構の規模は東西12.2m、南北16.4mで、主軸方向はN－13°－Wである。方台部の規模は東西9.6m、南北13.5mを測り、主体部は検出されていない。周溝は方形に巡るが、北東及び北西隅は浅い溝によって接続されるようである。拡張された周溝SD51175・SD52213・SD52913の幅は0.7～2.1m、検出面からの深さは40～80㎝で、全体としてやや幅広く掘り込まれている。覆土はSZ51174・51234とほぼ同様で、上～中層は黒色シルトと黒褐色シルトを主体とした堆積層、下層は黒色土の混じる黄褐色粘土が堆積する。遺物は出土状況を示したように、188・190～193の壺が西溝SD52913で集中的に出土し、他にも182・185・194の台付甕、189の壺が出土している。



第64図　SZ52155平面・断面図



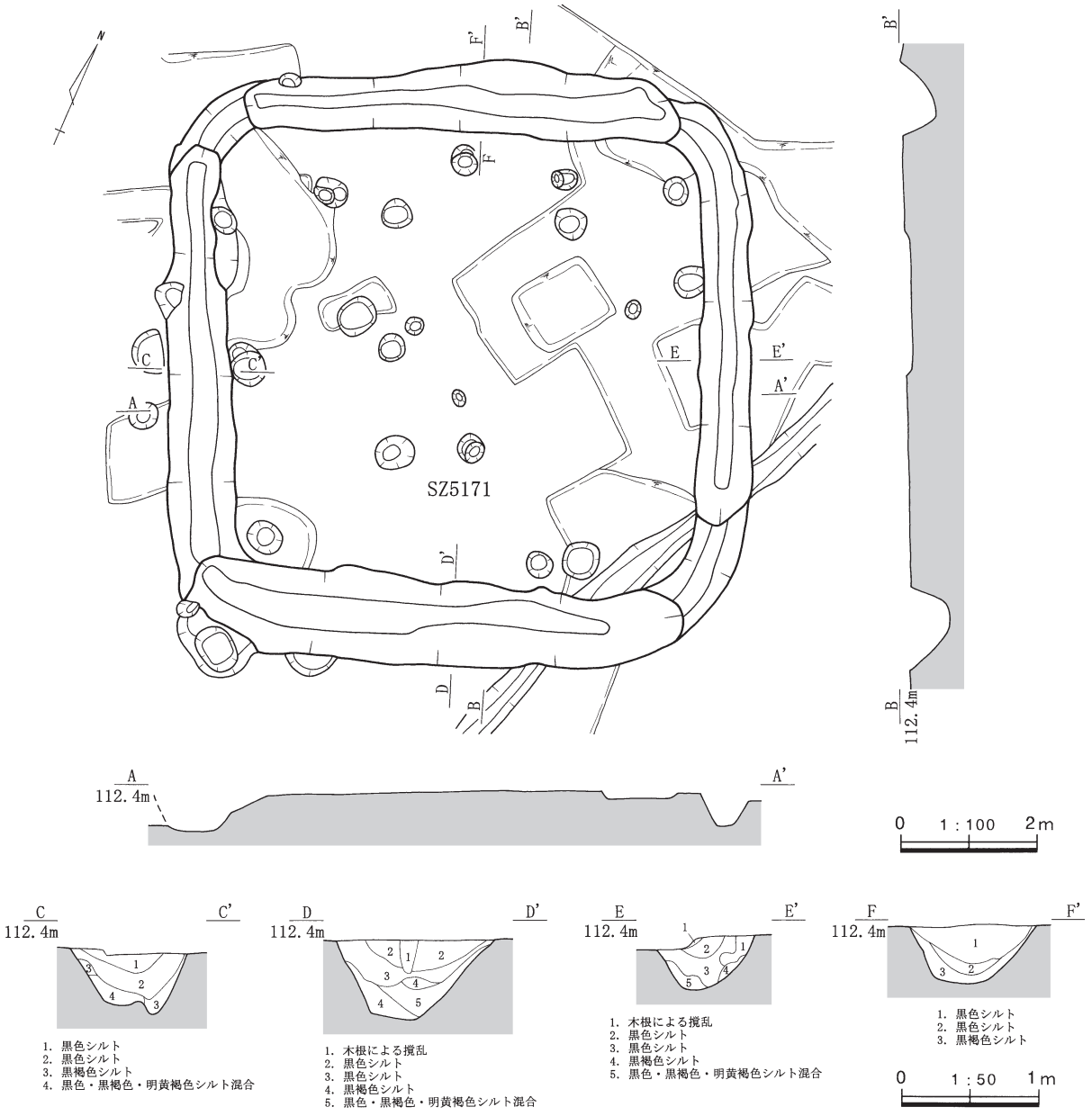
第65図　SZ51174・51234・51175平面・断面・遺物出土状況図

SZ5171（第66図）

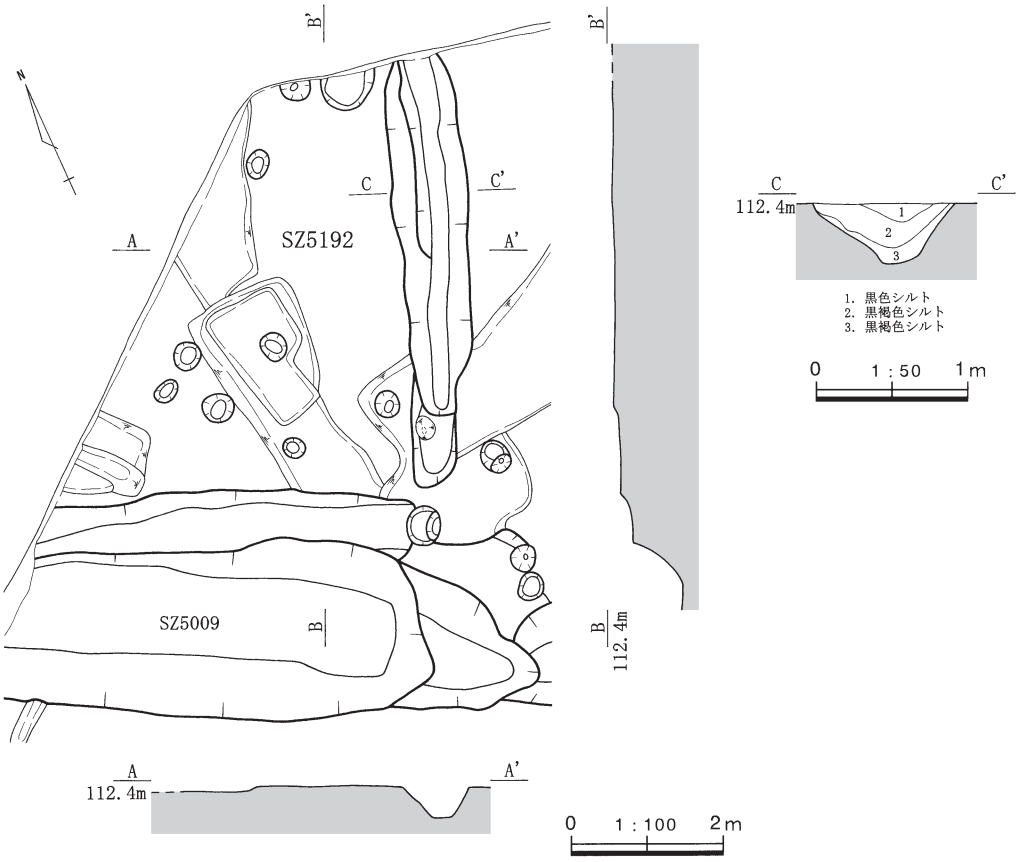
J－28・29区で検出された方形周溝墓で、SZ5009・SZ5192の東側に隣接する。遺構の規模は東西8.6m、南北8.9mで、平面形状は正方形に近い形状を示す。主軸方向はN－20°－Wである。方台部の規模は東西7.4m、南北7.2mで、主体部は検出されていない。周溝は方形に巡り、北西隅と南東隅は浅い溝によって結合されている。周溝の幅は0.6～1.4m、検出面からの深さは30～70㎝であった。南溝は幅広で、比較的深く掘り込まれるようである。覆土は黒色シルトを主体とし、下部には黒色・黒褐色・明黄褐色シルトが混在した土が確認される。出土遺物は195の手捏ねの小型甕、196～199の壺、200の台付甕、201の鉄鏃がある。

SZ5192（第67図）

I－28・29、J－29区で検出された方形周溝墓である。南溝と東溝が検出されるのみで、北側は調査区外となる。南溝はSZ5009北溝に切られており、これよりも古い遺構と判断される。遺構の規模は不明瞭であるが、主軸方向はN－24°－Eであることが確認される。検出された南東隅の状況をみると、周溝



第66図　SZ5171平面・断面図

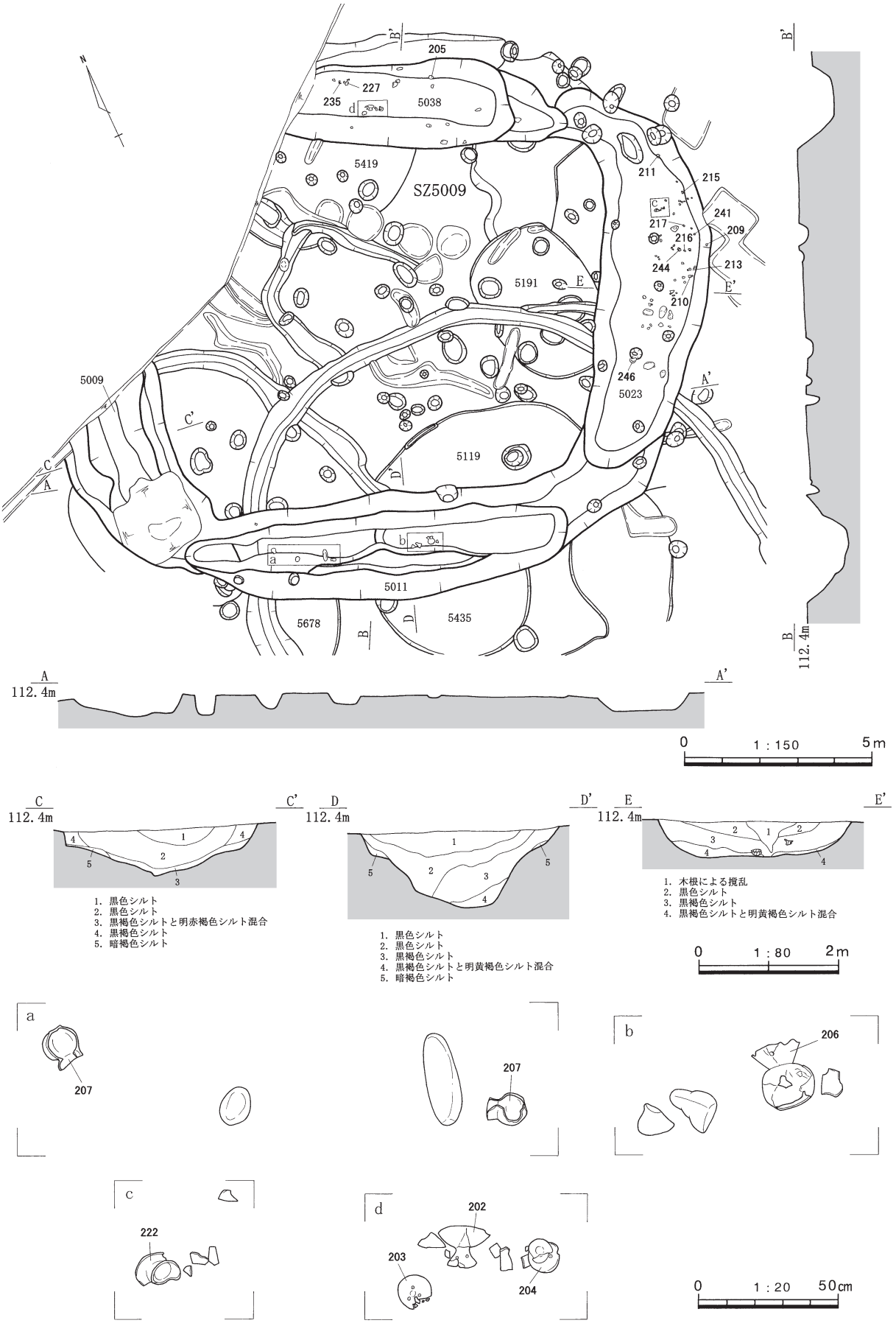


第67図　SZ5192平面・断面図

の四隅は切れていた可能性があるが、明確ではない。検出された周溝の幅は0.4～1.0m、検出面からの深さは10～50㎝であった。覆土は黒色シルト及び黒褐色シルトを主体とした自然堆積層である。図示可能な出土遺物はないが、SZ5009との新旧関係からこれよりも古いが、近接する時期に属する可能性が高い。

SZ5009（第68図）

J・K－28～30区で検出された大型の方形周溝墓である。北溝SD5038及び西溝SD5009の一部は調査区外となるため、全貌を明らかにすることはできなかった。SZ5192を切る形で重複し、南西にはSZ2579が隣接し、また竪穴住居SH5119・SH5191・SH5435・SH5678と重複し、これらを切っている。検出された部分における遺構の規模は東西16.1m、南北14.3m、主軸方向はN－23°－Eである。方台部の規模は東西12.0m、南北11.1mで、主体部は検出されていない。周溝は平面隅丸方形状に巡り、形状が明らかな東側南北隅の形状から、隅角部をやや狭く浅い溝で繋ぐ構造であったと推定される。周溝の幅は1.0～3.0mとかなり幅広であり、狭くなる隅角部は幅1.4～1.8mであった。検出面からの深さは0.4～1.2mで、南北溝が船底形に深く掘り込まれるようである。覆土は黒色シルト及び黒褐色シルトを主体とし、下部にはそれらに明黄褐色シルトが混ざる土が堆積している。遺物は202・204の高坏、203の器台、209の鉢、205～208・210～219・221～237の壺、238～244の台付甕を図示したように、多量に出土している。第68図に出土状況図を示したが、北溝SD5038及び南溝SD5011では完形に近い高坏・器台・壺がまとまって出土していることが特筆され、これらは供献された土器と考えられる。東溝SD5023でも多くは破片ながら多量の土器類が出土しており、北溝SD5038及び南溝SD5011を含め、底面から30～40㎝程度上層にあたる２～３層内で出土しているものが多い。



第68図　SZ5009平面・断面・遺物出土状況図

SZ2579（第69図）

K－30～32・L－31・32区で検出された方形周溝墓で、南溝及び北溝の一部、西溝については調査区外となるため、遺構の全容は明らかでない。SZ5009が東側、SZ317が南西側に隣接し、新旧関係は明確でないが、時期を違える掘立柱建物SB80052が重複して存在する。遺構の規模は南北14.7mを測り、主軸方向はN－26°－Eである。方台部の規模は南北12.6mで、主体部は検出されていない。周溝は検出された部分を見る限り方形に巡り、隅角部は北東隅の状況から、浅くなるようである。周溝の幅は東溝SD5193が最大幅3.8mとかなり広く掘られるのに対し、北溝SD5193・南溝SD5188は0.9～2.2mと比較的狭くなっている。検出面からの深さは0.2～1.0mで、北溝SD5193・南溝SD5188の中央部は0.7～1.0mとやや深く掘り込まれる一方、端部が20～30㎝程度と浅くなる傾向があり、東溝SD5193は幅広の割には

第69図　SZ2579平面・断面図

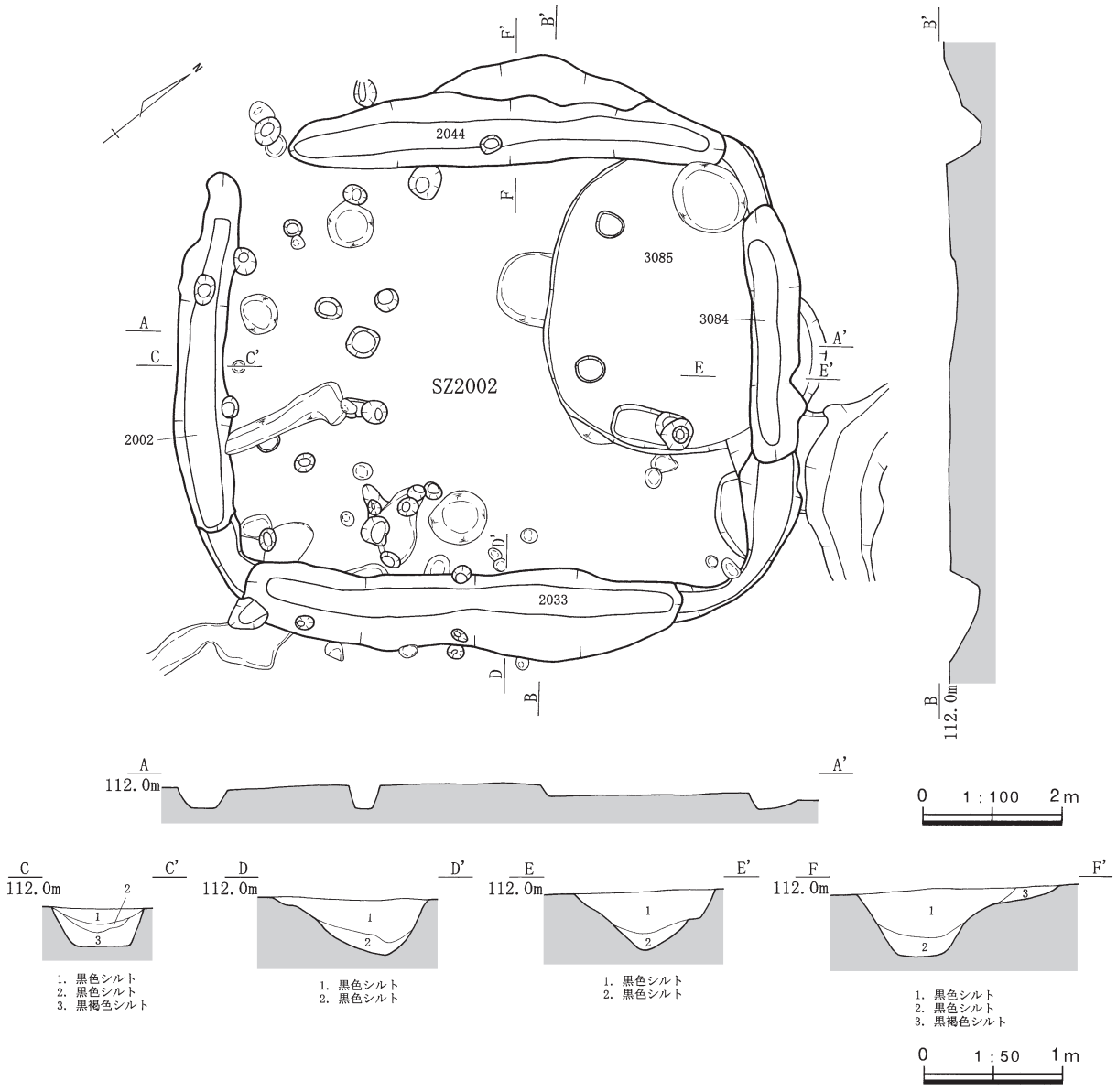
30～70㎝と浅い。覆土は黒色シルト及び黒褐色シルトを主体とし、下部にはそれに明黄褐色シルトが混ざる自然堆積層である。遺物は247の手捏ねの小型坏、249の小型丸底壺、250・251の小型鉢、252～257の壺、258の台付甕が周溝から出土している。

SZ2002（第70図）

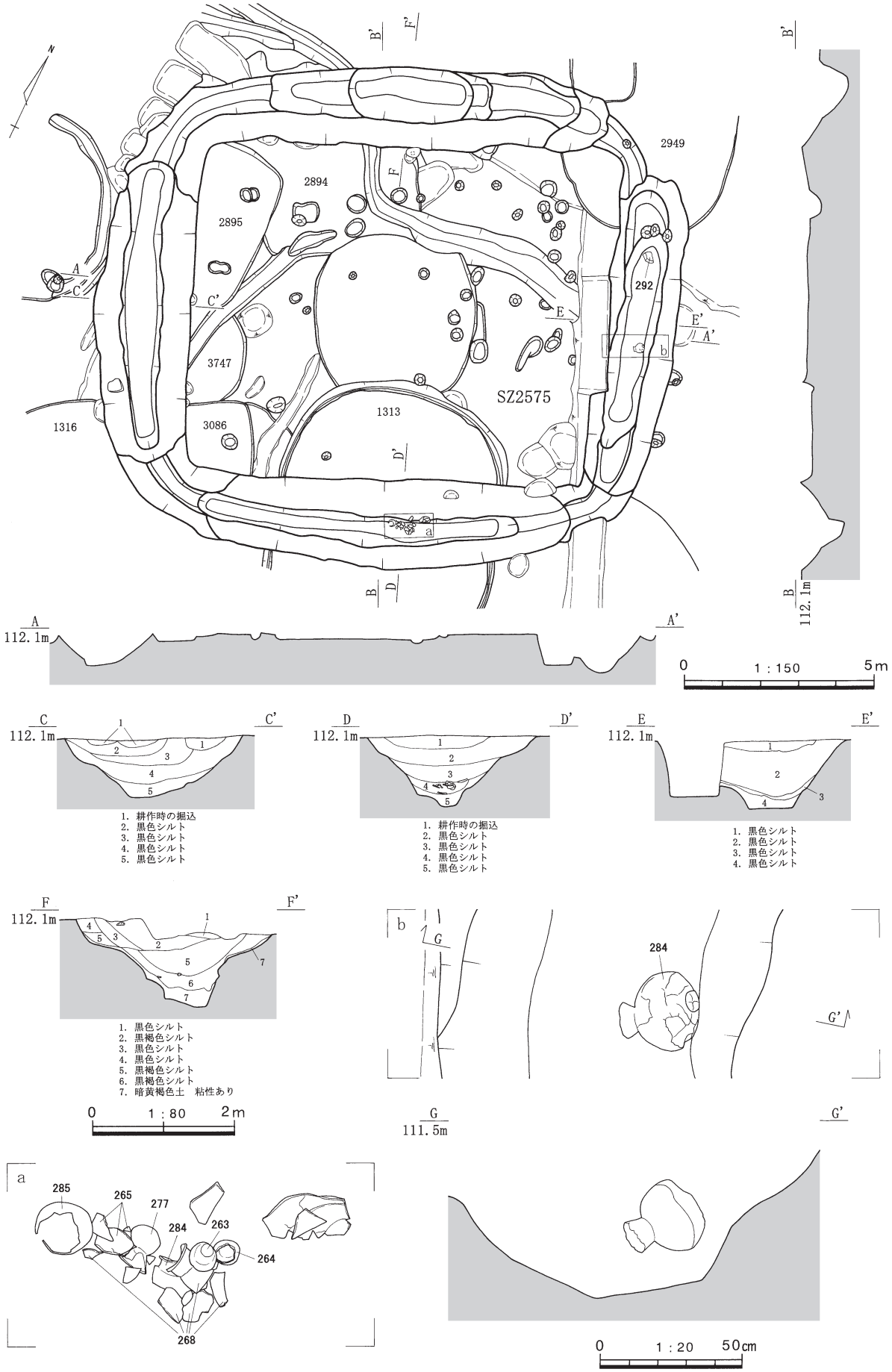
M・N－28・29区で検出された方形周溝墓である。竪穴住居SH3085と重複し、これを切っている。遺構の規模は東西9.0m、南北8.8m、主軸方向はN－50°－Wである。方台部の規模は東西7.9m、南北6.5mで、内部で主体部は検出されていない。周溝は直線的な溝を浅く狭い溝によって連結する形状であり、西溝SD2002と北溝SD2044の間の北西隅は途切れており、連結されていない。周溝の幅は0.6～1.1m、検出面からの深さは30～50㎝、周溝を繋ぐ細溝は幅30～40㎝、検出面からの深さは10～20㎝である。周溝覆土は黒色シルト及び黒褐色シルトを主体とした自然堆積層である。図示可能な遺物は259の鉄製ヤリガンナのみである。

SZ2575（第71図）

L－30、M－29～31、N－30・31区で検出された方形周溝墓である。SZ317の南東に隣接し、竪穴住居



第70図　SZ2002平面・断面図



第71図　SZ2575平面・断面・遺物出土状況図

SH1313・SH1316・SH2894・SH2895・SH2949と重複し、これらを切っている。遺構の規模は東西15.6m、南北13.3m、主軸方向はN－25°－Wである。方台部の規模は東西12.6m、南北11.4mで、主体部は検出されていない。周溝は方形に巡るが、四辺の東西南北溝は比較的深く掘り込まれ、隅部はやや浅く掘り残されるようである。北東隅部については北溝と東溝を浅く細い溝によって連結する形状となる。周溝の幅は1.7～2.6m、検出面からの深さは0.6～1.2m、北東隅の細溝は幅0.6m、検出面からの深さは30㎝であった。北溝と東溝については中央部が30～50㎝程度掘り窪められている。覆土は黒色シルトを主体とした自然堆積層である。遺物は260～264の鉢、265・266の高坏、267・268・270～286の壺、269の甕、287～289の台付甕、290～292の石器が出土している。第71図の出土状況図で示したように、南溝では263・264の鉢、265の高坏、268・277・284・285の壺がまとまって出土し、また東溝ではほぼ完形の284の壺が出土している。264の鉢、277の壺は底部穿孔が認められることからも、これらは供献された土器である可能性が高い。

SZ317（第72図）

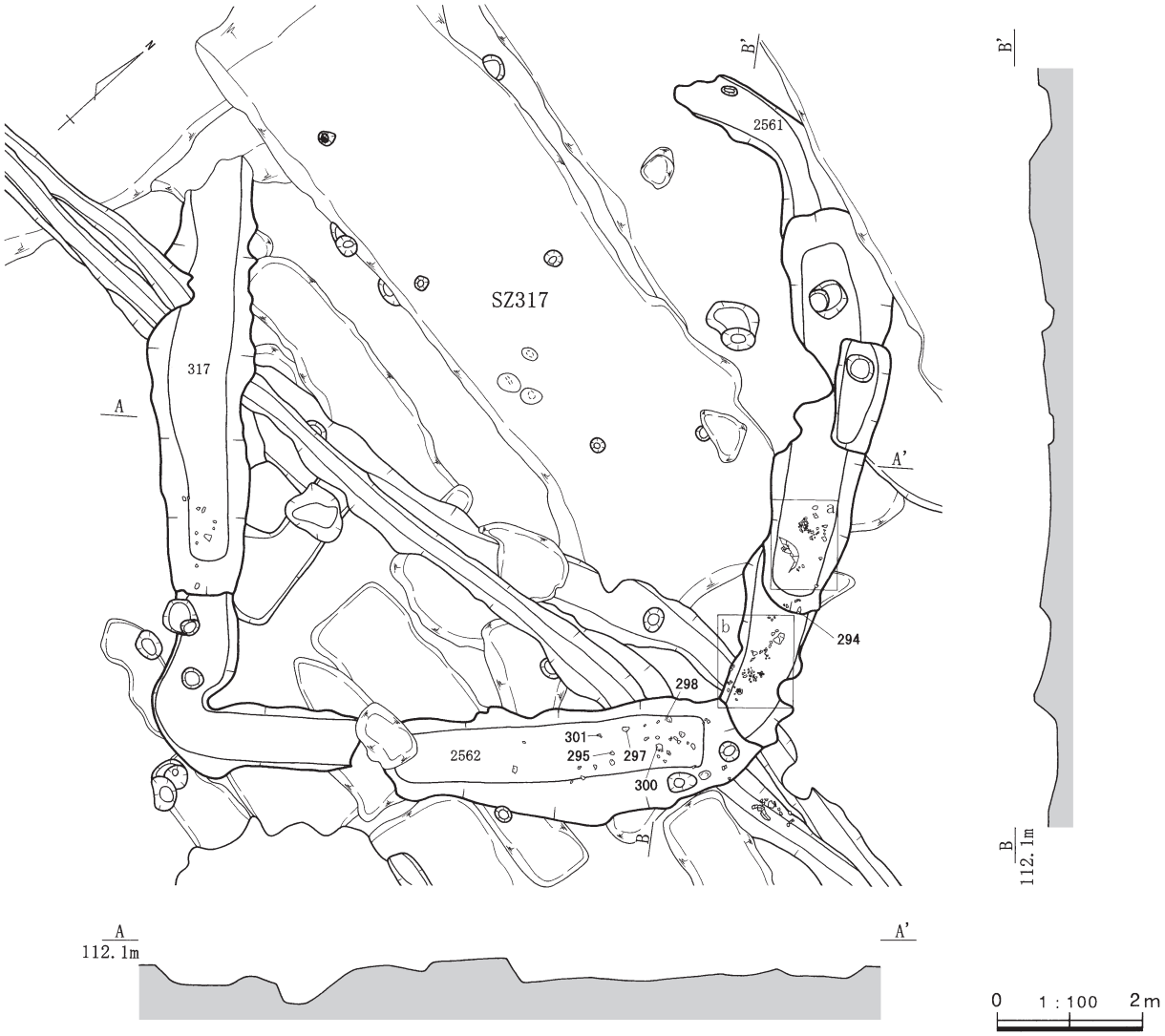
L・M－31・32区で検出された方形周溝墓で、SZ2579の南西、SZ2575の北に隣接する。遺構周辺は耕作等による攪乱が顕著で、北溝はほぼ削平されているため、遺構の規模・形状の一部は明確でない。遺構の規模は東西10.3m､残存する北溝の形状から南北規模は10.0mを測る。主軸方向はN－46°－Wであった。方台部の規模は東西7.8m、南北は不明である。方台部も攪乱の影響が顕著であるためか、主体部は検出されなかった。周溝は方形に巡っていたと考えられ、南東隅部はやや浅い溝によって東溝と南溝を接続していたようにみえる。周溝の幅は0.6～1.6m、検出面からの深さは10～40㎝であり、上部がかなり削平された状況であった。遺物は293～299の壺、300・301の台付甕が出土している。出土状況図に示したように、東溝南半、南溝東半で集中的しており、特に東溝南半の293・299はまとまった形で出土している。

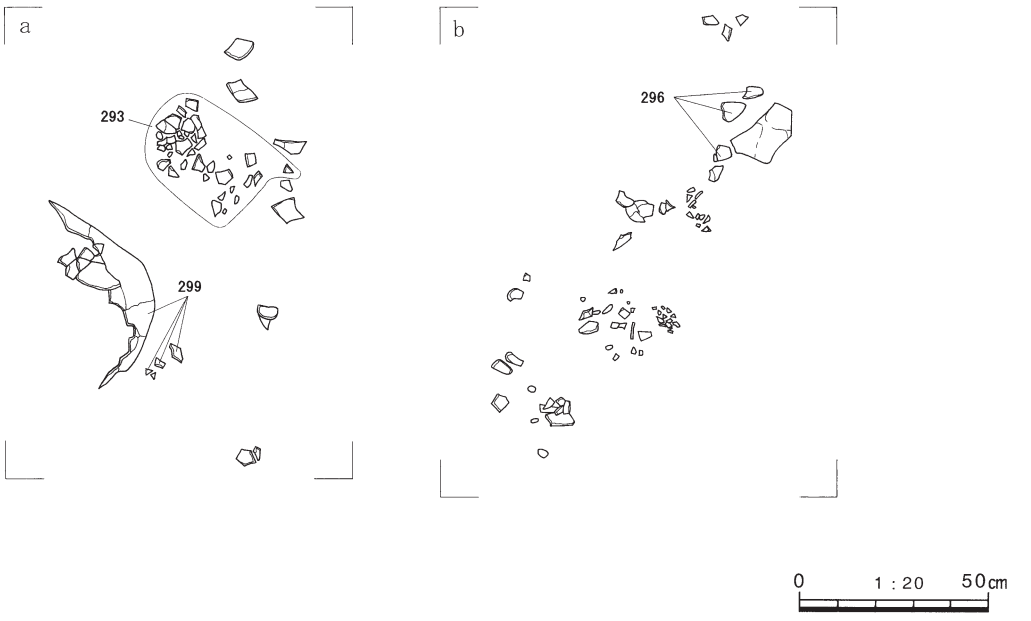
SZ1900（第73・74図）

O・P・Q－28～30区で検出された大型の方形周溝墓である。SZ228の南東に位置し、竪穴住居SH2934・SH2936と重複し、これを切っている。遺構の規模は東西23.7m、南北23.5mを測り、駿河山遺跡最大の方形周溝墓である。主軸方向はN－18°－Eである。方台部の規模は東西19.0m、南北17.0mで、内部の削平が顕著であるため、主体部は検出されていない。周溝は方形に巡り、南西隅は浅い細溝で接続されているようである。周溝の幅は1.5～5.4mで、南溝が極端に広くなっていることから、南西部がやや歪な形状となっている。検出面からの周溝の深さは0.2～1.5mで、南溝は中央東寄りの部分が20～60㎝程の高まりとなっており、均一な深さではなく、何らかの理由により掘り分けられているかのようである。また、北溝は中央に周溝底部に深さ50～60㎝の土坑状の落ち込みが２箇所確認されており、周溝内埋葬施設の可能性が考えられるが、確証は得られていない。覆土は黒色シルト及び黒褐色シルトを主体とし、下部には部分的に褐色あるいは黄色粘土を含んでいる。遺物は302・303の小型壺、304～306の高坏、307～330の壺、331～346の台付甕、347・348の石器が出土している。集中的な出土がみられる南溝を含めても、その多くは破片である。303の小型壺に底部穿孔がみられることから、そのうちの一部は供献された土器と考えられる。

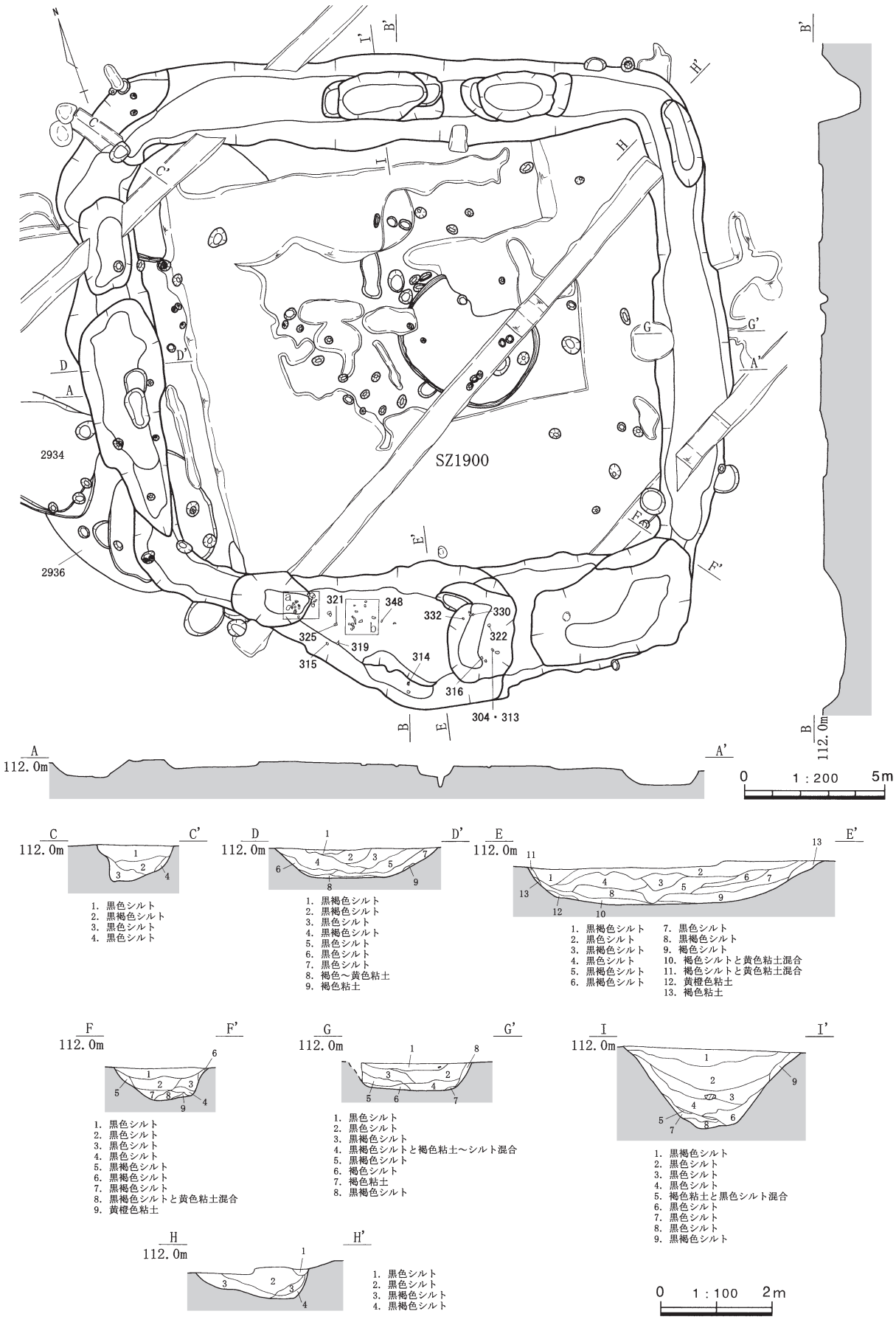
SZ228（第75～77図）

N・O・P－31・32区で検出された大型方形周溝墓である。SZ1900の北西に位置し、竪穴住居SH803・SH805、掘立柱建物SB80053と重複するが、これらを切る形で構築される。遺構の規模は東西17.4m、南北17.2m、主軸方向はN－8°－Eである。方台部の規模は東西13.8m、南北13.7mで、内部に主体部は検出されていない。周溝は方形に巡るが、南溝中央が掘り残されて土橋となっており、四隅はやや浅く細い溝で接続されていたようである。周溝の幅は0.6～3.2m、検出面からの深さは0.4～1.2m

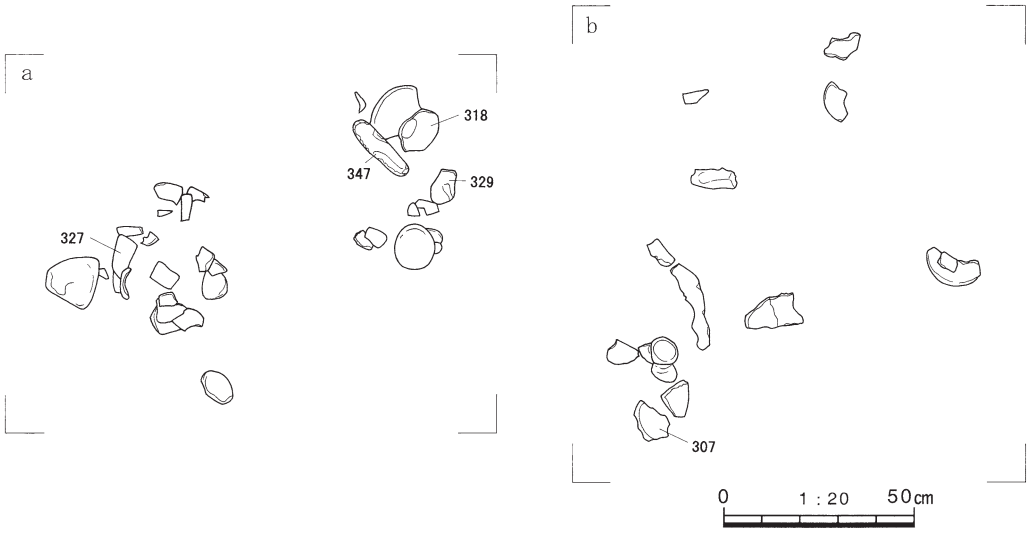




第72図　SZ317平面・断面・遺物出土状況図



第73図　SZ1900平面・断面図



第74図　SZ1900遺物出土状況図

であった。土橋のかかる南溝は幅2.1～3.2mと特に幅広に掘り込まれている。覆土は黒褐色シルト及び褐色シルトを主体とした自然堆積層である。遺物は349の小型壺、350の小型高坏、351の小型甕、352～364の高坏、365・366の鉢、367～397の壺、398～405の台付甕、406の台石が出土している。第76・77図で示すように、周溝各所で多量の遺物が出土しているが、北溝の370・384、西溝の383、南溝の374・378のような大型壺の存在は特筆される。おそらく方台部の崩落とともに周溝に流れ込んだものであろう。

SZ827（第78図）

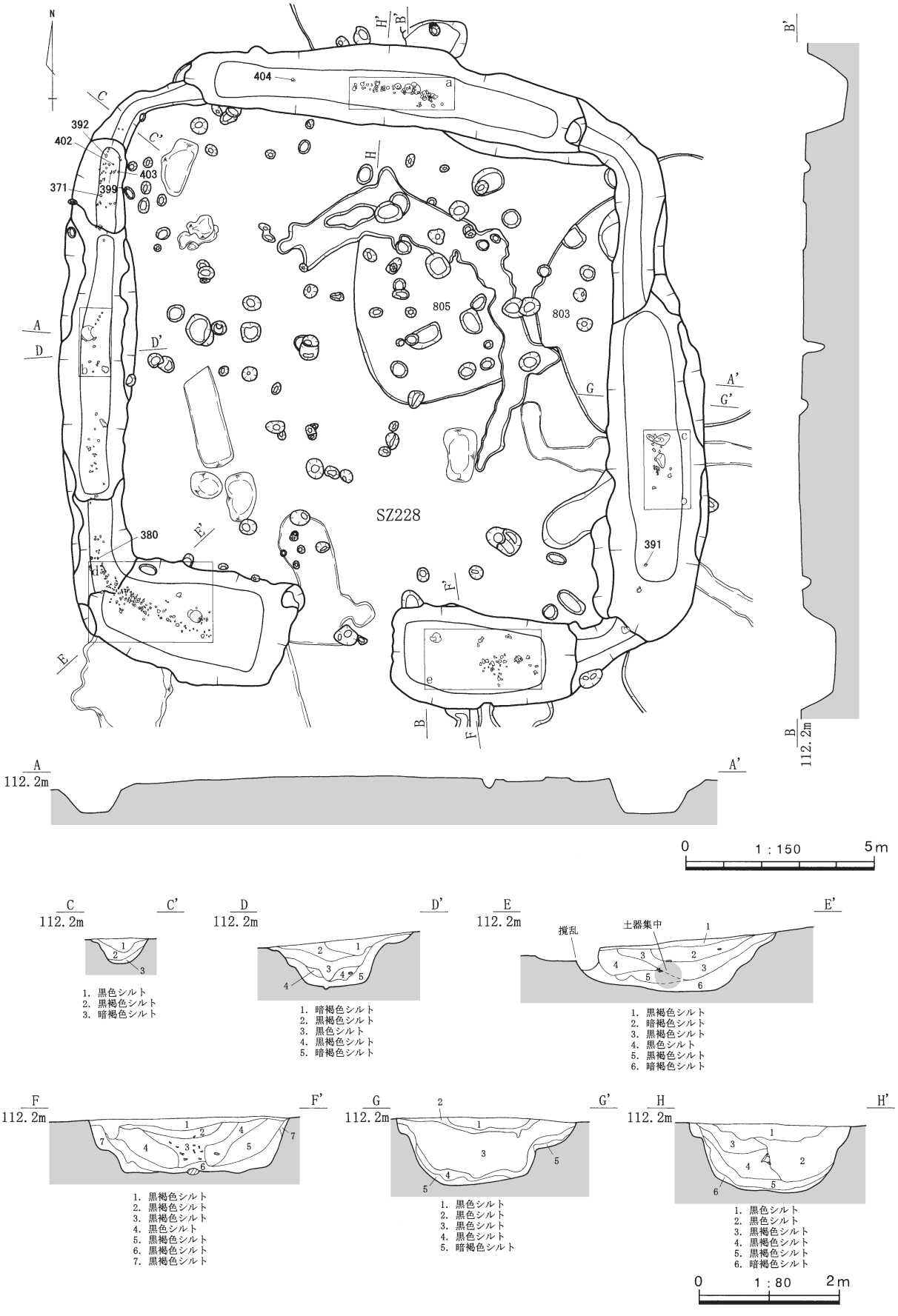
P・Q－31区で検出された方形周溝墓で、SZ200の東側に隣接する。竪穴住居SH2492と重複し、これよりも新しい。遺構の規模は東西7.6m、南北8.2m、主軸方向はN－6°－Eで、方台部の規模は東西6.2m、南北7.0mで、内部で主体部は検出されていない。周溝は四隅が切れる形状であり、削平や攪乱によって原状の把握は難しい。周溝の幅は0.3～1.2m、検出面からの深さは10～40㎝と極めて浅い。覆土は黒褐色シルトを主体とし、下部に黄褐色粘土を含む自然堆積層である。図示可能な遺物は出土していない。

SZ200（第79図）

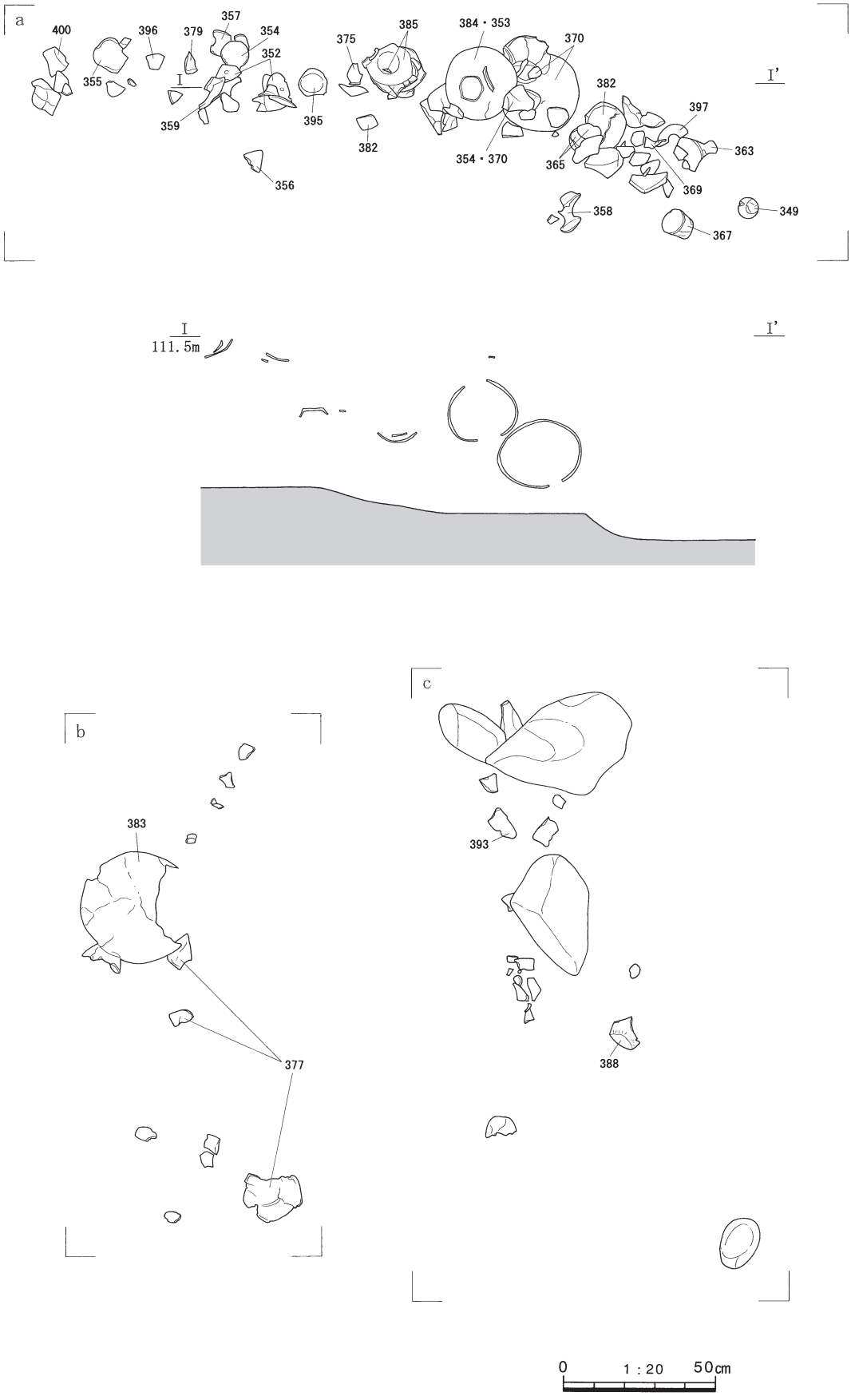
P－32、Q－31・32区で検出された方形周溝墓で、SZ827の西側に隣接する。規模・形状及び位置関係から近い時期に構築され、併存していたものと考えられる。掘立柱建物SB80054と重なり、新旧関係は不明ながら本遺構の方が新しいとみられる。遺構の規模は東西8.3m、南北9.4m、主軸方向はN－10°－Eである。方台部の規模は東西6.8m、南北7.7mで、内部において主体部は検出されていない。SZ827同様、周溝は四隅が切れる形状であり、削平や攪乱によって原状を把握するのは難しい。周溝の幅は0.5～1.2m、検出面からの深さは20～70㎝であった。覆土は黒褐色シルトを主体とし、下部に黄褐色粘土を含む自然堆積層となっている。図示可能な遺物は407の砥石のみである。

SZ176（第80図）

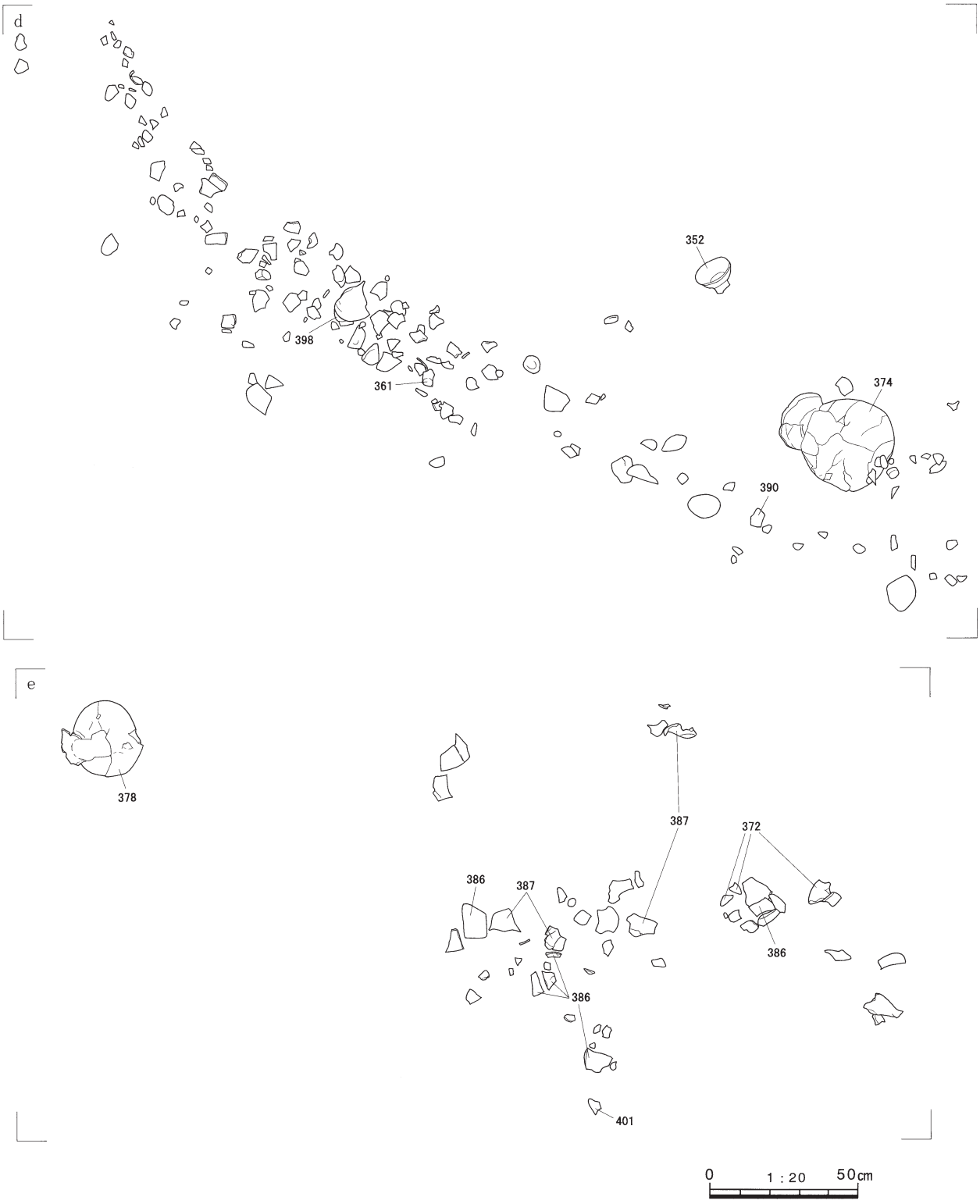
Q・R－32区で検出された方形周溝墓で、SZ200の南側、SZ446の北側に隣接する。遺構の規模は東西8.7m、南北8.9m、主軸方向はN－8°－Wである。方台部の規模は東西7.4m、南北7.2mで、内部で主体部は検出されていない。周溝については、南側東西隅は細溝で接続されるが、北側の東西隅は途切れている。上部が削平されているため、形状の把握は難しいが、北東隅は特に幅広に途切れているため、土橋状となっていた可能性がある。周溝の幅は0.3～1.4m、検出面からの深さは10～50㎝であった。覆土は黒褐色シルト及び暗褐色シルトを主体とした自然堆積層である。図示可能な遺物は出土していない。



第75図　SZ228平面・断面図



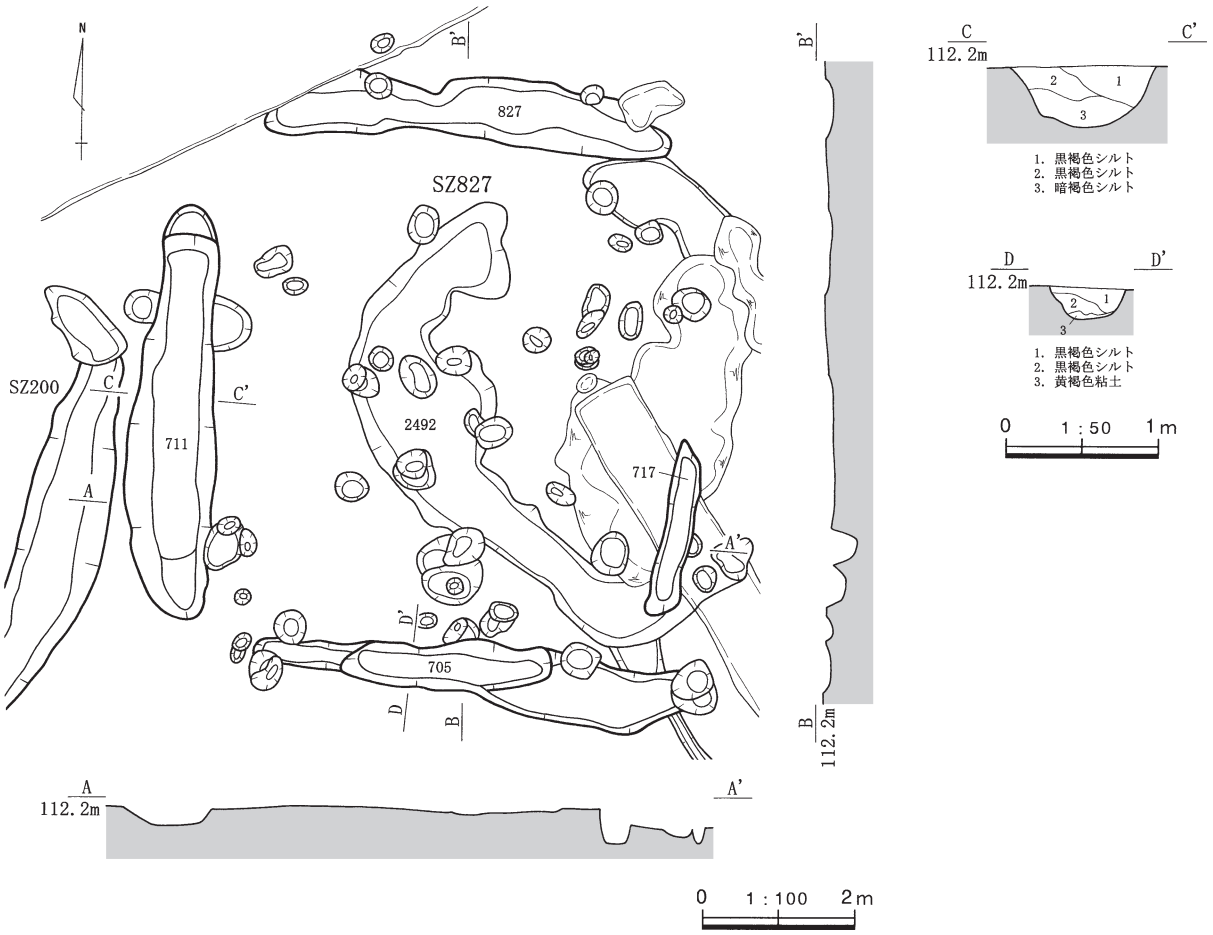
第76図　SZ228遺物出土状況図１



第77図　SZ228遺物出土状況図２

SZ446（第81図）

R・S－31・32区で検出された方形周溝墓で、SZ176の南に隣接する。遺構の規模は東西12.4m、南北11.0m、主軸方向はN－12°－Wである。方台部の規模は東西10.4m、南北10.2mで、主体部は検出されていない。遺構上部の削平が激しいため、周溝は直線的な東西南北溝として把握され、四隅は途切れていたとみられる。特に西溝SD2521周辺は攪乱が顕著であった。周溝の幅は0.6～1.3m、検出面からの深



第78図　SZ827平面・断面図

さは10～80㎝であった。覆土は暗褐色シルト及び黒褐色シルトを主体とした自然堆積層である。遺物は409の高坏、408・410・411の壺が出土している。

SZ2605（第81図）

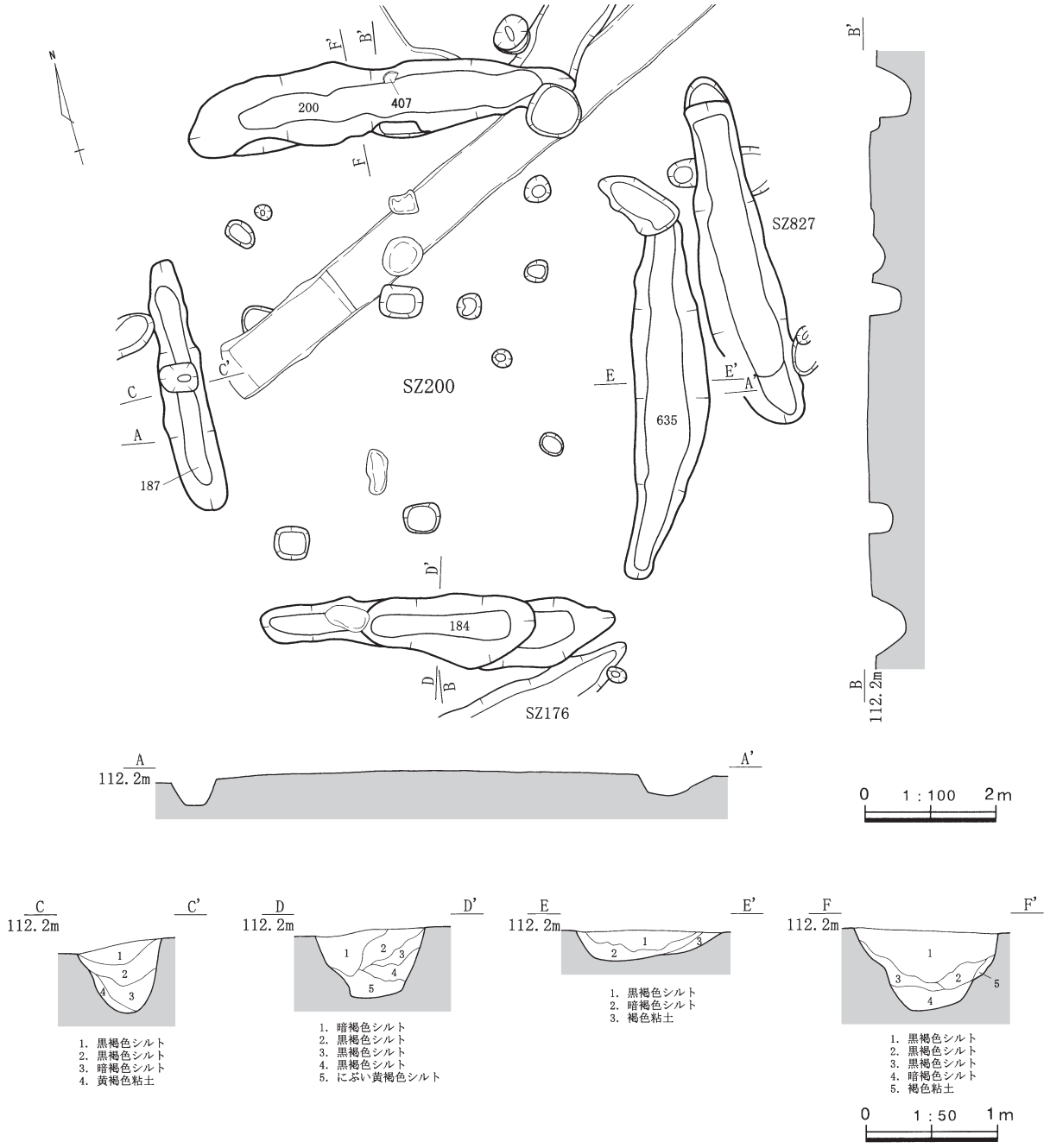
S－31・32区で検出された方形周溝墓である。SZ446の方台部南東隅にあたる場所で検出され、SZ446の南溝SD449と東溝SD446を利用し、北溝SD2605・西溝SD462によって東西5.7m、南北5.2mの規模の方形周溝墓を造り出しているものとみられる。主軸方向はN－10°－Wで、方台部の規模は東西4.8m、南北4.0mであった。主体部は検出されていない。北溝SD2605・西溝SD462を対象とした周溝の幅は40～70㎝、検出面からの深さは10～30㎝であった。覆土は褐色シルト及び暗褐色シルトを主体とした自然堆積層である。出土遺物に乏しいが、SZ446に近接する時期の遺構と考えられる。

SZ4424（第82図）

S－29・30、T－30区で検出された方形周溝墓であるが、南半は調査区外となるためその全貌は不明である。SZ4399の東側に隣接し、遺構の規模は東西11.3m、南北は不明である。主軸方向はN－23°－Wである。方台部の規模は東西10.0mで、主体部らしき遺構は検出されていない。周溝は北側の東西隅の状況から、東西南北溝が浅い溝で接続されていた可能性が高い。周溝の幅は0.6～1.3m、検出面からの深さは10～70㎝であった。覆土は黄褐色シルト混じりの黒色シルトを主体とした自然堆積層であった。遺物は412の壺、413～415の台付甕が出土している。

SZ4399（第82図）

T－30・31区で検出された方形周溝墓であるが、SZ4424と同様に南半は調査区外となる。東溝は

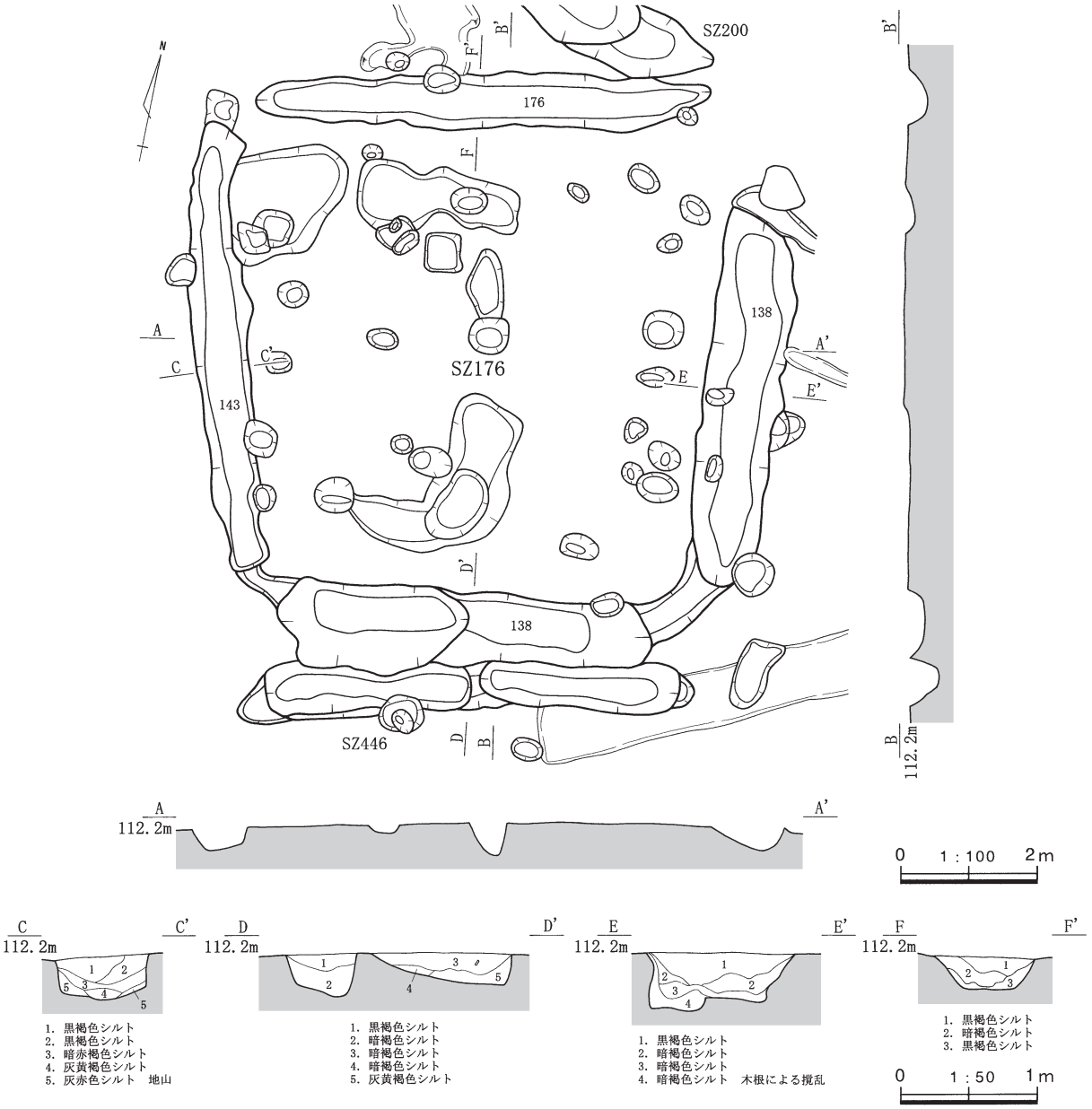


第79図　SZ200平面・断面図

SZ4424と共有していたと考えられ、同時期の遺構であることが判明する。遺構の規模は東西9.8m、主軸方向はN－19°－Wである。方台部の規模は東西8.1mで、主体部らしき遺構は検出されていない。周溝は北側東西溝の状況から、四隅が途切れていたとみられる。周溝の幅は0.6～1.3m、検出面からの深さは10～60㎝であった。覆土は黒褐色シルト混じりの黒色シルトを主体とした自然堆積層である。図示可能な遺物は出土していない。

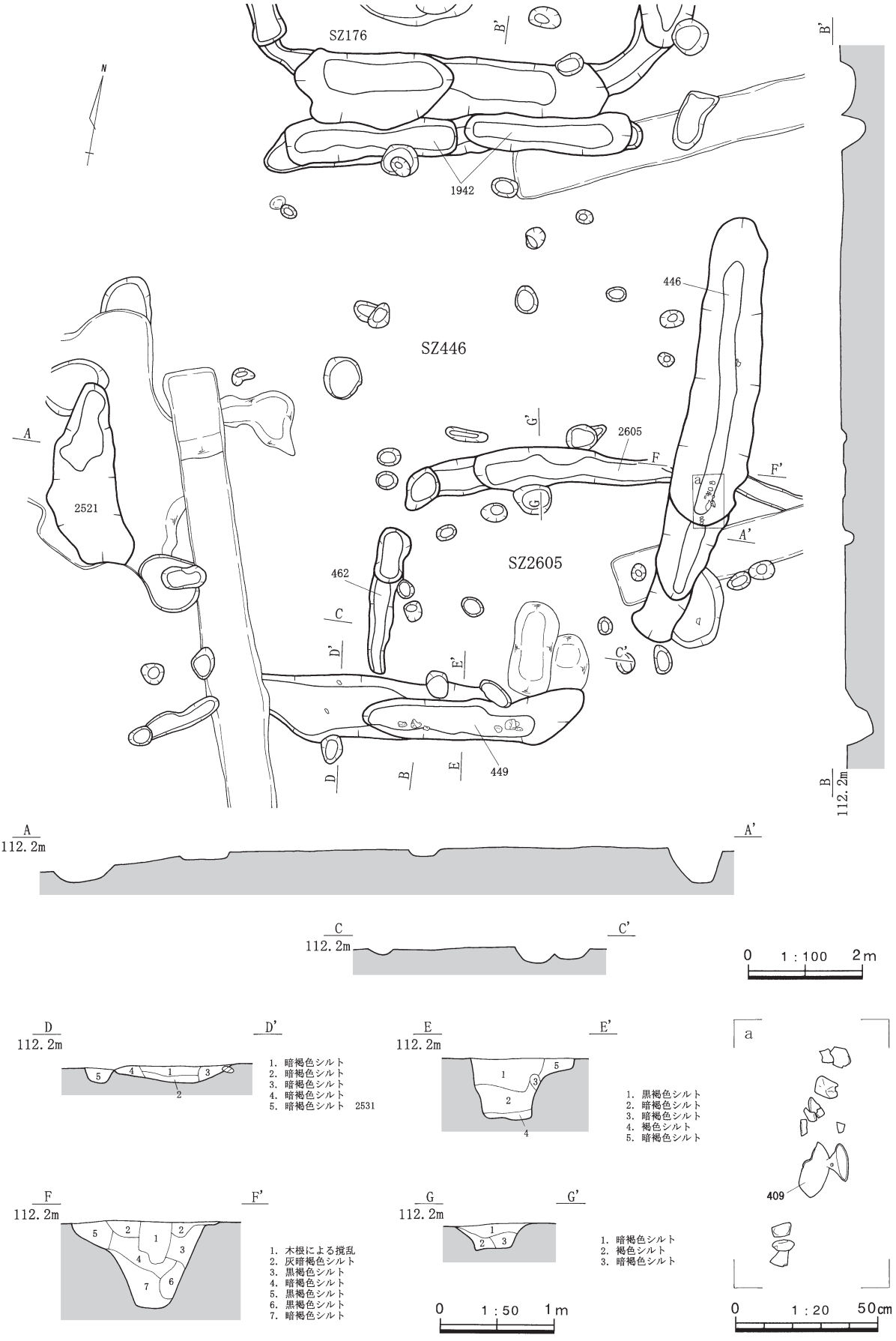
SZ６（第83図）

T－31・32、U－32区で検出された方形周溝墓で、隣接するSZ4399と同様に南側の大半が調査区外となる。遺構の規模は東西16.4m、南北は不明で、主軸方向はN－35°－Wである。方台部の規模は東西14.1mで、内部に主体部は検出されなかった。周溝は北西隅が途切れている様子が窺えるが、南半の状

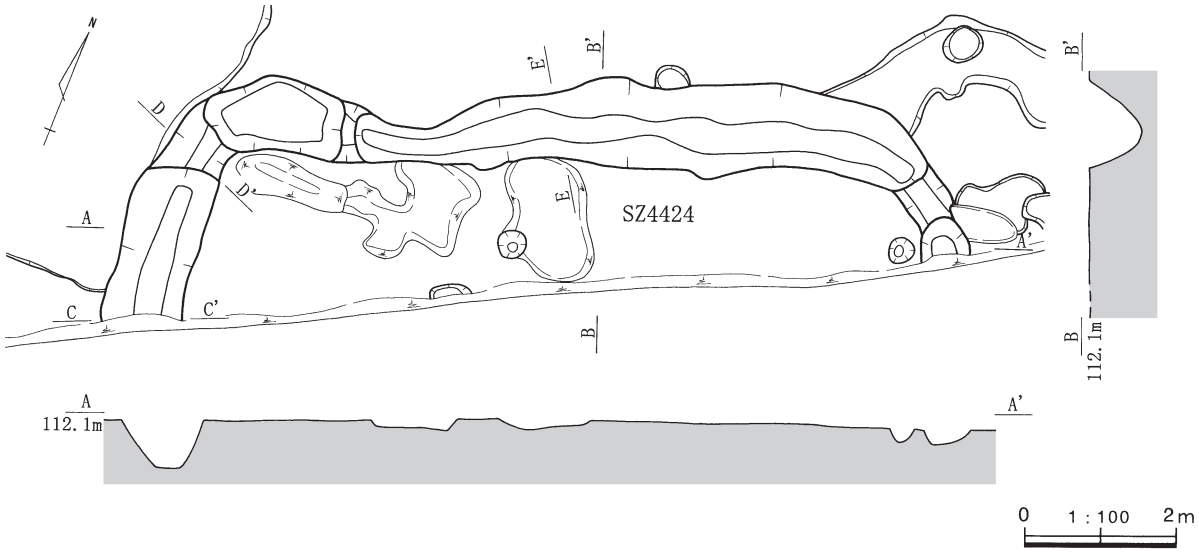


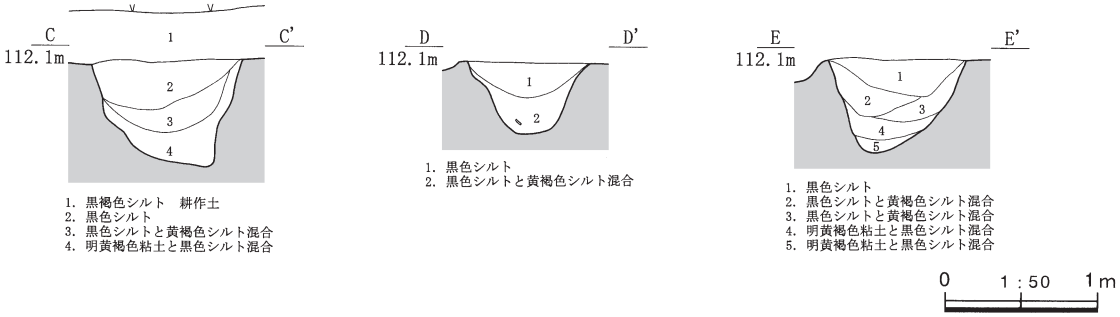
第80図　SZ176平面・断面図

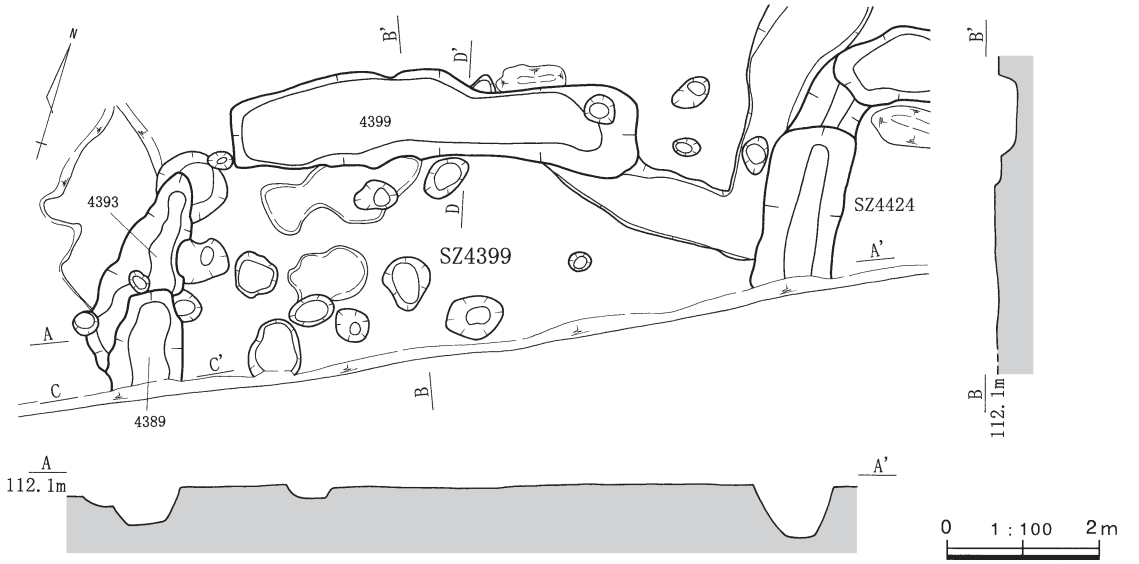
況が不明であるため、どのような形状であったかは不明瞭である。周溝の幅は0.8～2.7m、検出面からの深さは10～90cmであった。北溝が特に広く深く掘り込まれている。覆土は黒色シルト及び暗褐色シルトを主体とした自然堆積層である。出土遺物は416・417の壺、418～422の台付甕、423の石錐があり、第83図に示すように、特に北溝で多くの遺物が出土している。

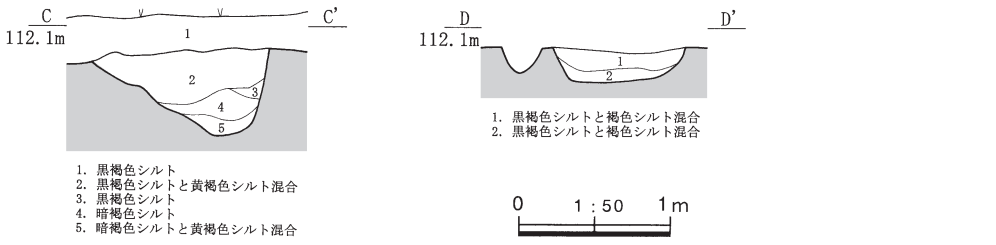


第81図　SZ446・2605平面・断面・遺物出土状況図

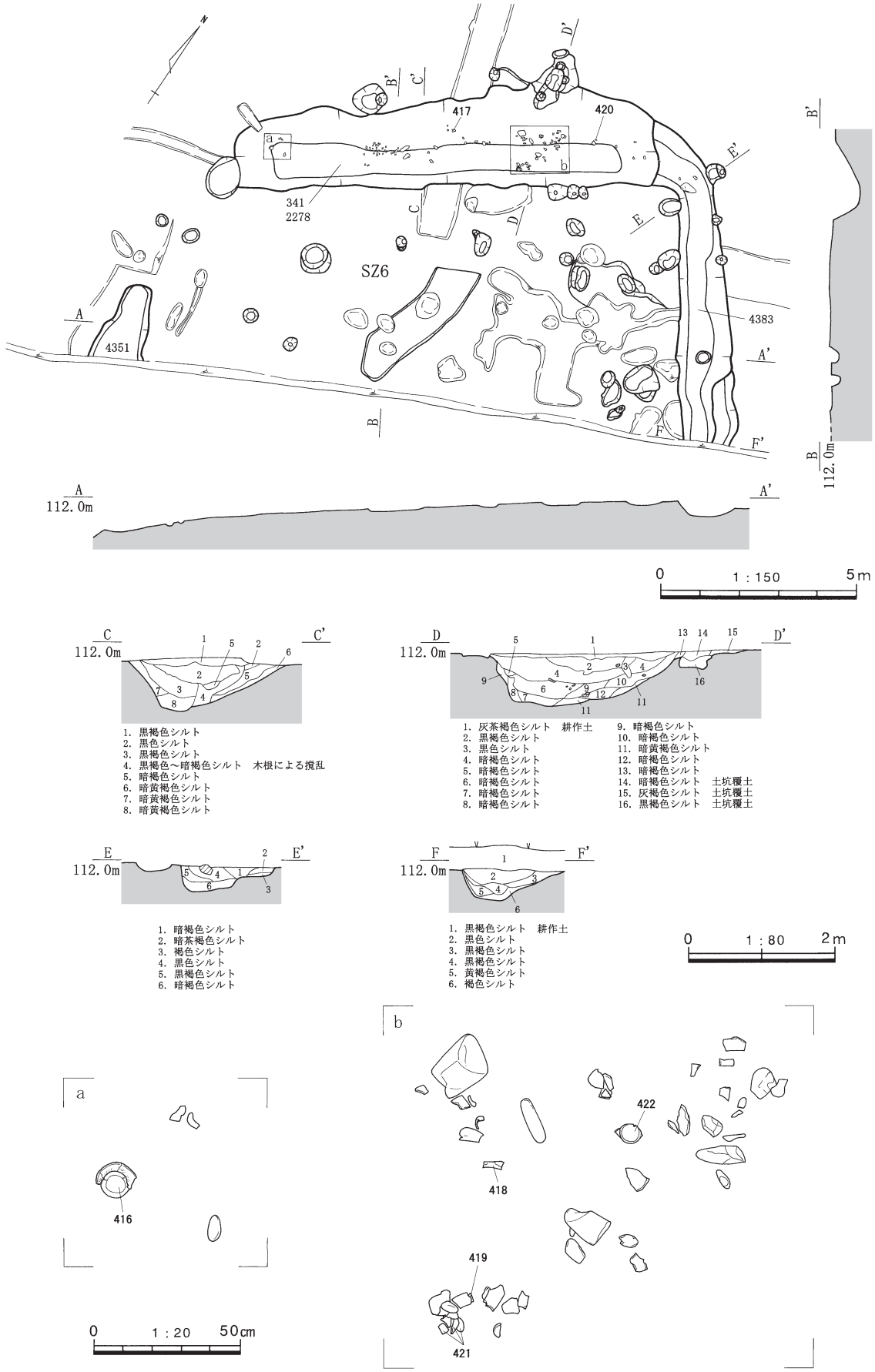








第82図　SZ4424・SZ4399平面・断面図



第83図　SZ6平面・断面・遺物出土状況図

３　出土遺物

方形周溝墓から出土した土器はある程度の数量はあるものの、各土器の残存率の低さと摩滅のため、年代を特定することは困難であるが、概ね弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の間に帰属するものと考えられる。以下、遺構ごとに出土遺物について記述していく。

SZ18010（第84図）

65～67は台付甕である。いずれも内外面ともにハケ調整がなされ、口唇部外面にはハケ工具による連続する刺突が施される。65は口縁部と体部の一部が残り、脚部は完全に残存する。口縁部から体部にかけての外面と体部内面下位には煤が付着している。口縁部と肩部との接合部分は大きくくびれている。肩が張り、体部が間延びすることなく脚部に接続する。頸部外面は縦位、肩部外面は横位、体部外面は斜位、脚部外面はやや斜め方向のハケ調整によって整えられている。口縁部内面には横位のハケ調整がなされている。体部内面上半には板ナデが施され、下半はナデ調整される。脚部内面は板ナデを施した後、ナデ調整が行われる。帰属時期は弥生時代後期後半の古い時期、菊川式中段階と思われる。66・67は口縁部破片であるが、残存部を見る限り、65に類似したハケ調整が施されているようである。

SZ52423（第84図）

68は短冊形を呈する打製石斧である。刃部欠損のため、使用痕は不明である。縄文時代の混入品である可能性が高い。

SZ52642（第84図）

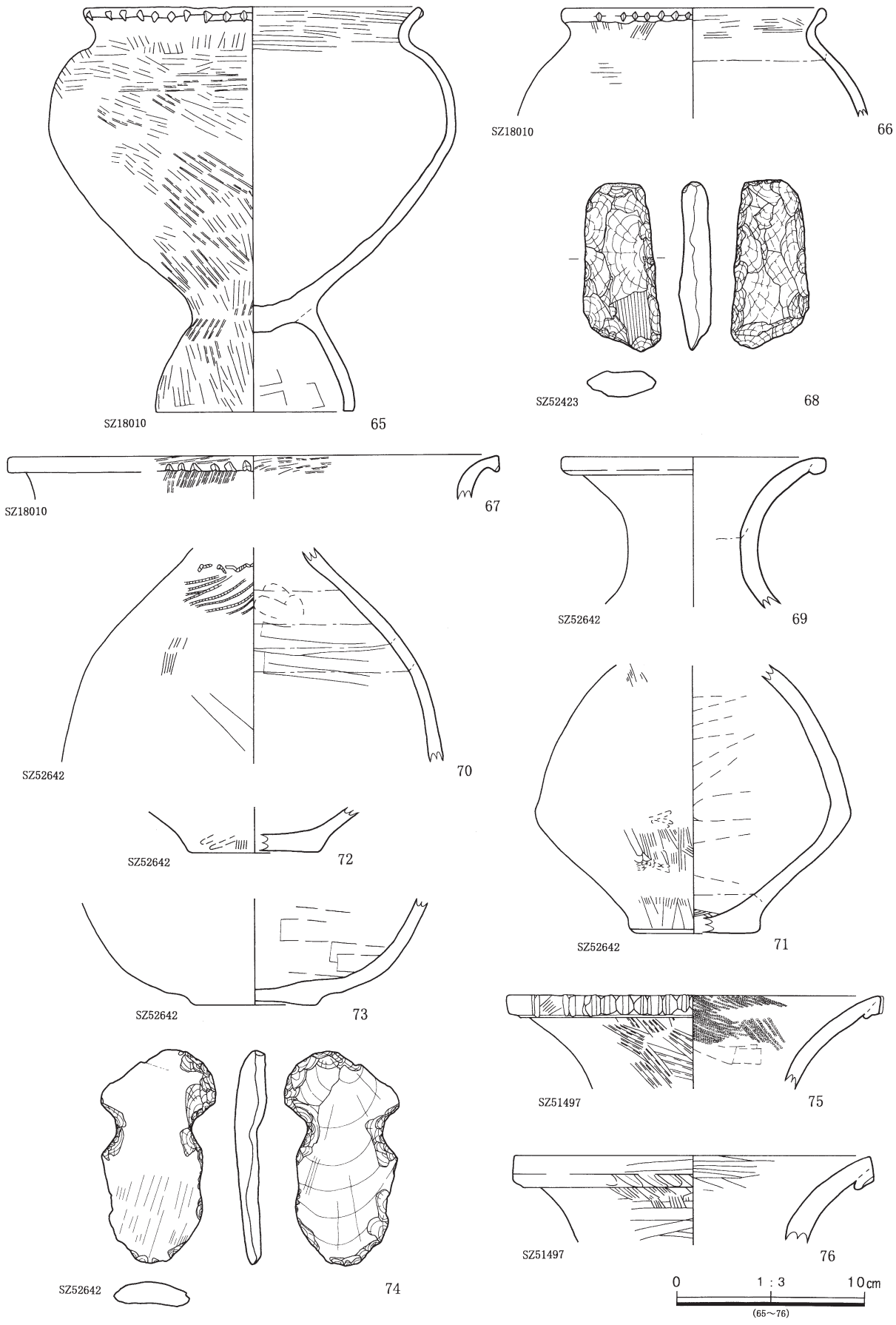
69～73は壺である。69は口縁部から頸部であり、折り返し口縁を持つ。摩滅が激しく調整方法は明らかでない。70は体部破片である。内外面ともに摩滅しているが、外面上部に施されているのは結節縄文と見られ、その下方にハケ目が観察できる。内面上部には指頭痕が残り、その下方は板ナデによって整えられる。71は体部から底部である。体部外面上半は摩滅しており、調整方法は不明である。下半は縦位のハケ調整の後、ミガキ調整が施される。体部内面には板ナデ、底部内面には横位のハケ調整が施される。72・73は底部である。73の内面には板ナデが施される。74は撥形あるいは分銅形を呈する打製石斧の完形品であり、刃部に使用痕が見られる。縄文時代の混入品である可能性が高い。

SZ51497（第84・85図）

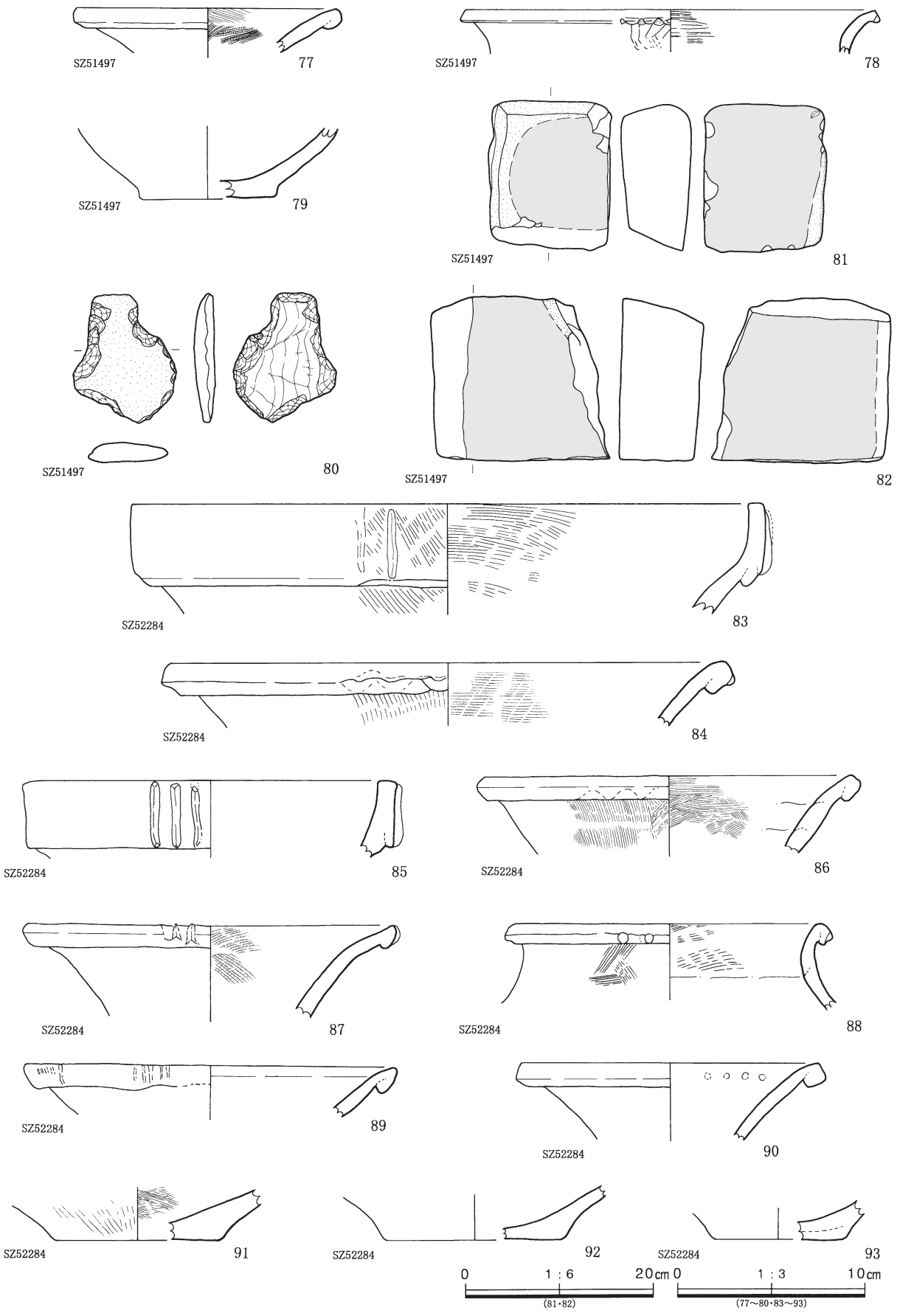
75～77は折り返し口縁を持つ壺の口縁部破片である。75の口唇部外面には９本で一組と思われる棒状浮文が貼り付けられている。頸部外面には斜位のハケ調整が施される。口縁部内面には細かい縄文が施され、その下方は板ナデにより整えられる。76は口唇部外面に板ナデが施され、端部には指頭による深い圧痕が見られる。口唇部直下の頸部外面には縦位のハケ調整がなされ、その下方と口縁部内面には横位の板ナデが施される。77の外面は摩滅のため調整方法が明らかでないが、口縁部内面には細かな縄文が施される。78は台付甕の口縁部破片である。口唇部外面にはハケ工具による連続する刺突が施され、口縁部内面は横位のハケ調整により整えられる。頸部外面の調整方法はハケかナデであると思われるが、定かでない。79は壺の底部破片である。内外面ともに摩滅が激しく調整方法は不明である。80は刃部の一部が欠損した撥形の打製石斧であり、縄文時代の混入品である可能性が高い。81・82は台石である。両者に共通して一部に敲打痕と研磨痕が見られる。

SZ52284（第85・86図）

83～87は壺の口縁部破片である。83は複合口縁を持つ。内外面ともに摩滅しているが、ハケ調整の痕が一部認められる。口縁部外面には棒状浮文が貼り付けられているがほぼ欠損している。84は折り返し口縁を持つ。口唇部には指頭による押圧痕が残る。頸部外面は縦位、口縁部内面には横位のハケ調整が施される。85は83と同様、複合口縁を持ち、口縁部外面には棒状浮文が貼り付けられている。内面は摩滅しており、調整方法は明らかでない。86は折り返し口縁を持ち、頸部外面は縦位のハケ調整がなされ



第84図　方形周溝墓出土遺物１



第85図　方形周溝墓出土遺物 2

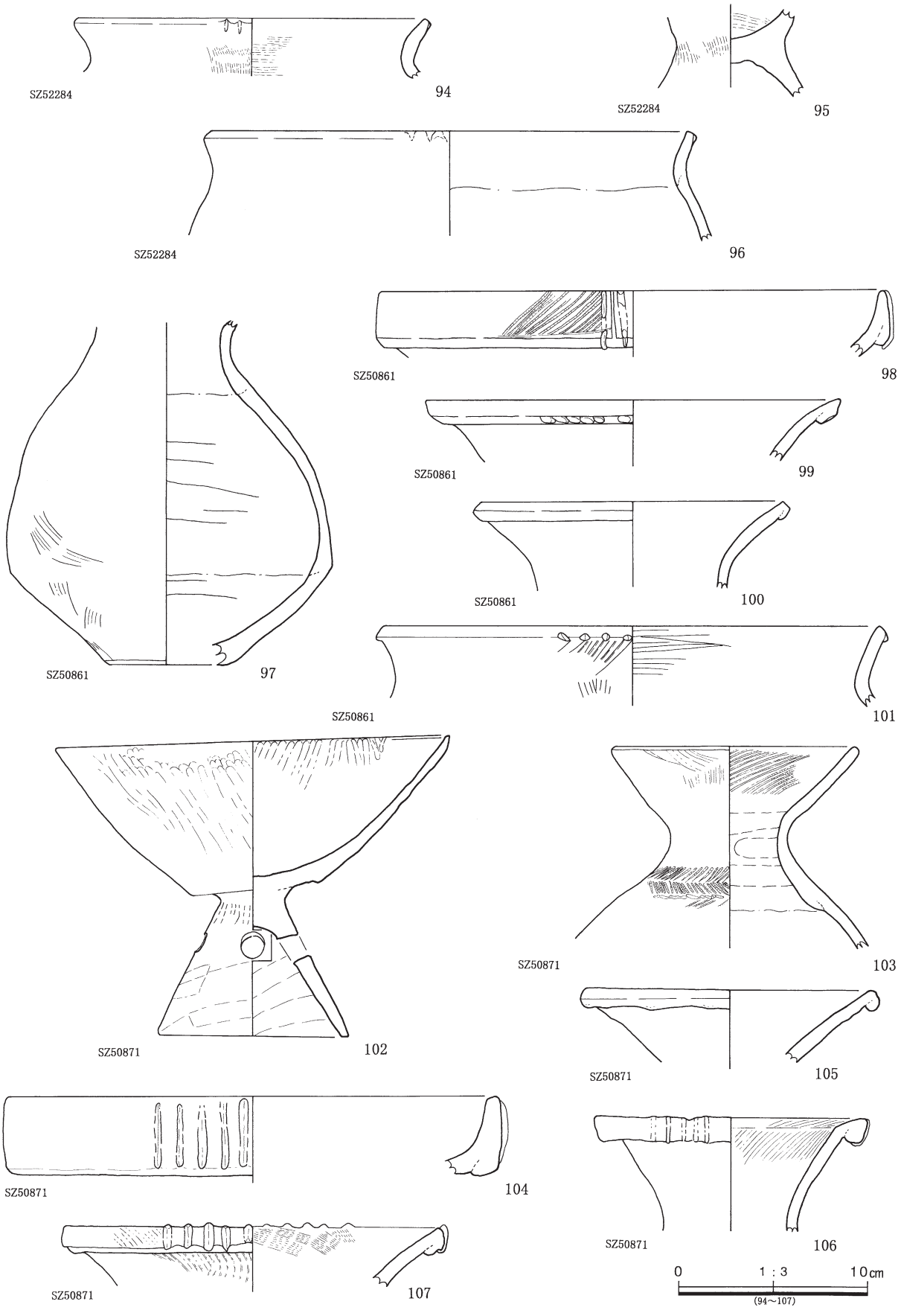
ている。口縁部内面には斜位と横位のハケ目が互いに重なり合っているのが観察できる。87は折り返し口縁を持ち、口唇部外面には浮文が貼り付けられている。内面には結節縄文が施されている。88は鉢の口縁部破片である。口唇部外面にはハケ工具によると見られるキザミを有し、頸部外面には多方向にハケ調整が施されている。89・90は折り返し口縁を持つ壺の口縁部破片である。89は内外面ともに摩滅が激しく調整方法は明らかでないが、口唇部外面にはキザミが施されている。90も全体的に摩滅しているが、口縁部内面に円形の浮文がほぼ等間隔に貼り付けられている。91～93は壺の底部破片である。91は外面にハケ目と思われる調整痕が残り、内面には外面より細かいハケ調整が施される。92・93は全体的に摩滅しており、調整方法は定かでない。94・96は台付甕の口縁部破片である。94は口唇部外面にキザミを持ち、頸部外面には縦位のハケ調整が施される。内面は摩滅しているが、横位のハケ調整が施されているようである。96は内外面ともに摩滅が激しいが、口唇部外面にはキザミが確認できる。95は台付甕の体部と脚部との接合部である。

SZ50861（第86図）

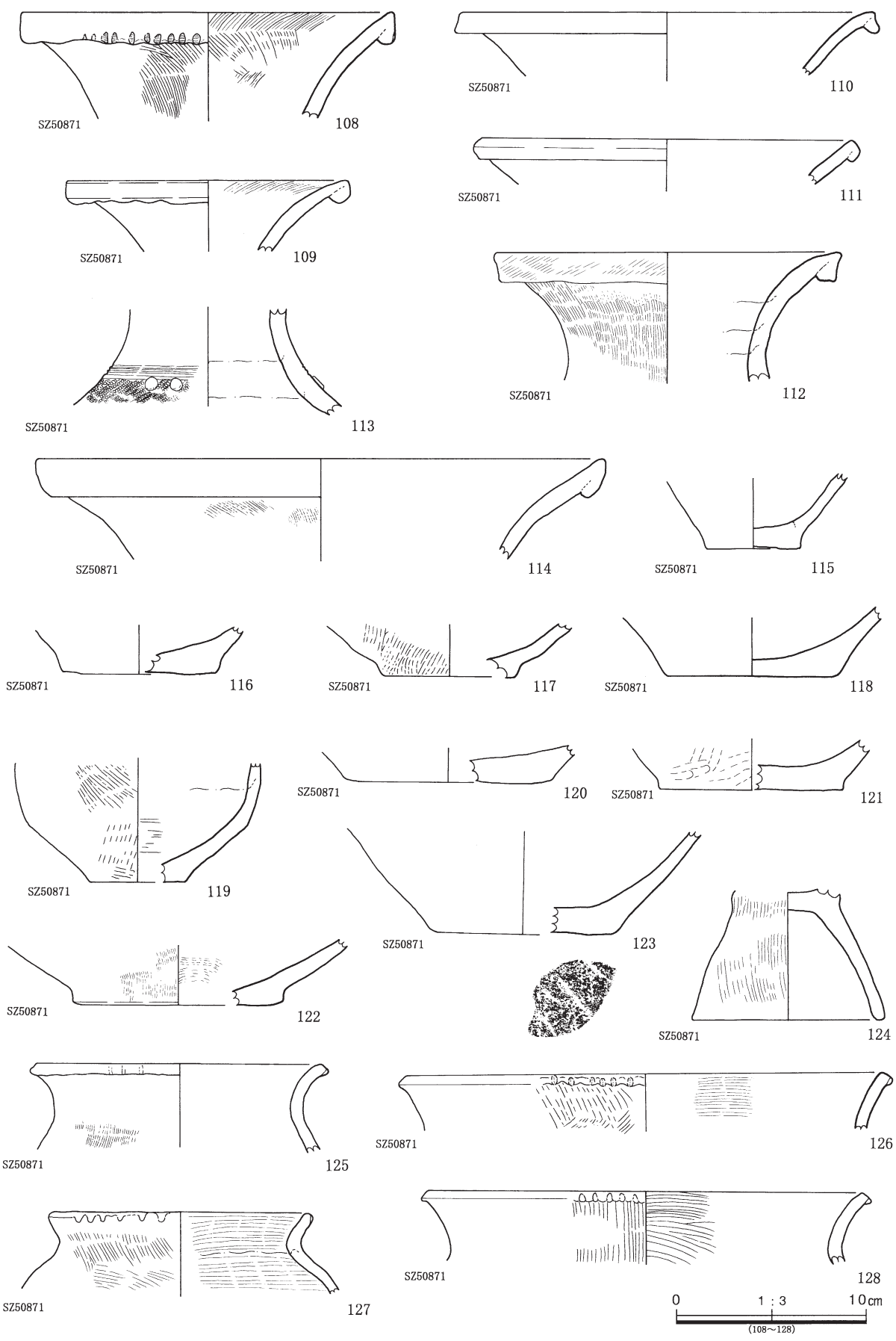
97は壺の頸部から底部である。体部外面上半は摩滅のため調整方法が不明であるが、下半には斜位と縦位のハケ目が確認できる。体部内面にはヘラか板によるナデ調整が施されている。古墳時代初頭に帰属するものと思われる。98～100は壺の口縁部破片である。98は複合口縁を持つ。口縁部外面には縄文が施され、その上に棒状浮文が貼り付けられている。99は折り返し口縁を持つ。全体的に摩滅しているが、口唇部外面端部には連続する指頭痕が見受けられる。100も折り返し口縁を持つが、摩滅が激しく調整方法は判然としない。101は台付甕の口縁部破片である。口唇部外面にはキザミが施される。頸部外面には斜位のハケ調整がなされ、その下方に縦位のハケ調整が施される。内面は横位のハケ調整によって整えられる。

SZ50871（第86～88図）

102は高坏の坏部から脚部である。全体的に摩滅しているが、坏部外面全体にミガキが施され、坏部と脚部との接合部外面には薄くハケ目が残る。口縁部内面付近には一部ミガキ痕が見られる。脚部にはやや坏部寄りの位置に円形の透かしが四方向にあけられている。古墳時代初頭に属するものと考えられる。103～112・114は壺の口縁部破片であり、折り返し口縁を持つものは105～112・114である。103は在地系であり、弥生時代後期後半の新しい時期、菊川式新段階のものとされる。口縁部外面にはハケ調整がなされており、頸部外面には櫛状工具による斜めの刺突を連続させて羽状の文様を作り出している。口縁部内面には縄文が施されており、頸部内面はナデ調整により整えられる。104は複合口縁を持つ。口縁部外面には棒状浮文が貼り付けられており、内面はナデ調整される。105は口唇部端部が波状にうねり、指で押圧したものと見られる。106は口唇部外面に棒状浮文が５本貼り付けられている。107は口唇部外面に施されたハケ目もしくは縄文の上に棒状浮文が貼り付けられている。頸部外面と口縁部内面にはハケ調整が施されている。108は口唇部外面全体にナデ調整がなされ、端部には櫛状工具によると見られるキザミが加えられる。頸部外面はハケ調整が施され、口縁部内面にもハケ調整がなされているものと思われる。109は摩滅が激しいが、口縁部内面にハケ目もしくは縄文が施されている。110・111は全体的に摩滅が激しく調整方法は明らかでない。112は内外面ともに摩滅が激しいが、口唇部外面は斜位、頸部外面は縦位のハケ調整がなされているようである。114の頸部外面にはハケ目が施されている。113は壺の頸部破片である。外面に施された縄文の上に円形浮文が貼り付けられている。内面はナデにより整えられている。115～123は壺の底部である。117・119は摩滅しているものの、外面にハケ目が観察できる。121は外面にミガキが施されている。122は摩滅しているが、外面は縦位、内面は横位のハケ調整が施されている。124は台付甕の脚部である。外面は摩滅しているが、ハケ目が観察できる。125は台付甕の口縁部破片である。摩滅しているが、口唇部外面にはキザミが施され、頸部外面下位には縦位



第86図　方形周溝墓出土遺物３



第87図　方形周溝墓出土遺物４

のハケ調整が施される。126～128は台付甕の口縁部破片である。いずれも口唇部外面にキザミを持つ。126の頸部外面には縦位のハケ調整がなされている。口縁部内面は摩滅しているが、横位のハケ目がわずかに観察できる。127の外面は摩滅しているが、頸部外面には縦位のハケ目が、その下方には横位～斜位のハケ目が見られる。口縁部から肩部にかけての内面には横位のハケ調整がなされる。128の頸部外面は摩滅しているが、縦位のハケ目が観察できる。内面には横位のハケ目が見られる。129・130は敲石である。いずれも端部に敲打痕が残る。

SZ51507（第88図）

131は台付甕の口縁部破片である。口唇部外面にはキザミが施される。頸部外面上部には斜位、下部には縦位のハケ調整が施される。口縁部内面には横位のハケ調整がなされる。

SZ51149（第88図）

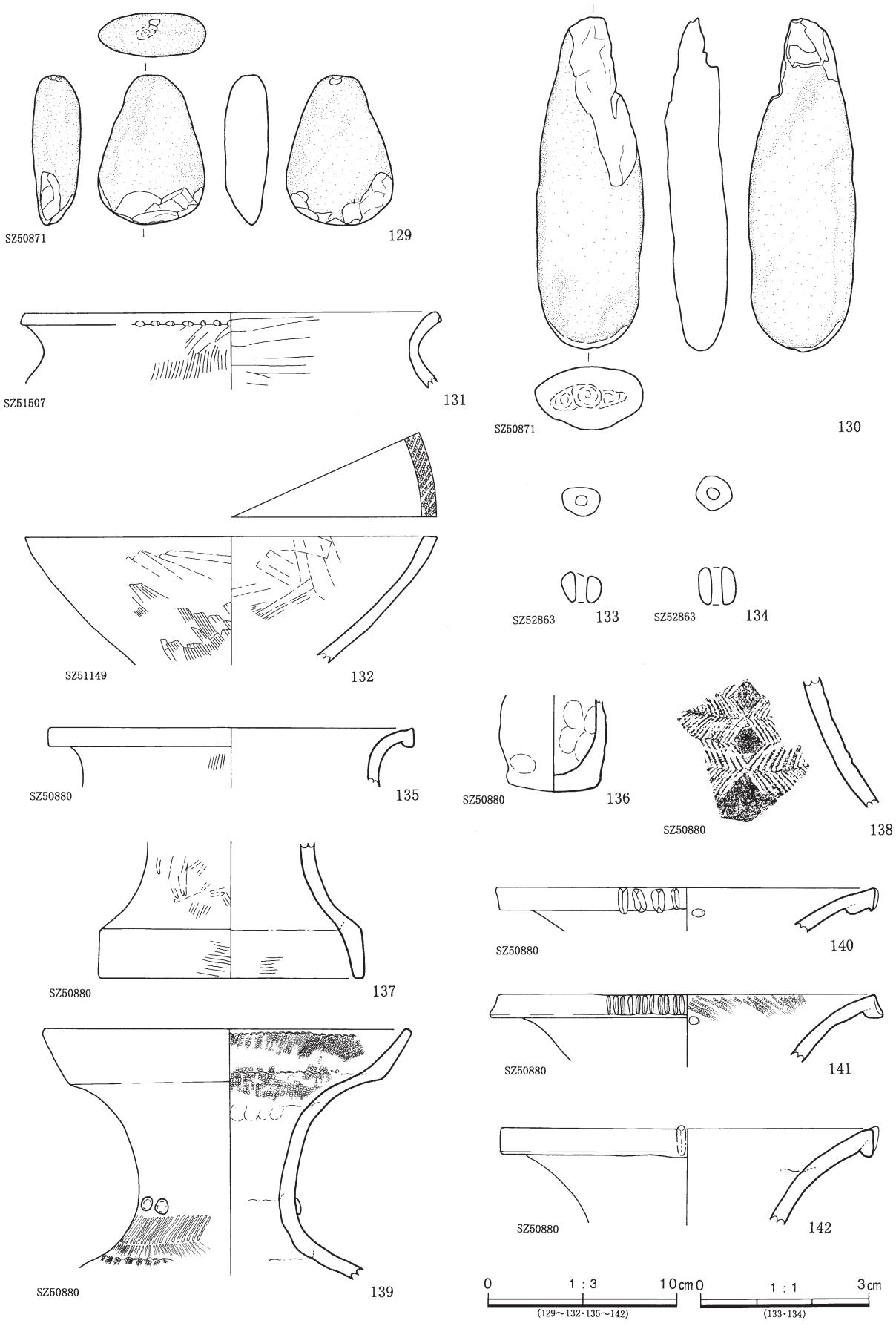
132は受口系口縁を持つ壺の口縁部破片である。外面下半にはハケ調整が施され、上半と内面にはナデ調整が施されている。口縁部内側の平坦面には縄文が施されている。

SZ52863（第88図）

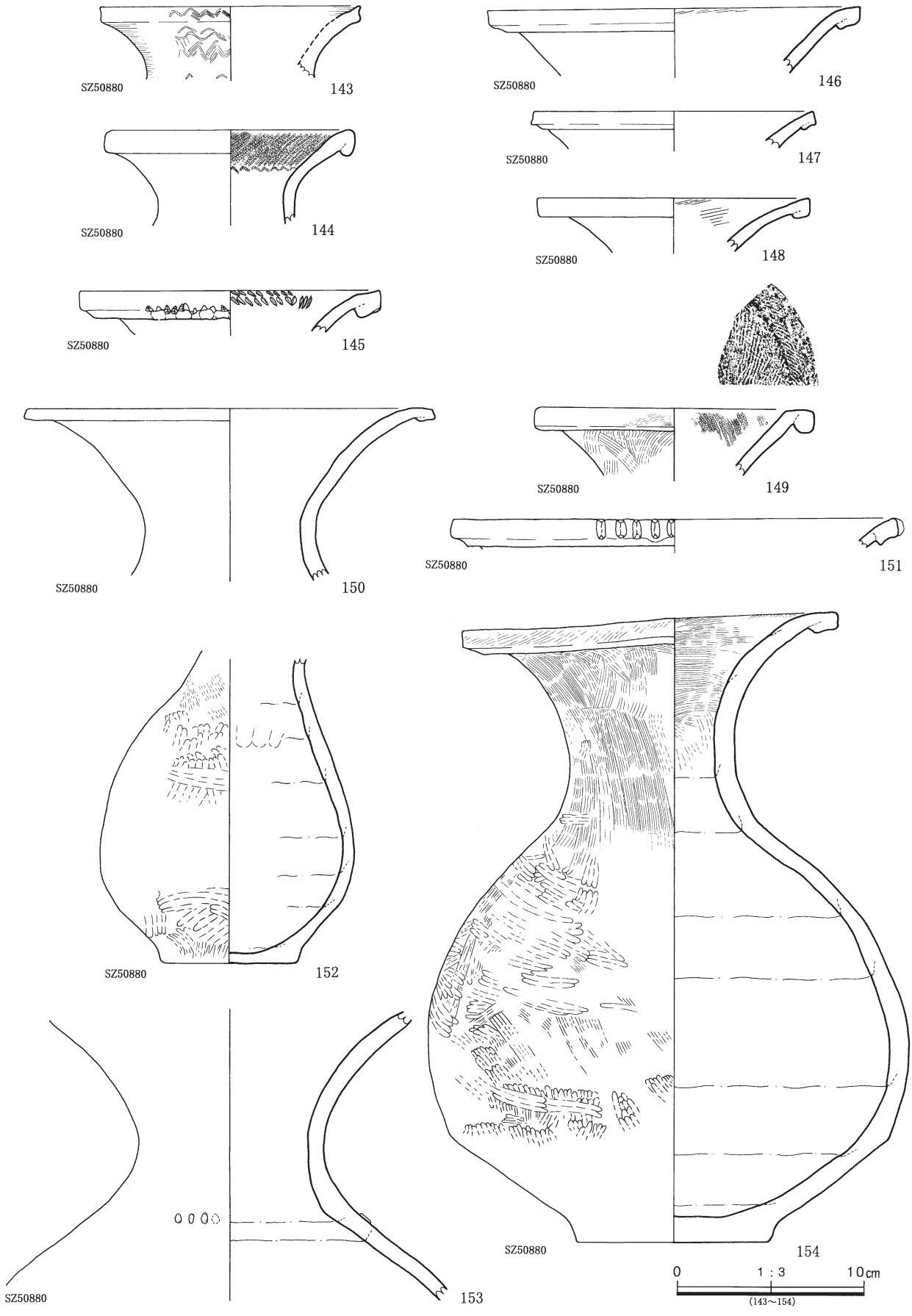
133・134は瑠璃色を呈するガラス玉である。133は長径0.7cm、短径0.5cm、孔径0.2cm、高さ0.55cmである。134は長径0.6cm、短径0.55cm、孔径0.2cm、高さ0.7cmである。

SZ50880（第88～91図）

135は鉢の口縁部破片である。頸部外面にはハケ目と思われる調整痕がわずかに見受けられる。136は小型壺の体部から底部である。内外面ともにナデ調整が施され、内面には指頭痕が多数残る。137は高坏の脚部破片である。菊川式新段階のものと思われる。138は壺の肩部破片と思われ、羽状文が施されている。139は複合口縁を持つ壺の口縁部から頸部である。外面は摩滅しており、調整方法は判然としない。頸部外面下位には円形浮文が２個ずつ３箇所に貼り付けられており、その下方には櫛刺突羽状文が施されている。口縁部内面には結節縄文が２段施文されている。下段の縄文の下方には指頭によると思われる圧痕が残る。140～143は壺の口縁部破片である。140～142は折り返し口縁を持ち、口唇部外面に棒状浮文が貼り付けられるもの（140・142）と、キザミを持つもの（141）に分類できる。140は口縁部内面に円形浮文が確認できる。141は口縁部内面に縄文が施され、その下方に140同様、円形浮文が確認できる。142は口唇部外面に貼り付けられた棒状浮文の下に縄文またはハケ目がかすかに観察できる以外は、内外面ともに摩滅が激しく調整方法は不明である。143の口唇部から頸部にかけての外面には波状文が認められる。頸部外面と口縁部内面はナデ調整される。144は折り返し口縁を持つ壺の口縁部から頸部である。口縁部内面には結節縄文が施されており、その下方はナデ調整される。外面もおそらくナデ調整であると思われる。145～151は折り返し口縁を持つ壺の口縁部破片である。145の口唇部外面はナデ調整され、端部には櫛状工具によるキザミが施され、その直下には指頭痕が残る。頸部外面はハケ調整の後、ナデ調整により整えられる。口縁部内面にはヘラ状工具を押し付けたような痕が残り、その下方はナデ調整される。146は摩滅のため、調整方法は定かでない。147の外面はナデ調整と見られ、内面には縄文かハケ目が施されていると思われるが、判然としない。148は口縁部内面に縄文らしき文様が残り、その下方にはハケ目と思われる調整痕が残る。149の口唇部外面は摩滅しているが、ハケ目もしくは縄文が観察でき、端部はナデ調整される。頸部に見られるのはおそらくハケ目であると思われる。口縁部内面には縄文が施されている。150は口縁部から頸部にかけて内外面ともにナデ調整される。151は口唇部外面に棒状浮文が貼り付けられている。内面は摩滅が激しく調整方法は不明である。152は壺の体部から底部である。肩部外面には斜位のハケ目が残り、体部外面は全体的にミガキが施される。底部外面は縦位のハケ調整がなされる。内面は全体的に摩滅しているが、ナデ調整がなされているものと思われる。肩部内面には指頭痕らしき痕跡が観察できる。153は壺の頸部である。内外面ともに摩滅



第88図　方形周溝墓出土遺物5



第89図　方形周溝墓出土遺物 6

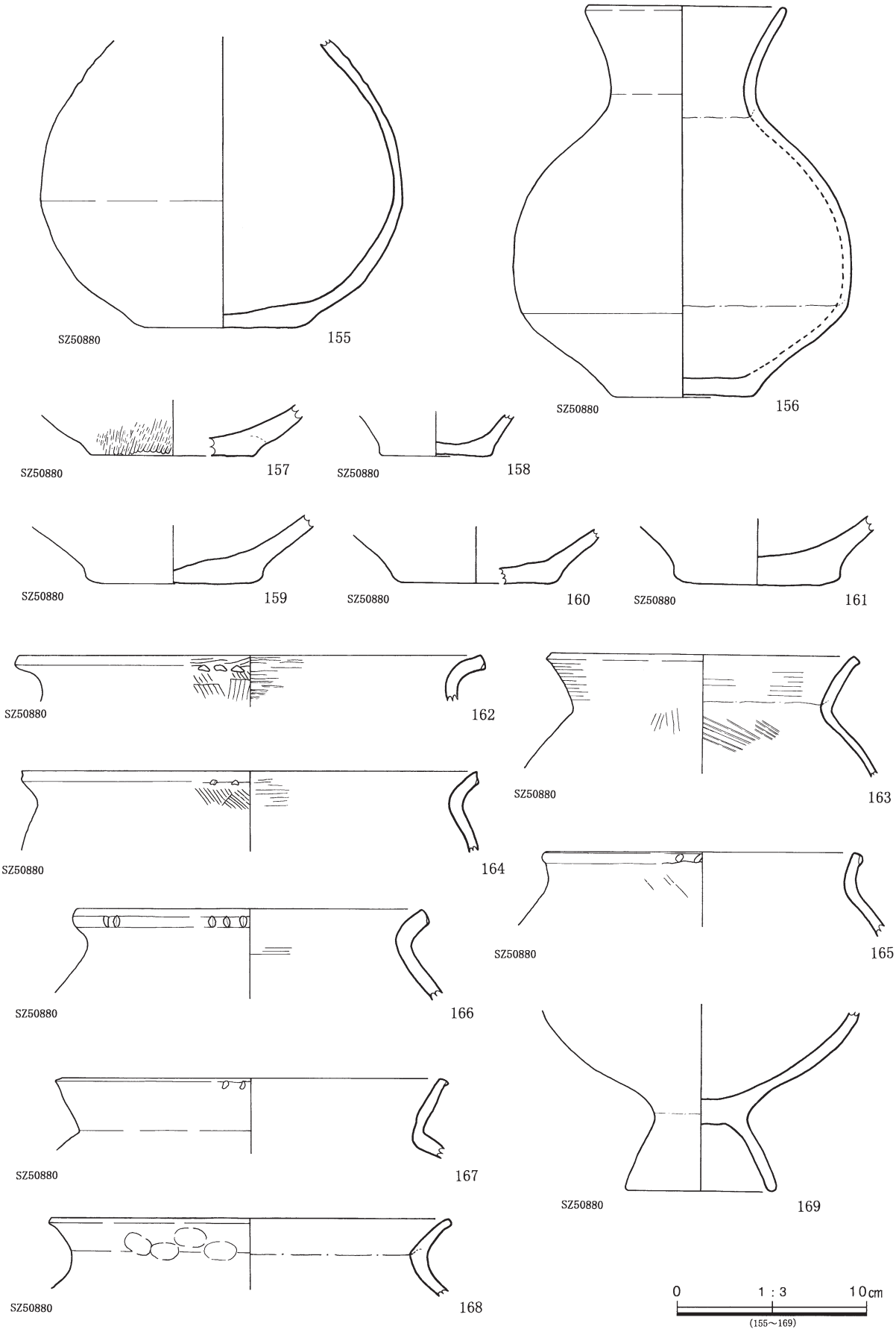
が激しく調整方法は判然としない。頸部外面下端には４つで一組となる円形浮文が貼り付けられており、４箇所に確認できる。154は折り返し口縁を持つ壺の口縁部から底部である。口唇部外面は斜位、頸部外面は縦位のハケ調整が施される。体部外面はハケ調整の後にミガキが施されたものと思われる。内面は口縁部から頸部上半にかけて横位のハケ調整が施されている。頸部下半から底部にかけては、ナデ調整と見られるが、一部ハケ調整がなされているようである。155は壺の体部から底部であり、球形の体部を持つ。外面はナデ調整により整えられ、内面もおそらくナデ調整であると思われる。156は単純口縁を持つ壺の口縁部破片と底部である。内外面ともにナデ調整により整えられる。155と同様、球形であるが、156は体部下半で屈曲し底部に接続する点において155と異なる。152・154・156はいずれも古墳時代初頭に帰属するものと思われる。157～161は壺の底部である。157の外面はハケ調整の後、ナデ調整を施しているものと思われる。158は内外面ともにナデ調整によって整えられる。159～161は内外面ともに摩滅が激しく調整方法は不明である。162～168は台付甕の口縁部破片である。口唇部外面にキザミを持つもの（162・164～167）と、持たないもの（163・168）に分類できる。162の口唇部外面には横位のハケ調整が施され、頸部には縦位のハケ調整がなされる。口縁部内面には横位のハケ調整がなされる。163は頸部が「くの字」に屈曲する。口縁部外面は横ナデにより調整され、肩部外面と口縁部内面はハケ調整の後、ナデ調整を施したものと思われる。口縁部と肩部の間のくびれ部分内面にはナデ調整、肩部内面にはハケ調整が施される。帰属時期は古墳時代前期前半と考えられる。164は頸部外面には斜位、口縁部内面には横位のハケ調整がなされる。165の頸部外面にはわずかに斜位のハケ目が観察できる。166の頸部内面にはハケ目と思われる調整痕がわずかに残る。167は口縁部から頸部にかけて内外面ともにナデ調整される。168の口縁部外面には指頭痕が残り、頸部にかけての内外面はともにナデ調整により整えられる。169～172は台付甕の脚部である。169の外面はナデ調整が施されており、おそらく内面もナデ調整であると思われる。170の外面には不鮮明ではあるが､ハケ目がわずかに観察できる。内面はナデ調整により整えられる。171は内外面ともにナデ調整がなされる。172の外面はハケ調整、内面はナデ調整であろうか。173・174は撥形を呈する打製石斧であり、いずれも縄文時代の混入品である可能性が高い。173は頭部と刃部が欠損しており、使用痕は不明である。174は完形品であり、刃部に使用痕が確認できる。175は磨石と敲石の兼用品である。一部に研磨痕が見られ、端部には敲打痕を残している。

SZ52155（第91図）

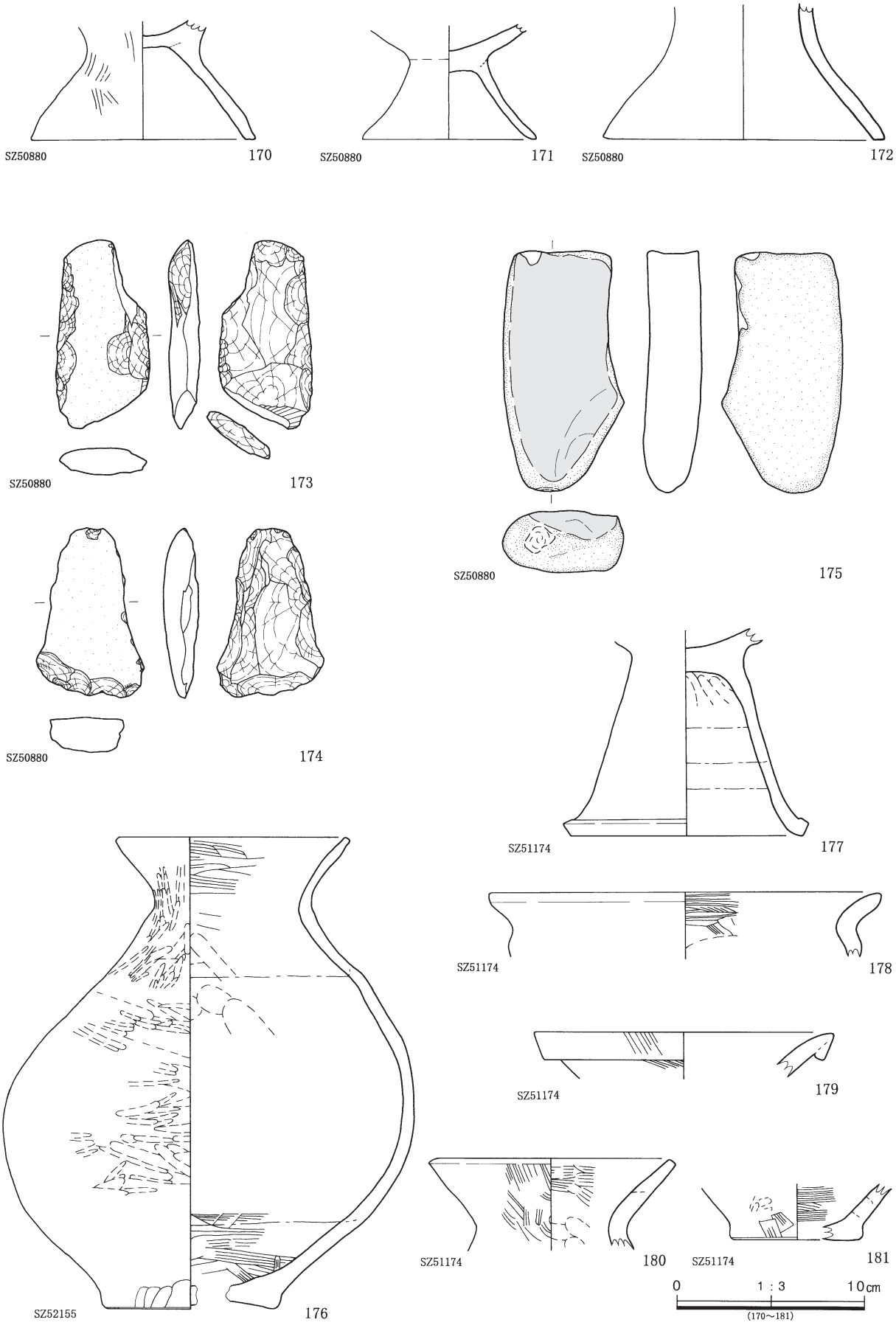
176は壺の口縁部から底部であり、底部に穴があけられている。頸部外面には縦位、体部外面には横位のミガキ調整が施される。底部外面には縦位のハケ調整がなされているようである。口縁部内面と底部付近内面には横位のハケ調整が施され、肩部内面にはナデ調整がなされる。古墳時代初頭に属するものと思われる。

SZ51174（第91・92図）

177は高坏の脚部である。外面は摩滅のため、調整方法が不明である。内面は脚部上位に指ナデしたと思われる痕が残り、その下方はナデ調整がなされる。脚部下端に付けられた段を境に裾が外側へやや開く。178は鉢の口縁部破片である。外面は摩滅が激しく調整方法は明らかでない。口縁部内面には横位のハケ調整がなされ、その下方には指ナデの痕が観察できる。179・180は壺の口縁部破片である。179は折り返し口縁を持つ。口唇部外面と頸部外面にそれぞれ斜位のハケ調整が施される。180の口縁部外面は斜位、内面は横位のハケ調整がなされる。頸部内面には指ナデの痕が確認できる。181は壺の底部破片である。外面に施されているのはおそらくハケ目であり、その直上にはミガキがなされているものと思われる。底部内面には横位のハケ調整が施される。183～186はいずれも台付甕である。183は脚部破片である。外面は斜位のハケ調整が施され、内面は板ナデがなされる。184は体部と脚部との接合



第90図　方形周溝墓出土遺物７



第91図　方形周溝墓出土遺物８

部である。摩滅が激しく調整方法は不明である。185・186は口縁部破片である。185の口唇部外面は横位のハケ調整がなされ、端部にキザミが施される。頸部外面には斜位、口縁部内面には横位のハケ調整がなされる。186の外面は摩滅のため調整方法は明らかでない。口縁部内面は横ナデされ、頸部内面は横位のハケ調整が施される。

SZ51234（第92図）

187は台付甕の口縁部破片である。口唇部外面にはキザミが施される。頸部外面は斜位、口縁部から頸部にかけての内面には横位中心のハケ調整がなされる。

SZ51175（第92図）

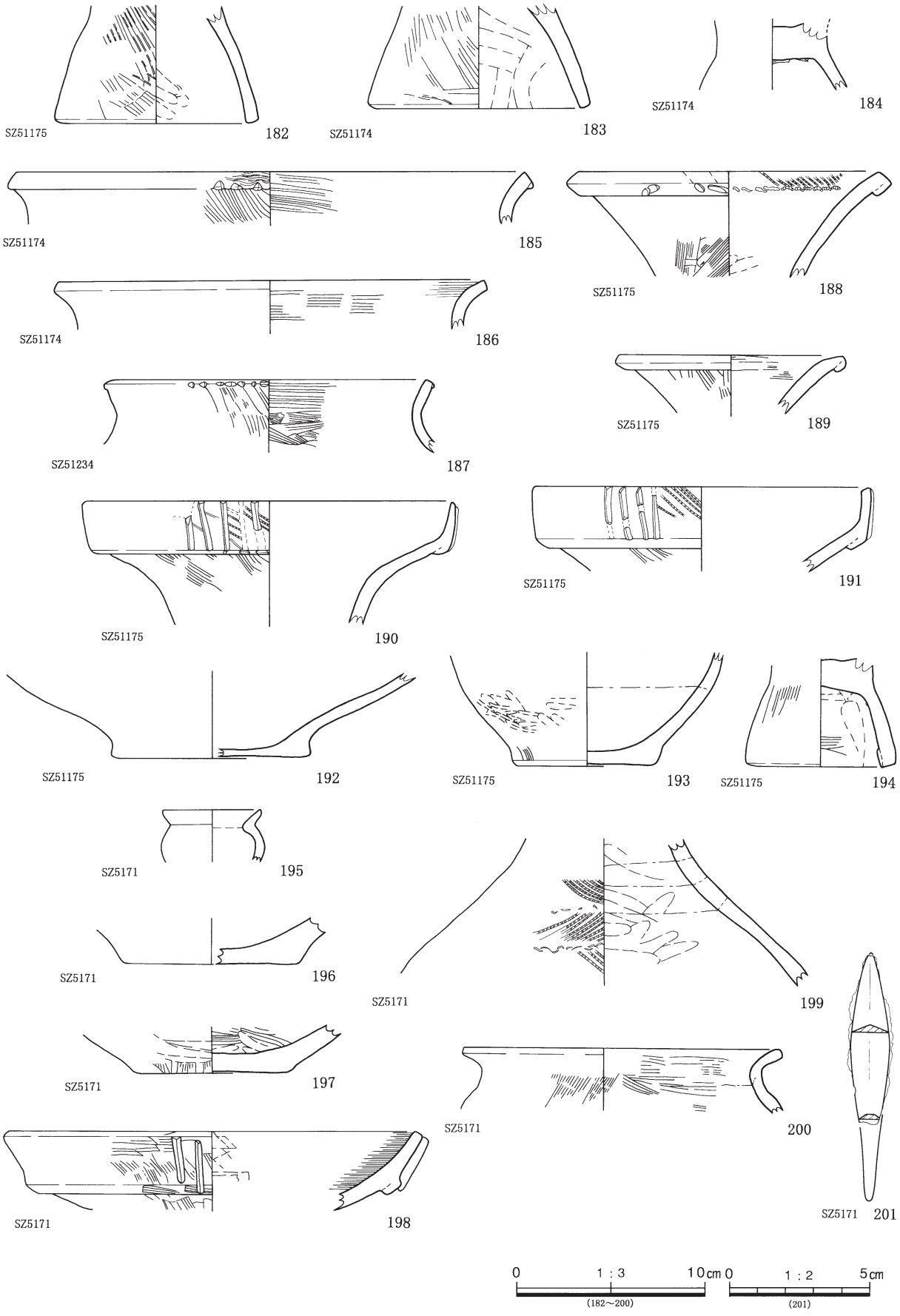
182は台付甕の脚部破片である。外面は斜位のハケ調整がなされる。内面上半は摩滅のため調整方法は不明であるが、下半はナデ調整が施される。188～191は壺の口縁部破片である。188・189は折り返し口縁を持ち、いずれも弥生時代後期後半の菊川式土器の特徴を呈する。188の口唇部外面にはキザミのようなものが観察できるが、判然としない。頸部外面には斜位のハケ調整が施される。口縁部内面には結節縄文が施文される。189の口縁部外面には縦位、内面には横位のハケ調整がなされる。190・191は複合口縁を持つ。190の口縁部外面には縄文らしき文様が施されており、その上に棒状浮文が貼り付けられている。端部にはキザミが施されている。頸部外面には斜位のハケ調整がなされる。191は口縁部外面に棒状浮文と縄文が確認できる。192・193は壺の底部である。192は内外面ともに摩滅が激しく調整方法は明らかでない。193は外面下部にミガキが施され、底部外面には縦位のハケ目が見られる。194は台付甕の脚部破片である。外面は摩滅しているが、縦位のハケ調整がなされているものと思われる。内面は指ナデとヘラ状工具によってなでられたような痕跡が観察できる。

SZ5171（第92図）

195は小型甕の口縁部破片である。口縁部は内外面ともに摩滅が激しく調整方法は不明である。頸部は内外面ともにおそらく指ナデされているものと思われる。196・197は壺の底部破片である。196は外面に施されたハケ目が摩滅している。内面はナデ調整がなされているものと思われる。197の底部外面には縦位のハケ調整がなされ、その上方は横位のミガキ調整がなされる。内面はハケ調整と指ナデが施されている。198は複合口縁を持つ壺の口縁部破片である。口縁部外面上部は横ハケ後、横ナデしたものと見られ、下部は斜位のハケ後、横ナデしたものと思われる。その上には棒状浮文が貼り付けられている。頸部外面には縦位のハケ調整がなされる。口縁部内面は横位のハケ調整の後、横ナデが施されている。199は壺の体部破片である。外面には３段の結節縄文が施文されており、上位から順にRL、LR、RLとなる。内面は指ナデがなされている。200は台付甕の口縁部破片である。口唇部外面はナデ調整されているものと思われる。頸部外面は斜位､内面は横位のハケ調整が施される。鉄鏃201は木葉形を呈し、関と鏃身との境界が明瞭ではなく、茎尻に向かって徐々に幅を狭める。鏃身は先端が欠損するがほぼ残存し、錆化により不明瞭であるが断面形状から片鎬造である可能性が高い。茎は断面横長台形となるようである。鉄鏃形態からみると時期的に古墳時代前期には降らず、弥生時代後期に帰属する可能性が高い。

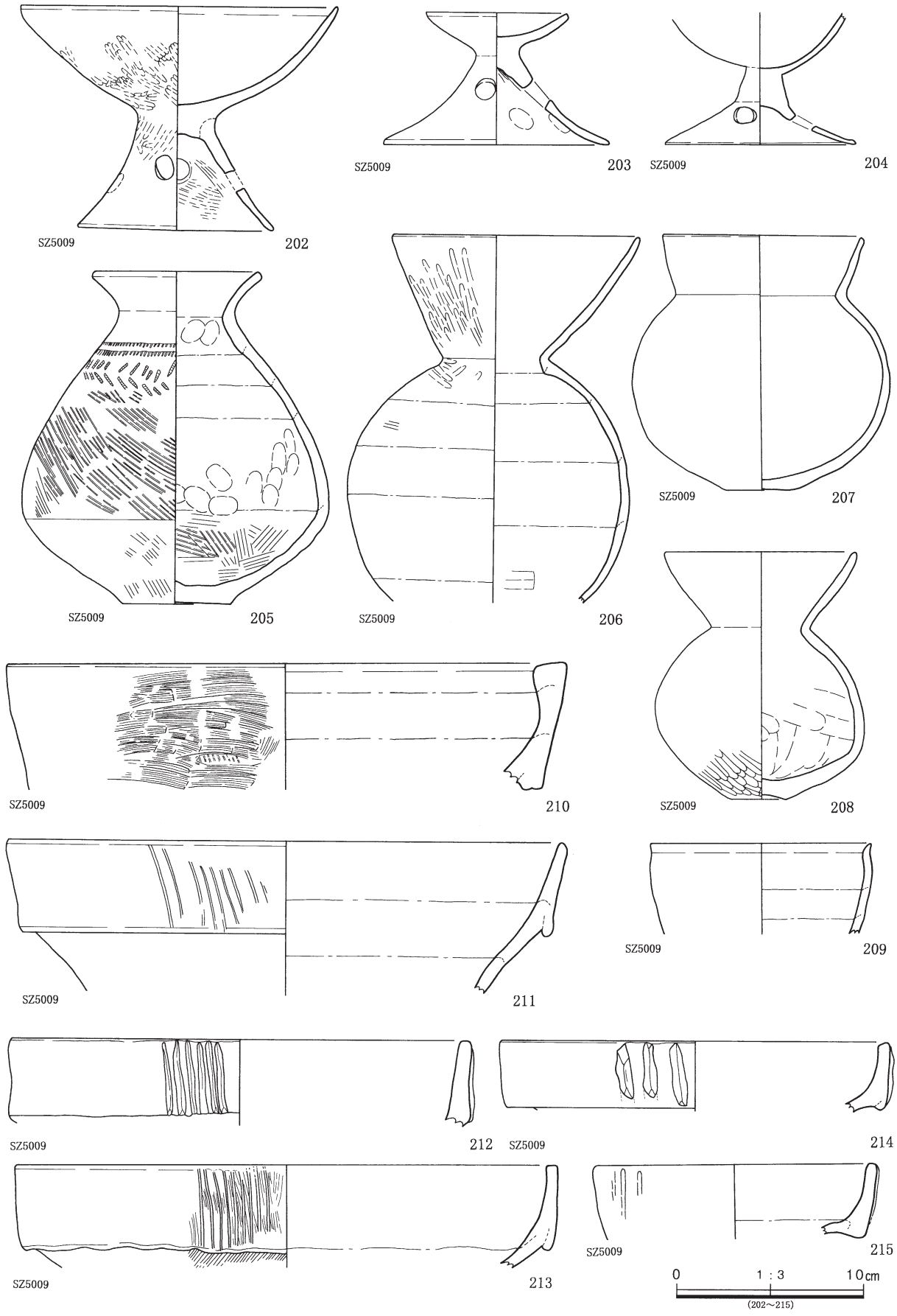
SZ5009（第93～95図）

202は高坏の口縁部から脚部である。内外面ともに摩滅しているが、坏部外面と脚部外面の一部にミガキ痕が残る。脚部に４つの透かしを持ち、内面にはかすかにハケ目が観察できる。203は器台の口縁部から脚部である。外面は全体的にナデ調整される。坏部内面もおそらくナデ調整がなされているものと思われる。脚部には三方に透かしを持ち、内面には指頭痕を残す。帰属時期は古墳時代前期前半と思われる。204は高坏の脚部である。脚部中位で屈曲し急激に裾が広がる。三方に透かしを持つが、透かしの位置が低い。205は壺の口縁部から底部である。肩部外面には帯状に２段の櫛刺突文が施され、そ

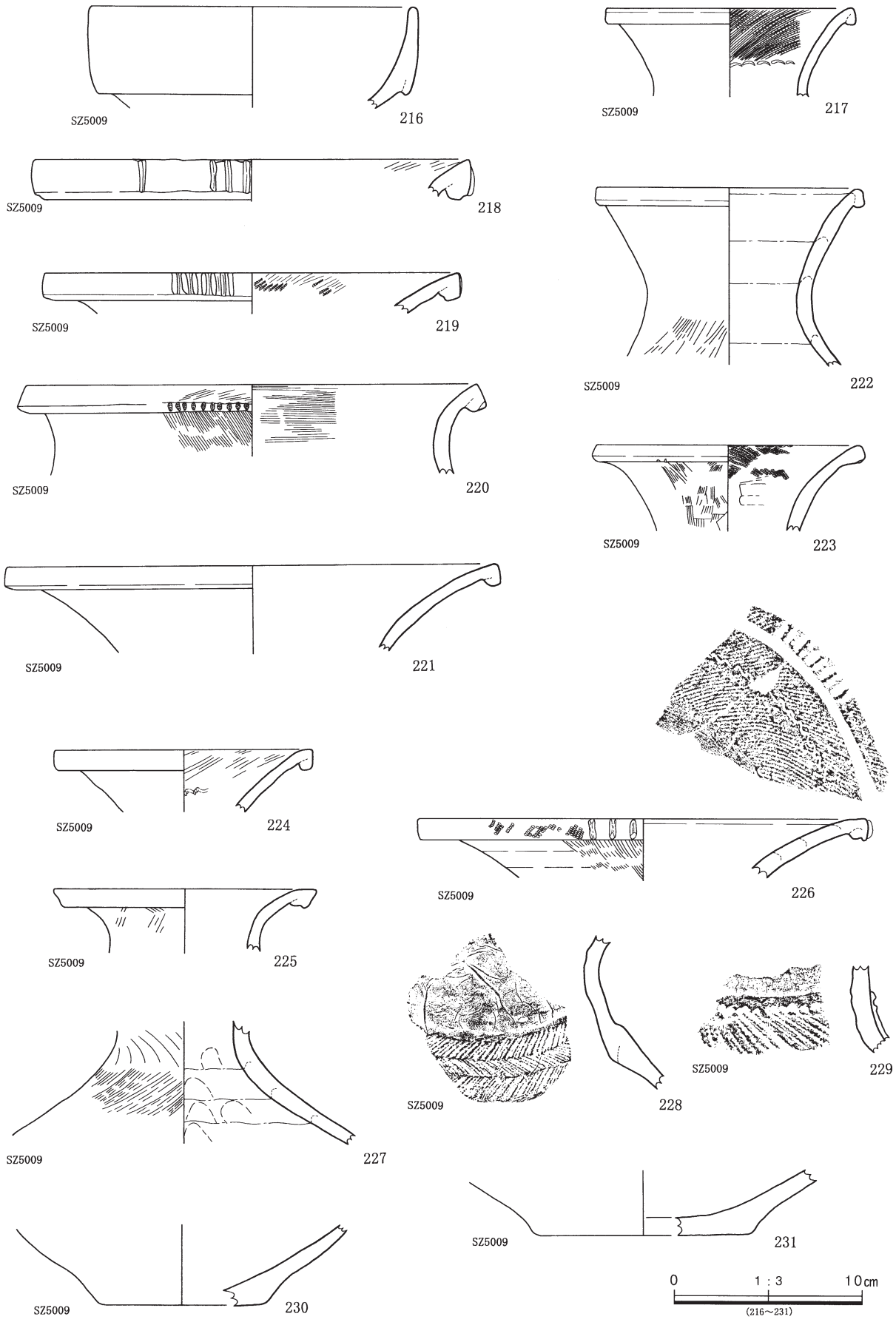


第92図　方形周溝墓出土遺物９

の下方には１段の櫛刺突羽状文が施されている。体部外面には斜位のハケ調整がなされる。内面は口縁部から体部にかけてナデ調整され、体部中位には指頭痕が多数見られる。体部下位にはハケ調整が施されている。弥生時代後期後半の新しい時期のものと思われ、混入した可能性が考えられる。206は壺の口縁部から体部であり、底部を欠く。外面は口縁部から頸部にかけてミガキが施される。体部は摩滅のため調整方法が判然としないが、ミガキが施されていたと推定される。内面も摩滅が激しく調整方法が明らかでないが、ナデ調整がなされているものと思われる。帰属時期は古墳時代前期前半と考えられる。207は壺の口縁部と底部である。内外面ともに摩滅が激しく調整方法は不明である。古墳時代初頭に属するものと思われる。208は壺の口縁部破片と体部から底部にかけての部位が残存する。外面は口縁部から体部半ばにかけて剥落が著しく、調整方法は明らかでない。体部外面下位はミガキ調整が施される。口縁部内面も剥落のため、調整方法は不明である。肩部内面はナデ、体部中位から下位にかけては指ナデされる。209は鉢の口縁部から体部にかけての破片である。摩滅のため調整方法は不明であるが、内外面ともにナデ調整されているようである。208・209はともに古墳時代前期前半に帰属すると考えられる。210～219は壺の口縁部破片である。複合口縁を持つもの(210～216)と折り返し口縁を持つもの(217～219）に分類できる。210は口縁部外面に横位のハケ調整がなされる。内面はナデ調整と思われ、口縁部内側の平坦面に施されているのは縄文と思われる。211は内外面ともに摩滅しているが、口縁部外面には櫛描文と思われる文様が残る。212は口縁部外面に棒状浮文が貼り付けられている。内面はナデ調整であろうか。213は口縁部外面にハケ調整を行った後、縦線文を施しているようである。頸部外面は摩滅しているがハケ目が観察できる。214は口縁部外面に棒状浮文が貼り付けられており、内面はナデ調整されている。215は摩滅しているが、口縁部外面に棒状浮文が貼り付けられている。216は口縁部外面にハケ調整を施した後、ミガキ調整を施していると思われる。217の外面は摩滅しており、調整方法は定かでない。内面には結節縄文が見られる。218は口唇部外面に棒状浮文が貼り付けられており、内面には縄文が施されている。219は口唇部外面にキザミが施され､端部から頸部にかけてナデ調整される。内面は不鮮明ではあるが、縄文が確認できる。220は鉢の口縁部破片である。外面は口唇部と頸部に斜位のハケ調整が施され、口唇部端部には櫛状工具によると見られる連続したキザミが加えられる。口縁部内面は横位のハケ調整がなされる。221～226は壺の口縁部である。221・224～226は折り返し口縁を持つ。221は内外面ともにナデ調整によって整えられる。222は内外面ともに摩滅が激しいが、頸部外面に斜位のハケ目が観察できる。223は口唇部外面端部に不鮮明ながらキザミが施される。頸部外面上位は斜位、下位は縦位のハケ調整が施される。内面は、口縁部に結節縄文が施される。頸部は板ナデされる。224の外面はナデ調整されているようであり、内面は摩滅しているが、結節縄文が確認できる。225は全体的に摩滅しているが、頸部外面はハケ調整がなされ、口縁部内面には縄文が確認できる。頸部内面はナデ調整が施される。226は口唇部外面に一部縄文が見られ、棒状浮文が貼り付けられる。頸部外面に残るのはハケ目と思われる。口縁部内面には結節縄文が施される。227は壺の頸部破片である。外面は摩滅しているが、頸部上位に縄文もしくはハケ目と思われる痕跡が残り、下位には縄文らしき文様が施文される。内面には指頭痕が残る。228・229は壺の頸部から肩部破片と思われる。228は外面上半と内面はナデ調整され、外面下半は羽状文が施される。内面には指頭痕が確認できる。229の外面には５mm幅の粘土紐が貼り付けられており、その粘土紐に櫛状工具の端を食い込ませるようにして、斜めに連続した刺突が施される。230～237は壺の底部破片である。230～234・237は内外面ともにナデ調整されているようである。235は摩滅しているが、外面にハケ目と思われる調整痕が見られる。236も摩滅しているが、底部外面にハケ目らしき調整痕が観察できる。237は底面と立ち上がり部分との接合部が外側にやや突出する。238～243は台付甕の口縁部破片である。238の外面には斜位～縦位のハケ調整がなされ、口唇部には連続するキザミが施される。内面には横位のハケ調整がなされる。239は口唇部外



第93図　方形周溝墓出土遺物10



第94図　方形周溝墓出土遺物11

面にキザミが施され、頸部から肩部にかけて斜位と横位のハケ調整がなされる。内面はナデ調整であろうか。240は口唇部外面にキザミがつけられ、頸部外面には縦位、口縁部内面には斜位と横位のハケ調整が施される。241は内外面ともに摩滅が激しいが、頸部外面にはハケ目が確認できる。内面はおそらくナデ調整と思われる。242は238とキザミ目の幅が異なるが、基本的な調整方法は同じである。243は口唇部外面にキザミがつけられ、頸部外面には縦位、口縁部内面には横位のハケ調整が施される。244は台付甕の口縁部破片であるが、摩滅が激しく調整方法は不明である。245は台付甕の体部と脚部との接合部破片である。体部外面は焼けており、摩滅しているが、ナデ調整がなされているものと見られる。体部内面はヘラナデと思われ、脚部内面にはヘラで押さえたような痕跡が確認できる。246は台石であり、一部に敲打痕が見られる。

SZ2579（第95・96図）

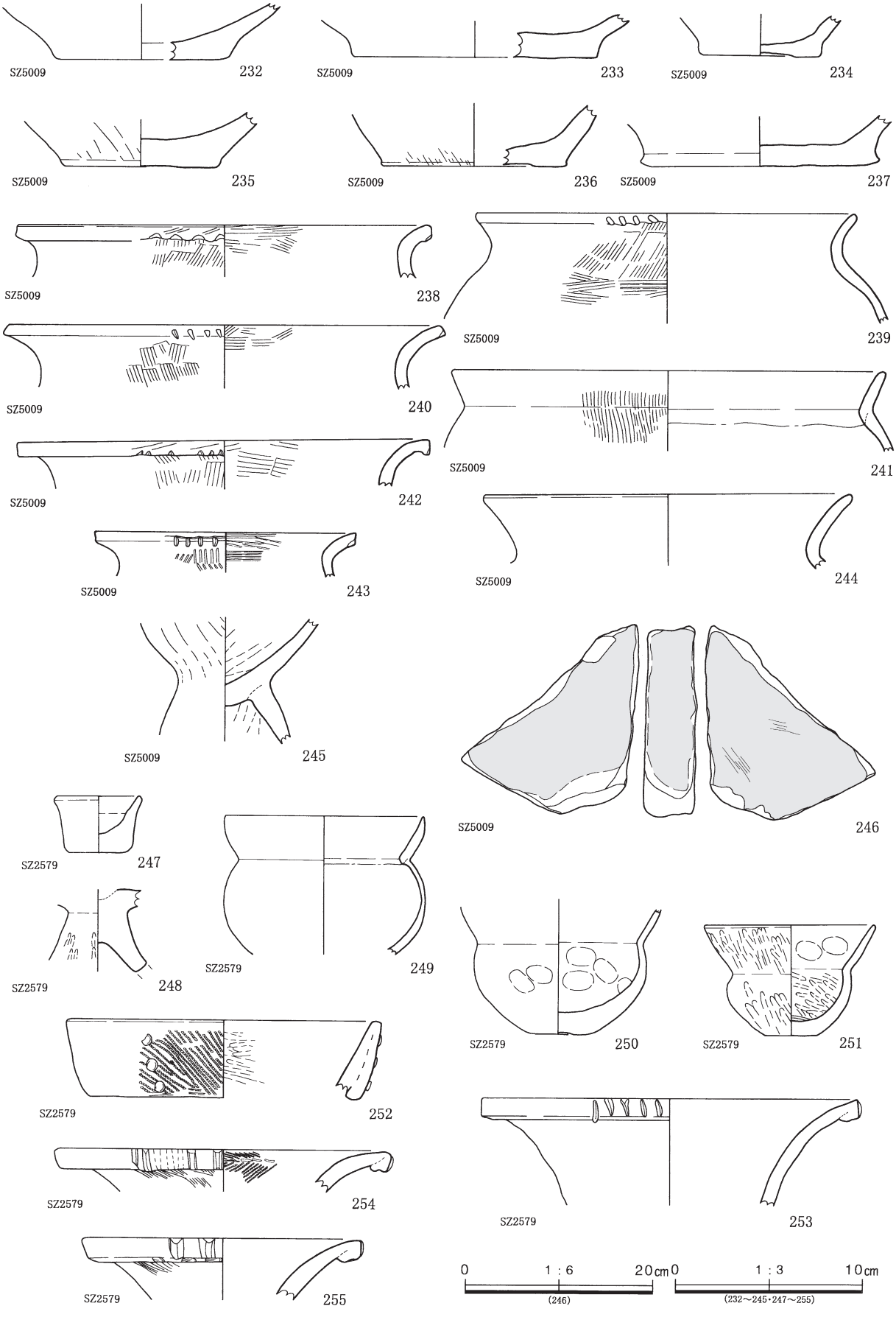
247は小型坏の口縁部と底部の破片である。摩滅のため調整方法は定かでないが、内外面ともにナデ調整されているものと思われる。248は高坏の脚部破片である。四方向に透かしを持ち、外面にはミガキ調整が施される。内面はナデ調整であろうか。249は小型丸底壺の口縁部から体部破片である。摩滅が激しく調整方法は明らかでない。250は小型丸底鉢の体部と底部である。摩滅のため調整方法は不明であるが、内外面ともに指頭痕が多数残る。251は鉢の底部と口縁部破片である。口縁部から底部にかけての外面と体部内面にはミガキ調整が施される。口縁部内面には指頭痕が残る。249～251は古墳時代前期前半に属するものと思われる。252は複合口縁を持つ壺の口縁部破片である。外面には縄文が施されており、その上から円形浮文が縦に3つ貼り付けられている。内面は横方向のミガキ調整がなされる。253～256は折り返し口縁を持つ壺の口縁部破片である。253は内外面ともにナデ調整され、口唇部外面には連続して浮文が貼り付けられる。254の口唇部外面には棒状浮文が貼り付けられているが、一部剥落している。頸部外面には斜位のハケ調整がなされる。口縁部内面には結節縄文が施文されている。255は口唇部外面に棒状浮文が貼り付けられており、端部にはキザミが施される。頸部外面には斜位のハケ調整がなされる。内面は摩滅のため調整方法は不明である。256は内外面ともにナデ調整される。口唇部外面は摩滅が激しいが、端部に一部キザミが確認できる。257は壺の肩部破片であると思われる。内面はナデ調整され、外面は縄文が施された上に円形浮文が貼り付けられている。258は台付甕の口縁部破片である。口唇部外面にはキザミが施され、頸部外面は斜位、口縁部内面は横位のハケ調整がなされる。

SZ2002（第96図）

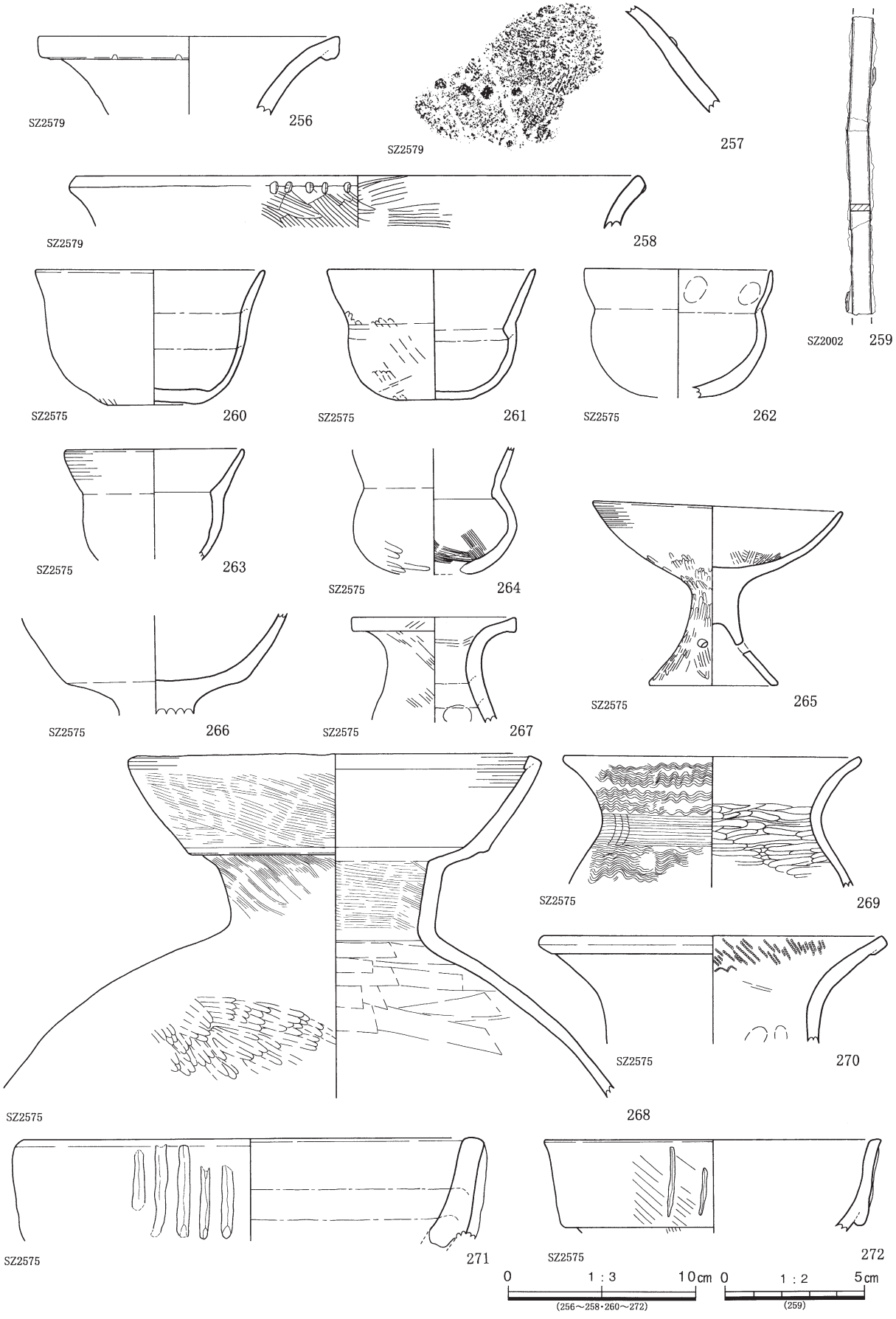
259は鉄製ヤリガンナの茎片で、切先・茎尻は欠損している。茎の断面は長方形である。木柄が一部残存する。木柄の木目は茎に平行する。全体的な形状が不明なため時期を特定できないが、弥生時代後期に帰属する可能性が高い。

SZ2575（第96～98図）

260～264は鉢である。260・261は口縁部から底部である。260は全体的に摩滅しているが、口縁部外面はナデ調整がなされ、底部外面はヘラ削りされているようである。口縁部内面は横ナデされている。261も全体的に摩滅しているが、外面の一部にミガキが確認できる。内面は全体にナデ調整されているものと見られる。262は口縁部から体部破片である。内外面ともにナデ調整され、口縁部内面には指頭痕が確認できる。263は口縁部から体部であり、底部のみ欠損している。内外面ともにナデ調整され、口縁部外面は横ナデされる。264は体部から底部であり、底部に穿孔される。外面はナデ調整され、体部下位にミガキが施される。内面は口縁部から体部半ばにかけてナデ調整され、体部下位に細かなハケ調整がなされる。260～264はいずれも古墳時代前期前半に帰属するものと思われる。265は高坏の口縁部と脚部の破片である。口縁部外面は横ナデされていると思われ、坏部下位から脚部にかけてミガキ調整される。坏部内面もミガキが施され、脚部には三方に透かしを持つ。266は高坏の坏部破片である。

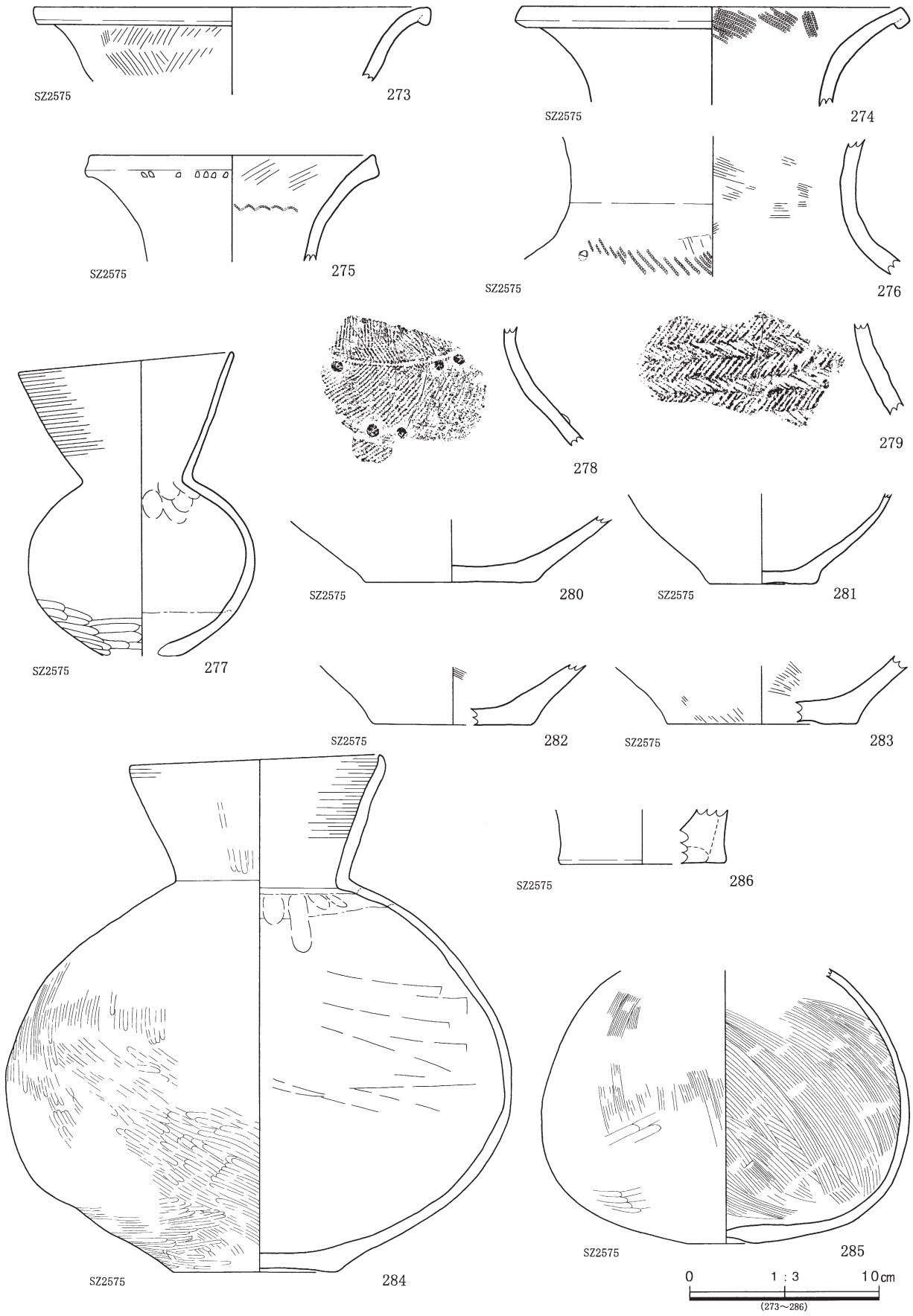


第95図　方形周溝墓出土遺物12



第96図　方形周溝墓出土遺物13

内外面ともにナデ調整が施されている。267は壺の口縁部破片である。内外面ともに摩滅が激しいが、外面はハケ調整がなされ、内面はハケ調整の後、ナデ調整を行っているものと思われる。268は複合口縁を持つ壺の口縁部から体部上半にかけての部分である。大廓的な口縁を持つが、胎土から在地産土器と思われる。外面は、口唇部上端は横ナデされ、その下方から頸部にかけては斜位のハケ調整がなされる。肩部外面はミガキ調整が施される。口縁部内面上端は横ナデされる。その下方は表面が剥落しているため調整方法が不明であるが、頸部内面は横位のハケ調整がなされる。肩部内面には丁寧なミガキに近い板ナデが施されている。269は甕の口縁部破片である。口唇部外面はナデ調整される。口縁部と肩部の外面には櫛描波状文が施文され、頸部外面には簾状文が施されている。簾状文の筋は12条確認できる。口縁部内面はナデ調整、頸部から肩部にかけての内面には横方向のミガキ調整が施される。中部高地系の甕であり、搬入品である可能性が高い。弥生時代末～古墳時代前期に帰属するものと思われる。270～275は壺の口縁部破片である。270は全体的に摩滅しているものの、口縁部内面には結節縄文が確認できる。結節の下方はハケ調整後、ナデ調整が施されたものと思われる。また、指頭痕が見られる。271・272は複合口縁を持つ。271は摩滅が激しく調整方法は明らかでない。口縁部外面には棒状浮文が貼り付けられている。272の口縁部外面には不鮮明ではあるが、縄文が確認できる。その上に細長い棒状浮文が貼り付けられている。口縁部内面はナデ調整される。273・274は折り返し口縁を持つ。273は摩滅しており判然としないが、口唇部外面と口縁部内面はおそらくナデ調整されているものと思われる。頸部外面にはハケ目が確認できる。274の口唇部から頸部にかけての外面はナデ調整される。口縁部内面には縄文が施され、その下方はナデ調整される。275は摩滅しているが、口唇部外面にわずかにキザミが確認できる。口縁部内面には不鮮明ながら結節縄文が見られる。276は壺の頸部破片である。全体的に摩滅しているが、頸部外面上位はおそらくナデ調整であり、下端はハケ調整がなされ、縄文が施されている。また、円形浮文も見られる。内面にはハケ目が観察できるが、摩滅が激しい。277は壺のほぼ完形品であるが、底部に穿孔される。口縁部から頸部にかけての外面は横ナデされる。摩滅が激しく調整方法の不明な箇所が多いが、体部外面下位はミガキ調整と思われる。口縁部から頸部にかけての内面はハケ調整後、ナデ調整されており、体部内面はナデ調整されるが、一部指頭痕と思われる痕跡が見られる。278・279は壺の頸部から肩部に至る部分の破片と思われる。278の外面上端には櫛で描いたような文様が見られ、下方は結節縄文が施される。縄文の上には円形浮文が２段にわたって貼り付けられている。上段は、櫛描文と縄文の境目であり、下段は、ちょうど結節に重なる位置である。279の外面には３段の羽状文が見られる。280～283・286は壺の底部である。280は内外面ともに摩滅が激しく、調整方法は不明である。281も摩滅のため判然としないが、内外面ともにナデ調整が施されているものと思われる。282も摩滅しているが、内面の一部にハケ目が見られ、その下方はナデ調整されている。283は輪台状の底部を持つ。摩滅が激しいが、内外面ともにハケ目らしき調整痕が見られる。底面の持ち上がった部分はナデ調整される。284は壺の口縁部から底部にかけての部分がほぼ残存する。口縁部外面上端は横ナデされる。体部外面は摩滅のため不明な箇所もあるが、縦・横・斜めのミガキ調整が施され、底面にもミガキが行われる。内面は、口縁部から肩部にかけてナデ調整され、肩部に指頭痕が残る。体部中位は板ナデされ、下位はナデ調整される。285は壺の体部から底部であり、頸部以上を欠く。内外面ともに表面剥落のため、調整方法の不明な箇所もあるが、体部外面はハケ調整の後、ミガキ調整がなされる。体部内面は全体的にハケ調整され、底部付近で一部ナデ調整される。底部内外面中央部にはそれぞれくぼみが確認できる。286は立ち上がりが底面に対して垂直になる。287は台付甕である。口縁部破片と体部の半分程度が残存する。口縁部外面上端は横ナデされ、頸部外面は縦位、体部外面は斜位～横位中心のハケ調整がなされる。内面は、口縁部に横位のハケ調整が施され、体部は板ナデされているものと思われる。体部内面最下位にはハケ目が見られる。284・285・287の帰属時期は古墳時代前期前



第97図　方形周溝墓出土遺物14

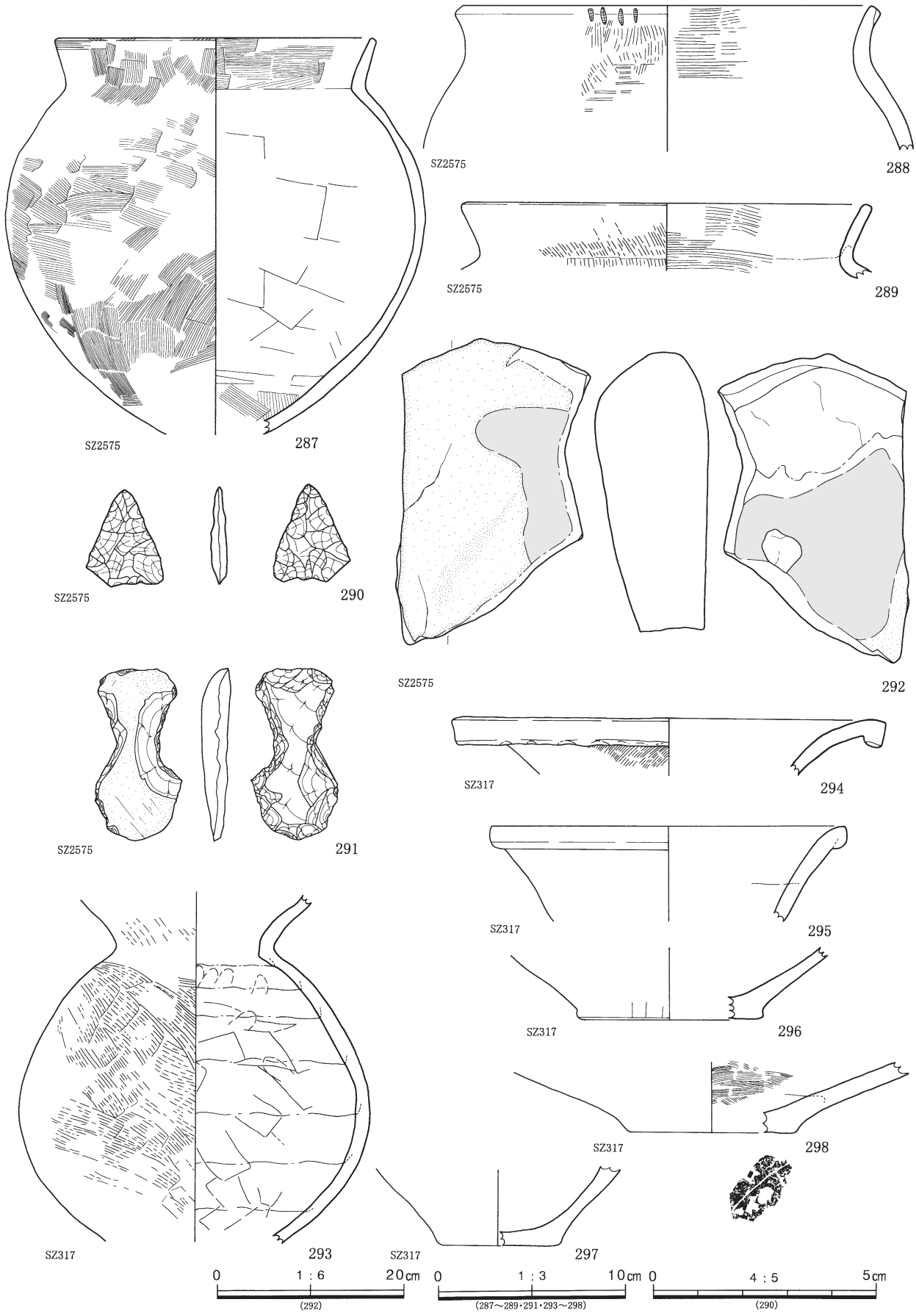
半と思われる。288は台付甕の口縁部から肩部にかけての部分である。口唇部外面には櫛状工具によると見られるキザミが施されている。ハケ目は頸部外面と口縁部内面に見られる。肩部内面はナデ調整される。289は台付甕の口縁部破片である。内外面ともにハケ調整される。290は黒色チャート製の凹基無茎石鏃である。抉りが小さく、三角形状をなす。291は分銅形の打製石斧であり、縄文時代の混入品である可能性が高い。刃部にわずかに使用痕が見られる。292は台石であり、一部に敲打痕と研磨痕が確認できる。

SZ317（第98・99図）

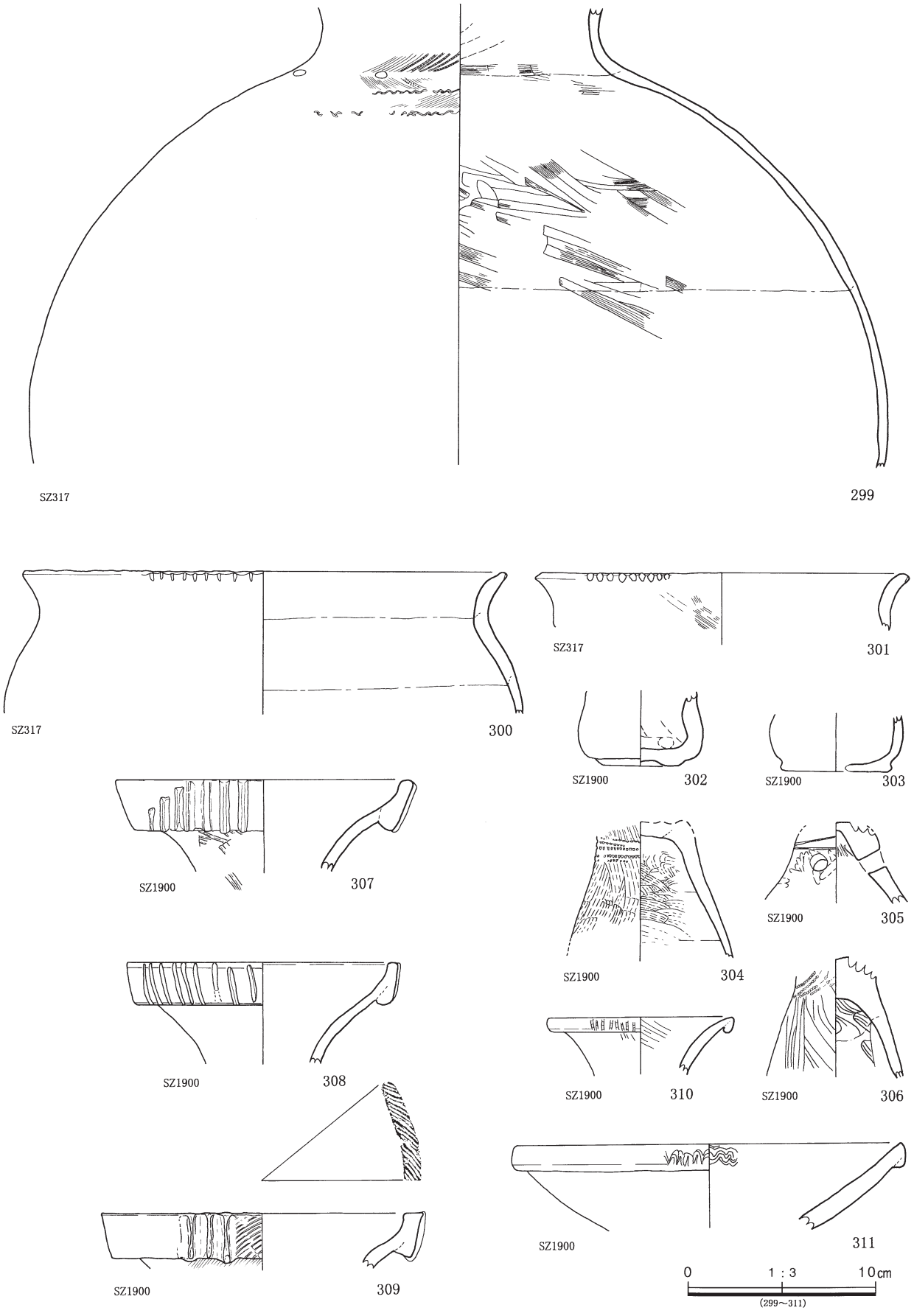
293は壺の頸部から体部破片である。体部外面全体にはハケ調整が施される。体部内面はヘラナデと思われる調整がなされており、所々に指頭痕が確認できる。体部の器形は球形をなすようである。古墳時代前期前半に属すると考えられる。294・295は折り返し口縁を持つ壺の口縁部破片である。294の口唇部外面には波状にキザミが加えられている。頸部外面は摩滅のため判然としないが、ハケ目らしき調整痕が見られる。口縁部内面も摩滅しているが､ハケ目もしくは縄文が認められる。295は摩滅が激しく、内外面ともに調整方法は不明である。296～298は壺の底部破片である。296は内外面ともに摩滅が激しいが、底部外面にはハケ目と思われる調整痕がかすかに見られる。297は摩滅のため、調整方法は定かでない。298の外面の調整方法はナデかハケだと思われるが、どちらか判別できない。内面にはハケ目が見られ、底面には木葉痕が残る。299は壺の頸部から体部破片である。頸部は内外面ともにナデ調整される。頸部下端から肩部にかけての外面には、上から順に、縄文、円形浮文、２段の結節縄文が見られる。頸部下端内面には横位のハケ調整がなされ、体部内面には全体的に目の細かい斜め方向のハケ調整が施されている。300は台付甕の口縁部から肩部破片である。口縁部外面にはキザミが施されている。摩滅のため判然としないが、内外面ともにハケ調整がなされているようである。301は台付甕の口縁部破片である。口縁部外面にキザミを持つ。頸部外面は摩滅しているものの、ハケ目と推定される調整痕が残る。口縁部内面に残るのは横位のハケ目であろうか。

SZ1900（第99～102図）

302・303は小型壺の底部破片であり、古墳時代初頭に帰属するものと思われる。302は摩滅しているが、外面に縦位のハケ目と思われる調整痕がかすかに見られる。303は摩滅が激しく調整方法は不明である。底部に穿孔されている。304～306は高坏の脚部破片である。304の外面は全体的にハケ調整され、特に上部のハケ目は鮮明である。上位にはハケ調整後に施したと見られる刺突文が確認でき、その下方は一部ミガキがなされているようである。内面には全体にハケ調整がなされている。305は透かしを持つ。外面は斜位と横位のミガキが施される。306の外面上部には縄文が施されており、その下には縦位のハケ目が見られる。内面に見られるのはハケ目であろうか。307～317は壺の口縁部破片である。307～309は複合口縁を持ち、310～317は折り返し口縁を持つ。307は口縁部外面に棒状浮文が貼り付けられる。頸部外面は斜位のハケ調整が施されるが、内面は摩滅のため調整方法は明らかでない。308の外面はナデ調整されているようである。口縁部外面には９本で一組となる棒状浮文が貼り付けられており、３箇所に存在すると思われる。内面はナデ調整される。309は口縁部外面にハケ目が見られ、その上から棒状浮文が貼り付けられる。頸部外面には縄文もしくはハケ目が見られる。内面はナデ調整され、口縁部内側の平坦面にはハケ調整が施される。310の口唇部外面には櫛状工具によると見られる刺突文が施される。摩滅のため不明瞭ではあるが、内外面に一部ハケ目らしき調整痕が見られる。311は摩滅のため調整方法は不明であるが、口唇部内外面に波状文が施文されている。312の頸部外面はハケ調整後、ナデ調整を行ったものと思われる。内面には縄文が施される。313の口唇部外面はおそらくナデ、端部はハケ調整と思われる。頸部外面はミガキ調整が施される。内面は摩滅しているが、ナデ調整を行ったものと推定される。314は口唇部外面端部にキザミが加えられる。頸部外面に見られるのは縦位のハケ目

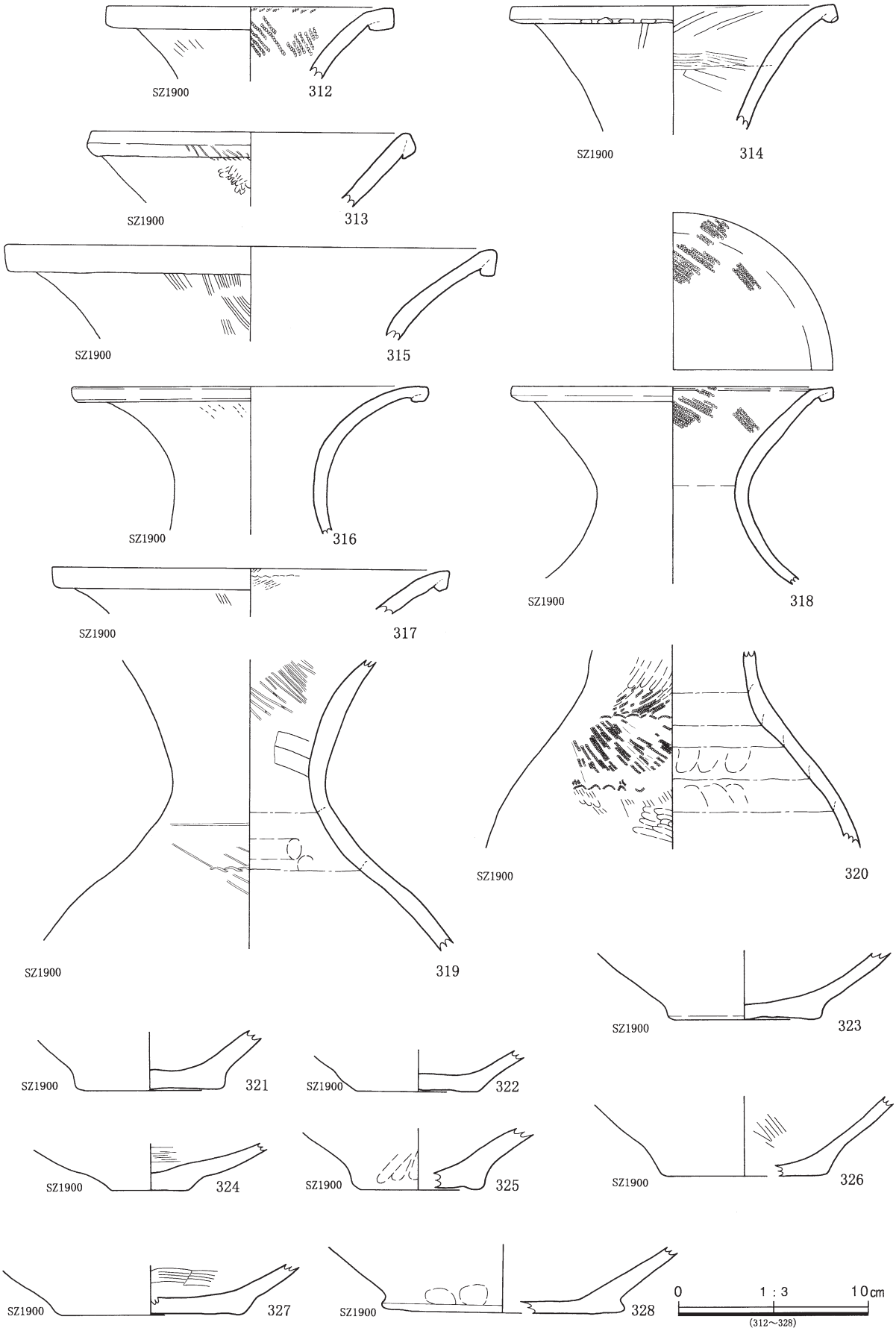


第98図　方形周溝墓出土遺物15

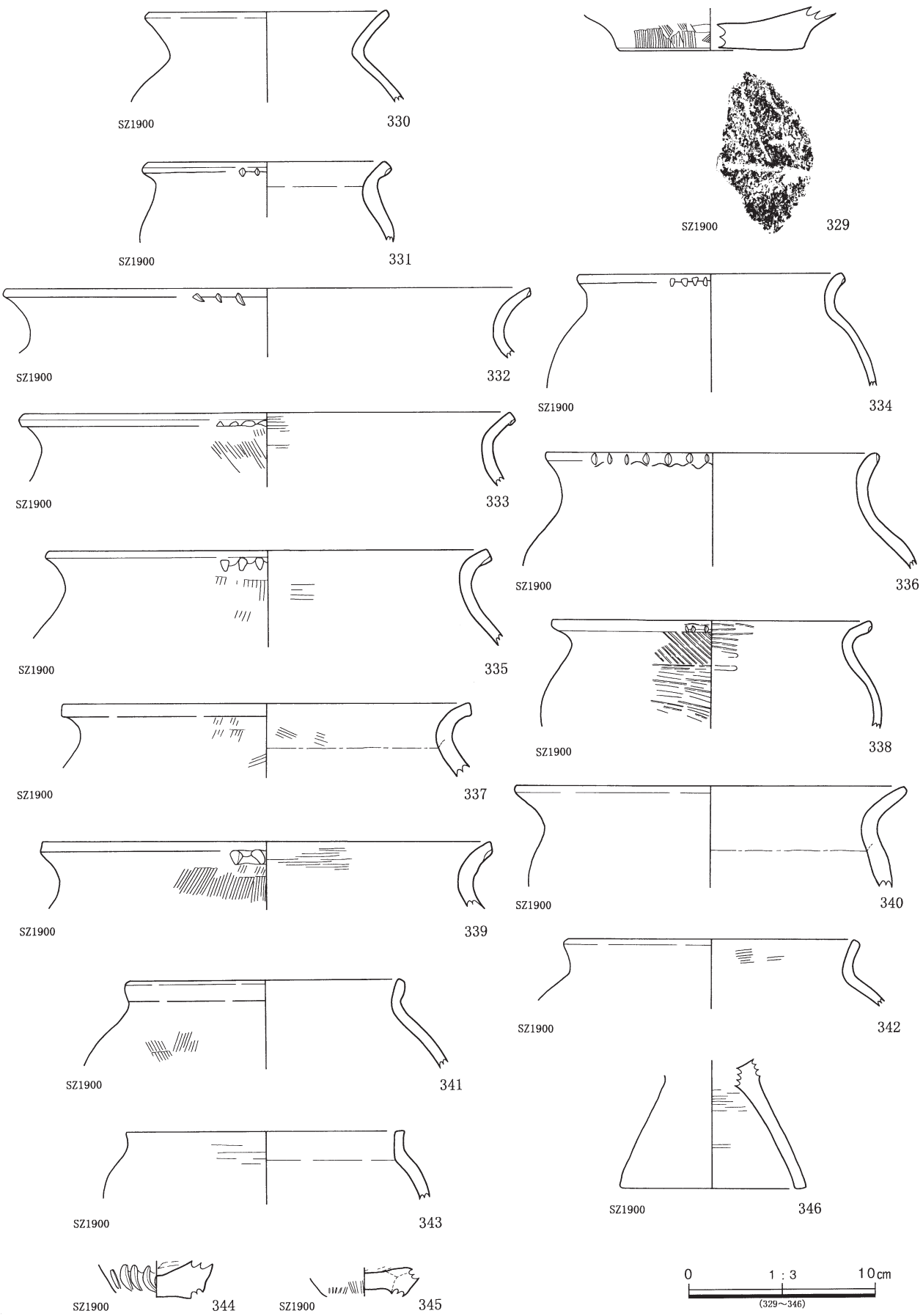


第99図　方形周溝墓出土遺物16

と思われる。内面には、幅狭く横位にハケ調整され、続けて縄文が施される。その下方に施されているのは横位のハケ調整と思われ、さらにその下方はナデ調整されていると見られる。315の頸部外面には縦位～斜位のハケ調整がなされる。内面は摩滅のため調整方法は不明である。316は内外面ともに摩滅しており、調整方法は明らかでないが、頸部外面上端に一部ミガキらしき調整痕が見られる。317は内外面にハケ目が見られ、内面には結節縄文と思われる文様が観察できる。318は折り返し口縁を持つ壺の口縁部から頸部である。内外面ともに摩滅が激しいが、口縁部内面には一部縄文が見られ、おそらく当該箇所全般に施されていたと考えられる。319は壺の頸部破片である。外面は全体的に摩滅しているため調整方法は不明であるが、頸部下端に結節縄文が見られる。内面は頸部上位に縄文が見られ、中位はおそらくナデ調整であり、下位は指ナデされている。320は壺の体部破片である。外面は、頸部下端と肩部下位にミガキ調整が施されており、上下のミガキに挟まれるようにして2段の結節縄文が施文される。内面はナデ調整と見られ、一部指頭痕が確認できる。321～329はいずれも壺の底部である。321は摩滅のため調整方法が判然としないが、外面は斜位のハケ調整、内面はナデ調整と思われる。323も全体的に摩滅しているが、内外面ともにナデ調整であろうか。324の外面はナデ調整が施される。内面は不鮮明ではあるがハケ目が確認でき、その後ナデ調整を施している。325は外面に斜位のハケ目もしくはミガキが見られるが、摩滅のため判然としない。326は摩滅が激しいが、外面はおそらくナデ調整であり、内面はハケ調整の後、ナデ調整を行ったものと思われる。327の外面は摩滅のため調整方法が不明であるが、内面はハケ調整され、その下方は指ナデされているように見える。328は内外面ともにナデ調整されていると思われ、底部外面には指頭痕が残る。329は外面に縦方向のハケ目が見られる。内面は摩滅しており、調整方法は不明である。330は壺の口縁部破片であるが、摩滅のため調整方法は明らかでない。口縁部から肩部にかけて「くの字」に屈曲する。331～343は台付甕の口縁部破片である。口唇部外面にキザミを持つもの（331～336・338・339）と持たないもの（337・340～343）に分類できる。331は摩滅のため調整方法は判然としないが、内外面ともにナデ調整と見られる。332は摩滅しており調整方法は不明である。333の頸部外面には斜位のハケ調整がなされる。口縁部内面には横位のハケ目が観察できる。334は内外面ともにナデ調整であろうか。335は頸部外面に縦位のハケ調整がなされ、内面にはハケ目と思われる調整痕が見られる。336は全体的に摩滅しており判然としないが、内面はナデ調整と思われる。337の頸部外面はハケ調整後、ナデ調整を行ったものと見られる。内面は摩滅のため不鮮明ながらハケ目らしき調整痕が観察できる。338の頸部外面は斜位、肩部外面は横位のハケ調整がなされる。内面は、口縁部に横位のハケ調整がなされており、肩部はおそらくナデ調整が施されているものと思われる。339の頸部外面は縦位、口縁部内面には横位のハケ調整がなされている。340は内外面ともにナデ調整であろうか。341は調整方法の不明な箇所が多いが、肩部外面にハケ目が見られる。口縁部の立ち上がりが垂直に近く、胴部最大径が口縁径を大きく上回ることが推定される。342は摩滅が顕著なため調整方法が判然としないが、口縁部内面に横位のハケ目が見られる。343は頸部外面にハケ目と思われる調整痕が見受けられる。内面はハケ調整の後、ナデ調整が施されている。344・345は台付甕の体部と脚部との接合部である。344の外面には指頭による深い圧痕が残る。正面から見ると、右手親指の爪を立てて押し当てたような痕である。内面は板ナデが施されているものと見られる。345の外面には櫛刺突文が施されており、内面はナデ調整される。346は台付甕の脚部破片である。外面はナデ調整され、内面はおそらくハケ調整と思われる。347・348は打製石斧であり、いずれも縄文時代の混入品である可能性が高い。347は短冊形を呈し、刃部に使用痕が見られる。片面は原礫面を多く残し、もう一方の面を加工調整することにより作り出している。348は短冊形に近い形状をなす。刃部欠損のため、使用痕は不明である。



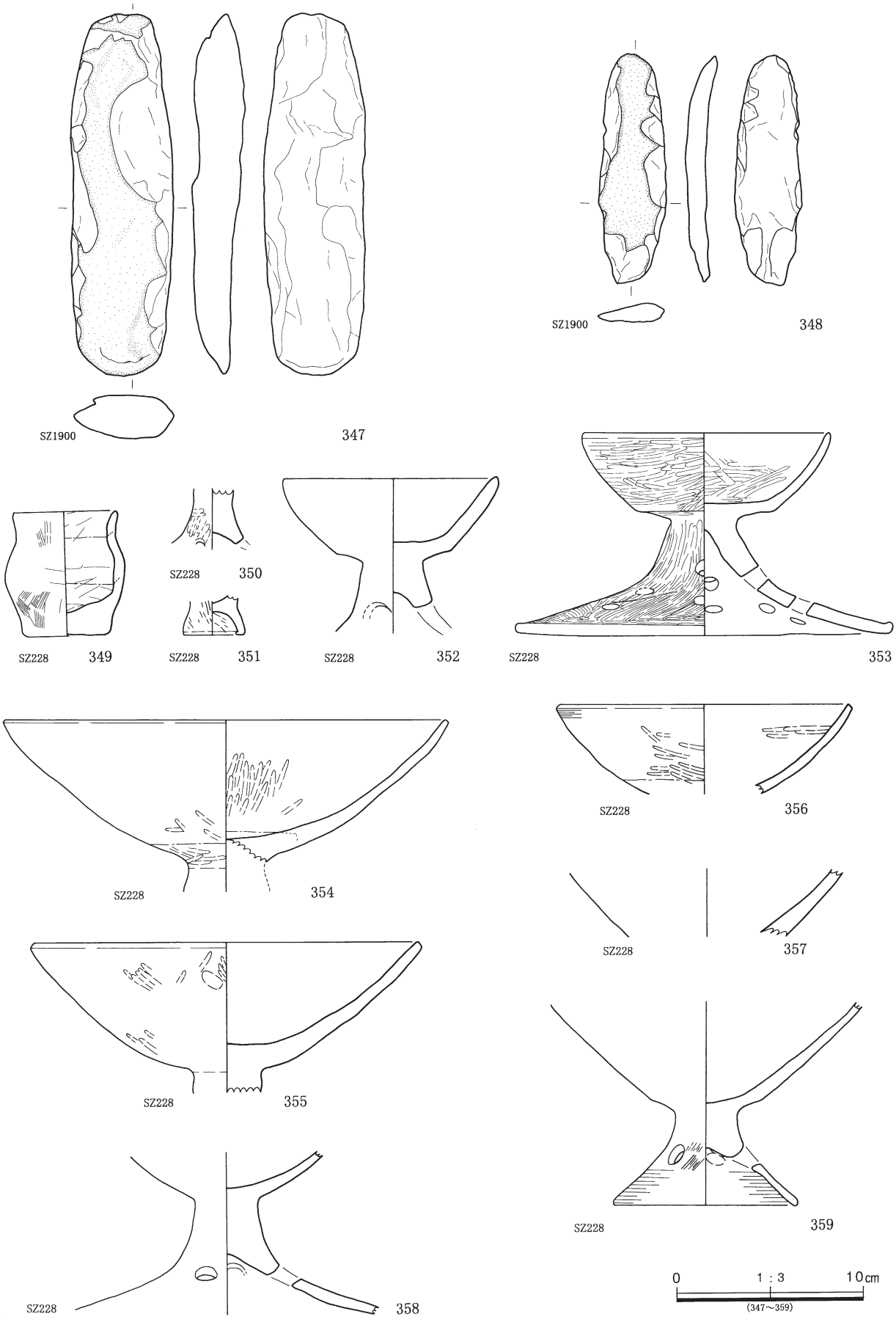
第100図　方形周溝墓出土遺物17



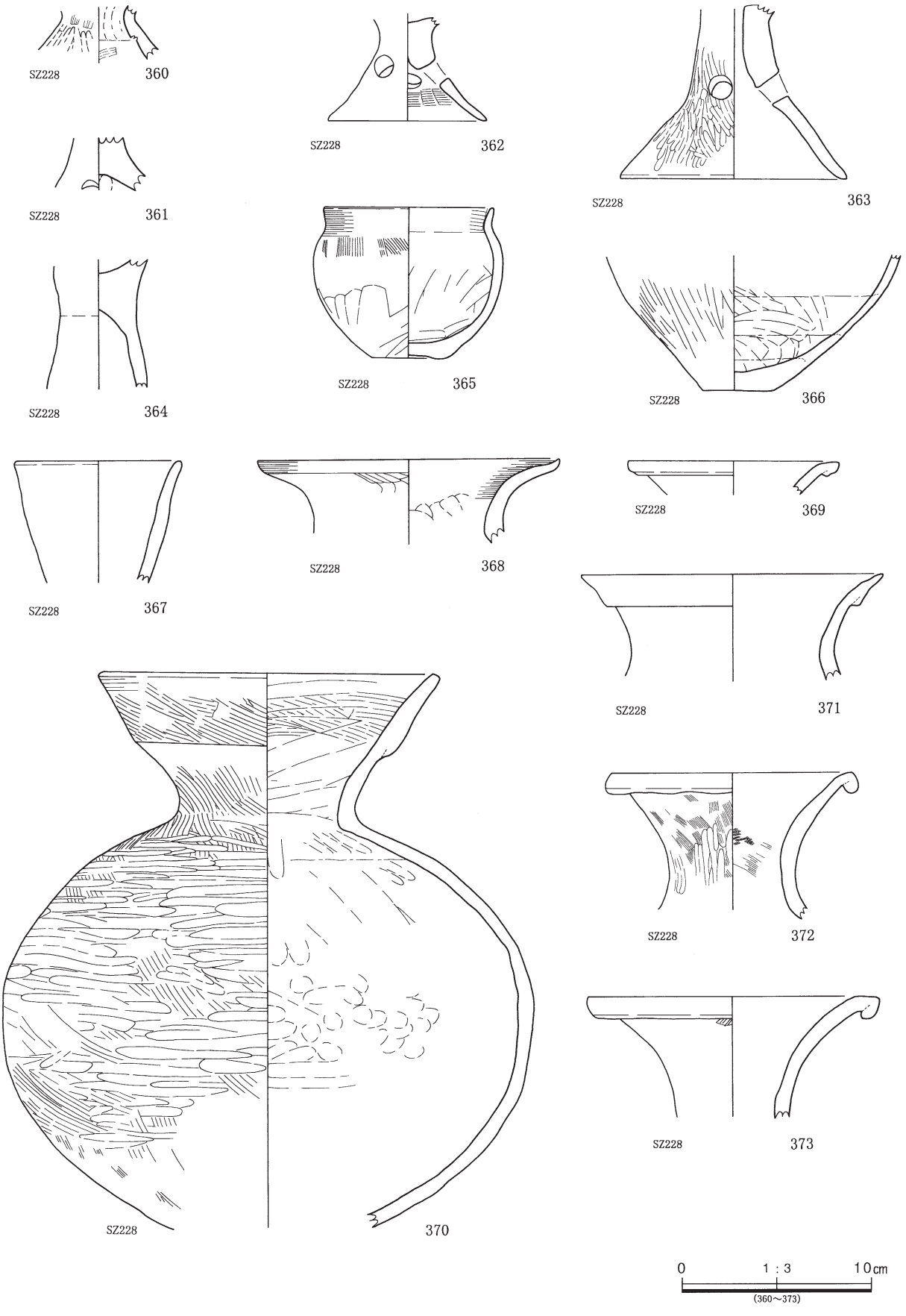
第101図　方形周溝墓出土遺物18

SZ228（第102～107図）

349は小型壺の口縁部から底部である。外面にはハケ目が見られ、内面は指ナデを施している。350は小型高坏の脚部破片である。内外面ともにナデ調整されるが、外面には一部ミガキ調整が施されているようである。三方向に透かしがあけられていた可能性が高い。351は小型台付甕の脚部である。外面はハケ調整が施されていると見られ、内面はナデ調整がなされているものと思われる。352・353は高坏の坏部から脚部である。いずれも坏部の下位で一旦屈折し、脚部に接続する。352は摩滅のため調整方法は不明であるが、脚部内面はナデ調整が施されている。脚部には三方向に透かしがあけられる。353の外面は全面にミガキが施されており、坏部は横位、脚部は縦位～斜位となる。底部はナデ調整により整えられる。口唇部内外面もナデ調整される。坏部内面上半のミガキ痕は不鮮明であるが、下半は斜位～横位のミガキ痕が鮮明に残る。脚部に14個の透かしを持つ。古墳時代初頭に帰属するものと思われる。354～357は高坏の坏部破片である。354は内外面ともにミガキ調整痕が確認でき、本来は全面に施されていたものと思われる。355の外面には不鮮明ではあるが、一部ミガキが見られ、指頭痕も観察できる。おそらく内面にもミガキが施されていると考えられるが、不鮮明で判然としない。356は全体的に摩滅しているが、口縁部外面は横ナデされ、坏部内外面はミガキ調整が施される。357は内外面ともにナデ調整される。358は高坏の脚部破片である。内外面ともに表面が剥落しており、調整方法は知り得ない。透かしは位置的に四方にあけられていることが推定されるが、一箇所欠損しており、残存するのは三箇所である。古墳時代前期前半に帰属するものと思われる。359は高坏の坏部と脚部の破片である。坏部は表面剥落のため、内外面ともに調整方法は不明である。坏部と脚部との接合部外面はナデ調整されている。脚部外面上位はハケ調整され、下位は内外面とも横ナデされる。脚部内面上位は指ナデと思われる。脚部には三方向に透かしが施される。360～364は高坏の脚部である。360の外面上位にはヘラ状工具でなでたような痕が見られ、下位はミガキ調整される。内面上位はナデ調整であり、下位は板ナデと思われる。361の外面には不鮮明ながら縦位のミガキが施されているようである。内面は指ナデであろうか。脚部の四方に透かしを持つと見られる。362の外面はナデ調整され､底部は横ナデされる。内面は､上位はナデ、中位は横位のハケ、下位は横ナデと、調整方法を分けて施している。363の外面上位は摩滅のため調整方法は明らかでないが、その下方は縦位のミガキが施され、底面付近はナデ調整される。内面はナデ調整により整えられる。364は摩滅が激しく、調整方法は不明である。365は鉢の口縁部から底部である。口縁部外面は横ナデされ、肩部外面は縦位のハケ調整、体部外面下半は指ナデされる。口縁部内面は横位のハケ調整がなされ、体部内面は指ナデにより調整される。古墳時代初頭に属するものと思われる。366は鉢の体部から底部に至る部分である。外面にはハケ目と思われる調整痕が見られ、内面は全体に板ナデを施したものと見られる。367～369・371～373は壺の口縁部である。367はヒサゴ壺と呼ばれる器形をなす。摩滅のため調整方法は判然としないが、内面はナデ調整されている。368の口唇部外面は横ナデされており、頸部外面はハケ調整と思われる。口縁部内面は横ナデされ、頸部内面は指ナデと思われる。369は折り返し口縁を持つ。調整方法は内外面ともにナデと思われる。370は複合口縁を持つ壺の口縁部から体部である。外面は、口縁部端部に横ナデが施され、その下方は斜位のハケ調整がなされている。体部はハケ調整の後、横位のミガキ調整を施したようである。内面は、口縁部端部は横ナデされ、その下方はハケ調整後、板ナデされたものと思われる。体部はナデ調整がなされており、板ナデと指頭の痕跡が部分的に見られる。368・370の帰属時期は古墳時代初頭と思われる。371の外面はナデ調整されており、内面もおそらくナデ調整されているものと思われる。372・373は折り返し口縁を持つ。372の頸部外面は、ハケ調整の後、縦位のミガキがなされている。内面には縄文がわずかに確認でき、その下方にハケ目と思われる調整痕が観察できる。373は摩滅が激しく調整方法は不明であるが、口縁の折り返し部分の直下にわずかにハケ目が見られる。371～373はいずれも弥生時代後期後

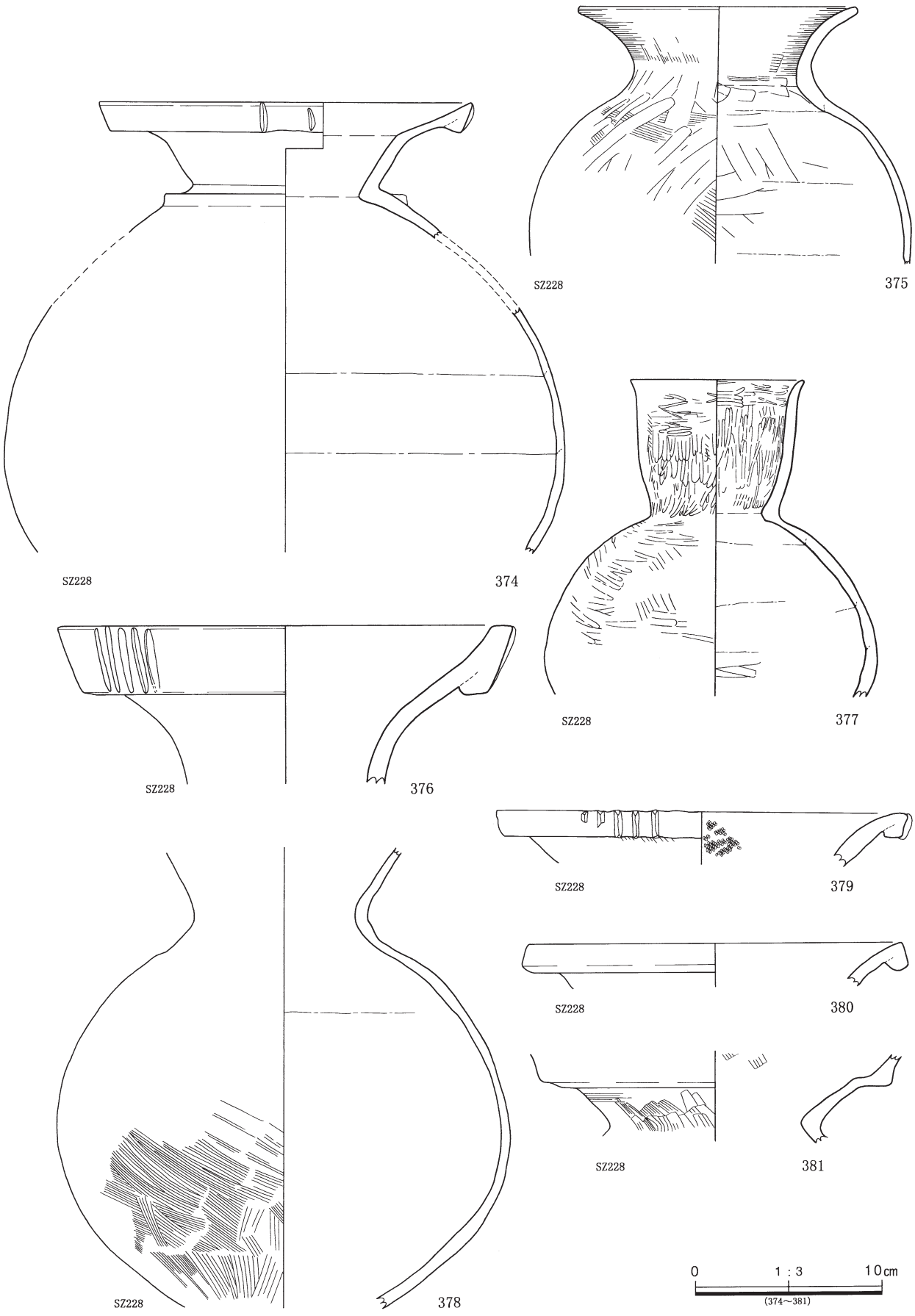


第102図　方形周溝墓出土遺物19

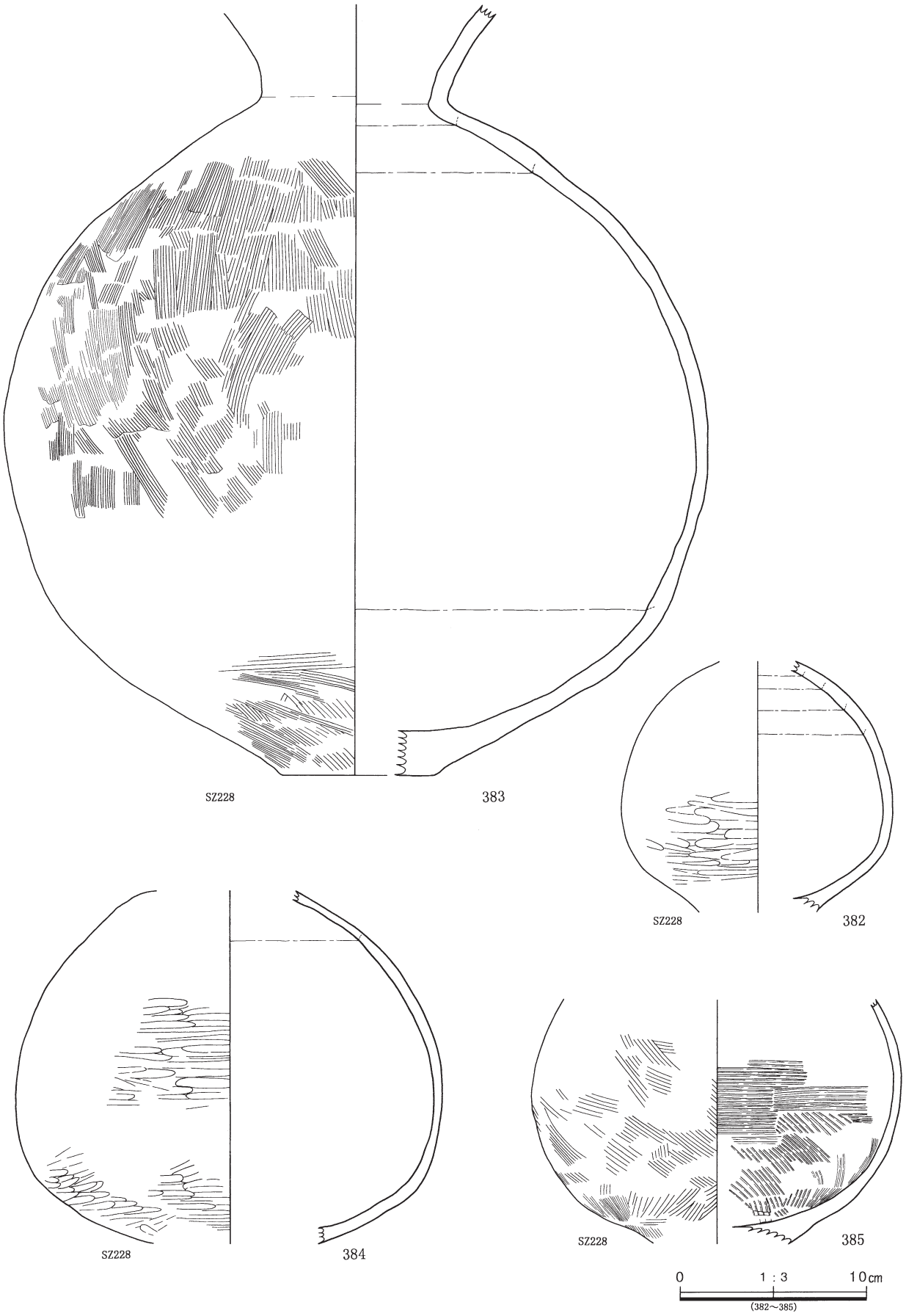


第103図　方形周溝墓出土遺物20

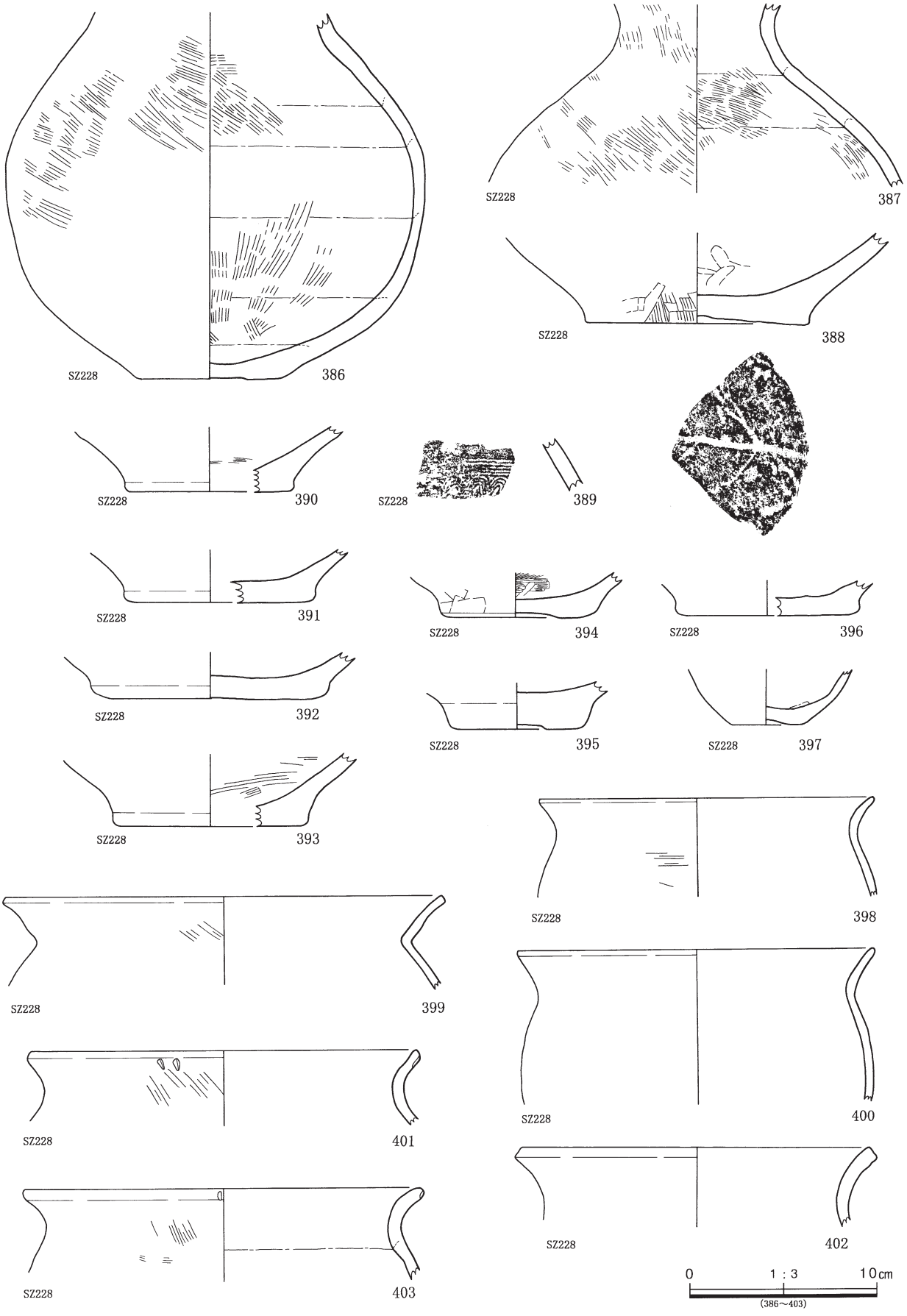
半に帰属するものと思われる。374は折り返し口縁を持つ壺の口縁部から頸部と体部の破片である。口唇部外面には、２つで一組と思われる浮文が貼り付けられている。口縁部から肩部にかけての外面はナデ調整される。肩部外面上位には幅５mm程の突帯が一周するように取り付けられている。古墳時代初頭に属するものと思われる。375は壺の口縁部から体部半ばに至る部分である。球形胴をなし、口縁は外反する。口縁部外面はハケ調整後、横ナデされる。頸部から体部半ばにかけての外面はハケ調整の後、指ナデされている。また、炭化物付着のため、部分的に黒く煤けている。口縁部内面は横ナデされており、一部ハケ目も見られる。頸部から体部半ばにかけての内面は板ナデされる。古墳時代前期前半に属するものと思われる。376は複合口縁を持つ壺の口縁部破片である。摩滅が激しく調整方法は不明であるが、口縁部外面には棒状浮文が貼り付けられている。帰属時期は弥生時代後期後半と考えられる。377はヒサゴ壺の口縁部から体部にかけての部分である。外面はミガキ調整が施されているが、一部ハケ目も確認できる。口縁部内面は横位、頸部内面は縦位のミガキ調整がなされている。体部内面は、表面剥落のため調整方法は明らかでないが、中程で指ナデの痕が観察できる。外面には炭化物の付着が見られる。378は壺の頸部から体部である。表面が剥落しており、調整方法の不明な箇所が多いが、体部下半には斜位のハケ調整痕が見られる。377・378はともに古墳時代初頭に帰属すると考えられる。379・380は折り返し口縁を持つ壺の口縁部破片である。379は口唇部外面に棒状浮文が貼り付けられている。口唇部のすぐ下方にはハケ目がわずかに見られる。内面には縄文のような文様が施されているが、判然としない。380の外面はナデ調整されており、内面もおそらくナデ調整と思われる。381は壺の頸部である。頸部外面上端は横ナデされ、その下方は斜位のハケ調整がなされる。口縁部内面にはハケ目が見られるが、それより下方は摩滅のため調整方法は不明である。古墳時代前期前半に帰属するものと思われる。382～385は壺の体部である。382の体部外面上半は摩滅のため調整方法が不明であるが、下半は横位のミガキ調整が施されている。内面はナデ調整により整えられる。383の頸部から肩部にかけての外面と底面はナデ調整され、体部外面はハケ調整されている。内面全体はナデ調整が施される。384の外面は剥落している箇所が多いが、横位のミガキ調整痕が部分的に見られる。体部下位では粗いハケ目がわずかに残る部分もある。内面は全体的にナデ調整がなされる。385の外面は斜位のハケ調整が施されており、体部半ばではハケ目をナデ消している。体部内面中程は横位のハケ調整がなされるが、下位は斜位のハケ調整が施されている。386は壺の体部から底部である。体部外面上半には斜位のハケ目が見られるが、下半は摩滅しているため判然としない。内面も摩滅しているところがあるが、全体的にハケ調整がなされている。383・384・386はいずれも古墳時代初頭に属するものと思われる。387は壺の頸部から体部にかけての部分である。外面は、頸部が縦位のハケ調整であり、肩部から体部にかけては斜位のハケ調整であると思われる。頸部内面は横ナデされており、肩部から体部にかけての内面にはハケ目が見られる。388・390～397は壺の底部である。388の外面は摩滅のため調整方法は明らかでないが、ハケ目が見られ、その上に一部板ナデを施したものと思われる。内面は指ナデしたものと見られる。底面には木葉痕が確認できる。389は壺の肩部破片と思われる。内面はナデ調整され、外面には水平方向に５本の直線文が施され、その下方に４本の波状文が施文される。390の外面はナデ調整され、内面はハケ調整後にナデ調整を施したものと思われる。391・392・396はいずれも内外面ともにナデ調整により整えられる。393の外面はナデ調整、内面はハケ調整される。394の外面は板ナデされる。内面はハケ調整されており、一部ハケ目の上からナデ調整されている箇所がある。395は摩滅のため調整方法は明確でないが、内外面ともにナデ調整と思われる。397は内外面ともにナデ調整されており、内面には指頭痕が見られる。398～403は台付甕の口縁部破片である。398の口縁部外面はナデ調整、肩部外面は横位のハケ調整と思われる。内面はナデ調整であろうか。399は頸部外面に一部斜位のハケ目が見られ、内面はナデ調整される。頸部の屈曲が顕著であり、「くの字」を呈する。古墳時代前期前半に帰属する



第104図　方形周溝墓出土遺物21



第105図　方形周溝墓出土遺物22



第106図　方形周溝墓出土遺物23

ものと思われる。400は内外面ともにナデ調整と思われる。401は外面にハケ調整が施されており、口唇部にキザミを持つ。内面はおそらくナデ調整と思われる。402は摩滅のため調整方法が判然としないが、内外面ともにナデ調整と思われる。403も摩滅が激しいが、口唇部外面にキザミを持ち、頸部外面はハケ調整、口縁部内面はナデ調整であると思われる。404・405は弥生時代後期後半に帰属する台付甕の脚部である。404は脚部外面上端に縦位のハケ目が見られる以外は、摩滅のため調整方法は不明である。405は内外面ともにナデ調整が施され、体部側の外面には指頭痕が残る。406は台石であり、一部に敲打痕が見られる。

SZ200（第107図）

407は砥石であり、両面に研磨痕が確認できる。

SZ446（第107図）

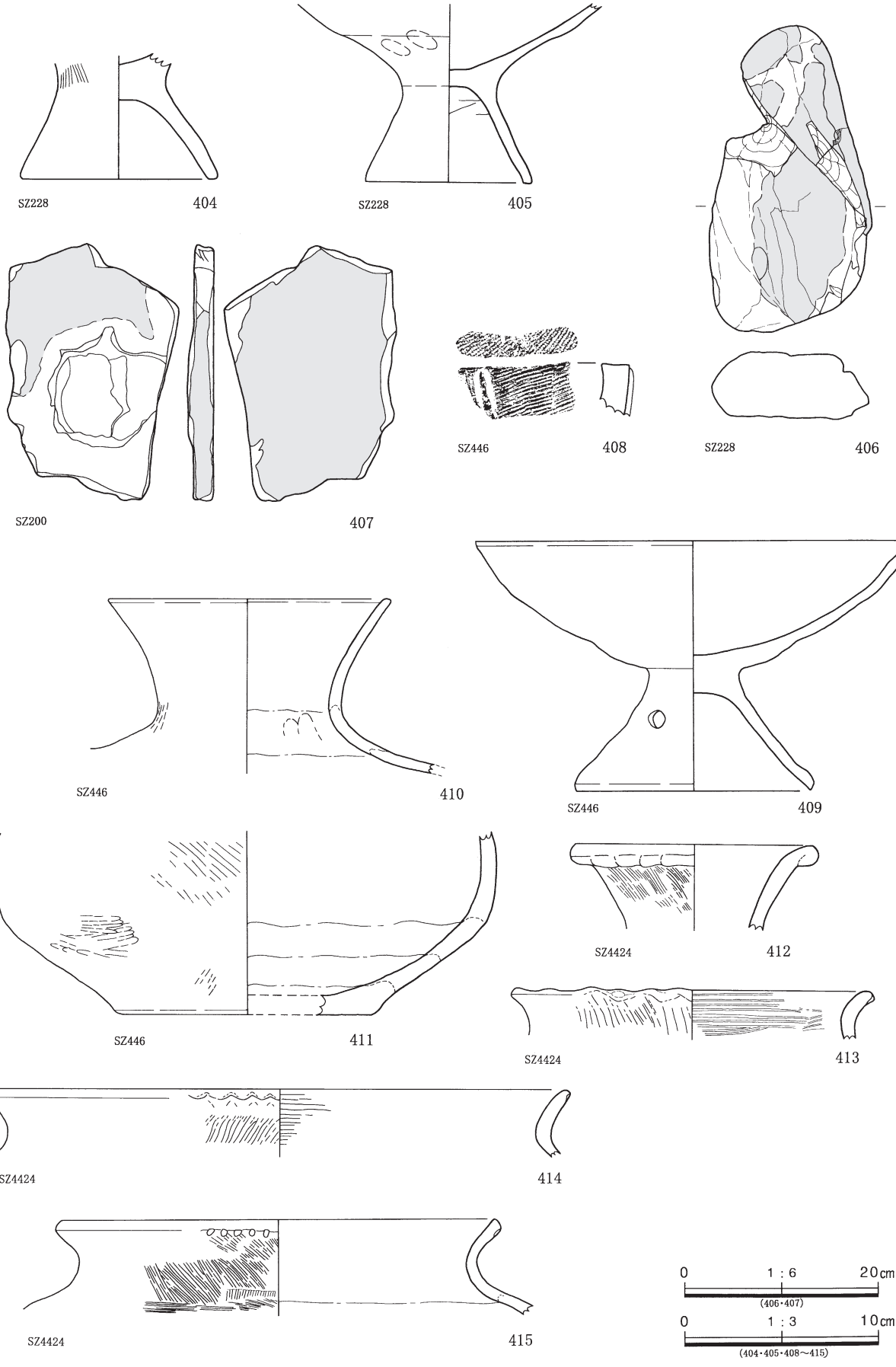
408は壺の口縁部破片である。口唇部外面に斜位のハケ調整がなされ、その上に棒状浮文が貼り付けられている。口縁部内側の平坦面には縄文が施されている。409は高坏である。内外面ともに摩滅が激しいため調整方法は知り得ない。脚部の三方に透かしを持つ。410は壺の口縁部から頸部である。全体的に摩滅しているが、頸部外面に薄くハケ目が認められる箇所がある。内面は全体にナデ調整されていると思われ、頸部には指ナデと思われる痕が残る。409・410はともに古墳時代初頭に属するものと思われる。411は弥生時代後期後半に帰属する壺の体部から底部である。外面には斜位のハケ目が見られ、横位のミガキ痕も見られる。内面は摩滅しているところが多く判然としないが、全体にナデ調整が施されているものと思われる。

SZ4424（第107図）

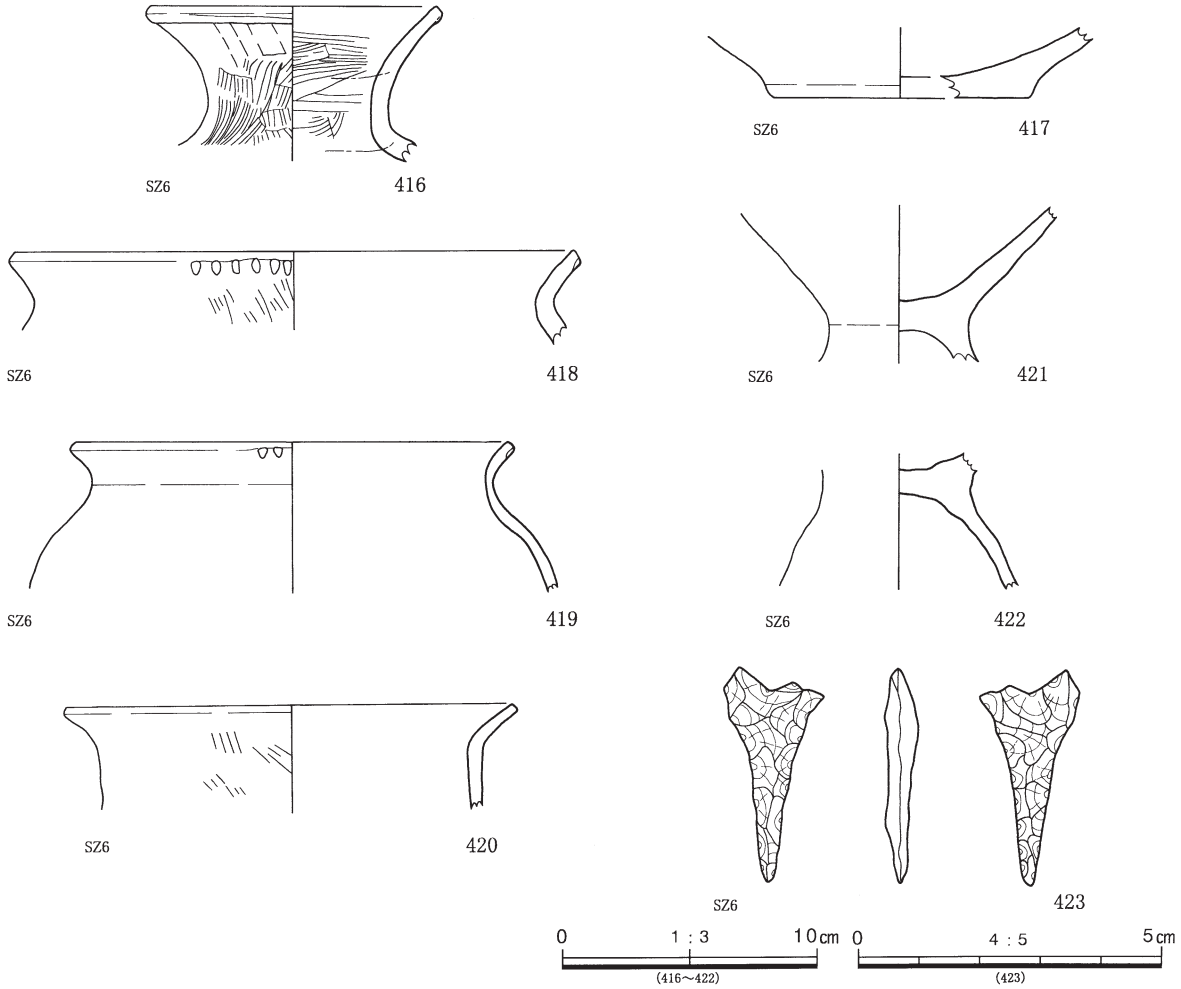
412は折り返し口縁を持つ壺の口縁部破片である。口唇部外面には指頭による押圧と見られる痕跡が残る。頸部外面にはハケ目が見られるが、下部は摩滅している。内面には縄文らしき文様が見られるが、摩滅のため判然としない。413・414は台付甕の口縁部破片である。413の口縁部は指頭により波状に縁取られる。頸部外面は縦方向のハケ調整と見られ、内面は横位のハケ調整がなされる。414の口縁部も波状に成形されており、指頭によるものと思われる。頸部外面は斜位のハケ調整が施されており、内面は横位のハケ調整がなされている。415は台付甕の口縁部と頸部の破片である。口唇部外面にはキザミが施されている。頸部外面には斜位のハケ調整がなされるが、その下方は横位へとハケ目の方向が変わるようである。

SZ6（第108図）

416は壺の口縁部である。口唇部外面はナデ調整により整えられるが、端部はハケ調整される。頸部外面は縦位のハケ調整がなされる。口縁部内面はハケ調整後、ナデ調整が施されており、頸部内面は横位のハケ調整がなされる。417は壺の底部破片である。内外面はともにナデ調整されている。418〜420は台付甕の口縁部破片である。口唇部外面にキザミを持つもの（418・419）と持たないもの（420）に分けられる。418の頸部外面には縦位のハケ調整がなされ、内面はナデ調整される。419の調整方法は内外面ともにナデ調整と思われる。420の頸部から体部にかけての外面にはハケ目が見られる。頸部以下が外側へ張り出さず、垂直に下降することから、418・419と異なった器形となることが推定される。421・422は台付甕の体部から脚部である。421は内外面ともにナデ調整される。422は全体的に摩滅しており調整方法は明らかでないが、体部側の内面はナデ調整されている。423は石錐であり、先端部に使用痕が認められる。



第107図　方形周溝墓出土遺物24



第108図　方形周溝墓出土遺物25

第１表　掘立柱建物跡一覧表

挿図番号	遺構番号	グリッド	間数		柱本数	分類	規模（m）		面積（㎡）	桁行方向	備考
			梁間	桁行			梁間(短軸)	桁行(長軸)			
6	80014	F・G-13	1	3	8	Ⅰ	4.0	7.4	29.6	N-44°-W	
7	80057	E・F-8	1	4	10	Ⅰ	4.3	10.4	44.7	N-26°-W	
8	80001	E-4・5	1	2	6	Ⅱ	4.0	5.3	21.2	N-42°-W	
9	80002	D・E-5	1	2	5	Ⅱ	3.7	4.6	17.0	N-17°-W	
10	80004	F・G-4	1	2	6	Ⅱ	3.9	6.8	26.5	N-37°-W	
11	80005	E-5・6	1	2	6	Ⅱ	3.0	3.8	11.4	N-6°-E	
11	80008	G-8	1	2	6	Ⅱ	2.6	2.9	7.5	N-50°-W	
12	80010	H・I-9	1	2	6	Ⅱ	4.1	5.4	22.1	E-46°-N	東西棟
13	80011	I-10	1	2	6	Ⅱ	3.8	4.4	16.7	N-56°-W	
14	80058	G-10	1	2	4	Ⅱ	3.1	4.1	12.7	N-28°-W	
14	80059	G-11	1	2	6	Ⅱ	3.2	3.7	11.8	N-39°-W	
15	80012	J-11	1	2	6	Ⅱ	4.2	5.8	24.4	N-38°-W	
16	80013	I-12	1	2	6	Ⅱ	4.4	6.0	26.4	N-55°-W	
17	80017	H-13	1	2	6	Ⅱ	3.5	4.4	15.4	N-30°-W	
17	80060	J・K-14	1	2	6	Ⅱ	2.7	3.0	8.1	N-33°-W	
18	80025	F-15	1	2	5	Ⅱ	3.2	4.0	12.8	N-11°-W	
19	80026	L-15	1	2	6	Ⅱ	4.0	5.2	20.8	E-4°-N	東西棟
20	80027	L-17	1	2	6	Ⅱ	4.4	5.3	23.3	N-15°-W	
21	80028	L-18	1	2	6	Ⅱ	3.8	6.1	23.2	N-20°-W	
22	80029	J-18	1	2	6	Ⅱ	2.9	3.5	10.2	N-28°-W	
22	80061	I・J-19・20	1	2	6	Ⅱ	2.2	4.1	9.0	E-2°-N	東西棟
23	80030	L-20	1	2	5	Ⅱ	3.0	4.1	12.3	N-26°-W	
24	80032	N-20・21	1	3	8	Ⅱ	3.3	5.6	18.5	N-15°-W	
25	80034	N-22	1	2	6	Ⅱ	4.0	5.1	20.4	N-38°-W	
25	80062	H-19・20	1?	2	3	Ⅱ	-	6.0	-	E-20°-N	東西棟・一部調査区外
26	80035	N-22・23	2	2	6	Ⅱ	3.8	5.5	20.9	E-62°-N	東西棟
27	80039	I-24	1	2	5	Ⅱ	2.8	4.0	11.2	N-5°-E	
27	80040	J-24	1	3	8	Ⅱ	2.7	3.6	9.7	N-16°-E	
28	80041	I-25	1	2	6	Ⅱ	3.4	4.7	16.0	N-6°-E	
29	80045	L・M-25	1	4	8	Ⅱ	2.8	4.6	12.9	N-39°-W	
30	80046	M・N-24	1	2	6	Ⅱ	3.6	4.8	17.3	E-43°-N	東西棟
31	80048	O-25	1	2	6	Ⅱ	2.9	4.1	11.9	N-29°-W	
32	80050	J・K-27	1	2	6	Ⅱ	2.8	3.9	10.9	N-24°-W	
32	80051	M-27・28	1	2	6	Ⅱ	2.9	5.1	14.8	E-18°-S	東西棟
33	80054	P・Q-32	1	2	6	Ⅱ	3.5	4.6	16.1	E-8°-S	東西棟
33	80055	R-30	1	2	6	Ⅱ	3.3	3.9	12.9	N-24°-W	
34	80056	R-30	1	2	6	Ⅱ	3.8	5.1	19.4	N-43°-W	
35	80003	F-4	1	1	4	Ⅲ	2.6	2.7	7.0	N-40°-W	
35	80006	E-5・6	1	1	4	Ⅲ	2.9	3.4	9.9	N-47°-W	
36	80007	F・G-5	1	1	4	Ⅲ	2.9	3.0	8.7	N-44°-W	
12	80009	I-9	1	1	4	Ⅲ	2.6	3.2	8.3	N-44°-W	
36	80015	G-13	1	1	4	Ⅲ	3.6	3.6	13.0	N-36°-W	
37	80016	H-12・13	1	1	4	Ⅲ	2.3	2.5	5.8	N-24°-W	
37	80018	J-13	1	1	4	Ⅲ	2.8	2.9	8.1	N-15°-W	
38	80019	J-13	1	1	4	Ⅲ	3.2	4.0	12.8	N-20°-W	
38	80020	J-13	1	1	4	Ⅲ	2.6	2.8	7.3	N-27°-W	
39	80021	J-12	1	1	4	Ⅲ	4.0	5.4	21.6	N-29°-W	
40	80022	J・K-12・13	1	1	4	Ⅲ	4.3	4.4	18.9	N-34°-E	
40	80023	K-13	1	1	4	Ⅲ	2.9	3.8	11.0	N-32°-W	
39	80024	K-13・14	1	1	4	Ⅲ	2.7	3.0	8.1	E-55°-N	東西棟
24	80031	N-20・21	1	1	4	Ⅲ	2.8	3.6	10.1	N-14°-W	
41	80033	N-21・22	1	1	4	Ⅲ	2.6	3.0	7.8	N-49°-W	
41	80036	N-22・23	1	1	4	Ⅲ	2.5	3.3	8.3	N-39°-W	
42	80037	N-23	1	1	4	Ⅲ	3.2	3.8	12.2	N-36°-W	
42	80038	F-22・23	1	1	4	Ⅲ	1.8	3.0	5.4	N-37°-W	
43	80042	L-24・25	1	1	4	Ⅲ	1.3	2.2	2.9	E-30°-N	東西棟
43	80043	L-24・25	1	1	4	Ⅲ	2.1	2.9	6.1	E-46°-N	東西棟
44	80044	L・M-24	1	1	4	Ⅲ	1.6	2.0	3.2	E-44°-N	東西棟
44	80047	N・O-24・25	1	1	4	Ⅲ	1.8	1.9	3.4	N-13°-E	
45	80049	P・Q-25・26	1	1	4	Ⅲ	2.5	3.0	7.5	N-3°-W	
45	80052	I-31	1	1	4	Ⅲ	2.0	2.8	5.6	N-14°-W	
46	80053	P-31	1	1	4	Ⅲ	3.0	3.4	10.2	N-35°-E	
46	80063	S-32・33	1	1	3	Ⅲ	3.3	3.7	12.2	N-0°	

第 2 表　方形周溝墓一覧表

挿図番号	遺構番号	グリッド	周溝墓を構成する溝	規模（m）		主軸方位	備考
				東西	南北		
53	SZ18010	L・M-15	18010	-	-	-	
53	SZ52642	G-19・20	52642、52646、55025	5.3	(5.4)	N-22°-W	
54	SZ52423	F・G-18・19	52423	3.3	(4.1)	N-20°-W	
54	SZ52639	F・G-19	52639、52634、52695	4.8	(5.6)	N-30°-W	
55	SZ51497	I・J-17・18	51497、51499	13.9	8.7	N-21°-W	
56	SZ52284	H・I-19・20	52284、50897、51503	10.1	10.4	N-29°-W	
57・58	SZ50861	I-20	50861	8.6	8.0	N-25°-W	
57・58	SZ50871	I・J-20・21	50871、50876、50872、52178	6.5	9.8	N-15°-W	
59	SZ51505	I・J-18・19	51506、52036、52028、51505	5.3	6.1	N-37°-W	
59	SZ51507	J-19	52939、52940、51508、51507	6.9	6.5	N-17°-W	
59	SZ54807	I・J-19	54807、51504、52043	-	-	-	
60	SZ52863	J・K-18・19	52863、52039、52038	-	-	N-25°-W	主体部 SK52866
61	SZ50902	J・K-20	50902、51119、51511	6.2	7.6	N-22°-W	
61	SZ51149	J-21、K-20・21	51148、51149、51402、51397、52228	5.5	6.3	N-24°-W	
62・63	SZ50880	J・K・L-19、K・L-20	50880	13.1	12.0	N-8°-W	
64	SZ52155	H・I-22、I-23	52155、52212、52204	10.5	(8.9)	N-2°-W	
65	SZ51174	J・K-21・22	52912、51174	10.0	10.5	N-9°-W	
65	SZ51234	J・K-22・23	51234	13.1	10.5	N-9°-W	
65	SZ51175	I・J-22・23	51175、52913、52213	12.2	16.4	N-13°-W	
66	SZ5171	J-28・29	5171	8.6	8.9	N-20°-W	
67	SZ5192	I-28・29、J-29	5192	-	-	N-24°-E	
68	SZ5009	J・K-28～30	5009、5011、5023、5038	16.1	14.3	N-23°-E	
69	SZ2579	K-30～32、L-31・32	5188、5193	-	14.7	N-26°-E	
70	SZ2002	M・N-28・29	2044、2002、2033、3084	9.0	8.8	N-50°-W	
71	SZ2575	L-30、M-29～31、N-30・31	2575	15.6	13.3	N-25°-W	
72	SZ317	L・M-31・32	317、2562、2561	10.3	10.0	N-46°-W	
73・74	SZ1900	O・P・Q-28～30	1900	23.7	23.5	N-18°-E	
75～77	SZ228	N・O・P-31・32	228	17.4	17.2	N-8°-E	
78	SZ827	P・Q-31	827、711、705、717	7.6	8.2	N-6°-E	
79	SZ200	P-32、Q-31・32	200、187、184、635	8.3	9.4	N-10°-E	
80	SZ176	Q・R-32	176、143、138	8.7	8.9	N-8°-W	
81	SZ446	R・S-31・32	1942、2521、449、446	12.4	11.0	N-12°-W	
81	SZ2605	S-31・32	2605、462	5.7	5.2	N-10°-W	
82	SZ4424	S-29・30、T-30	4424	11.3	-	N-23°-W	
82	SZ4399	T-30・31	4399、4393、4389	9.8	-	N-19°-W	
83	SZ6	T-31・32、U-32	4351、4383、341、2278	16.4	-	N-35°-W	

第３表　出土土器一覧表（１）

挿図No.	器種	遺構/溝		グリッド	層位	口径(cm)	低径(cm)	最大径(cm)	器高残存高(cm)	色調	部位	残存率	備考
1	壺	SH50542		P25	2層	(17.9)		(18.0)	(7.8)	7.5YR8/8橙色	口縁～頸部	25%	
2	壺	SH50542		P25･26	3層	(17.0)			(8.1)	2.5Y7/3浅黄色	口縁	40%	
3	壺	SH50542		P25	3層	21.4			(10.2)	7.5YR7/8黄橙色	頸部 口縁	100% 70%	
4	壺	SH50542		P25	上層	(11.7)			(2.0)	7.5YR7/6橙色	口縁	10%	
5	壺	SH50542		P25	下層	(9.3)			(3.1)	内:10YR7/6明黄褐色 外:7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	15%	
6	壺	SH50542		P25	下層	(16.0)			(2.8)	7.5YR7/6橙色	口縁	5％	
7	壺	SH50542		P25	2層			(13.8)		7.5YR7/6橙色･ 2.5Y7/2灰黄色	頸部～肩部	90%	
8	壺	SH50542		P26	覆土			(11.7)		7.5YR8/4浅黄橙色	頸部～肩部	100%	
9	壺	SH50542		P25	2層			(31.0)		7.5YR7/6橙色 10YR7/4にぶい黄橙色	体部	15%	
10	壺	SH50542		P25	1層		5.6	11.7	(13.8)	7.5YR8/8橙色	頸部～底部	100%	
11	壺	SH50542		P25	3層			(22.2)		5YR7/8橙色	頸部～体部	10%	
12	壺	SH50542		P24･25	2層		9.7		(14.4)	2.5YR7/8橙色	底部 体部	100% 25%	
13	壺	SH50542		P25	中層					内:2.5Y7/1灰白色 外:10YR7/2にぶい黄橙色	肩部	5％	
14	壺	SH50542		P25･26	上層					7.5YR8/6浅黄橙色	肩部	7％	
15	壺	SH50542		P25	3層		(6.0)		(8.4)	7.5YR7/6橙色 2.5Y7/4灰黄色	底部	20%	
16	壺	SH50542		P25･26	2層		6.4		(8.5)	7.5YR7/6橙色 10YR7/3にぶい黄橙色	底部	100%	
17	壺	SH50542		P25	2層		(11.0)		(4.6)	7.5YR7/6橙色 10YR7/4にぶい黄橙色	底部	80%	
18	壺	SH50542		P25	覆土		(9.0)		(3.5)	7.5YR7/6橙色	底部	50%	
19	壺	SH50542		P25･26	中層		(7.0)		(2.8)	内:10YR7/4にぶい黄橙色 外:7.5YR7/4にぶい橙色	底部	20%	
20	台付甕	SH50542		P25	中層	(19.2)			(1.6)	7.5YR8/2灰白色	口縁	3％	
21	台付甕	SH50542		P25	上層	(19.4)			(3.0)	2.5Y7/2灰黄色	口縁	8％	
22	台付甕	SH50542		P25	覆土	(21.2)			(4.7)	7.5YR6/4にぶい橙色･ 7.5YR7/6橙色	口縁	15%	
23	台付甕	SH50542		P25	上層	(29.2)			(5.2)	5YR7/6橙色	口縁	10%	
24	台付甕	SH50542		P25	上層				(2.7)	10YR7/3にぶい黄橙色	脚部	20%	
29	壺	SB80001	70354	E5	覆土	(17.0)			(3.5)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	5％	
30	鉢	SB80002	70352	D5	覆土	(9.6)			(3.0)	7.5YR6/6橙色	口縁	25%	
31	壺	SB80004	70312 70007	F5	覆土		(10.0)		(1.7)	10YR6/3にぶい黄橙色	底部	15%	
32	壺	SB80005	70330	E6	覆土	(14.0)			(4.2)	7.5YR6/8橙色	口縁	30%	
33	台付甕	SB80005	70321	E6	覆土	(26.0)			(2.8)	7.5YR6/6橙色	口縁	5％	
34	台付甕	SB80005	70320	E6	覆土	(16.2)			(3.5)	10YR5/3にぶい黄褐色	口縁	10%	
35	台付甕	SB80011	15318	I9	覆土	(17.3)			(4.3)	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	15%	
36	壺	SB80011	15403	I16	覆土		(9.8)		(2.2)	7.5YR6/4にぶい橙色	底部	15%	
37	台付甕	SB80012	15746	J11	覆土	(18.0)			(6.7)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	5％	
38	壺	SB80013	14245	J11	覆土		(7.6)		(0.9)	10YR7/4にぶい黄橙色	底部	15%	
39	壺	SB80013	14245	J11	覆土	(17.8)			(5.2)	内:10YR6/3にぶい黄橙色 外:10YR7/6明褐色	口縁	5％	
40	壺	SB80013	14245	I12	覆土	(24.0)			(2.2)	10YR5/2灰黄褐色	口縁	5％	
41	台付甕	SB80026	13054	L15	覆土			(7.8)		10YR7/3にぶい黄橙色	脚部	10%	
42	壺	SB80028	54755	L18	覆土		(11.4)		(2.7)	10YR6/3にぶい黄橙色	底部	5％	
43	壺	SB80029	50749	J19	覆土		(5.4)		(1.8)	10YR6/4にぶい黄橙色	底部	25%	
44	台付甕	SB80032	51951	N21	覆土			(20.5)		10YR6/6明黄橙色	頸部	5％	
45	壺	SB80032	52062	N20	覆土	(14.0)			(1.1)	7.5YR6/6橙色	口縁	5％	
46	台付甕	SB80035	51865	N22	覆土		11.8		(8.85)	10YR6/2灰黄褐色	脚部	65%	
47	台付甕	SB80039	54094	I24	覆土			(7.1)		10YR7/4にぶい黄橙色	脚部	10%	
48	壺	SB80046	50048	N24	覆土	11.4			(7.1)	7.5YR5/6明褐色	口縁 頸部	80% 95%	
49	壺	SB80048	50122	O25	覆土		(9.0)		(2.4)	10YR6/4にぶい黄橙色	底部	25%	
50	壺	SB80054	644	Q32	覆土	(13.8)			(3.1)	7.5YR7/6橙色	口縁	15%	
51	壺	SB80051	3470	O28	覆土		(6.8)		(4.6)	7.5YR6/6橙色	底部	25%	
52	壺	SB80056	3344	R30	覆土	(26.0)			(2.0)	7.5YR6/6橙色	口縁	5％	
53	台付甕	SB80056	3344	R30	覆土	(19.0)			(1.4)	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	5％	
54	壺	SB80006	70134	F6	覆土	(13.0)			(2.4)	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	20%	
55	台付甕	SB80006	70134	F6	覆土	(19.0)			(3.0)	10YR6/6明黄褐色	口縁	5％	
56	壺	SB80007	70103	G5	覆土	(13.6)			(4.2)	内:10YR4/1褐灰色 外:10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	20%	
57	壺	SB80007	70103	G5	覆土			(10.7)		7.5YR6/6橙色	頸部	5％	
58	壺	SB80007	70103	G5	覆土		(6.0)		(2.0)	10YR5/3にぶい黄褐色	底部	40%	
59	壺	SB80007	70103	G5	覆土			(8.2)		10YR6/4にぶい黄橙色	頸部	5％	
60	壺	SB80015	14472	G13	覆土	(13.0)			(3.5)	7.5YR6/6橙色	口縁	15%	
61	壺	SB80019	13534	J13	覆土		(13.0)		(3.0)	10YR6/4にぶい黄橙色	底部	10%	
62	壺	SB80042	51330	L25	覆土					10YR6/4にぶい黄橙色	頸部～肩部	5％	
63	壺	SB80042	51314	L24･25	覆土		(8.6)		(1.8)	10YR7/4にぶい黄橙色	底部	35%	
64	台付甕	SB80042	51314	L24･25	覆土	(19.0)			(4.0)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	25%	
65	台付甕	SZ18010	18010	M15	3層	(17.7)	10.5		21.6	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁 脚部	40% 100%	
66	台付甕	SZ18010	18010	M15	3層	(14.0)			(5.9)	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	20%	
67	台付甕	SZ18010	18010	M15	覆土	(26.0)			(2.0)	7.5YR6/6橙色	口縁	5％	

第３表　出土土器一覧表（２）

挿図No.	器種	遺構/溝		グリッド	層位	口径(cm)	低径(cm)	最大径(cm)	器高残存高(cm)	色調	部位	残存率	備考
69	壺	SZ52642	52642	G19	覆土	(14.0)			(8.1)	7.5YR8/4浅黄橙色	口縁 頸部	20% 50%	
70	壺	SZ52642	52642	G９	３層			(20.4)		５YR7/6橙色 10YR6/4にぶい黄橙色	体部	25%	
71	壺	SZ52642	52642	G19	３層		(7.0)		(14.4)	10YR7/4にぶい黄橙色	底部	25%	
72	壺	SZ52642	55025	G19･20	４層		(6.6)		(2.4)	7.5YR6/6橙色	底部	40%	
73	壺	SZ52642	55025	G19･20	４層		(6.4)		(5.5)	10YR6/6明黄褐色	底部	100%	
75	壺	SZ51497	51497	I17	１層		(20.0)		(5.0)	7.5YR6/4にぶい橙色	口縁	25%	
76	壺	SZ51497	51497	I17	１層	(19.0)			(4.8)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	20%	
77	壺	SZ51497	51497	I17	覆土		(14.0)		(2.4)	7.5YR8/3浅黄橙色	口縁	20%	
78	台付甕	SZ51497	51497	I17	覆土		(22.0)		(2.3)	7.5YR8/1灰白色 ５YR6/4にぶい橙色	口縁	10%	
79	壺	SZ51497	51497	I17	１層		(7.4)		(3.8)	５YR7/6橙色	底部	20%	
83	壺	SZ52284	52284	I19	覆土	(33.6)			(5.9)	10YR7/3にぶい黄橙色	口縁	７%	
84	壺	SZ52284	52284	H19	覆土	(29.6)		(30.7)	(3.4)	7.5YR7/3にぶい橙色	口縁	３%	
85	壺	SZ52284	52284	I19	覆土	(20.0)			(4.0)	５YR7/6橙色	口縁	５%	
86	壺	SZ52284	52284	I19	覆土	(20.5)			(4.2)	7.5YR7/3にぶい橙色	口縁	７%	
87	壺	SZ52284	51503	I19	２層	(19.4)			(4.9)	7.5YR7/6橙色	口縁	５%	
88	鉢	SZ52284	52284	H19	覆土	(16.4)			(3.8)	内：５YR6/4にぶい橙色 外:2.5YR7/4浅黄色・ ５Y4/1灰色	口縁	５%	
89	壺	SZ52284	52284	I19	覆土	(19.7)			(2.7)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	20%	
90	壺	SZ52284	52284	I19	覆土	(15.9)			(4.2)	2.5YR7/4浅黄色	口縁	15%	
91	壺	SZ52284	51503	I20	２層		(8.6)		(2.7)	内:7.5Y7/1灰白色 外:7.5YR6/1褐灰色	底部	20%	
92	壺	SZ52284	52284	H19･20	覆土		(9.8)		(2.9)	内:2.5YR7/3浅黄色 外：５YR7/6橙色	底部	15%	
93	壺	SZ52284	51503	I21	２層		(7.0)		(2.1)	7.5YR7/4にぶい橙色	底部	25%	
94	台付甕	SZ52284	51503	I19	２層	(19.0)			(3.2)	内:7.5YR7/6橙色 外:2.5YR5/2暗灰黄色	口縁	３%	
95	台付甕	SZ52284	51503	H20	２層				(4.6)	10YR7/6にぶい明黄褐色・ 2.5YR6/6橙色	接合部	95%	
96	台付甕	SZ52284	51503	I19	２層	(26.1)			(5.8)	５YR7/6橙色	口縁	８%	
97	壺	SZ50861	50861	I20	１層		(6.1)		(18.3)	５YR6/6橙色・10YR5/2灰黄褐色･7.5YR8/6浅黄橙色	頸部～底部	65%	
98	壺	SZ50861	50861	I20	覆土	(26.8)			(3.5)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	15%	
99	壺	SZ50861	50861	I20	覆土	(22.0)			(3.3)	7.5YR7/6橙色	口縁	15%	
100	壺	SZ50861	50861	I20	覆土	(16.0)			(4.7)	7.5YR7/6橙色	口縁	20%	
101	台付甕	SZ50861	50861	I20	覆土	(26.0)			(4.3)	2.5YR6/3にぶい黄色・ 10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	10%	
102	高坏	SZ50871	50871	I20 J21	１層	20.9	10.2		16.0	10YR6/2灰黄褐色	脚部 坏部	90% 60%	
103	壺	SZ50871	50871	J21 I20･21	１層	(12.6)			(10.8)	５YR6/6橙色	口縁	50%	
104	壺	SZ50871	50871	I20 J21	７層	(25.9)			(5.2)	５YR7/6橙色	口縁	３%	
105	壺	SZ50871	50871	I20･21 J21	１層	(15.4)		(15.8)	(3.8)	7.5YR8/6浅黄橙色	口縁	10%	
106	壺	SZ50871	50871	I20･21 J21	１層	(14.4)			(6.1)	7.5YR7/6橙色	口縁	30%	
107	壺	SZ50871	50871	I･J20･21	１層	(19.9)			(3.4)	7.5YR7/6橙色	口縁	７%	
108	壺	SZ50871	50871	I20･21 J21	１層	(19.6)			(5.6)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	８%	
109	壺	SZ50871	50871	I20･21 J21	１層	(15.1)			(3.7)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	20%	
110	壺	SZ50871	50871	I20･21 J21	１層	(21.8)		(22.4)	(3.35)	7.5YR7/6橙色	口縁	５%	
111	壺	SZ50871	50871	I20･21 J20	１層	(19.5)			(2.3)	５YR7/6橙色	口縁	５%	
112	壺	SZ50871	50871	I･J-20･21	１層	(18.4)			(6.8)	５YR7/6橙色	口縁	20%	
113	壺	SZ50871	50871	I20･21 J21	３層			(14.2)	(5.7)	7.5YR8/6浅黄橙色	頸部	20%	
114	壺	SZ50871	50871	I20 J21	３層	(29.9)			(5.3)	10YR5/3にぶい黄褐色	口縁	５%	
115	壺	SZ50871	50871	I20	１層		5.0		(4.0)	内:10YRY6/3にぶい黄橙色 外:7.5YR7/6橙色	底部	100%	
116	壺	SZ50871	50871	I20 J21	２層		(8.0)		(2.5)	内:2.5Y6/2灰黄色 外:10R6/6赤橙色	底部	25%	
117	壺	SZ50871	50871	I20	１層		(7.4)	(12.8)	(2.85)	10YR7/6明黄褐色	底部	20%	
118	壺	SZ50871	50871	I20･21 J21	１層		(9.0)	(13.6)	(3.7)	５YR7/6橙色	底部	40%	
119	壺	SZ50871	50871	I20･21 J21	１層		(5.0)	(13.0)	(6.3)	10YR7/4にぶい黄橙色	底部	５%	
120	壺	SZ50871	50871	I･J20･21	１層		(11.0)		(2.0)	7.5YR7/4にぶい橙色	底部	40%	
121	壺	SZ50871	50871	I･J20･21	１層		(9.8)		(2.6)	内:10YRY4/1褐灰色 外:7.5YR7/2明褐灰色	底部	40%	
122	壺	SZ50871	50871	I20･21 J21	２層		(11.1)		(3.5)	7.5YR8/6浅黄橙色	底部	20%	
123	壺	SZ50871	50871	I20･21 J21	１層		(9.8)		(5.5)	内:2.5Y6/2灰黄色 外:7.5Y7/1灰白色	底部	20%	
124	台付甕	SZ50871	50871	I･J20	覆土		10.2		(6.9)	５YR7/6橙色	脚部	100%	

第３表　出土土器一覧表（３）

挿図No.	器種	遺構/溝		グリッド	層位	口径(cm)	低径(cm)	最大径(cm)	器高残存高(cm)	色調	部位	残存率	備考
125	台付甕	SZ50871	50871	I20･21 J21	覆土	(15.0)			(4.5)	内：5 YR6/6橙色 外:2.5YR7/2灰黄色	口縁	15%	
126	台付甕	SZ50871	50871	I20 J21	1 層	(24.9)			(3.0)	7.5YR6/3にぶい褐色	口縁	10%	
127	台付甕	SZ50871	50871	I･J20	1 層	(13.9)			(4.3)	内:10YRY8/2灰白色 外:10YR5/1褐灰色	口縁	15%	
128	台付甕	SZ50871	50871	I20 J21	1 層	(22.9)			(3.8)	内:7.5YR8/4浅黄橙色 外：5 YR7/4にぶい橙色・ 2.5Y7/1灰白	口縁	5 %	
131	台付甕	SZ51507	51508	J19	覆土	(22.0)			(4.1)	7.5YR7/6橙色 10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	15%	
132	壺	SZ51149	51402	K21	1 層	(22.0)			(6.8)	内:7.5YR8/1灰白色・ 7/4にぶい橙色 外7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	10%	
135	鉢	SZ50880	50880	K19	1 層	(19.4)			(3.2)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	20%	
136	小型壺	SZ50880	50880	K19	2 層		4.8		(5.1)	7.5YR5/6明褐色	底部	100%	手捏ね
137	高坏	SZ50880	50880	K19	覆土	(14.0)			(7.2)	7.5YR6/4にぶい橙色	脚部	15%	
138	壺	SZ50880	50880	K･L19	覆土					10YR6/4にぶい黄橙色	肩部	5 %	
139	壺	SZ50880	50880	K19	1 層	(19.6)			(13.3)	5 YR7/6橙色	口縁 頸部	50% 100%	
140	壺	SZ50880	50880	K19	2 層	(20.0)			(2.35)	7.5YR7/6橙色	口縁	10%	
141	壺	SZ50880	50880	K･L19	覆土	(20.0)			(3.5)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	15%	
142	壺	SZ50880	50880	K19	覆土	(19.7)			(5.2)	内:2.5Y7/2灰黄色 外：5 YR7/6橙色	口縁	7 %	
143	壺	SZ50880	50880	K･L19	覆土	(14.0)			(3.9)	7.5YR6/4にぶい橙色	口縁	10%	
144	壺	SZ50880	50880	K19	2 層	13.4			(5.1)	7.5YR5/6明褐色	口縁～頸部	100%	
145	壺	SZ50880	50880	K20	覆土	(16.0)			(2.3)	10YR7/3にぶい黄橙色	口縁	20%	
146	壺	SZ50880	50880	K･L19	覆土	(20.0)			(3.5)	7.5YR6/6橙色	口縁	10%	
147	壺	SZ50880	50880	K19･20	覆土	(15.0)			(2.0)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	15%	
148	壺	SZ50880	50880	K19	2 層	(14.4)			(2.85)	7.5YR7/6橙色	口縁	35%	
149	壺	SZ50880	50880	L19･20	覆土	(14.9)			(3.6)	7.5YR6/6橙色	口縁	10%	
150	壺	SZ50880	50880	K19	2 層	(22.0)			(9.2)	7.5YR6/6橙色	口縁	30%	
151	壺	SZ50880	50880	K19	2 層	(23.8)			(1.6)	7.5YR7/6橙色	口縁	5 %	
152	壺	SZ50880	50880	K19	1 層		7.5	(13.6)	(16.8)	5 YR6/4にぶい橙色	底部 体部	100% 40%	
153	壺	SZ50880	50880	K19	1 層			(24.0)		5 YR7/6橙色	頸部	90%	
154	壺	SZ50880	50880	K20	2 層	20.2	10.2	25.8	33.8	5 YR7/3にぶい橙色	口縁～底部	80%	
155	壺	SZ50880	50880	K19	2 層		7.5		(15.2)	7.5YR6/6橙色	底部 体部	98% 30%	
156	壺	SZ50880	50880	K19	2 層	(11.0)	7.3		20.7	7.5YR7/6橙色	口縁 底部	30% 100%	
157	壺	SZ50880	50880	K19	覆土		(8.6)		(2.8)	10YR6/3にぶい黄橙色	底部	25%	
158	壺	SZ50880	50880	K19	覆土		(6.0)		(2.25)	7.5YR7/6橙色	底部	95%	
159	壺	SZ50880	50880	K19	2 層		(9.4)		(3.6)	内:2.5Y7/3浅黄色 外：5 YR7/6橙色	底部	25%	
160	壺	SZ50880	50880	K19	1 層		(9.0)		(2.9)	7.5YR8/4浅黄橙色	底部	20%	
161	壺	SZ50880	50880	K19	2 層		(8.8)		(3.7)	内:2.5Y7/3浅黄色 外：5 YR7/4にぶい橙色	底部	30%	
162	台付甕	SZ50880	50880	K19	覆土	(24.4)			(2.5)	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	5 %	
163	台付甕	SZ50880	50880	K19	2 層	(16.0)			(6.3)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	25%	
164	台付甕	SZ50880	50880	K19	2 層	(24.0)			(4.2)	10YR5/3にぶい黄橙色	口縁	5 %	
165	台付甕	SZ50880	50880	K19	覆土	(16.6)			(4.5)	7.5YR6/6橙色	口縁	10%	
166	台付甕	SZ50880	50880	K19	2 層	(18.2)			(4.8)	7.5YR5/6明褐色	口縁	25%	
167	台付甕	SZ50880	50880		覆土	(20.6)			(4.3)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	5 %	
168	台付甕	SZ50880	50880	K･L19	2 層	(21.0)			(3.8)	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	40%	
169	台付甕	SZ50880	50880	K19	2 層		(8.0)		(12.0)	7.5YR6/6橙色	脚部	80%	
170	台付甕	SZ50880	50880	K19	2 層		(12.0)		(6.4)	7.5YR6/6橙色	脚部	40%	
171	台付甕	SZ50880	50880	K19	覆土		(9.2)		(6.2)	10YR6/4にぶい黄橙色	脚部	10%	
172	台付甕	SZ50880	50880	K19	1 層		(15.0)		(7.3)	7.5YR5/6明褐色	脚部	40%	
176	壺	SZ52155	52155	I22	3 層		8.8		25.3	7.5YR8/6浅黄橙色・ 7/4にぶい橙色	口縁～底部	50%	底部穿孔
177	高坏	SZ51174	51174	J21	1 層		(12.4)		(11.1)	7.5YR7/6橙色	脚部	75%	
178	鉢	SZ51174	51174	J22	覆土	(21.0)			(3.5)	7.5YR6/4にぶい橙色	口縁	10%	
179	壺	SZ51174	51174	J21 K22	覆土	(16.0)			(2.5)	7.5YR6/4にぶい橙色	口縁	15%	
180	壺	SZ51174	51174	J21･22	覆土	(12.4)			(5.0)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	10%	
181	壺	SZ51174	51174	J21 K22	覆土		(7.0)		(3.0)	7.5YR8/4浅黄橙色	底部	15%	
182	台付甕	SZ51175	51175	J23	覆土		(11.0)		(6.3)	10YR7/4にぶい黄橙色	脚部	20%	
183	台付甕	SZ51174	51174	J21 K22	覆土		(12.0)		(5.5)	10YR7/4にぶい黄橙色	脚部	20%	
184	台付甕	SZ51174	51174	J21	3 層			(7.8)		10YR7/3にぶい黄橙色	接合部	100%	
185	台付甕	SZ51174	51174	J21 K22	覆土	(27.0)			(2.8)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	10%	
186	台付甕	SZ51174	51174	J21･22	覆土	(22.6)			(2.8)	7.5YR6/6橙色	口縁	20%	
187	台付甕	SZ51234	51234	J23	覆土	(16.6)			(3.9)	7.5YR7/6橙色･8/6浅黄橙色	口縁	15%	
188	壺	SZ51175	52913	J23	1 層	(16.0)			(5.6)	7.5YR7/6橙色	口縁	25%	
189	壺	SZ51175	51175	I22	覆土	(12.0)			(3.2)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	25%	
190	壺	SZ51175	52913	J23	1 層	(20.0)			(6.6)	7.5YR7/6橙色	口縁	20%	
191	壺	SZ51175	52913	J23	1 層	(18.0)			(4.5)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	15%	

第３表　出土土器一覧表（４）

挿図No.	器種	遺構/溝		グリッド	層位	口径(cm)	低径(cm)	最大径(cm)	器高残存高(cm)	色調	部位	残存率	備考
192	壺	SZ51175	52913	J23	1層		(10.6)		(4.7)	7.5YR7/6橙色	底部	50%	
193	壺	SZ51175	52913	J23	1層		8.0		(6.1)	7.5YR7/6橙色	底部	90%	
194	台付甕	SZ51175	51175	I22	覆土		(8.0)		(5.8)	7.5YR6/4にぶい橙色	脚部	50%	
195	小型甕	SZ5171	5171	J28	覆土	(5.2)			(2.7)	7.5YR6/6橙色	口縁	20%	手捏ね
196	壺	SZ5171	5171	J29	覆土		(9.5)		(2.5)	内:10YR7/4にぶい黄橙色 外:2.5YR7/6橙色	底部	30%	
197	壺	SZ5171	5171	J28	覆土		(8.0)		(2.5)	10YR6/3にぶい黄橙色	底部	25%	
198	壺	SZ5171	5171	J28	覆土	(22.2)			(4.2)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	15%	
199	壺	SZ5171	5171	J28・29	覆土			(21.6)		7.5YR6/4にぶい橙色	体部	10%	
200	台付甕	SZ5171	5171		覆土	(16.8)			(3.4)	5YR7/6橙色	口縁	15%	
202	高坏	SZ5009	5038	J29	覆土	17.0	10.5		12.1	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁～底部	90%	
203	器台	SZ5009	5038	J29	覆土	7.6	12.0		7.0	内:7.5YR6/6橙色 外:10YR6/3にぶい黄橙色	口縁～底部	80%	
204	高坏	SZ5009	5038	J29	覆土		10.2		(7.1)	5YR5/6明赤褐色	脚部	90%	
205	壺	SZ5009	5038	J29	覆土	(8.6)	(5.6)	16.45	17.8	7.5YR6/4にぶい橙色	口縁 底部	5％ 100%	
206	壺	SZ5009	5011		3層	13.3			(19.6)	2.5YR5/8明赤褐色	口縁～頸部 体部	80% 70%	
207	壺	SZ5009	5011		3層	10.3		13.9	13.65	5YR7/6橙色	口縁 底部	95% 100%	
208	壺	SZ5009	5038		覆土	(10.4)	2.8	11.2	13.25	10YR5/3にぶい黄橙色	口縁 体部～底部	30% 95%	
209	鉢	SZ5009	5023	J・K28・29	3層	(11.7)			(4.9)	7.5YR8/4浅黄橙色	口縁～体部	20%	
210	壺	SZ5009	5023	J・K28・29	3層	(29.8)			(7.0)	2.5YR5/3黄褐色	口縁	20%	
211	壺	SZ5009	5023	J・K28・29	1層	(29.8)			(8.1)	5YR6/6橙色	口縁	20%	
212	壺	SZ5009	5023	K29	覆土	(24.6)			(4.6)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	5％	
213	壺	SZ5009	5023	J・K28・29	3層	(29.1)			(5.5)	内:5Y6/2灰オリーブ色 外:2.5YR7/6橙色	口縁	5％	
214	壺	SZ5009	5038	J29	覆土	(20.6)			(3.75)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	5％	
215	壺	SZ5009	5023	J・K28・29	2層	(15.1)			(4.0)	2.5YR7/8橙色	口縁	20%	
216	壺	SZ5009	5023	J・K28・29	3層	(17.4)			(5.4)	内:2.5Y6/2灰黄色 外:5YR6/6橙色	口縁	10%	
217	壺	SZ5009	5023	J・K28・29	2層	(13.4)			(4.8)	7.5YR7/6橙色	口縁	25%	
218	壺	SZ5009	5038	J29	覆土	(23.0)			(2.0)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	10%	
219	壺	SZ5009	5023	K29	覆土	(22.0)			(2.2)	7.5YR6/6橙色	口縁	5％	
220	鉢	SZ5009	5038	K28	覆土	(24.0)			(3.8)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	10%	
221	壺	SZ5009	5011	K29	覆土	(26.0)			(4.6)	7.5YR6/6橙色	口縁	20%	
222	壺	SZ5009	5023	J・K28・29	2層	(14.0)			(9.5)	5YR7/6橙色	口縁	70%	
223	壺	SZ5009	5011		覆土	(14.0)			(4.6)	7.5YR7/6橙色	口縁	25%	
224	壺	SZ5009	5038	J29	覆土	(14.0)			(3.35)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	25%	
225	壺	SZ5009	5038	K29	覆土	(14.0)			(3.4)	10YR7/3にぶい黄橙色	口縁	25%	
226	壺	SZ5009	5009	K30	覆土	(24.0)			(3.15)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	15%	
227	壺	SZ5009	5038	J29	覆土			(18.2)		内:2.5Y8/3浅黄色 外:2.5YR7/2灰黄色	頸部	40%	
228	壺	SZ5009	5038	J29	覆土					10YR6/4にぶい黄橙色	頸部～肩部	7％	
229	壺	SZ5009	5038		覆土					10YR6/4にぶい黄橙色	頸部～肩部	5％	
230	壺	SZ5009	5010	K29	覆土		(9.0)		(4.3)	10YR6/6明黄褐色	底部	30%	
231	壺	SZ5009	5038	J29	覆土		(11.0)		(3.5)	10YR6/4にぶい黄橙色	底部	30%	
232	壺	SZ5009	5011	K29・30	覆土		(8.8)		(3.0)	10YR6/3にぶい黄橙色	底部	40%	
233	壺	SZ5009	5023	K29	覆土		(13.0)		(2.3)	10YR6/4にぶい黄橙色	底部	15%	
234	壺	SZ5009	5023	J29	覆土		(6.0)		(2.2)	7.5YR6/6橙色	底部	40%	
235	壺	SZ5009	5038	J29	覆土		(8.0)		(4.0)	内:7.5YR8/4浅黄色 外:10YR7/1灰白色	底部	30%	
236	壺	SZ5009	5011	K29・30	覆土		(10.0)		(3.3)	内:10YR7/3にぶい黄色 外:5YR7/2にぶい橙色	底部	20%	
237	壺	SZ5009	5011		覆土		(10.8)		(2.7)	10YR7/6明黄褐色	底部	30%	
238	台付甕	SZ5009	5038	J29	覆土	(22.0)			(2.8)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	5％	
239	台付甕	SZ5009	5011	K29	覆土	(20.0)			(5.9)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	20%	
240	台付甕	SZ5009	5038	J29	覆土	(23.0)			(3.45)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	10%	
241	台付甕	SZ5009	5023	J・K28・29	2層	(23.3)			(4.3)	内:2.5YR5/3黄褐色 外:2.5YR6/6橙色	口縁	10%	
242	台付甕	SZ5009	5023	J29	覆土	(22.0)			(2.5)	10YR5/3にぶい黄橙色	口縁	5％	
243	台付甕	SZ5009	5011		覆土	(14.0)			(2.4)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	15%	
244	台付甕	SZ5009	5023	J・K28・29	3層	(19.8)			(4.2)	5YR7/6橙色	口縁	10%	
245	台付甕	SZ5009	5009	K30	覆土			(9.6)		10YR7/2にぶい黄橙色	接合部	30%	
247	小型坏	SZ2579	5188	K32	覆土	(4.4)	(3.0)		3.0	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁 底部	25% 70%	手捏ね
248	高坏	SZ2579	5188	L31	覆土			(5.2)		7.5YR6/4にぶい橙色	脚部	50%	
249	壺	SZ2579	5188	L31	覆土	(10.6)			(7.5)	10YR6/2灰黄褐色	口縁～体部	30%	小型丸底
250	鉢	SZ2579	2579	L31	4層		3.2		(6.8)	5YR5/6明赤褐色	底部 体部	100% 60%	小型丸底
251	鉢	SZ2579	2579	L31	4層	9.2	2.8		6.0	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁 底部	50% 100%	
252	壺	SZ2579	5193		覆土	(16.8)			(4.2)	7.5YR6/4にぶい橙色	口縁	15%	
253	壺	SZ2579	2579	L31	覆土	(20.0)			(5.8)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	15%	
254	壺	SZ2579	2579	L31・32	覆土	(18.0)			(2.3)	7.5YR7/6橙色	口縁	20%	
255	壺	SZ2579	5193		覆土	(15.0)			(3.4)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	20%	
256	壺	SZ2579	2579	L31	覆土	(16.0)			(4.2)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	15%	
257	壺	SZ2579	2579	L31	覆土					7.5YR5/6明褐色	肩部	5％	

第３表　出土土器一覧表（５）

挿図No.	器種	遺構/溝		グリッド	層位	口径(cm)	低径(cm)	最大径(cm)	器高残存高(cm)	色調	部位	残存率	備考
258	台付甕	SZ2579	2579		覆土	(30.0)			(2.8)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	10%	
260	鉢	SZ2575	2575	M･N30	覆土	12.3	5		7.4	5 YR7/4にぶい橙色	口縁～底部	70%	
261	鉢	SZ2575	2575	M31	覆土	11.0	3.9		7.1	5 YR7/4にぶい橙色	口縁～底部	90%	
262	鉢	SZ2575	2575	M31	覆土	(10.0)			(6.8)	7.5YR7/6橙色	口縁～体部	30%	
263	鉢	SZ2575	2575		4層	9.6			(5.9)	2.5YR8/6橙色	口縁～体部	100%	小型丸底
264	鉢	SZ2575	2575		4層		3.8	8.7	(6.7)	5 YR7/6橙色	体部～底部	100%	小型丸底･底部穿孔
265	高坏	SZ2575	2575		4層	13.5			9.9	5 YR7/8橙色	口縁 脚部	25% 50%	
266	高坏	SZ2575	2575		覆土			(14.2)		10YR6/4にぶい黄橙色	坏部	20%	
267	壺	SZ2575	2575	M31	覆土	(8.7)			(5.7)	7.5YR7/6橙色	口縁	30%	
268	壺	SZ2575	2575	N･M30	4層	22.2			(18.4)	5 YR7/4橙色	口縁 体部	75% 50%	
269	甕	SZ2575	2575	N31	覆土	(16.0)			(7.0)	5 YR7/6橙色	口縁	20%	搬入品（箱清水式?）
270	壺	SZ2575	2575	L30	覆土	(18.0)			(5.7)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	20%	
271	壺	SZ2575	2575	L30	覆土	(25.0)			(5.6)	7.5YR8/6浅黄橙色	口縁	20%	
272	壺	SZ2575	2575	L30	覆土	(18.0)			(5.0)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	10%	
273	壺	SZ2575	2575	M29･30	覆土	(20.9)			(4.0)	7.5YR8/4浅黄橙色	口縁	15%	
274	壺	SZ2575	2575		覆土	(20.0)			(5.35)	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	15%	
275	壺	SZ2575	2575	L30	覆土	(15.0)			(5.7)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	30%	
276	壺	SZ2575	2575	M31	覆土			(20.0)		10YR6/4にぶい黄橙色	頸部	10%	
277	壺	SZ2575	2575		4層	11.4	3.9	12.0	16.1	2.5YR7/6橙色	口縁～底部	95%	底部穿孔
278	壺	SZ2575	2575	L30	覆土					10YR6/6明黄褐色	頸部～肩部	7 %	
279	壺	SZ2575	2575		覆土					10YR6/4にぶい黄橙色	頸部～肩部	5 %	
280	壺	SZ2575	2575	L30	覆土		(9.0)		(3.4)	5 YR7/6橙色	底部	30%	
281	壺	SZ2575	2575	M31	覆土		5.8		(4.8)	10YR6/3にぶい黄橙色	底部	100%	
282	壺	SZ2575	2575	M･N30	覆土		(8.4)	(14.1)	(3.2)	内: 5 YR7/6橙色 外:7.5YR7/4にぶい橙色	底部	25%	
283	壺	SZ2575	2575	L30	覆土		(10.1)	(15.5)	(3.6)	7.5YR8/4浅黄橙色	底部	25%	
284	壺	SZ2575	2575		4層	13.6	8.7	26.8	27.2	5 YR6/6橙色	口縁～底部	90%	
285	壺	SZ2575	2575		4層		3.4	19.6	(14.5)	2.5YR6/8橙色	体部～底部	100%	
286	壺	SZ2575	2575	L30	覆土		(8.9)		(2.9)	10YR7/3にぶい黄橙色	底部	20%	
287	台付甕	SZ2575	2575	N･M31	覆土	(17.3)		(22.6)	(21.3)	5 Y7/8橙色	口縁～体部	50%	
288	台付甕	SZ2575	2575	M･N30	覆土	(22.9)			(7.8)	2.5Y7/2灰黄色	口縁～肩部	70%	
289	台付甕	SZ2575	2575	M･N31	覆土	(22.1)			(4.0)	5 YR7/8橙色	口縁	10%	
293	壺	SZ317	2561	L31	覆土			(18.9)		5 YR7/6橙色	頸部～体部	40%	
294	壺	SZ317	2561	L31	覆土	(23.4)			(3.1)	内:10YR7/1灰白色 外: 5 YR7/6橙色	口縁	10%	
295	壺	SZ317	2562		覆土	(19.0)			(5.2)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	7 %	
296	壺	SZ317	2561	L31	覆土		(10.0)		(3.9)	10YR7/4にぶい黄橙色	底部	15%	
297	壺	SZ317	2562		覆土		(6.6)	(13.1)	(4.3)	7.5YR7/6橙色	底部	30%	
298	壺	SZ317	2562		覆土				(3.85)	7.5YR7/6橙色	底部 体部	15% 3 %	
299	壺	SZ317	2561	L31	覆土			(61.8)		7.5YR8/4浅黄橙色	頸部～体部	25%	
300	台付甕	SZ317	2562		覆土	(25.8)		(27.7)	(7.6)	5 YR7/4にぶい橙色･ 2.5YR7/8橙色	口縁～肩部	10%	
301	台付甕	SZ317	2562		覆土	(19.3)		(20.0)	(3.0)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	10%	
302	小型壺	SZ1900	1900	O28･29	覆土		(4.0)		(4.0)	7.5YR7/4にぶい橙色	底部	95%	手捏ね
303	小型壺	SZ1900	1900	P30	覆土		(6.0)		(3.0)	7.5YR7/6橙色	底部	45%	手捏ね･底部穿孔
304	高坏	SZ1900	1900	Q29	8層			(8.8)		7.5YR8/4浅黄色	脚部	40%	
305	高坏	SZ1900	1900	O28･29	覆土			(7.6)		7.5YR8/4浅黄橙色	脚部	30%	
306	高坏	SZ1900	1900	O･P28	覆土			(7.4)		10YR7/4にぶい黄橙色	脚部	40%	
307	壺	SZ1900	1900	Q29	覆土	(16.0)			(4.9)	7.5YR7/6橙色	口縁	25%	
308	壺	SZ1900	1900	P･Q29	覆土	(14.4)			(5.4)	7.5YR6/6橙色	口縁	35%	
309	壺	SZ1900	1900	Q28	覆土	(17.2)			(2.9)	7.5YR6/1褐灰色･ 8/6浅黄橙色	口縁	15%	
310	壺	SZ1900	1900	P･Q28	覆土	(10.0)			(3.1)	10YR8/3にぶい浅黄橙色	口縁	20%	
311	壺	SZ1900	1900	O28･29	覆土	(21.0)			(4.6)	7.5YR8/6浅黄橙色	口縁	10%	
312	壺	SZ1900	1900	P30	覆土	(15.2)			(3.8)	10YR7/6明黄褐色	口縁	25%	
313	壺	SZ1900	1900	Q29	覆土	(17.4)			(3.9)	5 YR7/6橙色	口縁	15%	
314	壺	SZ1900	1900	Q29	8層	(17.0)			(6.5)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	20%	
315	壺	SZ1900	1900	Q29	4層	(26.0)			(4.9)	5 YR6/6橙色	口縁	15%	
316	壺	SZ1900	1900	Q28･29	8層	(18.9)			(7.7)	5 YR8/3淡橙色	口縁	40%	
317	壺	SZ1900	1900	P･Q28	覆土	(21.0)			(2.4)	7.5YR6/6橙色	口縁	15%	
318	壺	SZ1900	1900	Q29	7層	(17.0)			(11.4)	7.5YR6/6橙色	口縁～頸部	70%	
319	壺	SZ1900	1900	Q29	3層			(21.7)		10YR8/4浅黄橙色	頸部	25%	
320	壺	SZ1900	1900	P30 Q28･29	覆土			(19.8)		7.5YR7/4にぶい橙色	体部	20%	
321	壺	SZ1900	1900	Q29	3層		(8.0)		(3.1)	2.5YR7/6橙色	底部	30%	
322	壺	SZ1900	1900	Q29	8層		6.4		(2.2)	7.5YR7/4にぶい橙色	底部	100%	
323	壺	SZ1900	1900	Q29	覆土		(7.4)		(3.7)	10YR7/4にぶい黄橙色	底部	70%	
324	壺	SZ1900	1900	Q28･29	覆土		4.0		(2.5)	10YR5/2にぶい黄橙色	底部	100%	
325	壺	SZ1900	1900	Q29	3層		(7.0)		(3.3)	7.5YR8/4浅黄橙色	底部	20%	
326	壺	SZ1900	1900	P･Q28	覆土		(8.8)		(4.2)	10YR7/4にぶい黄橙色	底部	30%	
327	壺	SZ1900	1900	Q29	9層		(9.4)		(2.6)	5 YR7/6橙色	底部	40%	
328	壺	SZ1900	1900	O29	覆土		(12.8)		(3.6)	内:10YR6/3にぶい黄橙色 外:7.5YR5/6明褐色	底部	30%	
329	壺	SZ1900	1900	Q29	7層		(10.4)		(2.3)	7.5YR5/6明褐色	底部	30%	

第３表　出土土器一覧表（６）

挿図No.	器種	遺構/溝		グリッド	層位	口径(cm)	低径(cm)	最大径(cm)	器高残存高(cm)	色調	部位	残存率	備考
330	壺	SZ1900	1900	Q29	7層	(13.2)			(4.9)	5YR7/6橙色	口縁	20%	
331	台付甕	SZ1900	1900	O28･29	覆土	(12.8)			(4.3)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	5％	
332	台付甕	SZ1900	1900	Q29	7層	(28.0)			(3.8)	5YR6/6橙色	口縁	20%	
333	台付甕	SZ1900	1900	P30	覆土	(26.0)			(4.0)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	5％	
334	台付甕	SZ1900	1900	Q29	覆土	(14.0)			(6.1)	7.5YR7/6橙色	口縁	20%	
335	台付甕	SZ1900	1900	O･P28	覆土	(24.0)			(5.2)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	15%	
336	台付甕	SZ1900	1900	Q28･29	覆土	(18.0)			(6.2)	7.5YR7/6橙色	口縁	35%	
337	台付甕	SZ1900	1900	Q28･29	覆土	(21.8)			(4.0)	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	10%	
338	台付甕	SZ1900	1900	P30	覆土	(17.0)			(5.8)	10YR5/3にぶい黄橙色	口縁	5％	
339	台付甕	SZ1900	1900	Q28･29	覆土	(24.0)			(3.7)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	10%	
340	台付甕	SZ1900	1900	P30	覆土	(21.0)			(5.5)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	10%	
341	台付甕	SZ1900	1900	O28･29	覆土	(15.0)			(4.8)	7.5YR5/6橙色	口縁	20%	
342	台付甕	SZ1900	1900	P30	覆土	(15.4)			(3.6)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁	25%	
343	台付甕	SZ1900	1900	O28･29	覆土	(15.0)			(3.8)	10YR7/4にぶい黄橙色	口縁	15%	
344	台付甕	SZ1900	1900	Q28･29	覆土			(6.0)		7.5YR7/6橙色	接合部	100%	
345	台付甕	SZ1900	1900	Q28･29	覆土			(5.9)		10YR7/4にぶい黄橙色	接合部	45%	
346	台付甕	SZ1900	1900	Q28･29	覆土	(10.0)			(7.0)	10YR7/4にぶい黄橙色	脚部	20%	
349	小型壺	SZ228	228	N31	2層	(5.7)	(4.7)	(6.4)	6.7	5YR7/8橙色	口縁 底部	50% 95%	手捏ね
350	小型高坏	SZ228	228	P31	覆土			(4.2)		7.5YR6/4にぶい橙色	脚部	60%	手捏ね
351	小型台付甕	SZ228	228	N31･32	暗褐色土		3.2		(2.2)	7.5YR7/3にぶい橙色	脚部	100%	手捏ね
352	高坏	SZ228	228		2層	11.6			(8.35)	5YR7/8橙色	坏部	80%	
353	高坏	SZ228	228	N32	2層	13.4			11.0	7.5YR7/4にぶい橙色	坏部 脚部	70% 95%	
354	高坏	SZ228	228	N31･32	暗褐色土 2層	(24.0)			(9.2)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁～接合部	50%	
355	高坏	SZ228	228	O31	Ⅳ層（黒色土） 4層	(20.6)			(8.1)	7.5YR7/6橙色	口縁～接合部	60%	
356	高坏	SZ228	228		2層	(16.0)			(4.8)	10YR7/6明黄褐色	口縁～坏部	50%	
357	高坏	SZ228	228		2層			(14.3)		7.5YR6/4にぶい橙色	坏部	20%	
358	高坏	SZ228	228	N32	2層		(16.9)		(8.8)	5YR7/6橙色	脚部	25%	
359	高坏	SZ228	228	N32	暗褐色土 4層		10.0		(11.0)	7.5YR7/4にぶい橙色	坏部 脚部	20% 50%	
360	高坏	SZ228	228	N31･32	暗褐色土			(6.4)		5YR6/4にぶい橙色	脚部	5％	
361	高坏	SZ228	228		3層			(4.5)		10YR7/3にぶい黄橙色	脚部	45%	
362	高坏	SZ228	228	O31	Ⅳ層黒色土		8.4		(5.5)	7.5YR8/4浅黄橙色	脚部	90%	
363	高坏	SZ228	228	N32	2層		12.0		(9.4)	7.5YR8/6浅黄橙色	脚部	70%	
364	高坏	SZ228	228	N31	暗褐色土			(5.25)		7.5YR6/6橙色	脚部	30%	
365	鉢	SZ228	228	N32	2層	(9.1)	4.0	(10.1)	8.0	5YR7/4にぶい橙色	口縁～底部	50%	
366	鉢	SZ228	228		暗褐色土		3.7		(7.2)	7.5YR7/3にぶい橙色	底部～体部	40%	
367	壺	SZ228	228	N31	2層	8.8			(6.5)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁	80%	ヒサゴ壺
368	壺	SZ228	228	N31	暗褐色土	(16.0)			(4.5)	7.5YR8/4浅黄橙色	口縁	30%	
369	壺	SZ228	228		2層	(11.0)			(1.8)	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	25%	
370	壺	SZ228	228	N32	2層	18.0		28.1	(29.4)	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁～体部	95%	
371	壺	SZ228	228		1層	(16.0)			(5.7)	7.5YR6/8橙色	口縁	20%	
372	壺	SZ228	228		6層	(13.4)			(7.7)	7.5YR6/4にぶい橙色	口縁	70%	
373	壺	SZ228	228		暗褐色土	(15.6)			(6.5)	5YR7/6橙色	口縁	30%	
374	壺	SZ228	228	P31･32	暗褐色土	(20.0)		(31.2)	(24.3)	10YR7/3にぶい黄橙色	口縁～頸部 体部	25% 20%	
375	壺	SZ228	228	N32	2層	15.1		(20.5)	(13.9)	10YR6/4にぶい黄橙色	口縁～体部	95%	
376	壺	SZ228	228		覆土	(24.5)			(8.5)	5YR7/8橙色	口縁	20%	
377	壺	SZ228	228	O32	Ⅱ層(暗褐色土層)･ Ⅳ層(黒色土層) 2層	9.3		17.9	(17.0)	7.5YR7/8黄橙色	口縁～頸部 頸部～体部	95% 70%	ヒサゴ壺
378	壺	SZ228	228	P31･32	Ⅱ層(黒褐色土層) 3層			(24.4)	(24.8)	10YR7/6明黄褐色	頸部～体部	90%	
379	壺	SZ228	228	N32	2層	(21.9)			(2.9)	7.5YR7/6橙色	口縁	10%	
380	壺	SZ228	228		3層	(20.0)			(2.4)	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	5％	
381	壺	SZ228	228		2～3層			(19.9)		7.5YR8/8黄橙色	頸部	70%	
382	壺	SZ228	228	N32	2層			(14.6)		7.5YR7/6橙色	体部	75%	
383	壺	SZ228	228		1層		8.6	37.9	(41.5)	5YR6/4にぶい橙色	体部	90%	
384	壺	SZ228	228	N32	2層			(23.0)		10YR8/3浅黄橙色	体部	100%	
385	壺	SZ228	228	N32	暗褐色土 2層			(19.9)		7.5YR7/4にぶい橙色	体部	50%	
386	壺	SZ228	228		Ⅳ層（黒色土） 3層		7.5	(22.4)	(19.7)	5YR7/2明褐灰色	体部～底部	40%	
387	壺	SZ228	228		Ⅳ層(暗褐色土) 3層			(22.2)		7.5YR7/4にぶい橙色	頸部 体部	40% 30%	
388	壺	SZ228	228		3層	(12.0)			(4.9)	7.5YR7/4にぶい橙色	底部	25%	
389	壺	SZ228	228		4層					7.5YR7/6橙色	肩部	3％	
390	壺	SZ228	228		3層		(9.0)		(3.5)	7.5YR6/6橙色	底部	20%	
391	壺	SZ228	228		3層		(11.0)		(2.8)	7.5YR6/6橙色	底部	25%	
392	壺	SZ228	228		1層		(12.6)		(2.5)	7.5YR6/6橙色	底部	30%	
393	壺	SZ228	228		3層		(10.4)		(3.9)	10YR6/4にぶい黄橙色	底部	35%	
394	壺	SZ228	228	O31	4層		8.5		(2.5)	7.5YR7/4にぶい橙色	底部	90%	
395	壺	SZ228	228	N-32	4層		7.0		(2.5)	内:10YR4/2灰黄褐色 外:10YR8/3浅黄橙色	底部	95%	
396	壺	SZ228	228		4層		(9.8)		(1.85)	7.5YR5/6明褐色	底部	20%	

第３表　出土土器一覧表（７）

挿図No.	器種	遺構/溝		グリッド	層位	口径（cm）	低径（cm）	最大径（cm）	器高残存高（cm）	色調	部位	残存率	備考
397	壺	SZ228	228	N-31	２層		3.6		(3.0)	10YR5/2灰黄褐色	底部	100%	
398	台付甕	SZ228	228		１層	(19.0)			(5.3)	10YR6/3にぶい黄橙色	口縁	10%	
399	台付甕	SZ228	228		１層	(23.4)			(5.1)	7.5YR6/6橙色	口縁	10%	
400	台付甕	SZ228	228		４層	(19.0)			(8.2)	7.5YR6/6橙色	口縁	20%	
401	台付甕	SZ228	228		３層	(20.6)			(3.8)	10YR7/6にぶい明黄褐色	口縁	20%	
402	台付甕	SZ228	228		２層	(18.6)			(4.3)	7.5YR6/6橙色	口縁	5％	
403	台付甕	SZ228	228		２層	(21.0)			(5.0)	10YR5/2灰黄褐色	口縁	5％	
404	台付甕	SZ228	228	N32	黒色土２層		(10.2)		(6.5)	5 YR6/6橙色	脚部	50%	
405	台付甕	SZ228	228		暗褐色土		(8.6)		(9.3)	10YR7/4にぶい黄橙色	脚部	50%	
408	壺	SZ446	446		覆土					10YR7/3にぶい黄橙色	口縁	5％	
409	高坏	SZ446	446	S31	２層	22.6			13.0	7.5YR6/6･6/8橙色	口縁～脚部	70%	
410	壺	SZ446	446		覆土	15.5			(9.0)	10YR7/1灰白色	口縁～頸部	80%	
411	壺	SZ446	449		覆土		(13.0)	(25.2)	(9.5)	7.5YR6/4にぶい橙色	底部～体部	30%	
412	壺	SZ4424	4424		覆土	(12.2)		(12.9)	(4.5)	7.5YR8/3浅黄橙色	口縁	20%	
413	台付甕	SZ4424	4424		覆土	(18.8)			(2.6)	10YR8/3にぶい浅黄橙色	口縁	15%	
414	台付甕	SZ4424	4424		覆土	(29.6)			(3.5)	10YR8/3にぶい浅黄橙色	口縁	5％	
415	台付甕	SZ4424	4424		覆土	(22.3)		(26.3)	(5.0)	内：5 Y4/1灰色 外:7.5YR7/1明褐灰色	口縁 頸部	5％ 25%	
416	壺	SZ 6	6		３層	(11.8)			(6.1)	7.5YR7/6橙色	口縁	75%	
417	壺	SZ 6	6		３層		(10.0)		(2.8)	10YR6/4にぶい黄橙色	底部	25%	
418	台付甕	SZ 6	6		６層	(22.0)			(3.7)	7.5YR6/6橙色	口縁	10%	
419	台付甕	SZ 6	6		６層	(17.0)			(6.0)	内:10YR6/3にぶい黄橙色 外:7.5YR6/6橙色	口縁	20%	
420	台付甕	SZ 6	6		２層	(18.0)			(4.2)	10YR5/2灰黄褐色	口縁	10%	
421	台付甕	SZ 6	6		６層			(12.3)		内:7.5YR6/6橙色 外:10YR6/2灰黄褐色	体部～脚部	5％	
422	台付甕	SZ 6	6		６層			(9.4)		10YR8/4浅黄橙色	体部～脚部	90%	

第４表　出土石器・玉類一覧表

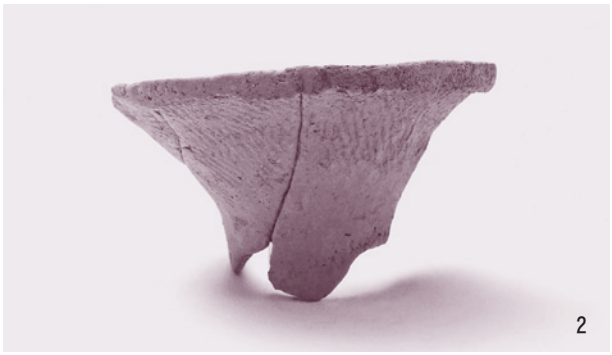
挿図No.	器種	遺構/溝		グリッド	層位	幅（cm）	長さ（cm）	厚さ（cm）	質量（g）	石質	残存率
25	磨石	SH50542		P-26	覆土層	10.3	11.6	3.75	690	黒色粘板岩	
26	台石	SH50542		P-25	覆土層	19.8	20.8	10.2	6,600	灰黄色粗粒砂岩	
27	台石	SH50542		P-25	覆土層	14.0	25.3	7.5	3,600	淡黄褐色中粒砂岩	
28	石鏃	SB80057	15388	F-8		2.3	3.5	0.9	5.0	灰色珪質頁岩	
68	打製石斧	SZ52423	52423	F-19	覆土層	(4.2)	(9.0)	1.75	(72.0)	灰色砂質粘板岩	刃部欠損
74	打製石斧	SZ52642	52642	G-19	覆土層	5.1	11.4	1.7	92.4	灰色珪質粘板岩	完形
80	打製石斧	SZ51497	51497	I-18	覆土層	5.45	6.9	1.1	(38.9)	灰色細粒砂岩	刃部一部欠損
81	台石	SZ51497	51497	I-17	覆土層	13.2	16.0	7.7	3,000	褐灰色中粒砂岩	
82	台石	SZ51497	51497	I-17	覆土層	19.4	18.0	9.0	5,000	褐灰色中粒砂岩	
129	敲石	SZ50871	50871	I・J-20・21	覆土層	5.65	8.0	2.3	146	淡灰緑色チャート	
130	敲石	SZ50871	50871	I・J-20・21	覆土層	5.7	17.7	3.4	435	黒色粘板岩	
133	ガラス玉	SZ52863	52866	K-19	覆土層	0.7	0.55	0.5	0.2		
134	ガラス玉	SZ52863	52866	K-19	覆土層	0.6	0.7	0.55	0.2		
173	打製石斧	SZ50880	50880	L・K-19	覆土層	5.0	(10.1)	1.7	(99.6)	灰色砂質粘板岩	頭部と刃部欠損
174	打製石斧	SZ50880	50880	K-19	覆土層	5.7	9.05	1.9	97.2	灰色砂質粘板岩	完形
175	磨敲石	SZ50880	50880	K-19	覆土層	6.5	13.9	3.15	413	灰色中粒砂岩	
246	台石	SZ5009	5023	K-29		18.9	20.8	5.7	2,000	黄褐色中粒砂岩	
290	石鏃	SZ2575	2575	M-30		1.8	2.2	0.4	1.0	黒色チャート	
291	打製石斧	SZ2575	2575	M-31		4.2	10.2	1.6	64.5	黒色粘板岩	
292	台石	SZ2575	2575		覆土層	21.0	33.6	12.4	1260	黄褐色中粒砂岩	
347	打製石斧	SZ1900	1900			5.5	19.5	2.8	380.9	暗灰色砂質粘板岩	
348	打製石斧	SZ1900	1900	Q-29		3.6	12.4	1.7	62.0	黒色砂質粘板岩	
406	台石	SZ228	228			17.0	32.3	10.4	6,000	灰色チャート	
407	砥石	SZ200	200	P-32		18.0	26.9	3.2	1,600	淡黄褐色細粒砂岩	
423	石錐	SZ6	6	T-32	S一括	1.6	3.6	0.6	1.6	灰色チャート	

第５表　出土金属製品一覧表

挿図No.	器種	遺構/溝		グリッド	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	茎厚（cm）	質量（g）	備考
201	鉄鏃	SZ5171	5171	J-28	覆土	6.0	1.4	0.25	0.2	8.49	
259	ヤリガンナ	SZ2002	3084			10.7	0.7	0.25		8.46	

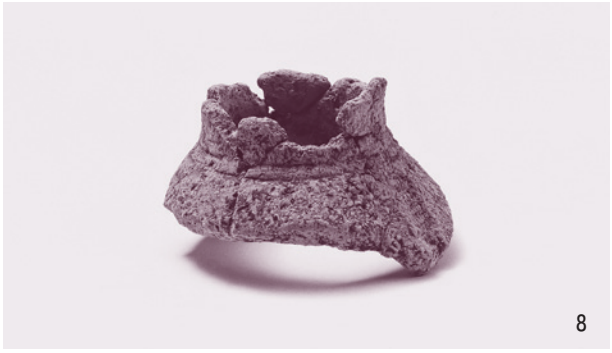
写真図版

1


2

3

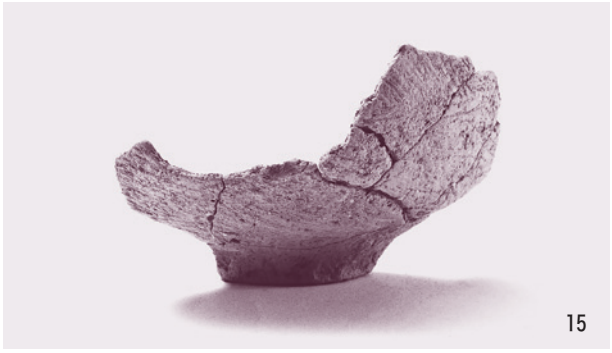
7


8

10

11

12


15

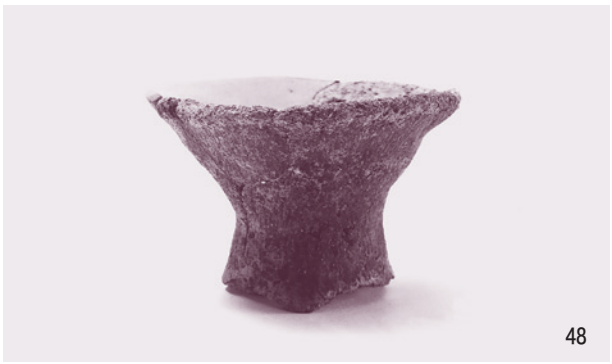
出土土器 1

図版 2

16

17

46


48

69

65

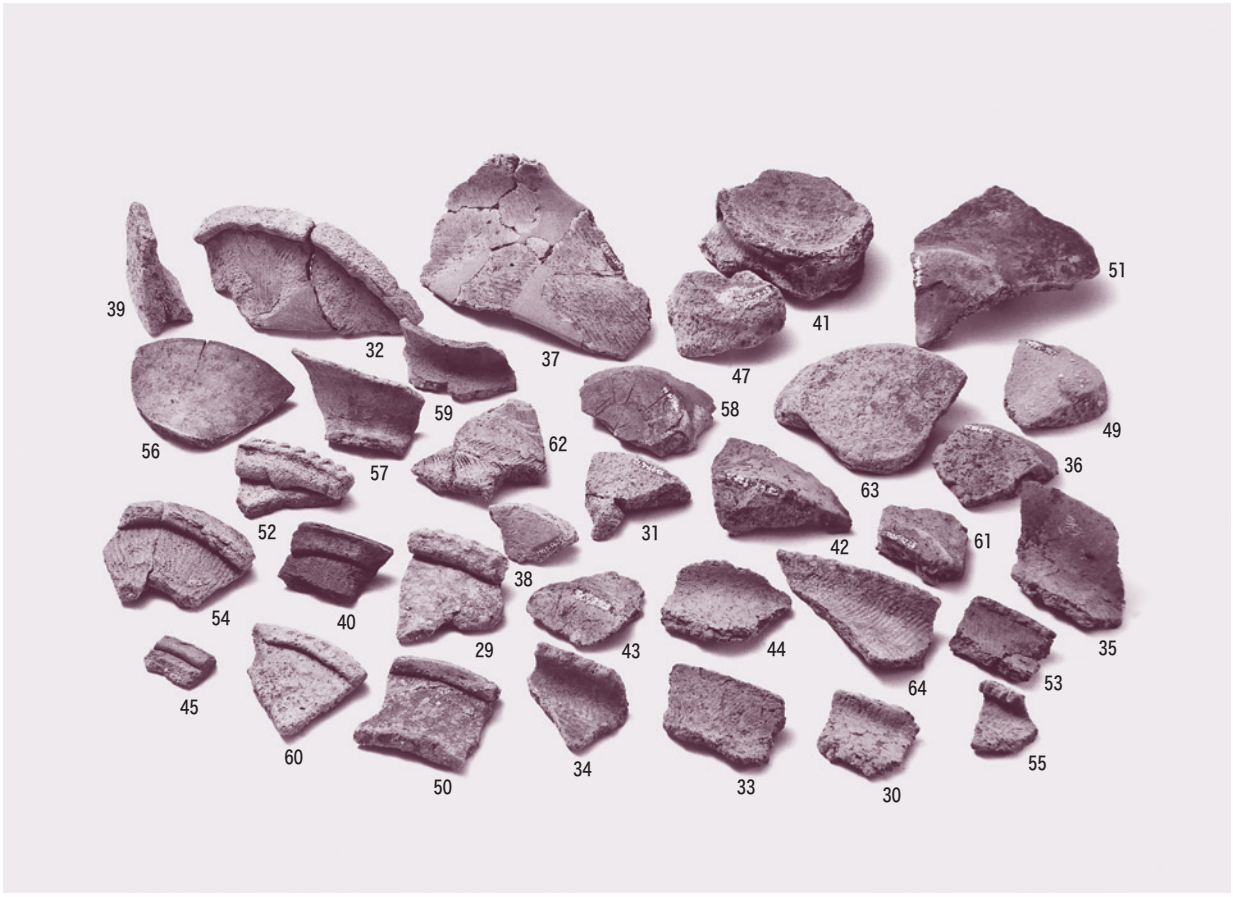
73

97

102

出土土器 2

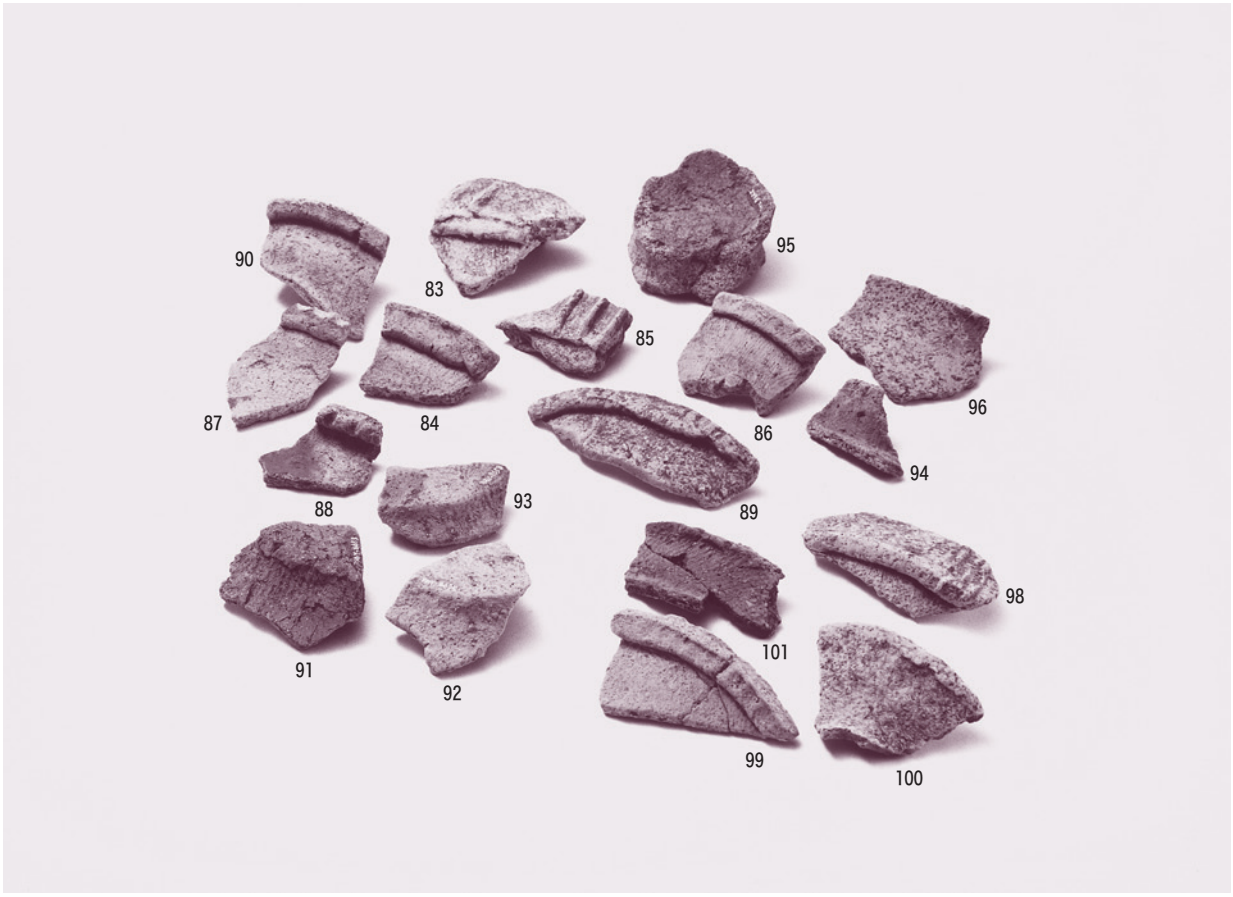
9
13
14
18
21
23
5
19
22
24
20
6
4


39
32
37
41
51
47
59
58
49
56
62
57
63
36
52
31
42
61
38
54
40
29
43
44
35
64
53
45
60
50
34
33
30
55

出土土器 3

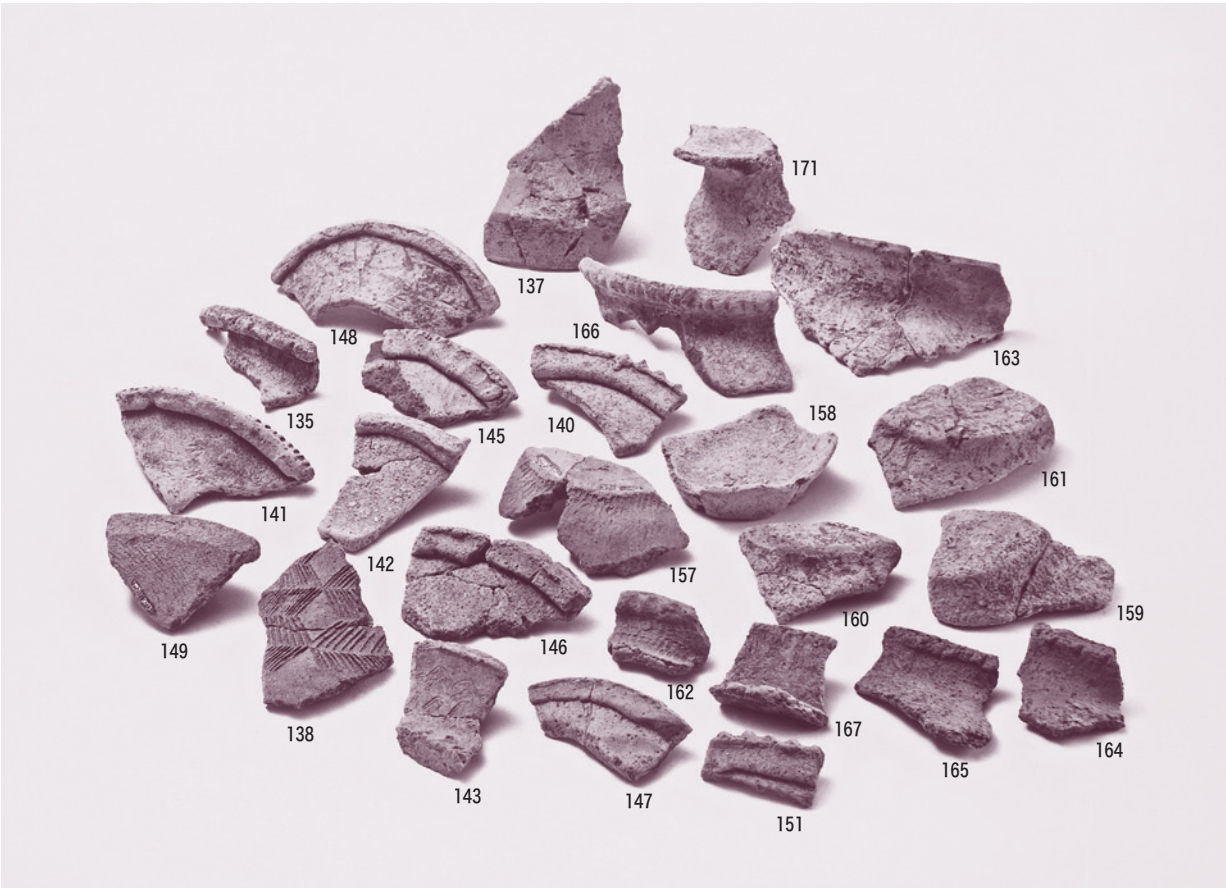
図版 4

70
71
66
75
79
67
76
72
78
77


90
83
95
85
87
84
86
96
94
88
93
89
98
91
92
101
99
100

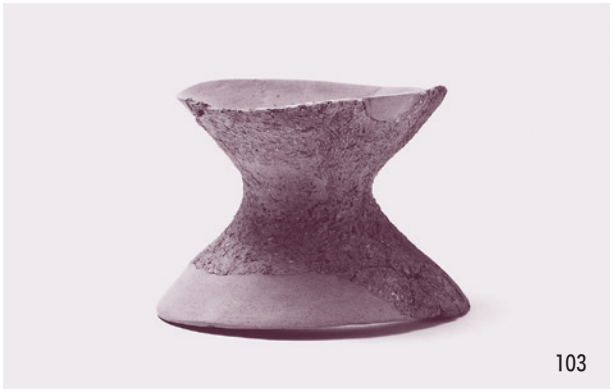
出土土器 4

112
106
108
109
117
118
121
105
104
116
119
120
107
127
123
113
110
114
125
111
126
128
122
131


171
137
148
166
163
135
145
140
158
161
141
142
157
160
159
149
146
162
138
167
165
164
143
147
151

出土土器 5

図版 6


103

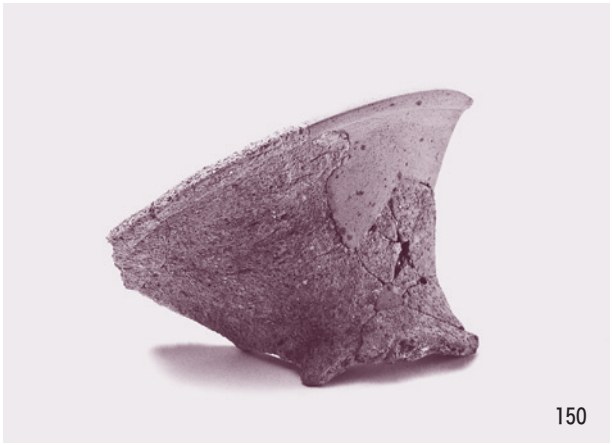
115

124

136

139

144


150

152

154

出土土器 6

153

155

156

168

170

169

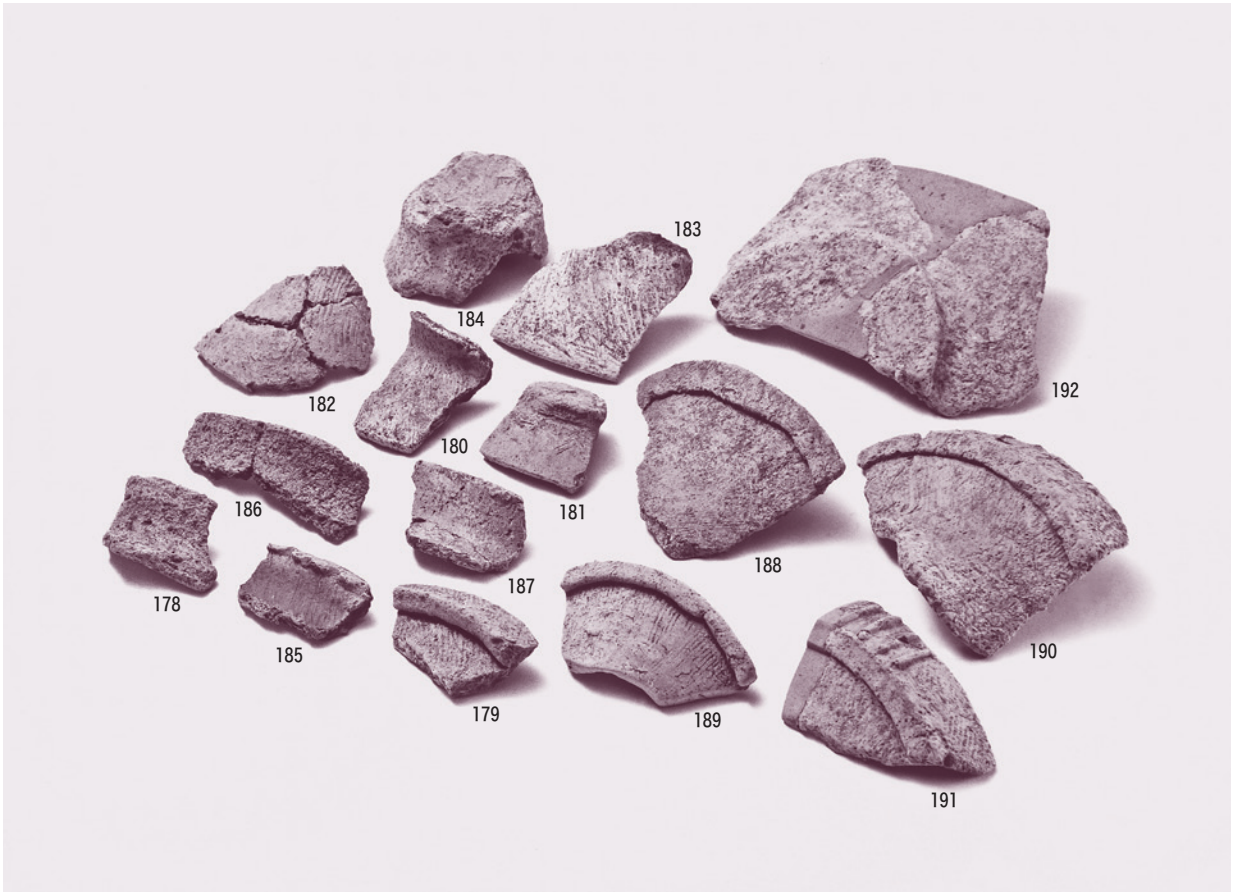
172

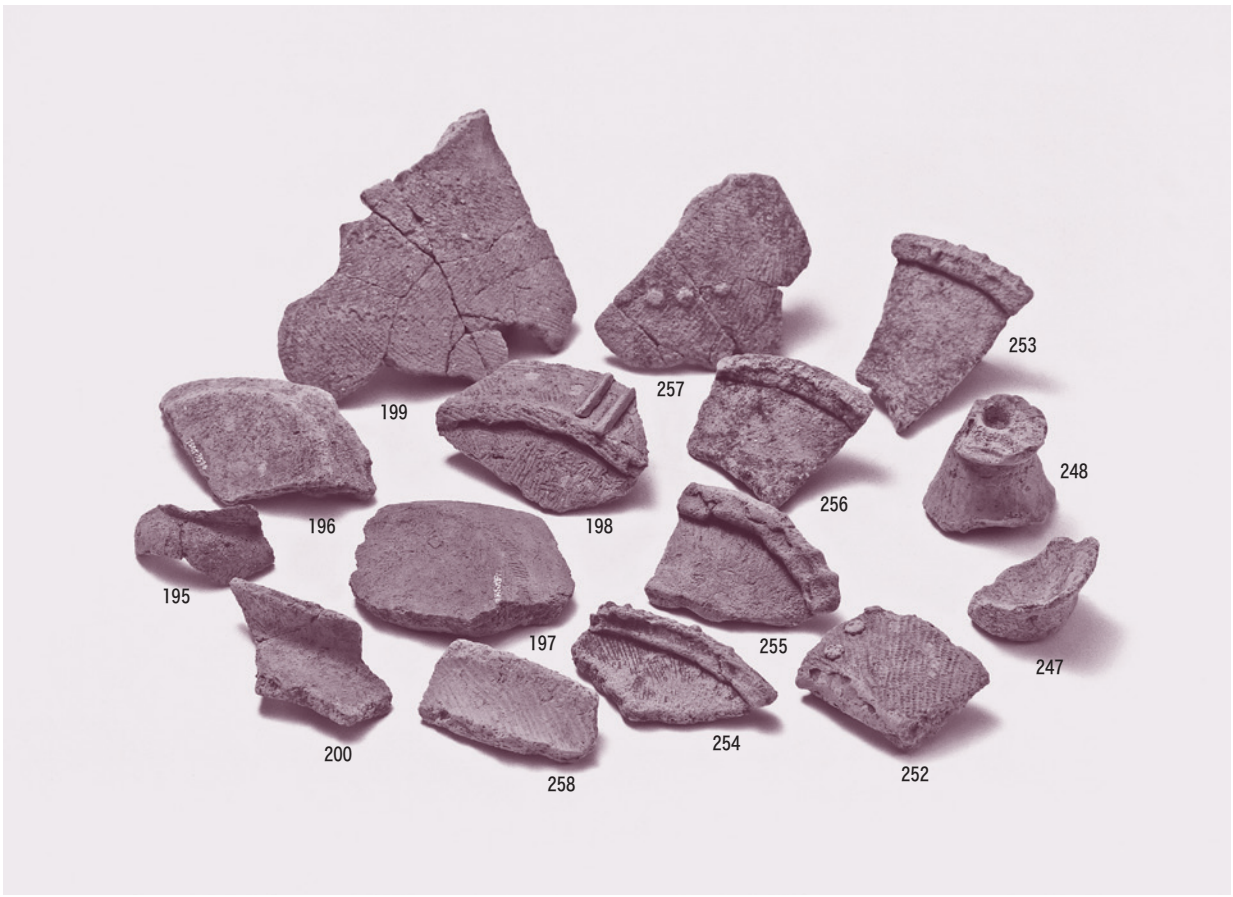
176

176

出土土器 7

図版 8

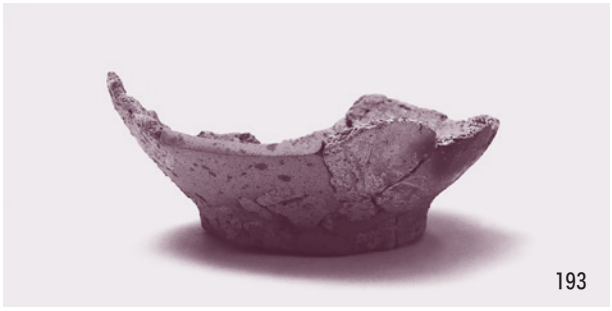

183
184
182
180
192
186
181
188
178
187
190
185
179
189
191


253
257
199
248
196
198
256
195
197
255
247
200
254
252
258

出土土器 8

177

204


193

205

194

206

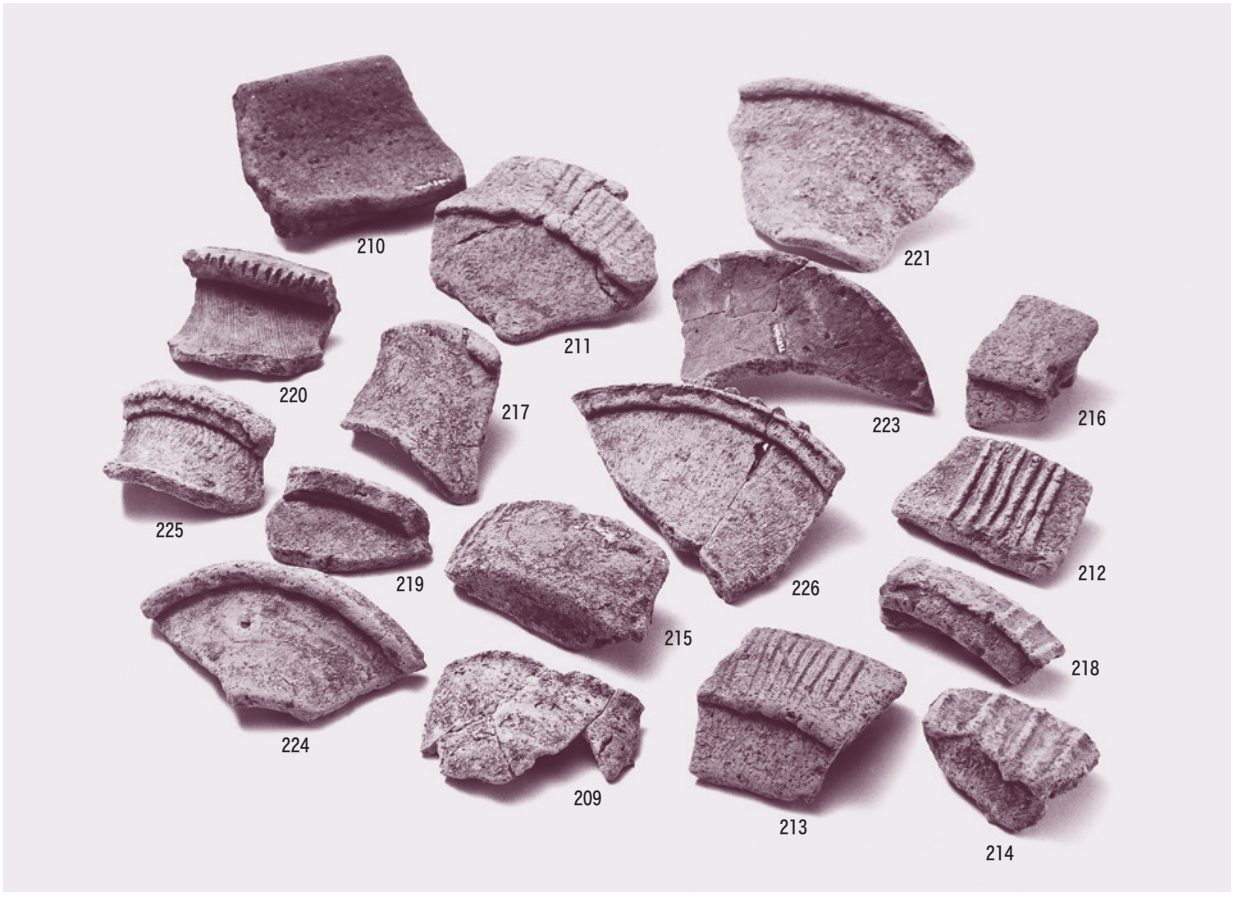
202

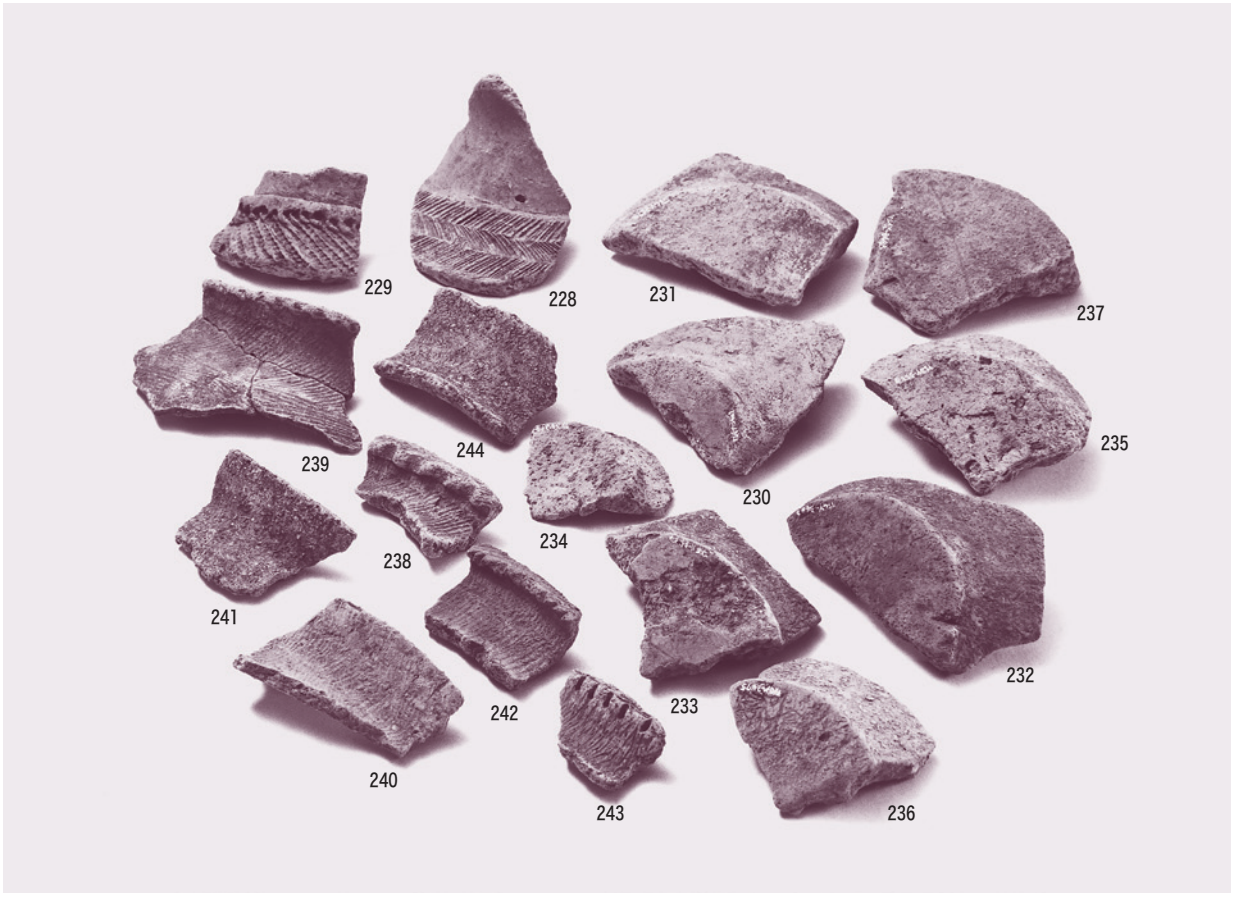
222

203

出土土器 9

図版10

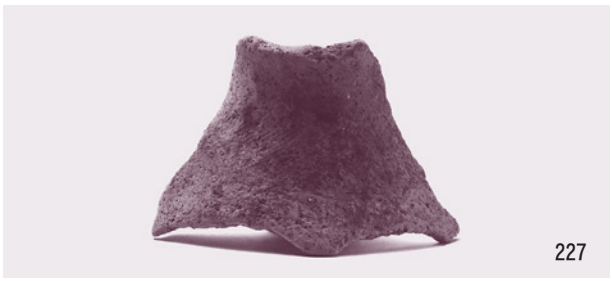

210
221
211
220
217
223
216
225
219
226
212
215
218
224
209
213
214


229
228
231
237
239
244
230
235
234
238
241
232
242
233
240
243
236

出土土器10

207

208


227

245

250

249

251

260

261

262

出土土器11

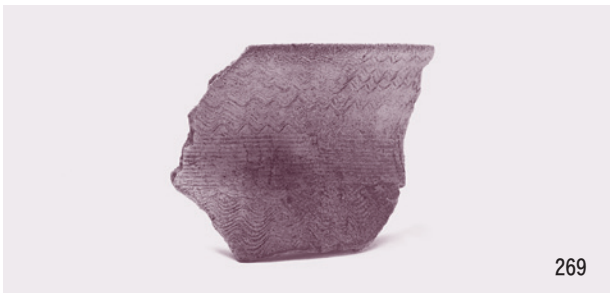
図版12

263

264

265

268


269

277

277

284

285

出土土器12

287

293

299

302

304

308

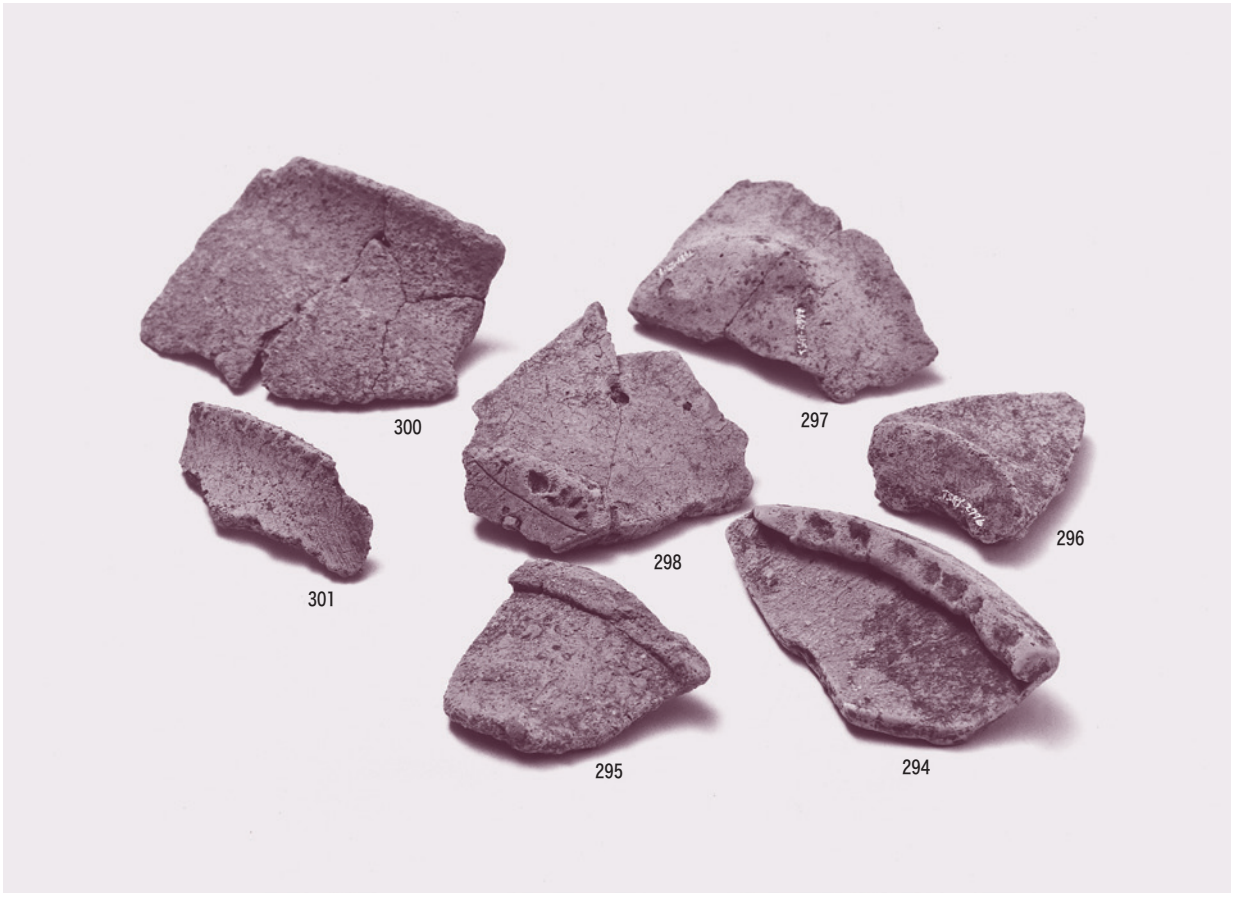
316

318

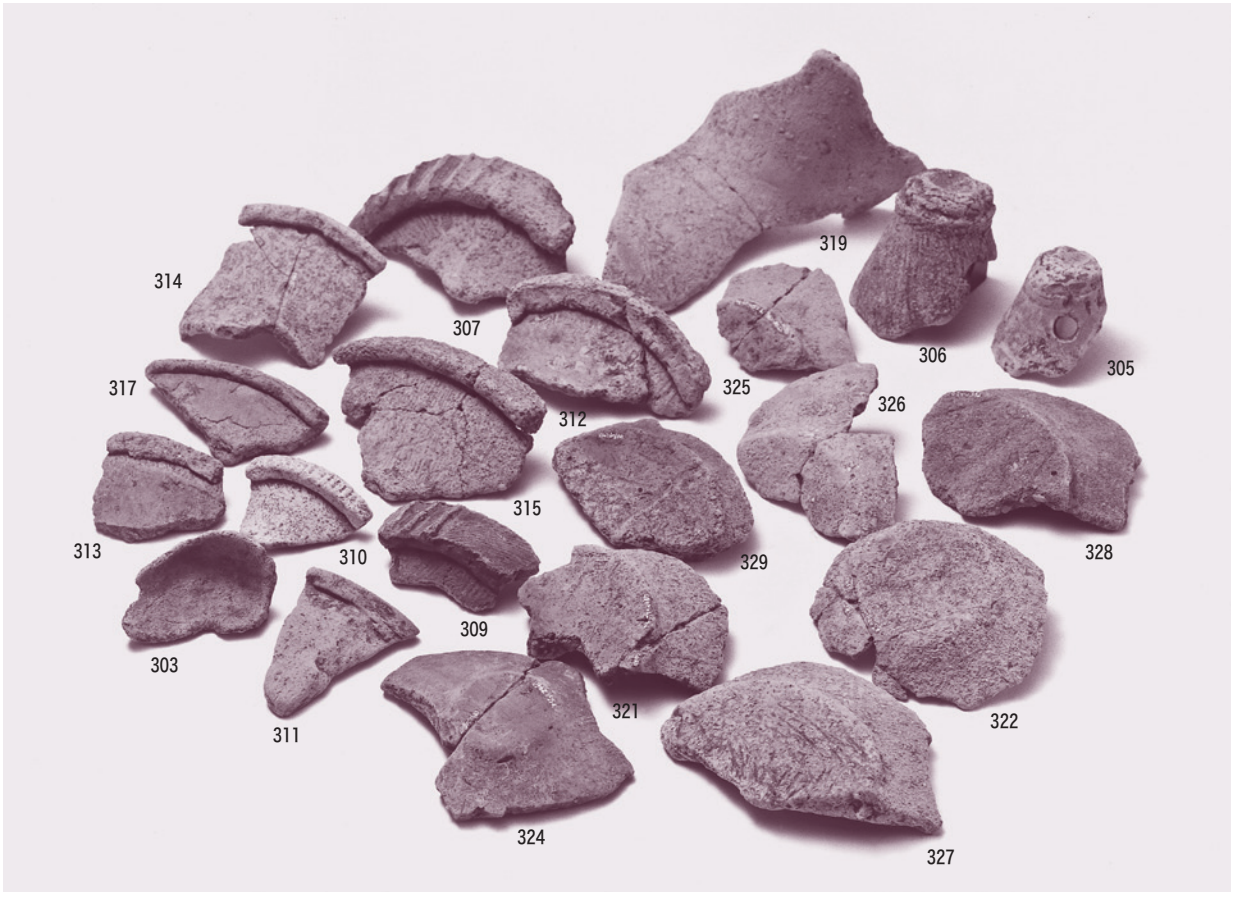
出土土器13

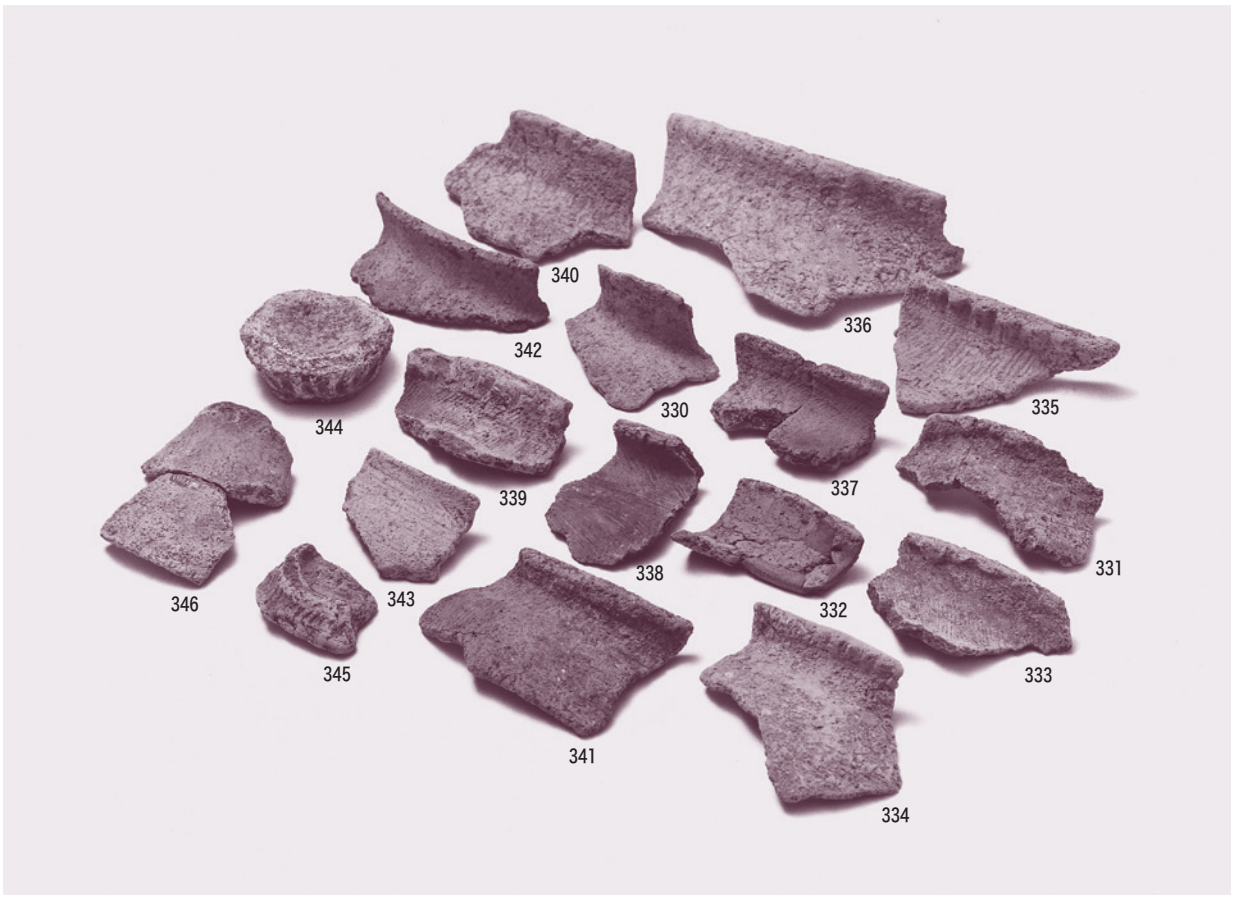
図版14

266
275
276
267
279
272
271
278
281
274
273
270
288
289
283
286
282
280


300
297
301
298
296
295
294

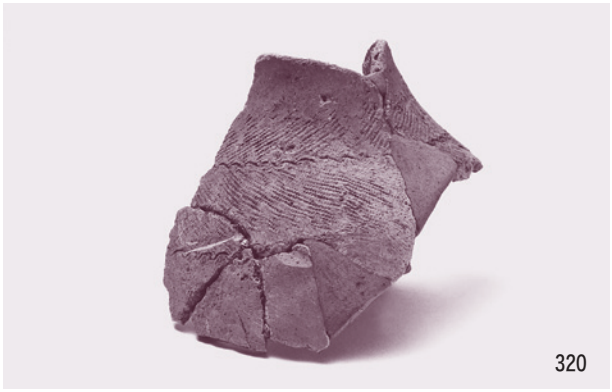
出土土器14

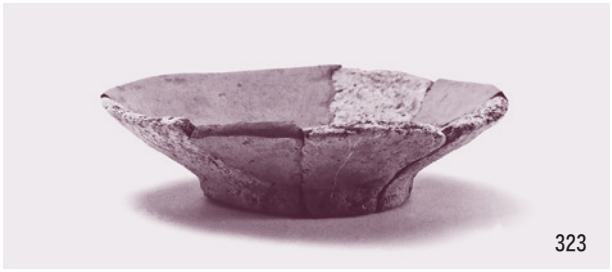

314
307
319
306
305
317
325
326
312
315
313
310
329
328
309
303
321
322
311
324
327


340
336
342
344
330
335
339
337
331
346
338
343
332
345
333
341
334

出土土器15

図版16


320


323

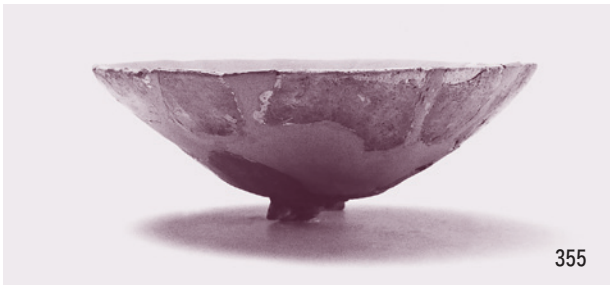
349

352

354

353

353


355

358

362

出土土器16

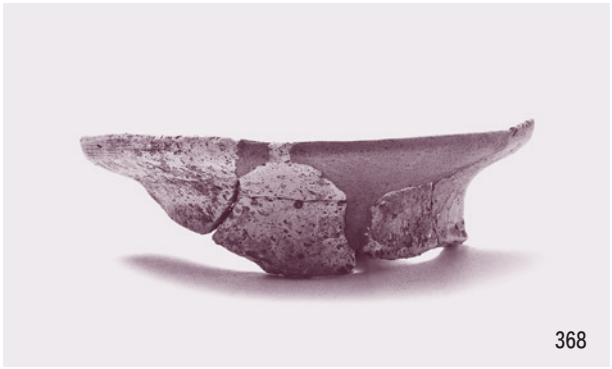
359

363

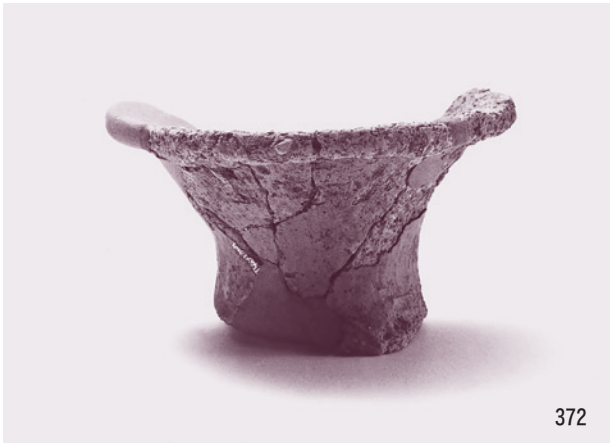
365

366

367


368

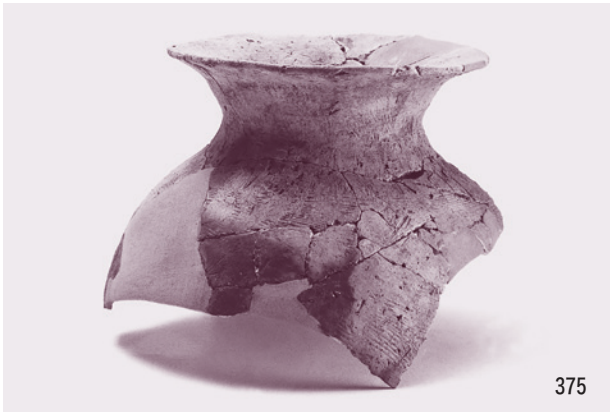
370


372

374

出土土器17

図版18


375

376

377

378

381

382

383

384

出土土器18

385

386

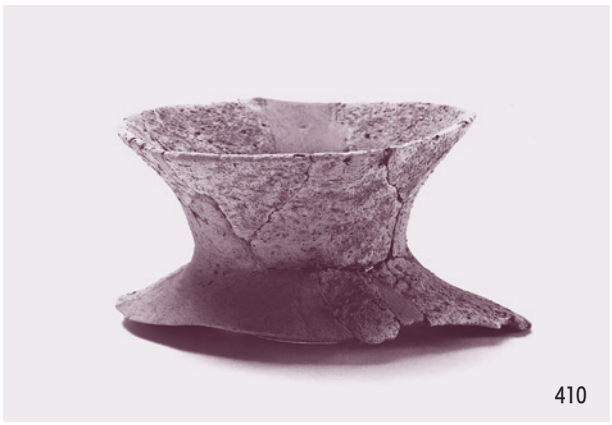
387

388

404

405

409

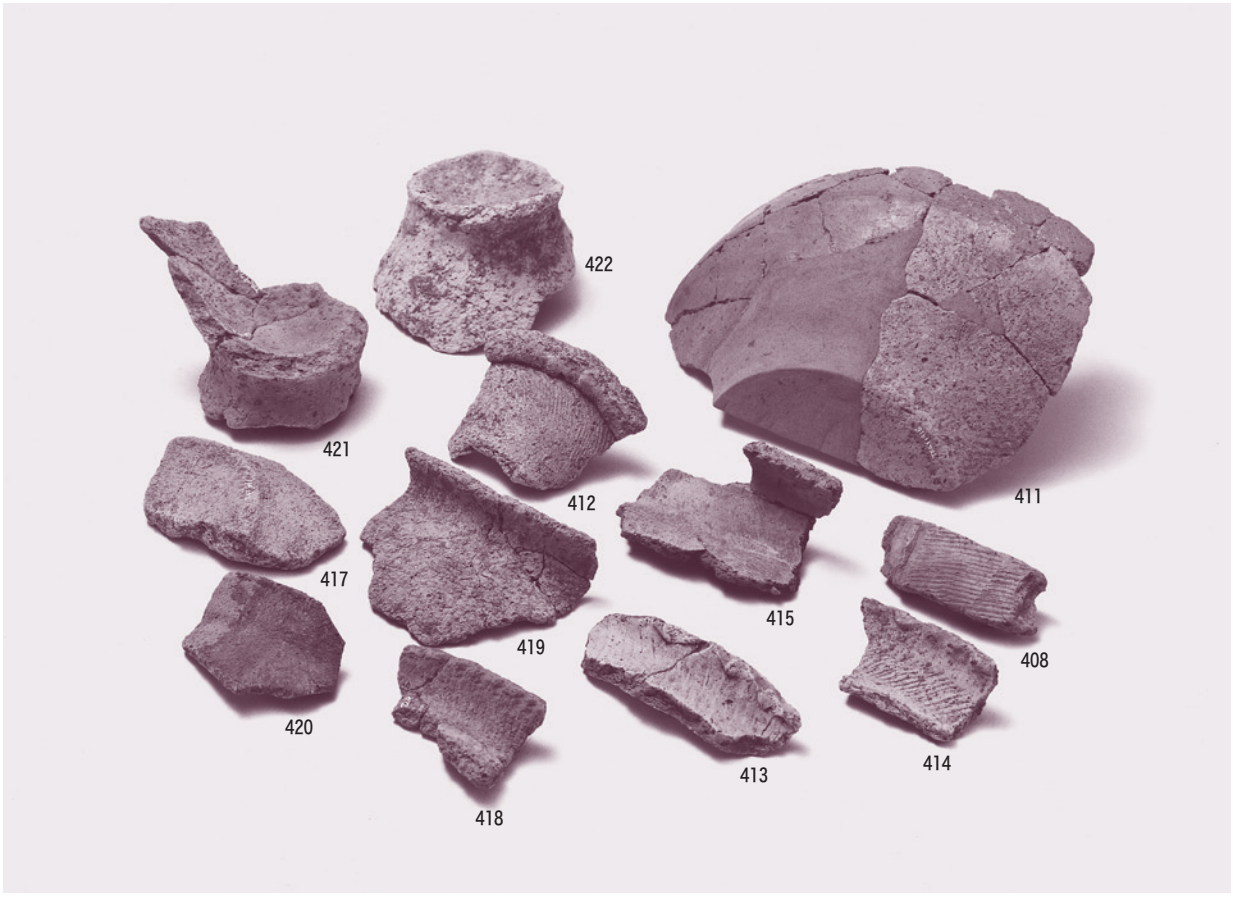

410

416

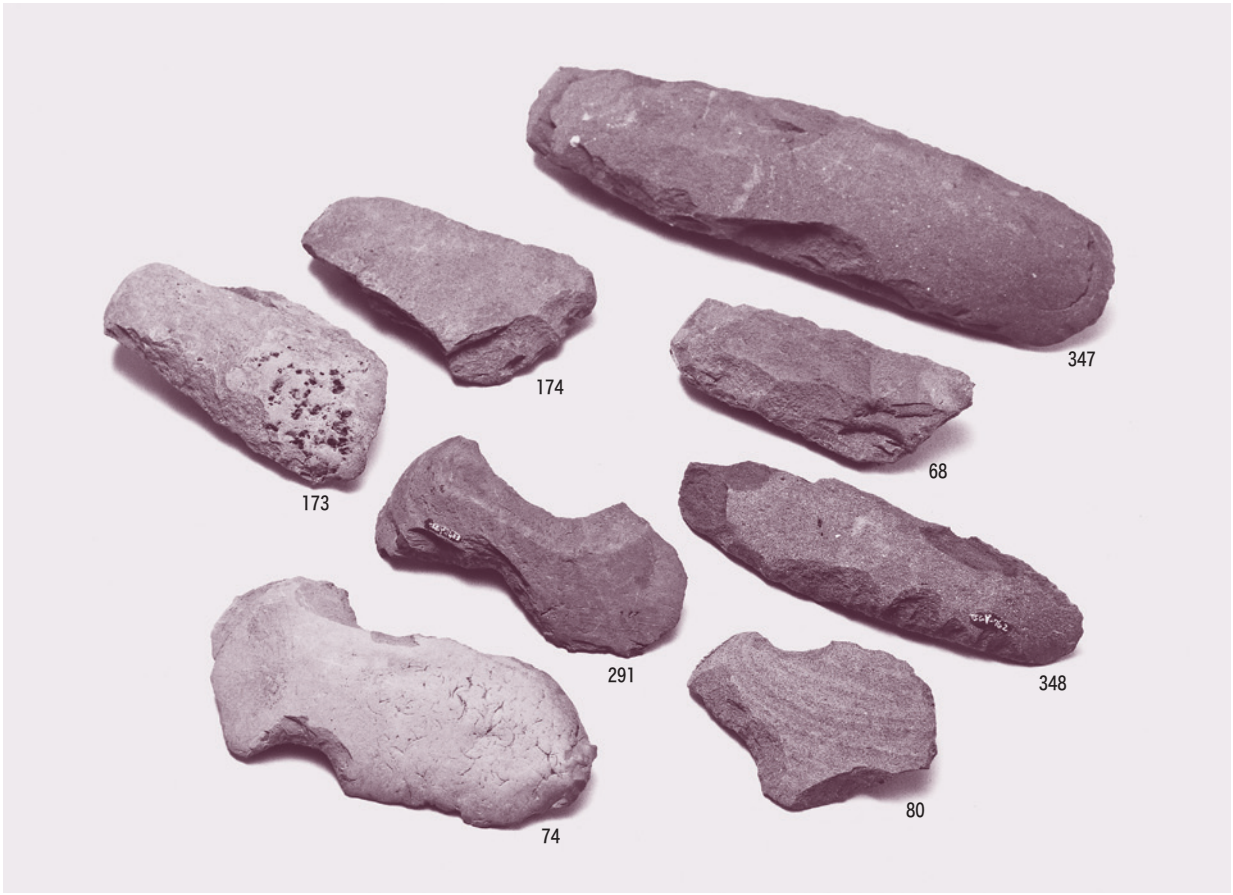
出土土器19

図版20

364
373
395
356
393
394
391
357
399
392
371
361
396
402
403
350
398
401
397
380
351
400
369
360
390
389
379


422
421
411
412
417
415
419
408
420
413
414
418

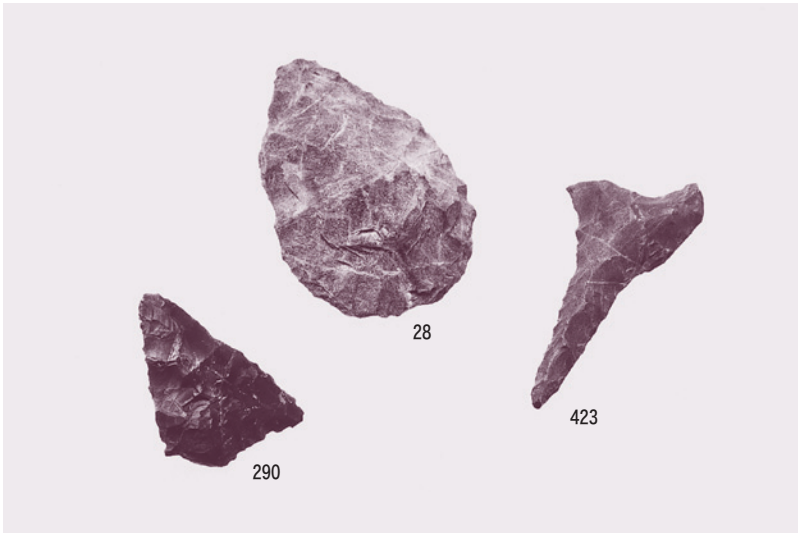
出土土器20



出土石器 1

図版22

出土石器 2



出土石器 3

出土ガラス玉

出土金属製品

図版24

SH50542出土土器

SZ50880出土土器

SZ5009出土土器

SZ2575出土土器

図版26

SZ228出土土器

報告書抄録

ふりがな	するがやまいせきⅣ（やよい・こふん・れきしじだいへん２）
書名	駿河山遺跡Ⅳ（弥生・古墳・歴史時代編２）
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	島田市－６
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第14集
編著者名	溝口　彰啓／田中　萌子
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20 電話　054－262－4261㈹
発行年月日	平成24年３月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
駿河山遺跡 （するがやまいせき）	静岡県（しずおかけん） 島田市（しまだし） 牛尾（うしお）	22209	25	世界測地系 34°51′13″ 日本測地系 34°51′1″	世界測地系 138°7′46″ 日本測地系 138°7′57″	199808 ～ 200203	23,783㎡	開発等の事業に伴うもの（道路）

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
駿河山遺跡	集落	弥生時代後期～ 古墳時代前期	竪穴状遺構１ 掘立柱建物跡63 方形周溝墓36	弥生土器・土師器・石器・ガラス玉・ 鉄製品	

要約

駿河山遺跡は、縄文時代中期前半～後期前半、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代～中世に至る複合遺跡である。本書は弥生時代～古墳時代・歴史時代についての第２分冊である。

駿河山の台地上に人が住み始めるのは縄文時代中期前半からで、後期前半頃までで一旦集落は廃絶する。その後人が住み始めるのは弥生時代後期中葉で、後期後葉にかけて急激に集落は拡大したとみられる。

調査区南西側では長方形の竪穴状遺構が１基検出された。出土遺物から判断して、弥生時代後期中葉の遺構と考えられる。また、柱穴が小規模であることや炉が検出されていないことから、非日常的な用途に用いられた建物跡と考えられる。

掘立柱建物跡は計63棟が調査区のほぼ全域で検出された。桁行３間以上の大型建物が２棟、桁行２～３間の建物は35棟、梁間１間、桁行１間の建物は26棟である。掘立柱建物跡の柱穴から出土した遺物はそれほど多くはないが、いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の遺物である。

方形周溝墓は36基検出された。形態としては、周溝が全周するものや四隅が切れるもの、隅が１～２ヵ所切れるものなどがある。これら方形周溝墓群は調査区中央部と西側に分布している。切合い関係と出土遺物から判断して、中央部から西側への変遷が想定できる。こうした墓域の変遷は、集落の再編が行われた可能性を示唆するものと考えられる。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第14集

駿河山遺跡Ⅳ（弥生・古墳・歴史時代編２）

第二東名№91地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－６

平成24年３月26日

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL　054-262-4261㈹
FAX　054-262-4266

印　刷　所　文光堂印刷株式会社
〒410-0871　静岡県沼津市西間門68-1
TEL　055-926-2800